兵庫県文化財調査報告 第203冊

兵庫県加古川市所在

志方窯跡群Ⅰ －中谷支群－

－山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸⅠ－

平成12年3月
（2000）

兵庫県教育委員会

兵庫県加古川市所在

志方窯跡群Ⅰ －中谷支群－

平成12年3月
（2000）

兵庫県教育委員会

例　　言

1．本報告書は山陽自動車道建設に伴い、日本道路公団の委託を受けて平成６年度～７年度にかけて発掘調査を実施した志方窯跡群中谷支群の発掘調査報告書である。

2．兵庫県教育委員会が発掘調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の森内秀造・井本有二・仁尾一人・岡本一秀が調査を担当した。

3．兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所における発掘調査番号は下記の通りである。

中谷１号窯	９４０００１
中谷２号窯	９４０００２
中谷３号窯	９４０２３６
中谷４号窯	９５０２１８・２１７
中谷５号窯	９５０２１９

4．遺跡の所在地は加古川市志方町大沢字中谷８４７－２８他である。

5．遺物番号の表示は本文・図版・図面を通して統一した。

6．窯体長については水平位になおさず、実長を用いた。

7．遺物の実測図は基本的には断面黒塗りとしたが、土師質土器については断面白抜きにして区別した。

8．１／２，５００の地図については加古川市都市計画図を使用した。

9．本報告書については、調査担当者が分担して執筆し、編集については非常勤嘱託員岡崎輝子他の協力を得て行った。このほか、遺物の統計処理については、埋蔵文化財調査事務所事務職員　舩濱徹の協力を得た。

10．遺構写真は調査担当者の撮影によるもので、遺物写真については、（株）衣川ならびにタニグチ・フォトに撮影委託した。また、航空写真は日本工事測量株式会社（平成６年度）・アジア航測株式会社（平成７年度）に撮影委託したものである。

11．整理後の遺物については、兵庫県教育委員会魚住分館に保管している。

12．調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導とご教示を仰いだ。記して感謝の意を表するものである。

川越俊一・巽淳一郎・西口寿生・玉田芳英（奈良国立文化財研究所）
後藤博弥（神戸女子大学教授）・岡本一士（加古川市教育員会）
永井信弘（加西市教育委員会）・小川真理子（神戸女子大学大学院）
川西幹雄（加古川焼陶芸作家）

（順不動・敬称略）

本文目次

第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経過 ……（仁尾）……1
第２節　確認調査の経過 ……（仁尾）……1
第３節　全面調査の経過 ……（仁尾）……2
第４節　発掘調査および整理の体制 ……（森内）……5
第２章　遺跡の立地と環境
第１節　遺跡周辺の地理的環境 ……（岡本）……7
第２節　遺跡周辺の歴史的環境 ……（仁尾）……7
第３節　志方窯跡群の分布 ……（仁尾）……9
第３章　中谷４号窯
第１節　窯の立地と構造 ……（岡本）……13
第２節　出土遺物の概要 ……（森内）……17
第４章　中谷１号窯
第１節　窯の立地と構造 ……（森内）……29
第２節　出土遺物の概要 ……（森内）……32
第５章　中谷２号窯
第１節　窯の立地と構造 ……（井本）……37
第２節　出土遺物の概要 ……（森内）……39
第６章　中谷３号窯
第１節　窯の立地と構造 ……（仁尾）……43
第２節　出土遺物の概要 ……（森内）……46
第７章　その他の遺構
第１節　中谷５号窯 ……（岡本）……49
第２節　炭土坑 ……（仁尾）……50
第８章　まとめ
第１節　中谷４号窯出土遺物について ……（森内）……51
第２節　中谷４号窯と１号窯の杯類の法量分布 ……（森内）……55
第３節　まとめにかえて ……（森内）……60
出土遺物一覧表 ……63

挿図目次

挿図１　遺跡の位置
挿図２　山陽自動車道路線内確認調査位置図
挿図３　中谷地区確認調査トレンチ配置図および全面調査区
挿図４　中谷４号窯　調査風景
挿図５　志方窯跡群周辺の遺跡分布図
挿図６　志方窯跡群分布図（明治33年）
挿図７　中谷４号窯　窯体図（検出時）
挿図８　中谷４号窯　基盤岩の節理の方向
挿図９　中谷４号窯　窯体図
挿図10　中谷４号窯　地形測量図
挿図11　壺Ｑ1809と1810
挿図12　甕2405　補修痕
挿図13　中谷４号窯　器種構成図
挿図14　中谷１号窯　地形測量図
挿図15　中谷１号窯　窯体図（検出時）
挿図16　中谷１号窯　窯体図
挿図17　中谷１号窯　杯Ｂ重ね積み復元図
挿図18　中谷１号窯　杯Ｂヘラ記号図
挿図19　中谷１号窯　器種構成図
挿図20　中谷２号窯　窯体図
挿図21　中谷２号窯　地形測量図
挿図22　中谷２号窯　出土鉄斧実測図
挿図23　中谷２号窯　出土鉄斧
挿図24　中谷２号窯　器種構成図
挿図25　中谷３号窯　地形測量図
挿図26　中谷３号窯　窯体図（検出時）
挿図27　中谷３号窯　窯体図
挿図28　中谷３号窯　刻書須恵器
挿図29　中谷３号窯　器種構成図
挿図30　中谷５号窯　地形測量図
挿図31　炭土坑遺構図
挿図32　中谷４号窯出土稜椀分類図
挿図33　長刀坂古墓出土椀と光明池22号窯出土稜椀

表目次

第１表　山陽自動車道建設に伴う志方窯跡群　大沢地区の調査一覧
第２表　中谷支群　窯跡名新旧対称表
第３表　志方窯跡群　支群名及び構成基数

第４表　中谷４号窯　器種別出土量比（コンテナ数）
第５表　白沢３号窯　杯Ｂ身口径別個体数グラフ
第６表　白沢３号窯　杯Ｂ蓋口径別個対数グラフ
第７表　中谷４号窯・中谷１号窯杯Ｂ蓋・身口径別個体数グラフ
第８表　白沢３号窯・中谷４号窯・中谷１号窯　杯Ｂ身法量分布図
第９表　白沢３号窯・中谷４号窯・中谷１号窯　杯Ａ口径別個体数グラフ
第10表　白沢３号窯・中谷４号窯・中谷１号窯　杯Ａ法量分布図

図面目次

第１図・第２図　中谷４号窯　窯体出土遺物１・２
第３図～第24図　中谷４号窯　灰原出土遺物１～22
第25図・第26図　中谷１号窯　窯体出土遺物１・２
第27図～第35図　中谷１号窯　灰原出土遺物１～９
第36図～第39図　中谷２号窯　出土遺物１～４
第40図　中谷３号窯　窯体出土遺物
第41図～第45図　中谷３号窯　灰原出土遺物１～５
第46図　中谷５号窯　出土遺物

遺構写真図版目次

図版１　航空写真　ａ．志方窯跡群遠景　ｂ．中谷支群遠景
図版２　中谷４号窯　ａ．窯体　ｂ．全景
図版３　中谷４号窯　ａ．全景　ｂ．灰原縦断面
図版４　中谷４号窯　窯体細部
図版５　中谷４号窯　舟底状ピット
図版６　中谷４号窯　ａ．窯体完掘状況　ｂ．窯体断ち割り全景
図版７　中谷４号窯　窯体断ち割り
図版８　中谷１号窯　ａ．窯体　ｂ．全景
図版９　中谷１号窯　ａ．窯体　ｂ．灰原縦横断セクション　ｃ．灰原縦断セクション
図版10　中谷１号窯　窯体断ち割り
図版11　中谷２号窯　ａ．窯体　ｂ．全景
図版12　中谷２号窯　ａ．窯体　ｂ．灰原縦横断セクション　ｃ．窯体断ち割り全景
図版13　中谷３号窯　ａ．窯体　ｂ．全景
図版14　中谷３号窯　ａ．窯体完掘状況　ａ．全景
図版15　中谷３号窯　ａ．窯体焚口縦断セクション　ｂ．灰原縦横断セクション　ｃ．窯体
図版16　中谷３号窯　窯体細部
図版17　中谷３号窯　窯体断ち割り
図版18　炭土坑群

遺物写真図版目次

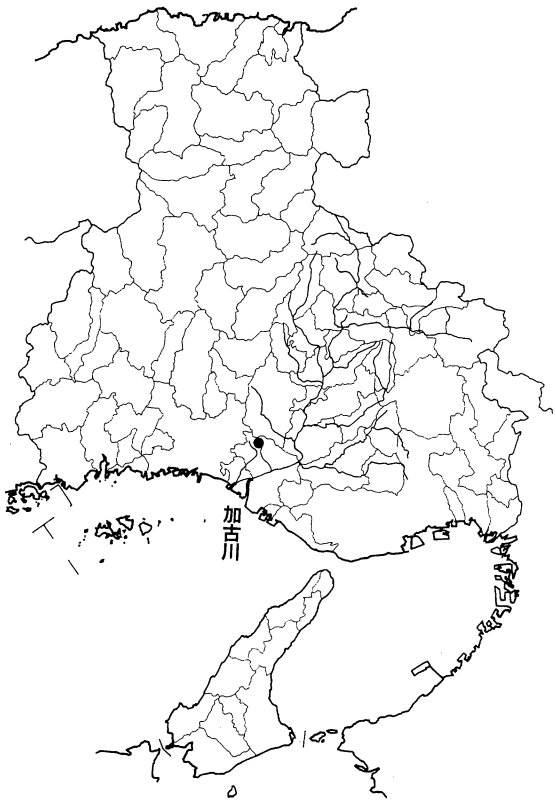
図版１　　ａ．中谷４号窯出土須恵器　ｂ．中谷１号窯出土須恵器
図版２　　ａ．中谷２号窯出土須恵器　ｂ．中谷３号窯出土須恵器
　　ｃ．中谷３号窯出土「忍坂」刻書須恵器
図版３～６　中谷４号窯出土須恵器抜粋１～４
図版７～28　中谷４号窯出土須恵器１～22
図版29　　中谷４号窯出土須恵器　細部
図版30　　中谷４号窯出土須恵器　調整技法１
図版31　　中谷４号窯出土須恵器　調整技法２
図版32　　中谷４号窯出土須恵器　重ね焼痕跡
図版33～38　中谷１号窯出土須恵器１～６
図版39～41　中谷２号窯出土須恵器１～３
図版42～45　中谷３号窯出土須恵器１～4
図版46　　中谷５号窯出土須恵器

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経過

山陽自動車道、正式には「高速自動車国道山陽自動車道吹田山口線」は、大阪府吹田市を起点にして瀬戸内海沿岸の都市を結び山口県山口市に至る総延長約434kmに及ぶ高速道路である。

兵庫県では、西は赤穂市より東は神戸市北区で中国縦貫自動車道と接続するおよそ90kmに及ぶ路線内の埋蔵文化財の発掘調査について、昭和52年の赤穂市堂山遺跡より調査を開始し、平成８年の三木市和田神社遺跡を最後に20年間にわたる調査を終了した。今回報告する志方窯跡群が所在する加古川市志方町を含む山陽自動車道第10次工事区間の三木～姫路間（加古川市白沢から姫路市飾東町）は、昭和63年３月３日に施工命令が発令され、平成元年５月10日～18日に一部地域を除き分布調査を実施した。

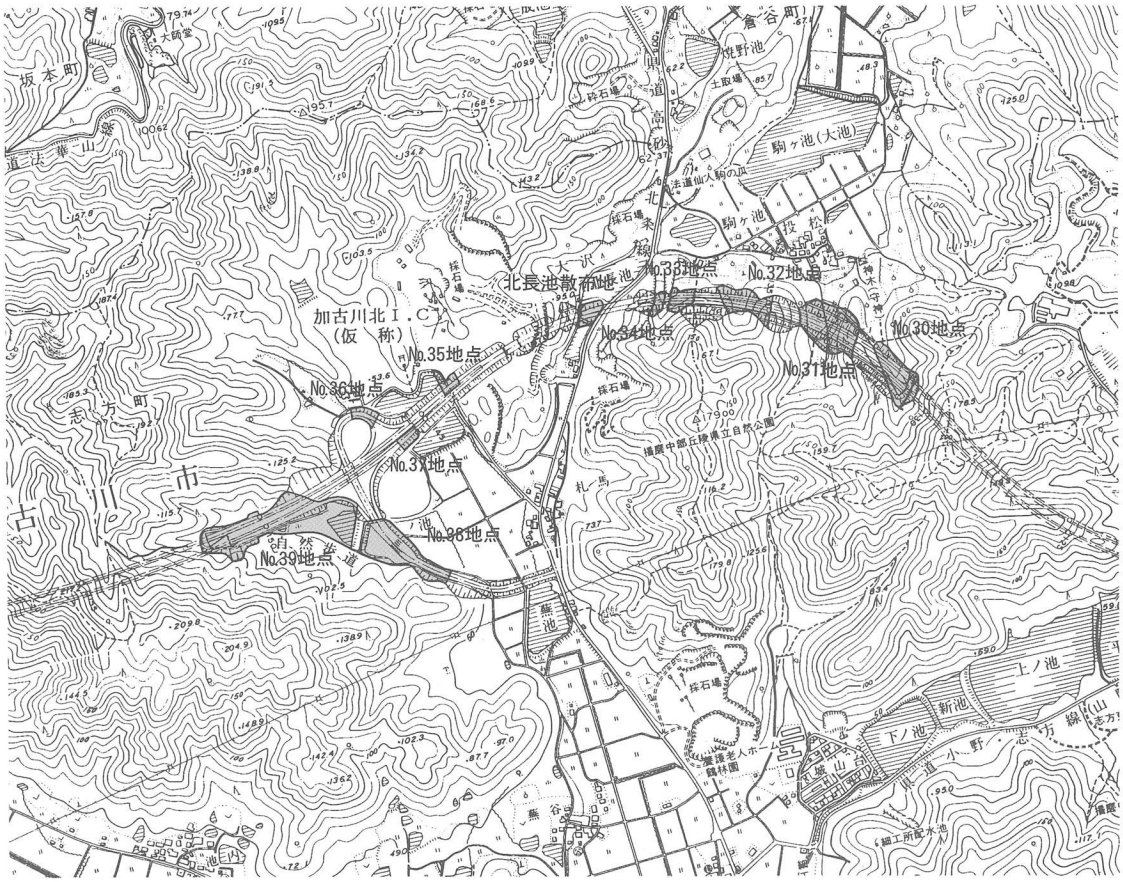


挿図１　遺跡の位置

志方窯跡群周辺は、平成元年に分布調査を一部実施し、７ヵ所の窯跡あるいは、土器の散布地を確認したが、遺構の性格上表面観察では充分に把握できないと判断し、日本道路公団姫路工事事務所と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で協議を重ね、これ以後は順次確認調査を実施することとした。

第２節　確認調査の経過

加古川市志方町の北部地域は、加西市の一部も含め「中東部播磨古窯址群」と呼称される奈良時代から平安時代の窯跡が多数分布していることが周知されている。このうち志方町札馬地区では、大規模な砕石採取による事前の発掘調査が昭和55年～57年の３ヶ年にわたって実施されている。[(1)] 山陽自動車道の路線ルートは、加古川市志方町へは東西両方向からトンネルを抜け、志方町北端部の丘陵を横断し、県道高砂北条線より加古川北インターチェンジが取りつくように計画されている。これは、志方窯跡群域内では、投松地区、札馬地区の一部および、中谷地区を含み、調査対象範囲はおよそ12万㎡の広範囲に及んでいる。調査はこのうち、窯跡の存在が確認あるいは、推定される地点および、土器の散布が認められる地点など11地点にわたって実施した。調査を行うにあたり、それらは山陽自動車道№30～№39地点、北長池散布地と仮称（挿図２）し、№30～№34地点は投松地区に、№35～№37地点および、北長池散布地は札馬地区に、№38～№39地点は中谷地区の範囲内にそれぞれに位置している。

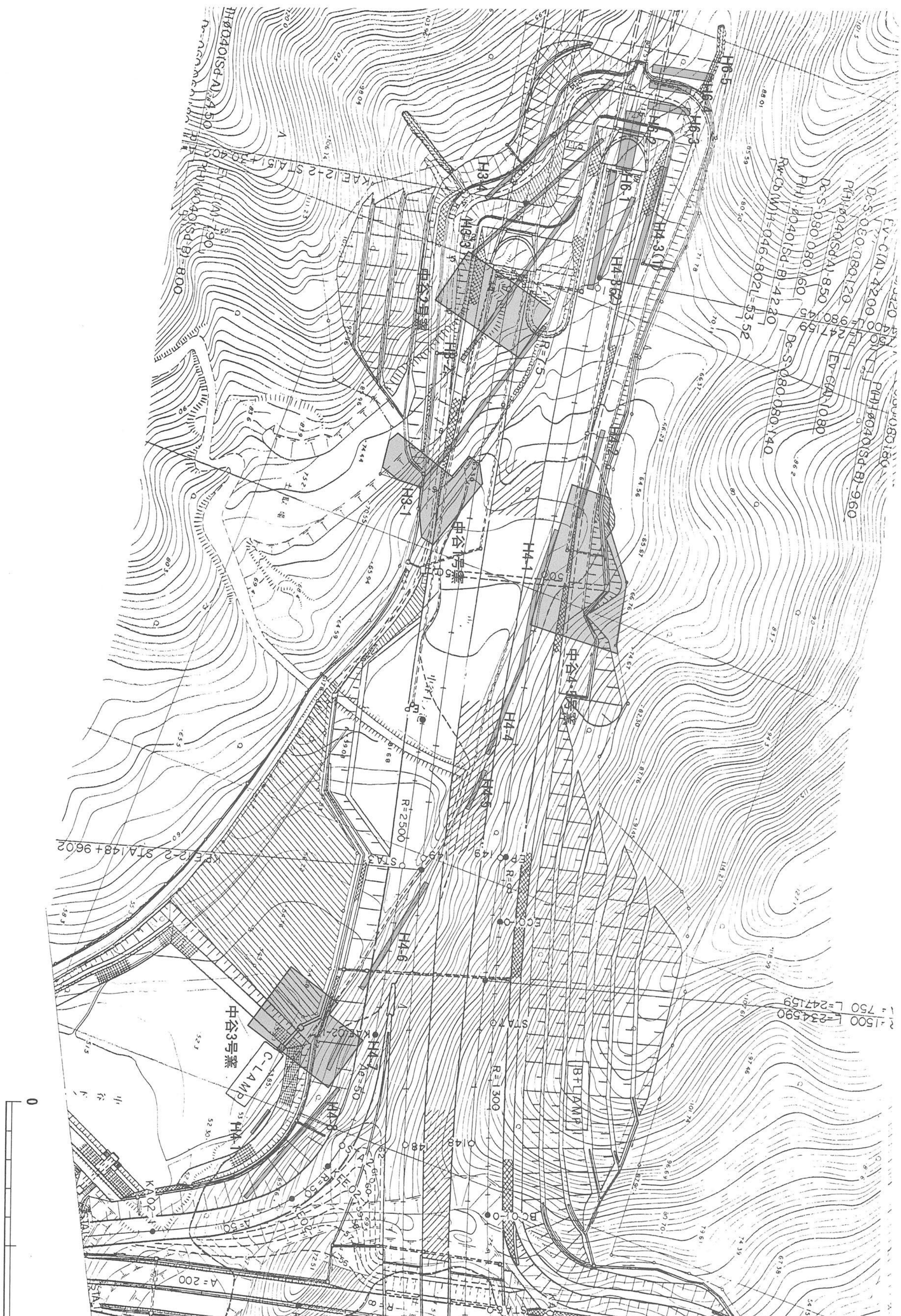


挿図２　山陽自動車道路線内確認調査位置図

中谷地区における確認調査（挿図３）は、平成３年度にNo.38・No.39地点の調査を、平成４年度にもNo.39地点の調査を実施した。No.39地点は、中谷の南北斜面を含む広範囲なため、平成３年度の調査では谷の南斜面を、続く平成４年度は谷の北斜面を調査の対象とした。平成６年度には一部全面調査と並行して、谷奥部の第２次調査を実施した。谷奥部は平成３・４年度の調査時に土器が出土し、炭を含んだ堆積層が確認されていたが、第２次調査の結果、窯跡や灰原は発見されず、炭土坑（ＳＸ01）１基が発見された。また、札馬地区における調査では、新池周辺（No.35～No.37地点）および、北長池周辺（北長池散布地）に窯跡の存在が考えられたが、土器の散布は認められず、遺構は発見されなかった。なお、投松地区における調査の経過については、別冊『志方窯跡群Ⅱ－投松支群－』[(2)]において記載する。

第３節　全面調査の経過

本線部分とインターチェンジ進入路内に分布している志方窯跡群中谷地区は、加古川市志方町大沢の東に向かって開く通称、中谷に所在する。中谷１号窯は、平成３年度の確認調査によって谷の南斜面に灰原が発見され、全面調査に至った窯跡である。斜面上方は土取りによって大きく削平されていたが、窯体は煙道部まで残存しており、灰原の東側一部が路線対象外に続いている他は窯跡全域の調査が行われた。中谷２号窯は、１号窯南上方から続く土取り跡地の崖断面に窯体が露出していたのを平成３年度の確認調査時に発見したものである。また、中谷３号窯は平成４年度の確認調査において谷の北斜面に窯体を発見し、全面調査に至った窯跡である。以上の中谷１号～３号窯の全面調査は、平成６年度にNo.39地点の確認調査および、白沢放山遺跡（加古川市上荘町白沢）・大釜瓦窯跡（姫路市飾東町大釜）[(3)]と



挿図3　中谷地区確認調査トレンチ配置図および全面調査区

遺　跡　名	所在地（加古川市）	遺跡調査番号	調査担当者	調査期間	調査面積
山陽自動車道（三木～姫路）No.38地点	志方町大沢字中谷 847-66他	910146	主　査 森内　秀造 技術職員 山上　雅弘	平成４年３月２日～３月６日	44㎡
山陽自動車道（三木～姫路）No.39地点	志方町大沢字中谷827他	910147		平成４年３月２日～３月13日	236㎡
山陽自動車道（三木～姫路）No.39地点	志方町大沢字中谷 843-7他	920309	調査専門員 西口　和彦 主　査 森内　秀造 臨時職員 仁尾　一人	平成４年11月20日～平成５年３月12日	494㎡
中谷１号窯	志方町大沢字中谷 847-67他	940001	主　査 森内　秀造 技術職員 井本　有二 仁尾　一人	平成６年８月１日～10月５日	585㎡
中谷２号窯	志方町大沢字中谷 847-65他	940002		平成６年６月24日～９月22日	700㎡
山陽自動車道（三木～姫路）No.39地点	志方町大沢字中谷847	940003		平成６年５月30日～６月30日	280㎡
中谷３号窯	志方町大沢字中谷847他	940236		平成６年９月５日～10月５日	800㎡
山陽自動車道（三木～姫路）No.39地点	志方町大沢字北山874-8	940306		平成６年12月26日～12月27日	20㎡
山陽自動車道（三木～姫路）No.39地点	志方町大沢字中谷847	940335		平成６年８月８日～８月９日	10㎡
山陽自動車道（三木～姫路）No.36地点	志方町大沢字新池 880-1他	940340		平成６年12月26日～12月27日	10㎡
山陽自動車道（三木～姫路）No.37地点					10㎡
（中谷窯跡群）中谷４号窯	志方町大沢字中谷 847-26他	（950217）950218	主　査 森内　秀造 技術職員 仁尾　一人 岡本　一秀	平成７年８月21日～10月31日	1,790㎡
中谷５号窯	志方町大沢字中谷 847-26他	950219			
山陽自動車道（三木～姫路）No.35地点	志方町大沢字新池 880-5他	950220		平成７年10月16日	30㎡
北長池散布地	志方町大沢字北長池 1034-1他	950381		平成7年12月18日～平成８年１月23日	120㎡

第１表　山陽自動車道建設に伴う志方窯跡群　大沢地区の調査一覧

併せて実施した。中谷3号窯の調査は、当初の発掘調査計画には含まれていなかったが、中谷下池の改修工事計画の工事実施にあたり、日本道路公団と協議を行い平成6年度の調査に追加して実施することとなったものである。続く平成7年度には、中谷4号窯の全面調査を実施した。中谷4号窯は分布調査時に谷の北斜面に2基の窯跡が存在するとされていたが、調査の結果、1基（5号窯）は灰原の南端裾のわずかに土器が散布する地点のみが路線内に係っており、窯体および、灰原は北上方斜面の路線外に存在することがわかった。この他、1号窯の灰原北側の比較的傾斜が緩やかな地点や4号窯の灰原南東などから炭土坑や炭の堆積層が発見され、調査を行っている。なお、平成7年9月28日には新聞発表を行い、10月1日に現地説明会を実施し、調査成果の一部を一般に公開した。

以上、山陽自動車道建設に伴う志方窯跡群中谷支群の調査では、遺跡の名称については加古川市教育委員会と協議を行った結果、確認調査によって窯跡の存在が認められた順に中谷1号窯～5号窯と呼称し、発掘調査および、整理作業を行い、今回の調査報告もこれに準じている。このため、加古川市の遺跡名（窯跡番号）とは相違がみられるが、対象表を[4]記しておきたい。

また、この地域の窯跡群として呼称されてきた「中東部播磨古窯址群」の名称を、このたび「志方窯跡群」と改めた。これは「中東部」という地域が播磨のどの辺りを位置するのかわかりにくいと考えたためであり、加古川・加西両市に分布する窯跡の中心に所在する「志方」という地名を付して総称している。このため、中谷地区と投松地区において調査が行われた複数の窯跡は、今回報告するような中谷支群および、投松支群としてそれぞれとらえ、この他これまでに調査が行われた札馬地区や西ノ池地区、これ以後に調査が行われた成池地区の各窯跡群に[5]ついても同様に「志方窯跡群」中の一支群として考えている。

第4節　発掘調査および整理の体制

発掘調査事業参加者（平成3年度～平成7年度）

調査担当者	第1表　参照
現場補助員	中北敦子・宮永宜和・越智みや子・高谷百世・牛谷好伸
室内作業員	五百蔵道代・菊島昌子・佐藤朋子・冨永浩子・永井弘子・林美代子・藤田由美 内藤須美子・安達章子・藤田　泉
発掘請負業者	東海アナース株式会社（平成3・4年度） 株式会社　新井組（平成6年度） ㈱富士土木興業（平成7年度）

整理事業参加者

平成9年度／接合・補強を実施

整理担当職員		非常勤嘱託員	
主　　査	森内　秀造	企画技術員	香川フジ子
技術職員	中村　　弘	図化技術員	前田千栄子・吉田優子・鈴木まき子・早川亜紀子
技術職員	井本　有二		喜多山好子・武田恵美子・西野淳子
技術職員	仁尾　一人	図化補助技術員	真子ふさ恵・大仁克子
技術職員	岡本　一秀		

平成10年度／実測・復元・写真撮影を実施

整理担当職員		非常勤嘱託員	
主　査	森内　秀造	主任技術員	酒井喜美子
主　査	菱田　淳子	企画技術員	岡崎輝子
技術職員	井本　有二	図化技術員	奥野政子・平松ゆり・松本嘉子・小野潤子
技術職員	仁尾　一人	日々雇用職員	西岡敬子
技術職員	岡本　一秀		

金属処理

主　査	加古知恵子	主任技術員	栗山美奈
	藤田　淳	企画技術員	和田寿佐子
		図化技術員	前川悦子・藤川紀子

平成11年度／遺構図補正・トレース・レイアウトを実施

整理担当職員	非常勤嘱託員	
	主任技術員	岡崎輝子
同　上	図化技術員	松本嘉子・小野潤子・奥野政子
	図化補助技術員	西岡敬子
	日々雇用職員	加藤裕美・三好綾子・佐々木誓子

註

(1)第２章　志方窯跡群の分布　参照

(2)平成10年度から整理作業を行っており、平成12年度に刊行予定である。

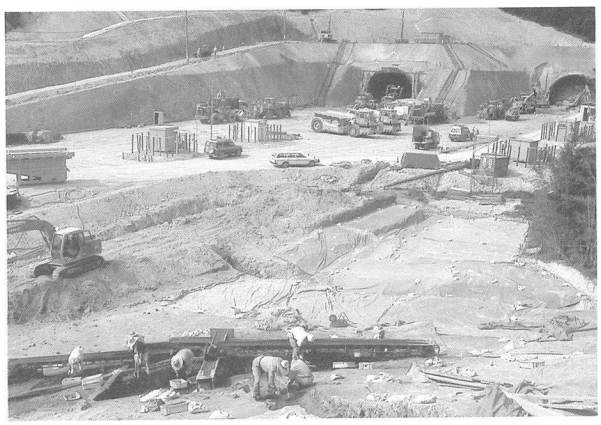
(3)『白沢放山遺跡』山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸⅧ－　1998　兵庫県教育委員会

『大釜瓦窯跡』山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸⅢ－　1997　兵庫県教育委員会

(4)第２表　中谷支群　窯跡名新旧対称表

中谷支群の名称	加古川市 遺跡分布地図
中谷１号窯	新発見
中谷２号窯	新発見
中谷３号窯	中谷古窯跡８号窯
中谷４号窯	中谷古窯跡10号窯
中谷５号窯	中谷古窯跡12号窯

(5) (1)に同じ。



挿図４　中谷４号窯　調査風景

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡周辺の地理的環境

志方窯跡群の所在する加古川市志方町は、加古川市の北西部に位置し加西市と北接する。律令期にはこのあたりは印南郡に属している。『播磨国風土記』に「印南郡」と記されているのが初見である。印南郡の郡名は、志方町が昭和54年に加古川市に合併されたことによって消滅するまで残っていた。志方窯跡群の位置する場所は旧印南郡と旧賀茂郡との郡境となっていた。この地域は、鉄道や幹線道路からも離れており、それほど宅地開発が進んでいない。

町の周囲は、城山、大藤山、飯盛山など標高200m前後の山塊が囲み、盆地状の地形を呈している。このような地形が形成されたのは、流紋岩質多結晶溶結凝灰岩からなる基岩が、周囲の山地を縦横に走る断層によって破砕され、気象環境の作用によって谷部を埋められたことによるものと考えられている。志方盆地を流れる河川は２本ある。法華山谷川は北西方向より盆地の南側へと流れ、播磨灘へとそそいでいる。西川は、北東方向から南東側へ流れ加古川本流へとそそいでいる。盆地の北東方向、真北方向、北西方向にそれぞれ開析された谷がのびる。町域の北側は、札馬地区を中心に掌状に谷が開析されている。志方窯跡群中谷地区は、この掌状の谷の中の最も西側の谷に位置している。

第２節　遺跡周辺の歴史的環境

加古川市志方町周辺の遺跡については、加古川市および、加西市がそれぞれ詳細な遺跡分布地図を作成しており、これらを基本的な資料としている。志方窯跡群については、次節で詳しくふれるため、ここでは、窯跡以外の遺跡について調査成果や採集遺物などから周辺の歴史的環境を概観していきたい。

加古川付近の旧石器時代の遺跡は、約40ヶ所を数え、兵庫県下で確認されている約150ヶ所のうちの四分の一を占めている。この地域は、備讃瀬戸・二上山付近などとともに西日本の旧石器遺跡の集中するところであり、加古川下流域がこの時代の生活に好適な土地であったと考えられる。志方町周辺では、約20ヶ所の旧石器時代の遺跡が確認されており、標高およそ30m前後の丘陵裾の段丘上に立地し、その半数は溜池の位置と重なっている。最も古い時期のものとしては、国府文化期に属するものであり、上の池遺跡（旧七ツ池Ａ地点）、横山遺跡（旧横山Ｂ地点）からは国府型ナイフが、広尾後池遺跡、西飯坂遺跡からは国府型ナイフの素材となる翼状剥片が採集されている。

加古川市域で縄文土器が出土する遺跡はわずか４遺跡であり、後期あるいは、晩期に属し、河岸段丘または沖積地に立地している。そのうち志方町では、旧石器時代の遺跡と重複する上の池遺跡、横山遺跡、岡山西方遺跡から縄文時代の石器と考えられる石鏃や石匙が出土しており、東中遺跡からは、表面に三条の平行沈線と一条の波形沈線が付き、上縁近くに縄文が施文された元住吉山式の時期と考えられる後期後半の縄文土器片が出土している。(1)

加古川市域には、弥生時代のほぼ全期間にわたって存続する遺跡がおよそ５キロメートルの距離をおいて四群が分布している。(2)東中遺跡は前述した縄文土器が採集され、法華山谷川中流の沖積地に立地する四群のうちの一群である。(3)弥生時代前期の土器とともに中期の土器が多量に出土しており、その中で

1.志方窯跡群／1-1中谷支群　1-2投松支群　1-3札馬支群　1-4観音堂支群　1-5薫谷支群　1-6中津倉支群　1-7カワラケ谷支群　1-8西ノ池支群
1-9七ッ池支群　1-10虎ヶ谷支群　1-11三口上池支群　1-12成池支群　1-13芋畦池支群　1-14戸井町坪支群　1-15倉谷・大池ノ下支群

2.畑遺跡	3.池の内遺跡	4.細工所遺跡	5.上の池遺跡	6.中道子山城跡	7.野尻古墳群	8.権現池遺跡	9.広尾後池遺跡	10.広尾東遺跡	11.中山古墳群
12.八ッ仏古墳群	13.小畑1号群	14.上原古墳	15.峠上ノ池遺跡	16.神木構居跡	17.神木遺跡	18.印南山古墳群	19.山角廃寺	20.大藤山祭祀遺跡	21.宮谷遺跡
22.大藤山1号墳	23.西中古墳	24.塚ノ池古墳群	25.西中新池遺跡	26.芋ヶ谷古墳群	27.天神山古墳群	28.天神山城跡	29.山添遺跡	30.東中遺跡	31.志方宮山古墳群
32.高畑古墳	33.寺山古墳	34.石打山古墳群	35.岡山西方遺跡	36.二子塚古墳	37.志方大塚古墳	38.西飯坂遺跡	39.観音寺城跡	40.皿池廃寺	41.助永砦跡
42.溝の石棺	43.西牧遺跡	44.志方大歳神社遺跡	45.志方南遺跡	46.横大路遺跡	47.成井山遺跡	48.西山新池遺跡	49.横大路古墓	50.峠の池遺跡	51.峠東遺跡
52.かや池遺跡	53.西山大塚古墳	54.横大路古墳	55.大国山遺跡	56.辻古墳	57.上富木遺跡	58.横山遺跡	59.鏡塚古墳	60.穴蔵古墳	61.宮前大池遺跡
62.宮前大池埴輪窯跡	63.神吉宮山古墳群	64.宮前古墳	65.新櫃池遺跡	66.神吉山古墳群	67.投松東古墳群	68.原兵庫守墓	69.小畑古墳	70.塚山古墳	71.畑谷池遺跡
72.山越古墳	73.黒岩山古墳	74.飯盛山古墳群	75.西山遺跡	76.里古墳	77.西山大塚古墳	78.法華山一乗寺	79.坂本遺跡	80.坂本町遺跡	81.焼野古墳
82.後藤山古墳	83.不動ヶ尾経塚	84.周遍寺坊跡	85.周遍寺中世墓	86.亀ノ尾古墳群	87.八寸山墳墓群	88.周遍寺山古墳	89.三口稲所遺跡	90.三口市場遺跡	91.三口中倉遺跡
92.小丸遺物散布地	93.かわらけ山城跡	94.千歳山城跡	95.中野町遺物散布地	96.中溝遺跡	97.西笠原古墳群	98.西笠原遺跡	99.善坊山城跡	100.猫尾遺跡	101.三口北山古墳
102.隠し谷散布地	103.古法華散布地	104.西長採石跡	105.剣坂熊野神社古墳	106.善坊池遺跡	107.善坊古墳	108.王子遺跡	109.野条廃寺	110.上南ノ谷遺跡	

挿図5　志方窯跡群周辺の遺跡分布図

も中期Ⅲ期の典型的な壷形土器には円形浮文や凸帯文、しずく状の浮文など全体的に強い装飾が施されている。弥生時代の集落跡はこの他にも、西中新池遺跡、志方南遺跡で確認されており、加西市域では西笠原遺跡、猫尾遺跡が知られている。

古墳時代の法華山谷川河口の山地と加古川の支流万願寺川上流では、それぞれ竜山石、高室石と総称される凝灰岩が産出し、大和・河内地域を中心とする広い範囲に長持形石棺や家形石棺を供給していたことが知られている。石棺供給元である加古川下流域では、長持形石棺や家形石棺を埋葬主体とする古墳が数多く築造され、現在それらの一部は蓋石と身が分離して放置されていたり、庭石や寺社の手水石に転用されており、およそ150例近くの石棺材が確認されている。『播磨国風土記』印南郡大国里の条[(4)]には「石作連」の名がみられ、現在の西神吉町に大国の地名が残っている。

古墳時代の終焉とともに各地では寺院が建立されるが、加古川・加西両市域でも、白鳳時代に創建された寺院が数多く発見されている。[(5)]平荘町の平荘小学校敷地内には、1個の塔婆心礎が安置され、多量の古瓦が保管されており、それらの出土遺物からこの地に山角廃寺の存在が想定されている。

中世には石棺材を転用して阿弥陀仏を彫刻した石棺仏や中世城郭、集落跡などの遺跡数も多く、近世を経て現在に至るまで、この地域には人々の生活が連綿と続いている。

第3節　志方窯跡群の分布

加古川市志方町の北部丘陵および、加西市の南部地域（三口町・倉谷町・田原町）には、奈良時代から平安時代にかけての窯跡が数多く分布している。これらの総数は、現在確認しうるもので151基の窯跡と32ヶ所の土器の散布地を数えている。[(6)]この地域は、古代の行政区分では志方町は旧播磨国印南郡、加西市の南部地域は同賀茂郡に属しており、ふたつの郡域にまたがって土器生産が行われていた。[(7)]平安時代に編纂された『延喜式』[(8)]には、播磨国の調（税）として土器が納められていたことが記載されており、この時代の播磨国における土器生産地の主要なひとつとして当該窯跡群の存在が考えられる。

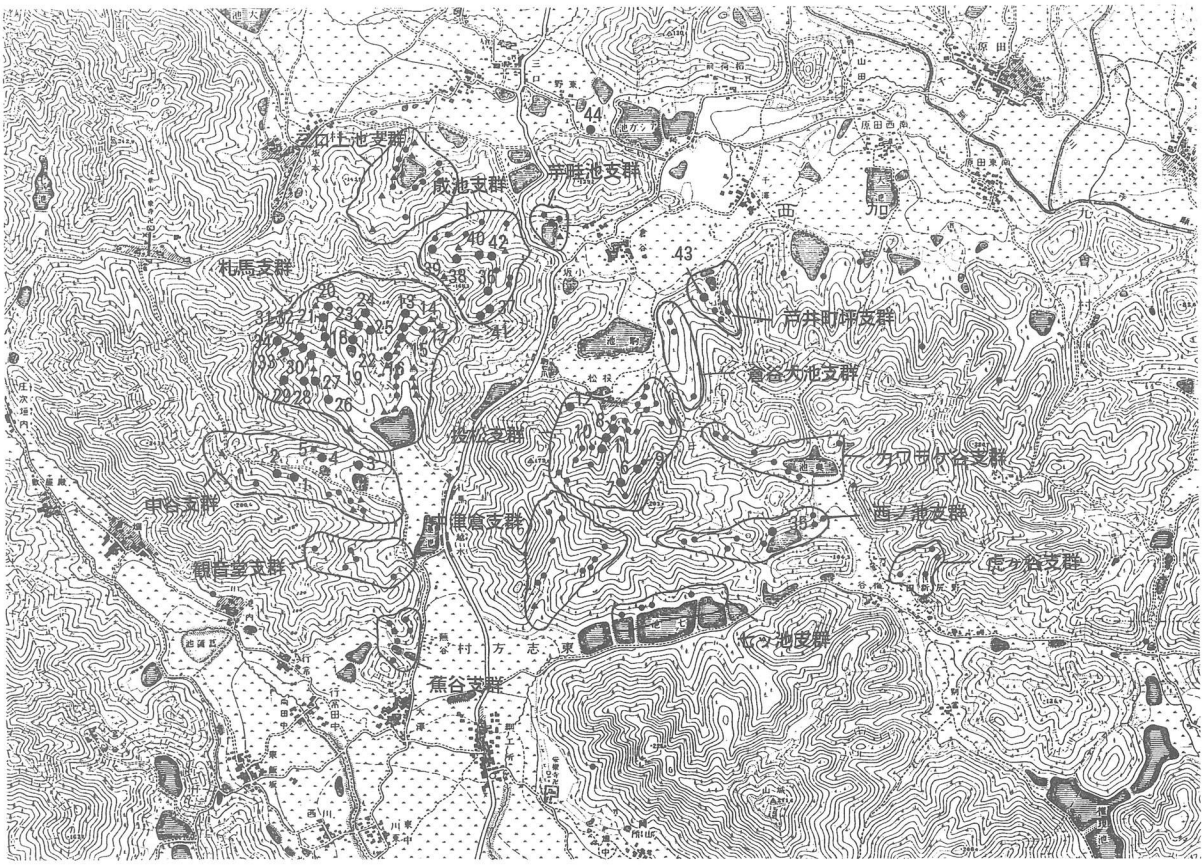
志方窯跡群の調査については、旧印南郡志方町が加古川市に合併される以前、昭和43年に実施した町誌編纂事業による町域全体を対象とした遺跡分布調査が最初である。[(9)]上月昭信氏らを中心として実施されたこの調査では、志方町札馬・大沢・投松・細工所・野尻の5地区にまたがる東西約2㎞、南北約1㎞の範囲において16基の窯跡が確認され、「中東部播磨古窯址群」と命名された。その後、昭和47年には札馬地区において宅地造成計画が提示され、同地区を対象とした詳細な分布調査を行い、新たに24基の窯跡と14ヶ所の土器の散布地が確認された。宅地造成計画は中止されたが、これ以後、上月氏らを中心とした地元研究者の調査によって、志方町北部丘陵にはおよそ100基の窯跡と50ヶ所以上の土器の散布地が確認されることになる。[(10)]また、加西市側では、平成5年から始まった市内全域の分布調査以前に永井信弘氏による踏査によって30基近くの窯跡の存在が知られていた。

これらの地域では、現在に至るまで大小さまざまな開発に伴う発掘調査が実施されている。昭和51年には西ノ池地区において城山ゴルフ場建設に伴う発掘調査が行われ、[(11)]札馬地区では昭和55年～57年にわたって札馬砕石工業株式会社の砕石採取による事前の発掘調査が実施されている。[(12)]札馬砕石工業株式会社による砕石採取は近年加西市側にも及び、平成11年には成池地区において発掘調査が行われている。[(13)]しかし、札馬地区では分布調査によって窯跡の存在が確認されて以降、昭和55年に調査が実施されるまでの期間中に破壊され、消滅していった窯跡が多数報告されている。[(14)]今回の山陽自動車道建設に伴う調

査によって中谷支群の４基、投松支群の６基とを併せ、志方窯跡群全域では44基の窯跡の調査が行われたことになり、調査成果の集積による窯跡群の実態解明が進むことと引換えに周辺の自然環境は大きく変貌している。

以下に旧印南郡および、旧賀茂郡に分布するそれぞれの支群について記載しておきたい。

【旧印南郡】　志方町法華口から平荘町小畑にかけては、北西～南東の狭い山間盆地となっており、そのほぼ中央、志方町細工所から北の加西市方向へは現在の県道高砂北条線が抜け、東の小野市方向へは県道小野志方線が通じている。このふたつの細長い主谷から派生する支谷および、枝谷に旧印南郡に分布する窯跡が点在し、10の支群に分類される。北にのびる細長い主谷（以下、北主谷と仮称）には、東に開口する３つの支谷が形成され、南から蕉谷・観音堂・中谷支群と呼称される。中谷支群はそのうちの一番北に位置しており、谷の南北斜面に11基の窯跡と３ヵ所の土器散布地が確認されている。今回の調査では５基の窯跡と4基の炭土坑について発掘調査を実施した（詳細は本書を参照）。この中谷には、



1.中谷1号窯	2.中谷2号窯	3.中谷3号窯	4.中谷4号窯	5.中谷5号窯	●窯跡
6.投松1号窯	7.投松2号窯	8.投松3号窯	9.投松4号窯	10.投松5号窯	▲散布地
11.投松6号窯	12.投松7号窯	13.札馬1号窯	14.札馬2号窯	15.札馬3号窯	
16.札馬5号窯	17.札馬7-Ⅰ・Ⅱ号窯	18.札馬22号窯	19.札馬23号窯	20.札馬24号窯	
21.札馬25号窯	22.札馬29号窯	23.札馬30号窯	24.札馬33号窯	25.札馬36号窯	
26.札馬41号窯	27.札馬44-Ⅰ号窯	28.札馬44-Ⅱ号窯	29.札馬45号窯	30.札馬46号窯	
31.札馬47号窯	32.札馬48号窯	33.札馬49号窯	34.札馬50号窯	35.西の池1号窯	
36.成池2号窯	37.成池12号窯	38.成池13号窯	39.成池17号窯	40.成池19号窯	
41.成池20号窯	42.成池21号窯	43.戸井町坪1号窯	44.三口中倉1号窯		

挿図６　志方窯跡群分布図（明治33年）

古くは旧印南郡方面から西国三十三か所巡礼第二十六番札所の法華山一乗寺へと通じる巡礼道が抜けており、現在は山陽自然歩道として市民憩いの散策道として残されている。中谷支群の北には新池より北方向へ派生する3つの支谷に窯跡が点在する札馬支群が位置している。3つの支谷は西から西の谷、中の谷、東の谷と呼ばれ、谷の斜面には26基の窯跡と16ヶ所の土器の散布地が確認されていた。札馬支群では22基の窯跡の調査が行われているが、山陽自動車道の建設に加え、現在も砕石採取が進められており、山塊の削平は著しく、残存する窯跡は激減している。

東にのびる細長い主谷（以下、東主谷と仮称）には、七ツ池と総称される下の池、上の池をはじめとする多くの溜め池が点在している。窯跡はこの東主谷の北の山塊に複雑に入り込んだ支谷および、枝谷に分布している。中津倉支群は東主谷西端の南に開口する支谷と枝谷に窯跡が点在し、七ツ池の北側斜面には4基の窯跡が確認されている七ツ池支群が位置している。さらに東主谷から北へ入り込んだ支谷には、それぞれ枝谷を堰止めるような位置に西ノ池、奥池が所在し、枝谷の両側斜面に窯跡が点在する西の池支群・カワラケ谷支群と呼称される一群が展開する。東主谷の北の山塊からはずれた野尻には4基の窯跡が確認されている虎ケ谷支群が所在しており、さらに東の平荘町奥新田には古墳時代の窯跡が1基存在する。また、投松支群は東主谷の北側の山塊に位置しているが、旧賀茂郡に所在する駒ケ池に向けて北に開口する3つの支谷に窯跡が点在している。3つの支谷は西から西ノ谷、久屋ケ谷、大歳山(谷)と呼ばれ、26基の窯跡が確認されている。山陽自動車道建設に伴う調査では、久屋ケ谷奥部の東西斜面で2基、西ノ谷の東斜面で3基、さらに西ノ谷西側のベク谷で1基のあわせて6基の窯跡と、西ノ谷の西斜面で発見された窯跡に伴う工房跡の調査を実施している。

【旧賀茂郡】　現在の加西市三口・倉谷・田原の3町に点在する窯跡は、5つの支群に分類される。三口町奥池および、上池に向けて開口する谷中の斜面と池の周囲には、三口上池支群と呼称される10基の窯跡と5ヵ所の土器の散布地が確認されている。三口上池支群の南東に位置する成池支群は、明治33年の図面（挿図5）では池は存在しておらず、東と北に開口する支谷の両側斜面に窯跡が分布している。両支谷の開口部には現在、成池が所在し、札馬地区での砕石採取が成池支群の支谷にも及んだため、加西市教育委員会が試掘調査を実施し、成池支群には15基の窯跡と2基の炭焼き窯跡が発見されている。これらふたつの支群は札馬および、中谷支群が所在する同一の山塊に分布しているが、山塊の中央を横断する尾根の稜線が旧印南郡との郡境となっており、旧賀茂郡に含まれる。また、成池に対面する芋畦池の周囲にも窯跡が点在しており、芋畦池支群と呼称される。

駒ケ池の南、旧印南郡域には投松支群が分布しているが、旧賀茂郡に属する池の東斜面には倉谷・大池ノ下支群が位置している。さらに尾根をひとつ隔てた東の上笹池に向けて開口する戸井町坪支群では5基の窯跡が確認されており、農地造成工事による事前の発掘調査で戸井町坪1号窯の調査が行われている。[15] この他にも、周辺の谷筋や池の周囲に6基の窯跡と1ヵ所の土器の散布地が確認されているが、現在ではそれぞれ単独なため、支群としてはみなしていない。

註

(1)『東中遺跡発掘調査報告書』　1981　加古川市教育委員会

(2)東中遺跡の他、草谷川下流には下村遺跡、加古川下流の左岸には溝之口遺跡、同右岸には岸遺跡・砂部遺跡・東神吉遺跡が所在し、以上四群の遺跡が各水系におけるムラの中心的な存在であったと考えられる。このうち、岸・砂部・東神吉の各遺跡は径約2㎞の範囲内にあり、出土土器からそれぞれの遺跡には時期のずれがみられ、一群内での移動があったと考えられている。

(3) (1)に同じ。

(4)『播磨国風土記』賀古郡には、「大国里（前略）此里有山。名曰伊保山。（中略）息（長）帯日女命、率石作連大来而、求讃伎国羽若石也。（後略）」と記載されており、この地域に石材を採取、加工した石工集団が存在したことを記している。なお、「印南郡」の郡制施行は風土記編述より後であり、当時「印南郡」が存在した証はなく、賀古郡の一部であったと推定される。

(5)加古川市域では西条・石守・野口・中西・山角廃寺が、加西市域では殿原・吸谷・繁昌廃寺が発掘調査および、分布調査によって知られている。

(6)これまでに確認しえた 151基の窯跡のうち、古墳時代の窯は１基、律令期の窯は121基、平安時代の窯は29基をそれぞれ数える。しかし、調査毎に窯跡の数は増加しており、今後もその数は増えるものと考えられる。

(7)志方窯跡群が旧印南郡と旧賀茂郡にまたがって分布している他、相生窯跡群は旧赤穂郡と旧揖保郡に、峰相山窯跡群が旧揖保郡と旧飾磨郡に、東播北部窯跡群が旧賀茂郡と旧多可郡にそれぞれまたがって分布しており、播磨国内における律令期の窯跡群の特徴といえる。

(8)『延喜式』巻二十四主計上には、「山陽道播磨国海路八日調。（前略）池由加五口。中由加五口。■二口。（中略）菜坏（ナッキ）各七十一口。韲坏八十合。燈盞八十口。（後略）」と記載されており、播磨国の他、摂津・和泉・讃岐・備前・美濃・近江・筑前の国々にも同類の記事がみられる。

『延喜式』中篇　新訂増補　国史大系　1984　吉川弘文館

(9)この時の調査成果を著した文献で確認しえたものは、以下のものである。

「播磨志方町分布調査　その前提作業１」　1968　志方町教育委員会・学生考古学研究会・三村秀弘町会議員共催

上月昭信・江口千恵子・太田芳美「播磨志方町第１次遺跡分布調査特集」『土塊』№13　増刊号1968立命大歴史学研究会　考古学部会

『古代の志方』（先土器時代～弥生時代）　志方町遺跡調査報告その１　1974　兵庫県印南郡志方町教育委員会

(10)上月昭信氏の他に、山本三郎・眞野修・中村信義・山本博利各氏らによって昭和45年に兵庫県生産遺跡研究会がつくられ、播磨各地の生産地の分布調査が行われている。

(11)『西ノ池古窯址群調査報告書』　1979　西ノ池古窯址群発掘調査団

(12)『札馬　古窯跡群発掘調査報告書』　1982　加古川市教育委員会

(13)『成池古窯跡群発掘調査　現地説明会資料』成池２・12・20号窯跡の調査成果　1999　兵庫県加西市教育委員会

なお、詳細については永井信弘氏よりご教示頂いた。

(14)上月昭信「附　調査前に消滅した窯について――とくに東の谷14号窯出土遺物とその特色――」

前掲『札馬　古窯跡群発掘調査報告書』

(15)『戸井町坪１号窯』　1990　兵庫県教育委員会

参考文献

『兵庫県史』第１巻　1974

『増訂　印南郡誌』前後編　1985　兵庫県郷土誌叢刊

『加古川市史』第１巻　1989

『兵庫県大事典』　1983　神戸新聞出版センター

『播磨の地理』自然編　1994　田中眞吾編著　神戸新聞社総合出版センター

『加古川市遺跡分布地図』第２版　1994　加古川市教育委員会

『加西市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』　1997　加西市教育委員会

『風土記』新編日本古典文学全集５　植垣節也校注・訳　1997　小学館

(旧)印南郡	総　数
中　谷	11(３)
投　松	26
札　馬	26(16)
観音堂	5
蕉　谷	6
中津倉	9(１)
カワラケ谷	7
西ノ池	9
七ツ池	4
虎ケ谷	4
その他	3

(旧)賀茂郡	総　数
三口上池	10(５)
成　池	15(４)
芋畦池	3(１)
戸井町坪	3(１)
倉谷・大池ノ下	3
その他	6(１)

(　)の数値は散布地

(6)第３表

志方遺跡群　支群名及び構成基数

第3章　中谷4号窯

第1節　窯の立地と構造

南向き斜面側の裾部に立地する。標高は焚口で67mを測り、谷底からの比高差は約7mある。流紋岩質凝灰岩からなる基盤層を掘り込んだ半地下式の穴窯である。窯体先端部は山道により削平されて残存しないが、先端部は山道の幅を越えて上方には延びていないので、削平された先端部の長さは1mに満たないものと思われる。残存長は7.5mあるので、窯体の全長は8m前後になろう。床面の傾斜角度は焼成部下部のB断面付近で25°、先端部のA断面付近では35°となりやや急になる。平均斜度は30°である。

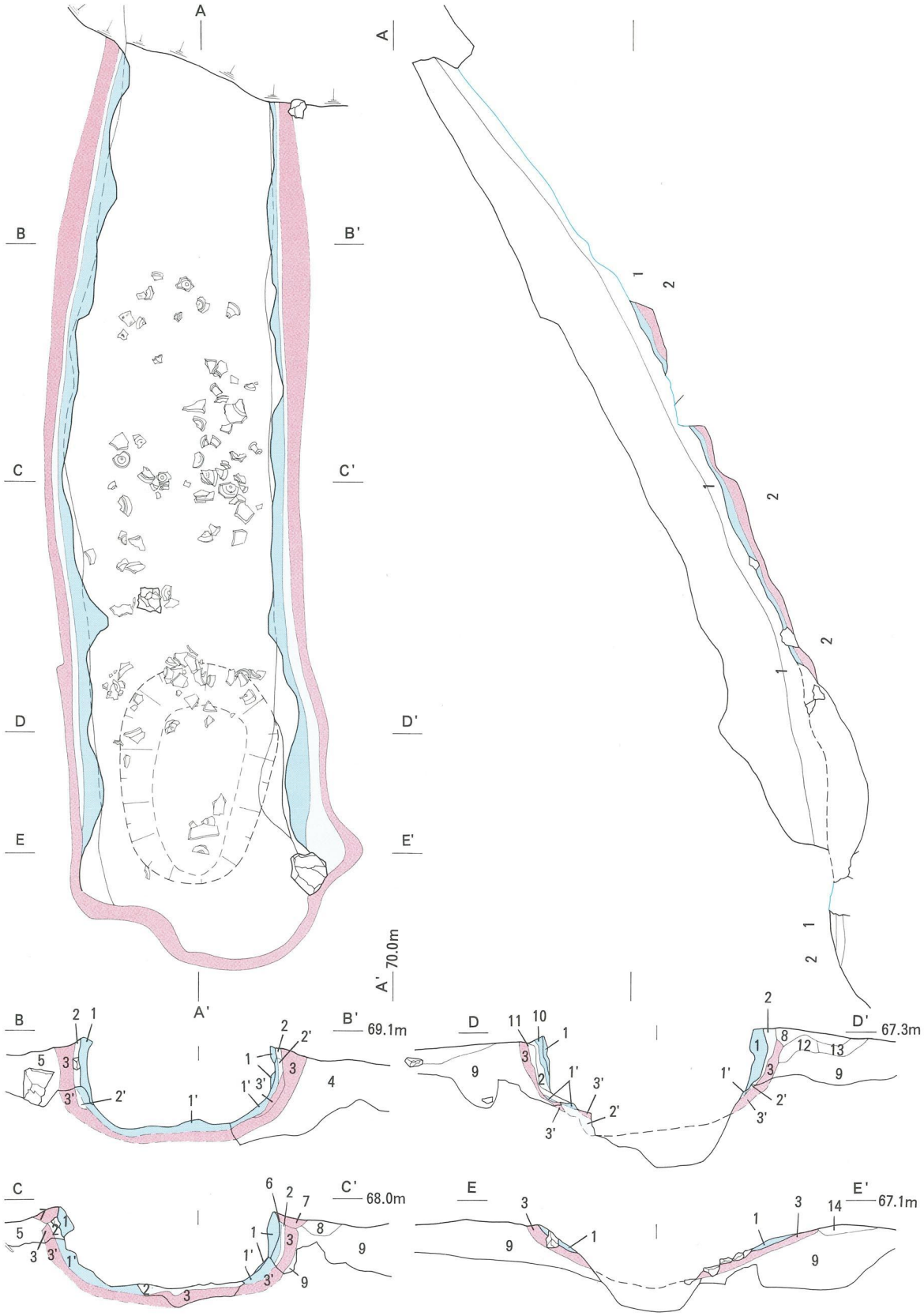
床幅は先端で0.60m、焼成部中央で0.84m、燃焼部で0.75m、焚口で0.80mである。挿図7でわかるように、右側壁が焚口から先端まで一直線であるのに対し、左側壁は焼成部中央（C断面付近）でふくらんでいるために、全体の平面プランは右にカーブしているように見える。このようなやや歪な平面プランを呈するに至った要因は基盤層の流紋岩質凝灰岩の節理にある。すなわち、右側壁側では風化土が厚く壁面の整形が容易であるのに対し、左側壁側では表土直下に流紋岩質凝灰岩が露頭し、掘削が容易でない。しかも、この流紋岩質凝灰岩は挿図8に示したような節理の方向を有しており、ブロック単位に割れるために、壁を一直線に通すことができなかったと理解される。

窯体は上記のように流紋岩質凝灰岩を掘り込んで構築されており、側壁の下部から床面にかけては基盤岩の掘削面を粘土で被覆せずにそのままの状態で使用しているが、 側壁の上部は架構天井を支えるために、すさ混じりの粘土を貼り付けている。窯体内に落盤した窯壁の厚みは天井部の窯壁で22cm、側壁部の窯壁で15cmあるが、壁の枚数は数層に及んでおり、度重なる修復が行われたことがわかる。修復の痕跡はB断面とC断面に残されている。このうち、B断面では両側壁の青灰色還元層と橙色酸化層が上面でカットされ、その上に第7層淡赤褐色土が堆積している。C断面についても右側壁に同様の痕跡が残されており、少なくとも1回は操業期間中に大きな修復が行われたことがわかる。側壁の垂直高は先端部で0.35m、焼成部中央で0.8m、焚口で0.60mである。壁には粘土を手でなでて貼りつけた痕跡が明瞭に残る。また、天井部か側壁部のいずれかは判断できないが、窯壁片の一部に直径1.5cmの支柱の跡を残すものがある。

燃焼部は奥行き1.6mあり、長径1.85m、短径1.25mの楕円形の舟底状ピットが設けられている。ピット内には窯壁片、須恵器片、炭などを含んだ数層の堆積土が充満し、底面には被熱は及んでいない。焚口はわずかにハの字状に開く。最終操業時の右焚口には2個の石が据えられていたが、外側の1個は露出し、内側の1個は壁内に塗り込められていた。床面の還元域は焚口よりも0.8m前方に広がる。この還元域に接して2個の馬蹄形の掘り込みがあり、内部には灰が堆積していた。

遺物は焚口から焼成部中央部にかけての床面に残されていた。大半は杯A・杯Bで、そのほとんどは割れ口の断面に再焼成を受けているので、焼成台に転用されたものであることがわかる。

灰原は東西約14m、南北約12mの範囲にわたり、灰層の厚さは最も厚い所で60cmある。灰原中央付近の最下層には窯壁を含んだ赤褐色土の堆積がある。灰原からの出土遺物量はコンテナ275箱ある。



1. 灰色還元層
1'. 灰色還元層(岩盤)
2. 黄色還元層
2'. 明黄褐色還元層(岩盤)
3. 橙色酸化層
3'. 橙色酸化層
4. 明黄褐色粘質土
5. 浅黄色土
6. 青灰色還元層
7. 淡赤褐色土
8. にぶい黄色土(焼土粒を含む)
9. にぶい黄色土
10. 青灰色還元層
11. 浅黄色還元層
12. 黒色土 (炭を多量に含む)
13. 黒褐色土
14. 暗灰黄色土(炭および、焼土粒を含む)

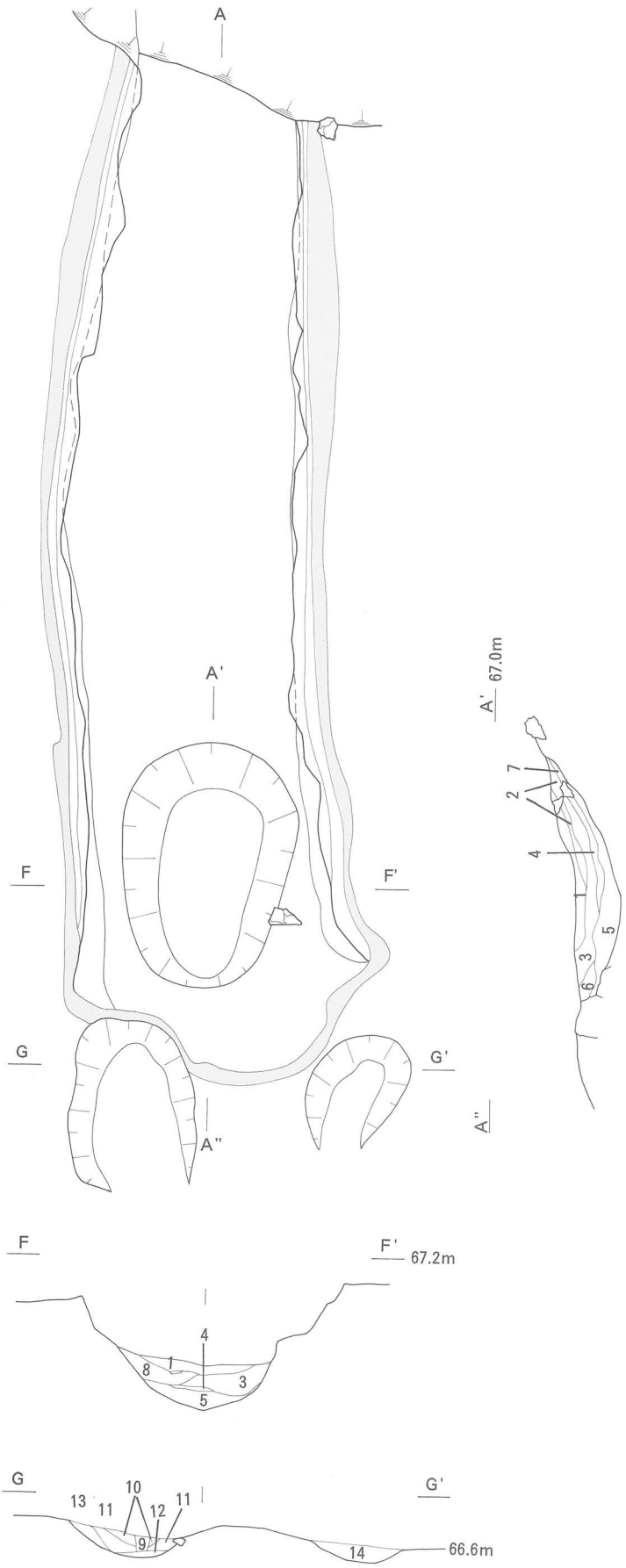
0 2m

挿図7　中谷4号窯　窯体図（検出時）

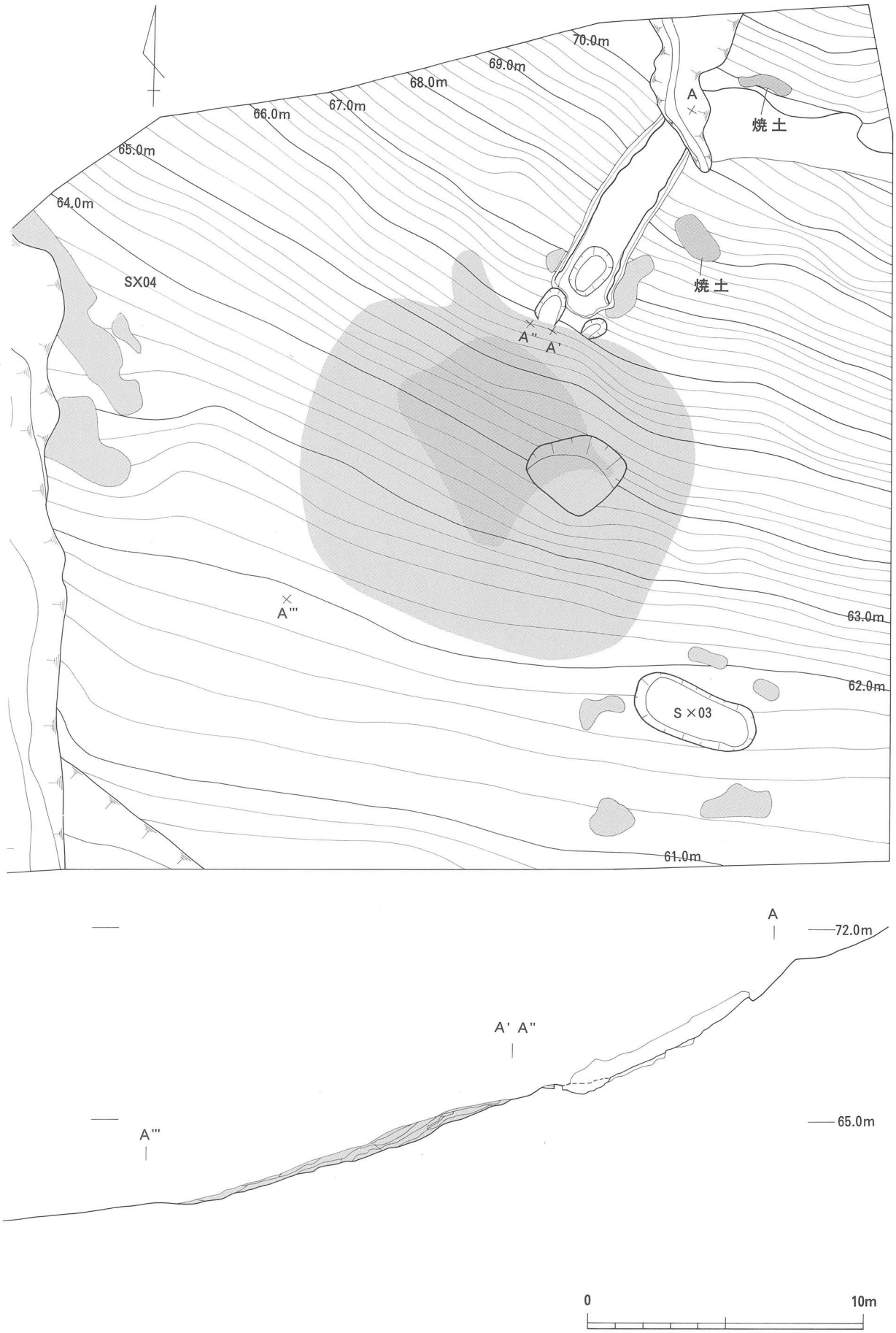
挿図8　中谷4号窯　基盤岩の節理の方向
（後藤博弥教授の現地指導による）

1.褐色土(土器片および、炭、礫を含む)
2.黄褐色還元層(渇灰色粒を含む：補修床面)
3.にぶい黄色粘質土(炭、焼土粒、小礫を含む)
4.にぶい黄褐色還元層(褐色色粒を含む：補修床面)
5.灰黄褐色粘質土(炭および、小礫を含む)
6.黒褐色土(炭層)
7.にぶい黄褐色土(焼土塊を多量に含む)
8.暗褐色土(炭を含む)
9.褐色土(小礫を含む)
10.暗褐色土(焼土粒を含む)
11.黒褐色土(炭および、焼土を含む)
12.黒褐色土(炭および、焼土を多く含む)
13.オリーブ褐色土
14.黒褐色土(炭および、焼土を含む)

0　2m



挿図9　中谷4号窯　窯体図



挿図10　中谷４号窯　地形測量図

第２節　出土遺物の概要

中谷４号窯からは多種・多量の須恵器が出土している。全般的に作りはていねいであるが、その中でも、器面にヘラ磨きや細かなロクロ削りを施したとりわけ精良な作りの一群をもつのが特徴である。こうした精良な作りの須恵器は、金属器写しの製品を中心とした特定の器種のほかに同一器種・同一器形の中の一部の製品に認められる場合がある。ここでは、精良品の特徴をより鮮明にするために、調整がナデ等による通常の調整技法によるものを乙類、器面にヘラ磨きや細かなロクロ削り調整を施してより丁寧に仕上げているものを甲類として区分した。従って、遺物図面も乙類と甲類の須恵器が区分できるように配列している。但し、降灰によって器面の調整の識別が難しいものもあり、本来、甲類に分類すべきものが乙類に分類されたり、またその逆の場合もあり得ることをあらかじめ断っておきたい。

なお、器種名および分類記号については、基本的には『平城宮発掘調査報告　ＸＩ』記載の須恵器器種表の分類に従っているが、同器種表にないものについては独自の分類記号を与え、細分類が必要なものは枝番号や枝記号を付与している。また、口径や器高の分類の表記は平城宮分類とは異なる。

Ⅰ．窯体出土の遺物

窯体から杯Ａ～Ｂ・皿Ａ～皿Ｄ・杯Ｆ・鉢Ａ・横瓶等の出土遺物が出土しているが、前節で述べた通り、杯・皿類を中心とした大半の遺物は焼成台に転用されたもので、灰原の遺物よりも特に新しい要素が見られるということはないので、灰原の遺物の項で一括して述べることとして、ここでは灰原では出土のない特殊遺物についてのみ説明を加える。

盤（第２図 *0211*）

口径46.2㎝、高さ4.1㎝の平たい盤である。盤というよりも大皿と言ったほうがよいかもしれない。破片の大半は灰原から出土しているが、破片の一部は焼成台に転用され、器面に他の製品の融着痕が残る。表面の調整は釉などの付着によって観察が難しいが、底部と高台周辺はロクロ削り、体部内外面ともヘラ磨きを施している。

器台形須恵器（第２図　*0213*）

口径11.6㎝、残存高4.3㎝。皿部の中心は穴が空き中空の脚部に続く。脚端部を欠き、全体の形状が不明であるが、とりあえず器台形須恵器と呼んでおく。口縁は外反し、内面全体に自然釉がかかる。脚内部には布を押し当てたような痕跡を残すが、布目かどうかは確証がない。

脚（第２図　*0214*）

脚部径12.9㎝。裾はゆるやかに大きく広がり、端部はほとんど屈曲しない。他の高杯の脚とはやや異なる形状を呈しており、*0213* の脚部の可能性も考えたが、色調および脚内面の調整が異なるので、*0213* とは別個体である。

Ⅱ．灰原出土の遺物（含、窯体出土遺物）

杯Ｂ蓋（第１図・第３図・第４図）

蓋の形態には笠蓋形式と平蓋形式の二者がある。笠蓋形式の蓋の大半は頂部が平らで、高さの低い扁平な笠形を呈するが、*0323*・*0324*・*0332*・*0333* のように頂部が丸みをもち高さがあるものも少数ある。天井部と口縁部の境は鋭く稜を持ち、口端部は「く」の字状に内側に深く折れ込むのが特徴である。こ

れに対して、平蓋形式の蓋は天井部の盛り上がりがないもので、天井部と口縁部の境は丸く、口縁端部はあまり内側には入らない。該当するものとしては*0307・0337・0339～0341*があるが、笠蓋形式のものに比べれば数は圧倒的に少ない。

つまみの形状は扁平なボタン形と擬宝珠形がある。ボタン形のつまみには、(1) 中心部が山状にわずかに突出し、宝珠の形を留めるもの（*0303・0313*など）、(2) 頂部が平坦なもの（*0301・0304*など）、(3) 頂部が陥没したもの（*0323・0331*など）の3種がある。擬宝珠形のつまみをもつものには*0342・0344・0346～0353*があり、いずれも調整がていねいな甲類の蓋に付けられている。

口径の違いによって、（Ⅰ）10cm～13cm未満、（Ⅱ）13cm～17cm未満、（Ⅲ）18cm以上の3種類に分けることができる。このうち、第7表（56頁）で示したように、15cmを分布の頂点として、13cm～17cm未満のものが圧倒的に多い。仕上げ段階の調整の違いによって次の乙類と甲類に分かれる。

〔乙類〕（*0101～0110／0301～0336*）

天井部にロクロ削りを施しているが、ロクロ削りは頂部のみで周縁には及んでいない。つまみは扁平なボタン形である。

〔甲類〕（*0337～0353*）

天井部外面は頂部から縁部まで細かなロクロ削りまたはヘラ磨きが施されている。扁平な笠形を呈するが、乙類に比べて高さが低いのが特徴である。特に*0337・0340・0341*は頂部の盛り上がりがない平蓋である。つまみは扁平なボタン形と擬宝珠形がある。乙類に比べれば数は圧倒的に少なく、組み合うものは、甲類の杯Bであろう。

なお、*0349～0351*は甲類としてはやや調整が粗いが、乙類のものに比べればていねいである。また、*0346*については天井部全体が自然釉で被われているので、調整は不明であるが、つまみの形状から一応甲類に分類した。また、圏線が巡っているようにも見えるので乙’類に分類されるかもしれない。

〔乙’類〕（*0401～0408*）

天井部に圏線を巡らす蓋の一群である。口径13.9cm～16.1cm。ヘラ削りは天井部の頂部のみで周縁に及んでいないので形態的には乙類に分類されるべき一群ではあるが、圏線を巡らす点から金属器模倣の器と判断されるので、乙’類として乙類から区分した。組み合う器種については今のところよくわからない。

圏線は一重のもの（*0401～0406*）と二重のもの（*0407・0408*）がある。このうち、*0405・0406*は2条を1単位とし、*0408*は2条の圏線を引こうとしているが、内側の圏線は半周で終わり、外側の圏線は始まりと終わりがずれて渦巻き状になっている。蓋の形態は*0401～0406*までが笠形で、*0407*と*0408*が平蓋である。つまみの形態は擬宝珠形（*0401・0404*）・扁平なボタン形（*0402・0403・0405～0408*）がある。

杯B身（第1図・第4図・第5図）

仕上げ段階の調整の違いによって蓋と同じく乙類と甲類に分かれる。法量については、口径の違いによって、（Ⅰ）8.8cm～13cm未満、（Ⅱ）口径13cm～17cm未満、（Ⅲ）口径17cm以上の大きく3つのグループに分けることができる。さらに器高はそれぞれ高低二者あり、第8表のとおり分類できるが、全体的な数量分布をみると、16cmを分布の頂点として口径13cm～17cm未満、器高3.9cm～4.9cmのものが9割以上を占める。

〔乙類〕（*0111～0128／0501～0542*）

基本的には底部外面はロクロ削りを行っているが、中心部を削り残すものも少なくない。特に窯体出土のもの（*0111*～*0128*）はすべて中心部を削り残している。胎土に白い長石の粒が多く認められ、5㎜以上の大きな粒も含んでいるものも少なくない。器壁の表面は凹凸があり、ざらついている。

器高の低い一群（*0111*～*0126*・*0505*～*0529*）と高い一群（*0127*・*0128*・*0530*～*0542*）とがあるが、低い一群の方が圧倒的に多く、高い一群は本報告書に掲載の点数がほぼ全量に近い数字である。

〔甲類〕（*0411*～*0423*）

体部外面は細かなロクロ削りやヘラ磨きが施され、器壁の表面には凹凸がない。乙類に認められる粒の大きな石は認められない。底部はすべてロクロ削りが施されている。内面はナデ仕上げであるが、*0411* は体部内面まで磨きを施している。出土点数は乙類に比べれば圧倒的に少なく、本報告書に掲載の点数がほぼ全量に近い数字である。

椀Ｂ　第４図（*0410*）

口径17.2㎝、高さ9.0㎝。腰の丸みはなく、体部は直上方向に直線的に立ち上がる。体部内外面ともナデ仕上げで底部外面はロクロ削りを施している。

鋺形椀　第４図（*0409*）

口径8.0㎝、高さ3.9㎝。高台は高く、踏ん張る。腰の部分は丸く、口縁部は外反する。密教の法具の１つである六器を思わせる器形である。降灰により器面の調整法の識別が難しいが、恐らくヘラ磨きを施しているものと思われる。

杯Ａ（第１図・第６図）

杯Ａには口径が小さく底部の調整がヘラ切りのまま不調整もしくは軽いナデ程度のものと口径が大きく底部の最終調整がロクロ削り仕上げのものがある。平城宮分類では杯Ａとして一括されているが、両者は中谷４号窯に先行する白沢６号窯（飛鳥Ⅳ～Ⅴ段階）や白沢３・５号窯（飛鳥Ⅴ・平城宮Ⅰ段階）の段階から存在するので、ここでは前者を杯Ａａ、後者を杯Ａｂとして区分して考えたい。

Ａａ（*0129*～*0138*／*0601*～*0620*）

底部はヘラ切り不調整もしくは軽いナデを施す程度である。本窯では第９・10表（58・59頁）に示した通り、口径13㎝を分布の頂点として、口径12㎝～14㎝、器高3.2㎝～4.2㎝にほぼ統一されている。　*0610*・*0614*・*0615*・*0618* は底部外面に×印のヘラ記号もつ。

Ａｂ（*0621*～*0645*）

底部の最終調整にロクロ削り仕上げを施し、体部はヘラなどによってていねいに調整する。杯Ａａが乙類とするならば杯Ａｂは甲類的な要素をもつが、杯Ａｂの中にも外面に磨きを施す甲類中の甲類的な要素をもつもの（*0630*・*0631*・*0633*・*0634*）がある。口径は（Ⅰ）12㎝～14㎝未満、（Ⅱ）口径14㎝～17㎝未満、（Ⅲ）口径17㎝以上の３群があり、さらに各群には器高の高い一群と低い一群類がある。

器高の低い一群は器高2.6㎝～4.8㎝で、口径は（Ⅱ）口径14㎝～17㎝未満（*0621*～*0630*）、（Ⅲ）口径17㎝以上（*0631*～*0634*）と大きく２群に分かれる。*0621*～*0624* は口径に対して底径が小さく、体部は湾曲して斜めに低く立ち上がる。*0625*～*0634* は内外面ともより細かな調整が行われている。*0625* は口縁部外面に細かい針書きのような沈線を巡らす。*0626* と *0629* の外面は降灰によって器面の調整法の識別が難しいが、細かなロクロ削りかヘラ磨きが施されている可能性がある。*0630*・*0631*・*0633*・*0634* は外面はヘラ磨き、内面はヘラ磨きかロクロ削り調整が行われている。

器高の高い一群は器高5.0cm～7.0cmで、口径別に（Ⅰ）12cm～14cm未満のもの（*0335・0336*）、（Ⅱ）口径14cm～17cm未満のもの（*0637・0638・0641*）、（Ⅲ）口径17cm以上のもの（*0639・0640・0642～0645*）に分けることができる。内外面ともにていねいな調整を施すが、特に*0642～0645*は外面をヘラ磨き、内面はヘラ磨きまたはヘラ状工具による調整などより細かい調整を施す。

椀A（第1図　*0139*／第7図　*0701～0709*）

体部がほぼ垂直に立ち上がり、底部と体部の境は明瞭である。底部はロクロ削り調整を行う。このうち、*0706・0707・0709*の体部はヘラ磨きまたは細かなロクロ削りを行う。口径は8.6cm～11cm、器高は4.0cm～5.8cmである。

杯E（第7図）

湾曲する体部をもつ金属器模倣の器である。大半が精良な甲類であるが、若干の乙類がある。

〔甲類〕（*0710～0722*）

体部はロクロ削りまたはヘラ磨きを施す。口縁部にはいくつかの形態がある。

a．口縁端面を平坦または丸く仕上げるもので、体部外面はヘラ磨きまたは細かいロクロ削りを施す。内面はコテ状工具で調整している。端部が平坦なものには*0710～0714*があり、丸く納めるものには*0715*がある。*0714*の底部はロクロ削りが施され、底部と体部の境は明瞭であるが、*0710～0713*の境は丸く不明瞭である。

b．口縁部に1条または2条の沈線を巡らせるものである。このうち、*0717～0719*は口縁の内外に1条の凹線、*0720・0721*は外面のみに1条の沈線、*0722*は外面に2条の沈線をそれぞれ巡らす。

〔乙類〕（*0723～0726*）

口径12.0cm～13.6cm、器高は3cmのもの（*0723・0724*）と4cm前後のもの（*0725・0726*）がある。底部ヘラ切り不調整。

杯C（第7図　*0727～0735*）

口縁部を外反させ、端部を上方につまみ上げるが、内側への巻き込みはない。体部と底部の境は丸く、底部はロクロ削りを施す。口径12.6cm～17.8cm、器高2.1cm～3.4cm。

皿E（第7図　*0736～0744*）

灯明皿とされる器種で、口縁端部を外方に薄く引き出す。底部は平底でヘラ切り後ナデ調整を施しているが、底部ヘラ切り不調整（*0738・0739・0743*）のものもある。口径12.6cm～17.8cm。

環状鈕付蓋（第8図　*0801～0828*）

a（*0801～0813*）

天井部は丸みをもち天井部と縁部の屈曲部の境が丸いタイプ（*0801～0809*）と天井部の頂部が平坦で天井部と縁部の屈曲部の境が稜をなすタイプ（*0810～0813*）がある。後者には口径が25cm余りのもの（*0812・0813*）があり、杯L以外の器種の蓋になる可能性がある。頂部は細かなヘラ削りを行う。

b（*0814～0817*）

天井部から口縁部まで細かなロクロ削りまたはヘラ磨きを施し、頂部に削り出しの突起を巡らす。端部は内側に折れ込む。器高が低く、扁平である。

c（*0818～0821*）

天井部から口縁部まで細かなロクロ削りまたはヘラ磨きを施す。器高が低く、扁平である。口縁端部の折り込みはほとんどないのが特徴である。*0818* と *0820* は天井部に圏線を巡らす。

d（*0822* ～ *0826*）

口縁部を内側に深く折り込んで、7世紀の杯蓋に見られるようなかえり状にする。唯一全体を復元することができた *8026* の形態から、天井部には径4～5㎝の小さな環状鈕がつくものと判断される。*0822* と *0824* は天井部に圏線を巡らし、*0825*・*0826* は天井部を削り出している。

e（*0827*・*0828*）

杯B形態の蓋に環状鈕を付けたものである。天井部が平坦なもの（*0827*）と丸みをもつもの（*0828*）がある。

杯L（第1図・第9図）

いわゆる稜椀形態の杯である。環状鈕付蓋とともに多量に出土している。体部外面は降灰のために調整法の識別が難しいものもあるが、体部は基本的には稜より上部はヘラ磨き、下部は細かなロクロ削りを行う。内面はヘラ状工具によってていねいに整形している。

Ｌａ（*0901* ～ *0909*）

体部と腰の境に明瞭な稜線をもつ。比較的浅手である。*0903*・*0905*・*0906* は稜の下に1条の沈線を巡らす。*0903*・*0904*・*0906*・*0909* は体部外面から高台の畳付きまで降灰しているが、高台裏には降灰が認められない。このうち、*0903*・*0909* の高台の畳付きには、ほぼ同じ径の高台をもつ別の杯Lが積み上げられていた痕跡を残しており、一方を伏せた状態で置き、もう一方の杯Lをその上に底部同士を重ねて積み上げたことがわかる。*0903* の場合は内面に降灰があるので重ね積みの上側に、*0909* の場合は内面に降灰が認められないので重ね積みの下側に置かれて焼成されたことがわかる。*0904*・*0906* は内面に降灰が認められないので *0909* と同じく下側に置かれて焼成されたと思われる。*0905* と *0908* は高台裏も含めた外面全体に降灰があるが、内面には降灰はない。

Ｌｂ（*0140*・*0141* ／ *0910* ～ *0918*）

体部と腰の境が丸みもつ。Ｌａタイプのものに比べて深手である。いずれも内面に降灰はない。また、*0914* と *0918* は高台内も含めた外面全体に降灰がある。

Ｌｃ（*0919* ～ *0922*）

腰の部分を削り出して段を作る。*0919* は稜より上部を削り出して段を作る。*0920* のように器高が低いものと *0921*・*0922* のように器高の高いものがある。ＬａやＬｂに比べて高台径が小さく、高台部分だけの破片であれば環状蓋のつまみと区別がつかないものもある。

Ｌｄ（*0923*）

体部中央に突帯を巡らす。突帯は貼り付けか削り出しかは不明である。

皿A（第2図・第10図）

Ａａ（*0201* ～ *0202* ／ *1001* ～ *1017*）

口径21.6㎝～23.6㎝の大型の皿で、器壁は厚く、短く内湾する体部をもつ。口縁部は丸く納める。底部外面はていねいなロクロ削りを行う。体部外面は細かいロクロ削りとヘラ磨きを行う。このうち、*0101* ～ *1010* は内外面ともヘラ磨きを行うが、*1011* と *1012* は外面のみヘラ磨きを行い、内面はナデ仕上げである。これに対して、*1013* と *1014* は体部内外面ともナデ仕上げで胎土に大粒の長石を含む。*1015* ～ *1017* は口径16.0㎝～19.2㎝、器高1.6㎝～2.1㎝の小型の製品で、短く内湾する

体部をもち、口縁部は丸く納める。底部外面はロクロ削りを行うが、体部内外面の仕上げはロクロナデ調整である。

Ａｂ（*0203*～*0204*／*1018*～*1023*）

杯Ａ形態の口径を広くしたもの。火襷を明瞭に残す。底部外面をロクロ削り調整している甲類タイプ（*1018*・*1019*）のものと底部外面をナデ調整している乙類タイプ（*1020*～*1023*）がある。

皿Ｆ（第10図　*1024*～*1032*）

平城宮分類では該当するものがないので皿Ｆと仮称しておく。体部は短く直上方向またはわずかに斜めに立ち上がるのが特徴である。底部と体部の内外面に火襷を残す。口縁端部は*1032*が平坦である以外は丸く納める。体部内外面はロクロナデ、底部外面はロクロ削りによって面を整えている。

皿Ｃ（第２図　*0205*／第10図　*1033*～*1038*）

Ｃａ（*0205*・*1033*～*1038*）

口縁端部を外側に引き出し、端面を平坦に仕上げる。底部はロクロナデ調整でヘラ切りの段を消している。このうち、*1037*の底部には高台跡が残る。本来は皿Ｄとして製作されたものであるが、何らかの理由で高台を外して皿Ｃの姿に戻し、高台跡ともども底部外面全体をロクロ削りしている。*1039*は体部内外面ヘラ磨き、底部は細かいロクロ削りを施しており、甲類要素をもつ。

Ｃｂ（*1024*～*1032*）

体部は短く直上方向またはわずかに斜めに立ち上がるのが特徴である。底部と体部の内外面に火襷を残す。口縁端部は*1032*が平坦である以外は丸く納める。体部内外面はロクロナデ、底部外面はロクロ削りによって面を整えている。平城宮分類では該当するものがないのでとりあえず、皿Ｃに含めておく。

皿Ｄ（第２図・第11図）

浅いＣ形態の皿に高台を付したものである。

Ｄａ（*0206*・*0207*／*1111*～*1128*）

皿Ｃａに高台を付したものである。体部は斜めに立ち上がり、口縁端部が外側に引き出され突出する。底部はロクロナデまたはヘラ調整を行なう。*0206*・*0207*・*1121*～*1128*は口縁端部が外方に引き出されず、体部内外面ともヘラ磨き、底部外面ロクロ削り調整を行う。甲類的要素をもつ。

Ｄｂ（*1101*～*1110*）

体部が直上に短く立ち上がり、口縁端部が外側に引き出され突出する。底部はロクロナデまたはヘラ調整を行なう。

台付皿（第11図　*1029*～*1034*）

皿Ａと皿Ｃｂに高台を付した形態である。ここでは台付皿としておく。高台は底部の内側に貼りつけられ、高く踏ん張る点が皿Ｄの形態と大きく異なる。底部内面はヘラによって整形し、底部内面はロクロ削りを行う。*1129*～*1132*は皿Ａｂに、*1134*は皿Ｃｂにそれぞれ高台を付したものである。*1133*は短く低い高台を付すもので、三木市久留美窯跡群柳谷11号～13号窯跡から同じ形態のものが出土している。*1129*は高台裏から体部外面全体に自然釉がかかり、蓋的な要素もあるが、形態から台付皿の類としておく。

皿Ｂ蓋（第12図　*1201*～*1213*）

口径20cm～24cmのやや径の小さいもの（*1201* ～*1205*）と口径27cm～32cmまでの口径の大きなもの（*1206* ～*1213*）があるが、口径24cm以下のものは数が少ない。つまみは台形状を呈す。

天井部は頂部から周縁部までヘラ磨きを行う。*1201*・*1205*・*1207*・*1208*・*1210*・*1211* は内面にもヘラ磨きを行うが、この中で*1205*・*1210*・*1211* はヘラ磨きのていねいさと胎土の点で他の蓋よりも精良で、皿Ｂ蓋全体が甲類的な要素を持つなかでもさらに甲類的な色彩が強い。*1202* は頂部をヘラ削りしているが、つまみをもたず、調整は全体に雑であるので皿Ｂの蓋ではない可能性のほうが高い。

外面と内面の痕跡から判断して、蓋と身の天地をそれぞれ逆にして、交互に積み重ねる方法を採用している。但し、甲類的な要素をもつ*1205*・*1210*・*1211* については蓋と身をセットにして焼成している。

皿Ｂ（第２図　*0208* ～*0210* ／第12図　*1214* ～*1217* ／第13図　*1301* ～*1315*）

蓋と同じく口径20cm～22cmの小振りのもの（*1301*・*1313*・*1314*）と口径24cm～30cmまでの大振りのもの（*0208* ～*0210*・*1302* ～*1312*・*1315*）がある。

1214 ～*1217*・*1301* ～*1303* は底部外面をロクロ削り後にヘラ磨き状の仕上げを行なうとともに、高台部分についてもヘラ削りを行いていねいに整形している。甲類中の甲類という要素が強く、蓋*1205*・*1210*・*1211* と対になる可能性が高い。このうち、*1214* ～*1217* の高台裏には「大」の刻書を有するが、*1302* と*1303* についても残存率が½以下であり、欠損部分に「大」の文字が刻まれていた可能性がある。

1304～*1308* については体部内外面にヘラ磨きを行なうが、底部はロクロ削りで、高台は通常の仕上げである。*1309* ～*1312* は体部内外面および底部外面をロクロ削りを行うが、ヘラ磨きは認められない。*1313* ～*1315* は体部内外面ともナデ調整のみである。

高杯（第14図　*1401* ～*1427*）

口径16cm～18cmの小型の高杯（*1401* ～*1406*）と口径24cm～32cmの大型の高杯（*1407* ～*1423*）がある。皿部口縁端部を丸く納めるものが大半であるが、*1420* ～*1423* のように端部が平坦なものもある。また、深さが浅く口縁部が面をなすもの（*1401* ～*1403*）、深さが浅く端部が「て」の字状のもの（*1406* ～*1407*）がある。皿部の調整は大半が内外面ともヘラ磨きを施している。

皿部の内面には焼成時の積み重ねの痕跡を残すが、*1423* のように積み重ねる高杯の天地を逆にして置く逆積みと*1420* のように天地を逆にせずに積み上げる順積みの２つの積み重ねの方法がある。

壺Ｌ（第15図　*1501* ～*1506*）

卵形の体部にやや外反する頸部をもつ。口縁はＬ字形に曲げられ、端部を上方につまみ上げる。*1501* は口縁端部のつまみ上げはないが、形態から壺Ｌの口縁部と判断した。２条の圏線が口縁部に施されているもの（*1503* ・*1504*）と肩または体部に施されているもの（*1504* ・*1506*）がある。頸部と体部の接合は３段接合である。

水瓶（第２図　*0216* ／第15図　*1507* ～*1510*）

卵形の体部に細長い頸部をもつ。口縁端部はＬ字形に大きく外反する。体部は細かいロクロ削り若しくはヘラ磨きが認められる。頸部と体部の接合は３段接合である。

壺蓋（第15図　*1511* ～*1525*）

口径7.7cmのものから16.5cmのものまである。口縁部端部を丸く納めるものが大半であるが、*1519* や*1520* のように端部を内側に短く引出して蓋掛け状にしたものや*1523* のように内側を切り込んで端部を鋭角にしたものもある。また、つまみは宝珠形のものとやや扁平なボタン形がある。*1524* と*1525* はつまみの周囲に圏線を巡らしている。このほか、*1511* は天井部が平坦で手持ちのヘラ削りを行ない、天

井部の周縁には沈線を巡らすが、中心部を欠く。*1512* はつまみをもたないが、外面全体に降灰しているので蓋とした。

壺C（第16図　*1601* ～*1605*）

1601 は短く直立する口縁と肩に稜をもつ。体部下半部は欠くが、平城分類の小型壺Cに該当しよう。*1602* は扁平な体部に短く直立する口縁をもち、体部外面をヘラ磨きしている。*1603* は*1602* をさらに扁平にしたもので平底である。*1604* も底部は平底で、体部はロクロ削りを行っている。

壺B（第16図　*1606* ～*1612*）

直立する口縁と肩に稜をもつ。*1608* は肩部に明瞭な稜をもつが、*1610* と*1611* の肩の稜は鈍い。いずれも共蓋の痕跡を残していない。底部は平底で、*1610* は底部外面をロクロ削りしている。

壺A（第16図　*1613* ～*1616*）

いちじく形の体部に直立する口縁をもつ。体部中央に沈線を巡らし、2方に角状の把手をもつ。*1615* は頸部の下に共蓋の痕跡を残し、共蓋の径は壺の径よりも2㎝広い。体部中央から下にかけて外面に叩き、内面にはあて具の跡を残すが、内外面とも板状工具で消されている。*1616* も体部中央に沈線が巡り、2方に角状の把手をもつ。

獣足（第16図　*1617*・*1618*）

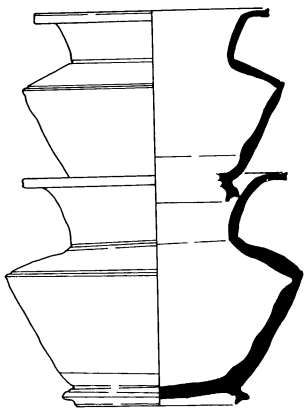
同一個体につけられていた3脚のうちの2脚で、いずれもヘラで面取りをしている。*1617* は高さ11.5㎝、足幅4.0㎝、*1618* は残存高10.8㎝、足幅4.8㎝である。*1618* は器本体との接合部から獣足のみが外れたものであるが、*1617* は接合部の器壁ごと外れたもので、器壁の厚さは6～7㎝あり、カーブを描いた形状から器本体は壺であると推定される。爪先は両側面と中央を3つに分割してヘラで面取りをしている。体部との接合部は同じくヘラで余分な粘土を削ぎ落としている。

壺K（第17図　*1701* ～*1712*）

いわゆる長頸壺である。体部は算盤形であるが、肩部の径に対して体部高が低く、口頸部の長さも短い。全体に扁平な様相を呈しており、体部の形態は壺Qと共通する。頸部に沈線を巡らす。頸部と体部の接合は3段接合である。大半は高さ20㎝前後であるが、*1710* ～*1712* のように30㎝余りの高さの大型の長頸壺もある。口縁部は*1701* ～*1704* のように外反するものと*1705*・*1706*・*1708* ～*1710* のように口縁端部が垂下するものがある。

壺Q（第18図　*1801* ～*1813*）

外反する頸部から大きく開く口縁部をもつ。口縁部は反転し、端部を直上につまみ上げる。頸部に1重の沈線をもつもの（*1803*・*1807*・*1809*）、2重の沈線をもつもの（*1805*・*1813*）、3重の沈線をもつもの（*1802*）がある。肩部は稜をもち、*1809*・*1810*・*1812* のように沈線を巡らしたものもある。体部はやや胴長のものと扁平なものがある。*1807* は歪みが大きいので実際の底径は図の1.5 倍位になろう。*1809* は*1810* の頸部の上に積み上げて焼成している。



挿図11　壺Q *1809* と*1810*

鉢A（第2図・第19図）

Aa（*0217*・*0218* ／*1901* ～*1913*）

いわゆる鉄鉢形と呼ばれている形態の鉢で、底部は尖底である。体部上半をヘラ磨き、下半部をロクロ削りを行う。同じ鉢Aaを積

み重ねて焼成しており、各鉢の口縁部に4～5㎝の帯状の重ね焼痕と火襷が残る。

Ａｂ（*1914*～*1916*）

片口が設けられている鉢である。*1914*の口縁端面は平坦で内側に傾ける。*1915*は口縁部外面に2条の沈線を巡らす。内外面の最終調整はナデ調整である。

鉢その他（*2001*～*2003*）

*2001*は口縁を大きく開き、端部を上方につまみ上げる。*2002*は口縁部が「く」の字状に屈曲し、肩部に稜をもつ。同様の形態で片口をもつ鉢が白沢3号窯から出土していることから片口を有するものと思われる。*2003*は底部の周辺から底部外面にかけてロクロ削りを施している。*2002*と胎土・色調が酷似しており、同一個体の可能性がある。

鉢Ｆ〔すり鉢〕（第2図　*0212*／第20図　*2004*～*2005*）

*2004*は口径17.4㎝、器高13.7㎝。底部径11.7㎝。器壁の厚み8㎝、底部の厚み3㎝。底部はヘラ削り調整を行っているが、残存部の範囲ではヘラ等による刺穴はない。*2005*は底面が吹き飛んで原形を留めないが、底部が受皿のように大きく広がる。また、実測はできなかったが、*2018*（遺物図版27）は竹管状の刺穴があり、胎土等から*2005*の底面から剥落した破片の可能性が高い。

把手付椀（第20図　*2006*～*2007*）

*2007*は口径11.6㎝、器高4.8㎝。二方に角状の把手がつく。口縁部はやや内傾し、体部は底部から湾曲する。体部内外面とも調整はロクロナデ、底部は軽くナデてヘラ切りの凹凸を消す。*2006*は把手が外れた口縁部の破片で、口縁部は内傾しない。

硯（第20図　*2008*～*2012*）

*2008*は外縁径15.6㎝、高さ5.6㎝の透脚硯である。硯面は一部が残存しており、陸の周囲には縁から2㎜の間隔を置いて幅4㎜の浅い溝を掘ることによって低い堤を設けている。透かしは長さ2㎝強、幅1㎝前後の縦長の矩形で、全体的に垂直ではなくやや斜め右に傾いており、上辺と下辺の長さが異なって台形となったものや幅が極端に広いものなど必ずしも形や大きさはきれいに揃っていない。透かしは2個を単位として時計回りに5.2㎝、1.7㎝、3.0㎝、4.5㎝、5.5㎝の間隔で穿たれている。欠損部分の透かしの間隔を5㎝前後とすると残り2単位の透かしがはいるので、透かしの基本間隔は5㎝前後であろう。1.7㎝と3.0㎝の間隔幅の箇所については、恐らくは最後に穿たれた区間であり、5㎝前後の間隔をとることできるスペースが確保できなくなってしまったものと理解したい。

*2009*は外縁径17.4㎝、脚底径20.4㎝の透脚硯である。陸の部分は吹き飛んで原形を留めないが、周縁に浅い溝と低い堤の一部が残存しており、陸の形態は*2008*と同じと考えてよい。*2008*と同じく2個を単位とした長さ2.5㎝、幅1㎝前後の縦長の矩形の透かしと1.7㎝×1.5㎝の方形の透かしがある。透かしの並びは右から縦長の矩形の透かし、1.5㎝空けて方形透かし、2.2㎝空けて縦長の矩形の透かしが2個1単位、3.6㎝空けて縦長の矩形の透かしとなっている。脚の破片はこのほかに3破片あり、そのうちの2つは縦長の矩形の透かしを有するもので、間隔は3.3㎝と3.4㎝であることから縦長の透かしの間隔は3.5㎝前後と推定される。方形の透かしの数については全くわからないが、仮に縦長の矩形2単位の間にはいるとして、径から割り出して4つ入ることになる。この場合、縦長の矩形は合計8単位となる。図は方形の透かし4個、縦長の矩形8単位と仮定して作成している。

*2010*も透脚硯の脚台部である。透かしは幅1㎝前後、長さ3.5㎝余りの縦長の矩形である。底径は22.7㎝で、透かしは計算上では28個入る。

2011 も透脚硯の脚台部で、透かしは幅１㎝前後、長さ3.5㎝余りの縦長の矩形である。破片類の１片に透かしと透かしの間にヘラ状工具による線刻がある。線刻は両隣には認められない。従って、どの程度の間隔で刻まれたかは不明であるが、一応１つ置きと仮定して図を作成している。底径は27.0㎝で、透かしは計算上では32個入る。

2012 は中心部を欠くが、形態から無脚硯と判断した。硯面径は23.2㎝あり、硯面はロクロ削りを行う。無堤であるが、周縁がわずかに高い。

特殊土器（第20図　*2013*～*2017*）

2013

推定径30.0㎝の平たい円形の器である。周縁は厚み1.6㎝、高さ1.6㎝の立ち上がりがあり、中央には孔がある。中央の孔は推定径5.0㎝で、周囲には円筒状の立ち上がりがあるが、立ち上がりの高さは上部が欠けており不明である。中央の孔と周縁の間には高さ1.1㎝の環状の突起がある。さらにこの突起と中央の孔の間には２条の線描きがある。

2014

体部の上部に透かしをもつ器形である。口径23.0㎝。一番大きな口縁の破片から透かしは４方と推定している。透かしの位置は上底で口縁部から3.3㎝から4.1㎝の距離にある。透かしの全体が残るものはないが、下の幅が広い台形状を呈しており、上底幅が２㎝前後、長さは最低５㎝ある。器種・器形とも不明。

2015

底径6.2㎝、残存高8.1㎝。器壁は３㎜と薄く、外面は細かいロクロ削りを施し、内面はロクロナデ調整である。平城宮ＳＤ５１００から当該資料の天地を逆にした須恵器が出土しており瓾と推定されている。当該資料は器面の降灰の状況と外面の調整から脚部と考えているが、上部を欠いているので器形については不明である。金属器模倣の器であろう。

2016

底部が平底でヘラ削りされている。体部は扁平で、肩に稜をもつ。肩部はヘラ磨きが施され、周縁から1.5㎝のところまでは水平で、それより内側は中心に向かって下がっていく。器種・器形については不明である。

2017

肩に稜をもち、降灰が認められるが、器種・器形とも不明である。小型の平瓶の可能性もある。

蓋（第21図　*2101*～*2103*）

つまみのない蓋である。完全なものはないが、中央に方形状の４つの穿孔がある。恐らく甑の蓋であろう。

甑（第21図　*2104*～*2106*）

口径17.4㎝のもの（*2104*）から23.8㎝のもの（*2106*）まである。*2104* は口縁部に４つの穿孔がある。*2105* は体部上半に角状の把手が付く。

盤（第21図　*2107*～*2112*）

左右に把手をもつ。把手は角状のもの（*2110*）と鉤形のもの（*2111*・*2112*）がある。口縁端面は平坦でわずかに内傾し、わずかに内側に突出する。体部外面のうち底部周囲はヘラ削りを施す。

横瓶（第２図　*0215*／第22図　*2201*～*2202*）

口縁端部は平坦で内側にわずかに突出する。窯体出土の*0215*は口径9.6㎝、長径26.8㎝、短径20.9㎝、高さ22.8㎝の小型の横瓶である。外面はわずかに叩きの跡が残り、内面は板状工具でハケで当て具の跡を消している。*2202*は口径9.6㎝、長径36.5㎝、短径24.0㎝で、 外面はわずかに叩きの跡が残り、内面は板状工具で当て具の跡を消している。

平瓶（第22図　*2203*～*2206*）

肩部に提梁を有し、肩と体部の境は明瞭な稜をもつ。口縁部は外反させるもの（*2203*・*2204*）とさせないもの（*2205*）がある。*2205*の口縁部は水平に開き、提梁は断面方形である。体部および底部はヘラで調整している。*2203*と*2204*は口縁部と体部が直接接合できなかったが、図のように復元した。ともに体部と底部外面は丁寧なヘラ削りを行っている。*2206*は小型の平瓶の把手で、ヘラでていねいに面取りされている。恐らく10㎝余りの小型の平瓶であろう。

甕A（第23図　*2301*～*2310*・*2405*）

口径20㎝～30㎝前後の中型の甕である。外反する頸部をもち、口縁部は端部を上方につまみあげるものと（*2301*～*2306*）と下端部を下方に引き出すもの（*2307*～*2310*）がある。*2045*は口径53.5㎝の大型の甕で、口縁部の一部に内外面を粘土で被覆した箇所があり、乾燥中に生じたひび割れの補修の可能性がある。

甕B（第23図　*2311*～*2313*）

卵形の体部に内湾する口縁部をつけたものである。*2311*は二方に角形の把手をつける。

甕C（第24図　*2401*～*2403*）

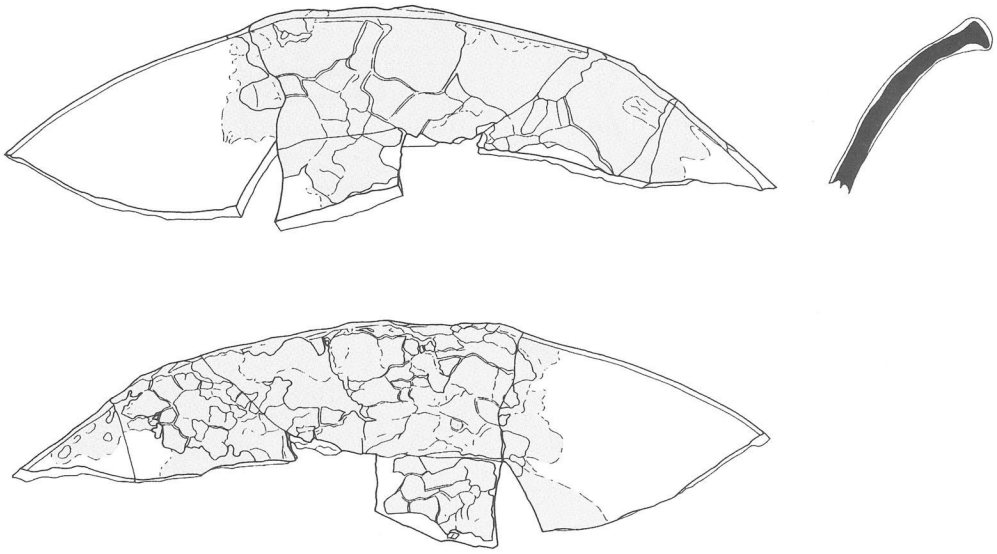
広口甕である。口縁端部は平坦で端部は内側に突出する。

甕F（第24図　*2404*）

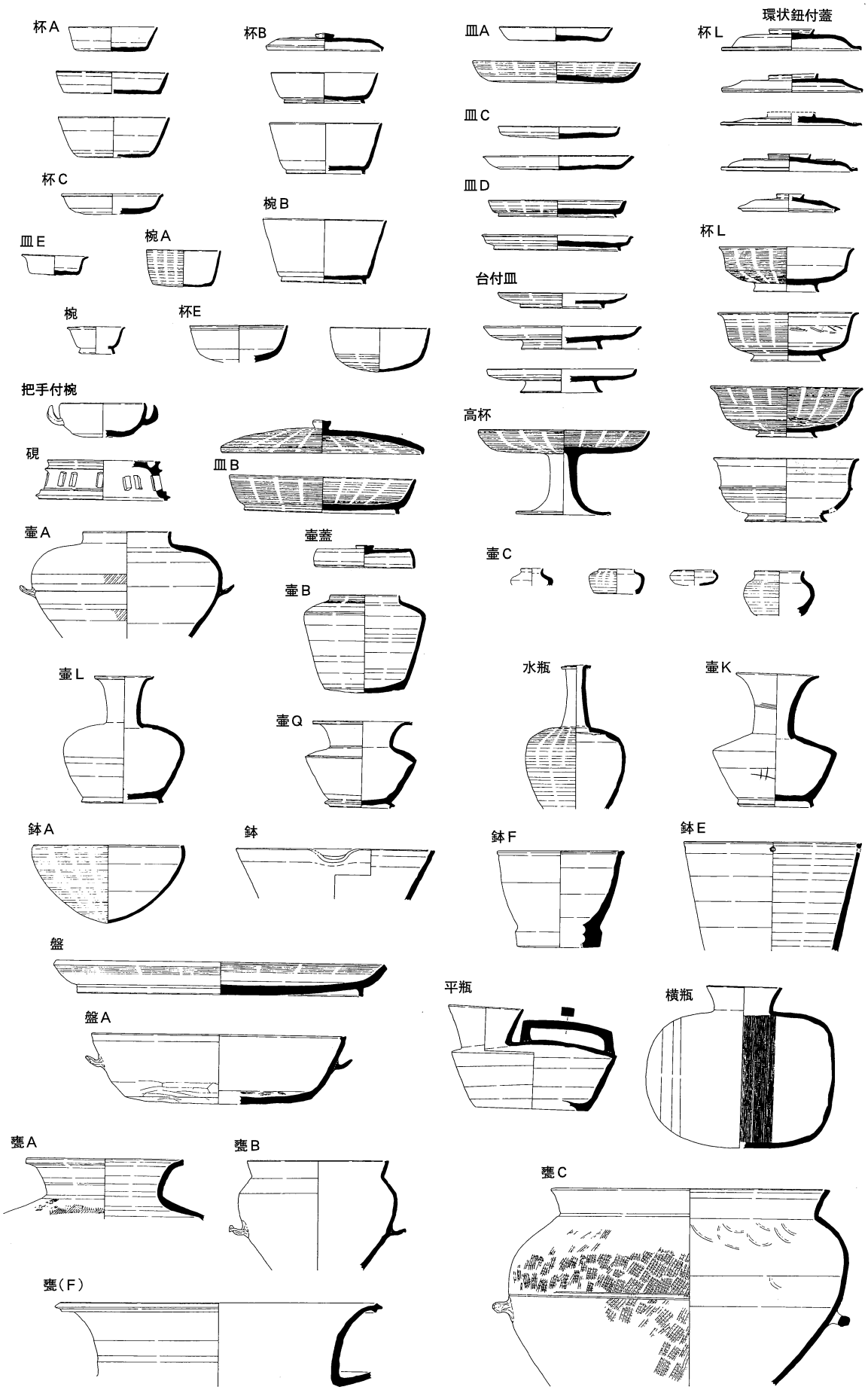
二重口縁風の口縁部をもち、口縁下端部をわずかに突出させる。

土師器甕（第23図　*2314*～*2315*）

土師質の小型甕で、砂粒を多く含む。「く」の字状に外反する口縁部をもつ。体部外面はハケ目調整、内面は上半部がハケ調整、下半部が指押さえである。



挿図12　甕*2405*補修痕



挿図13　中谷４号窯　器種構成図（S：１：８）

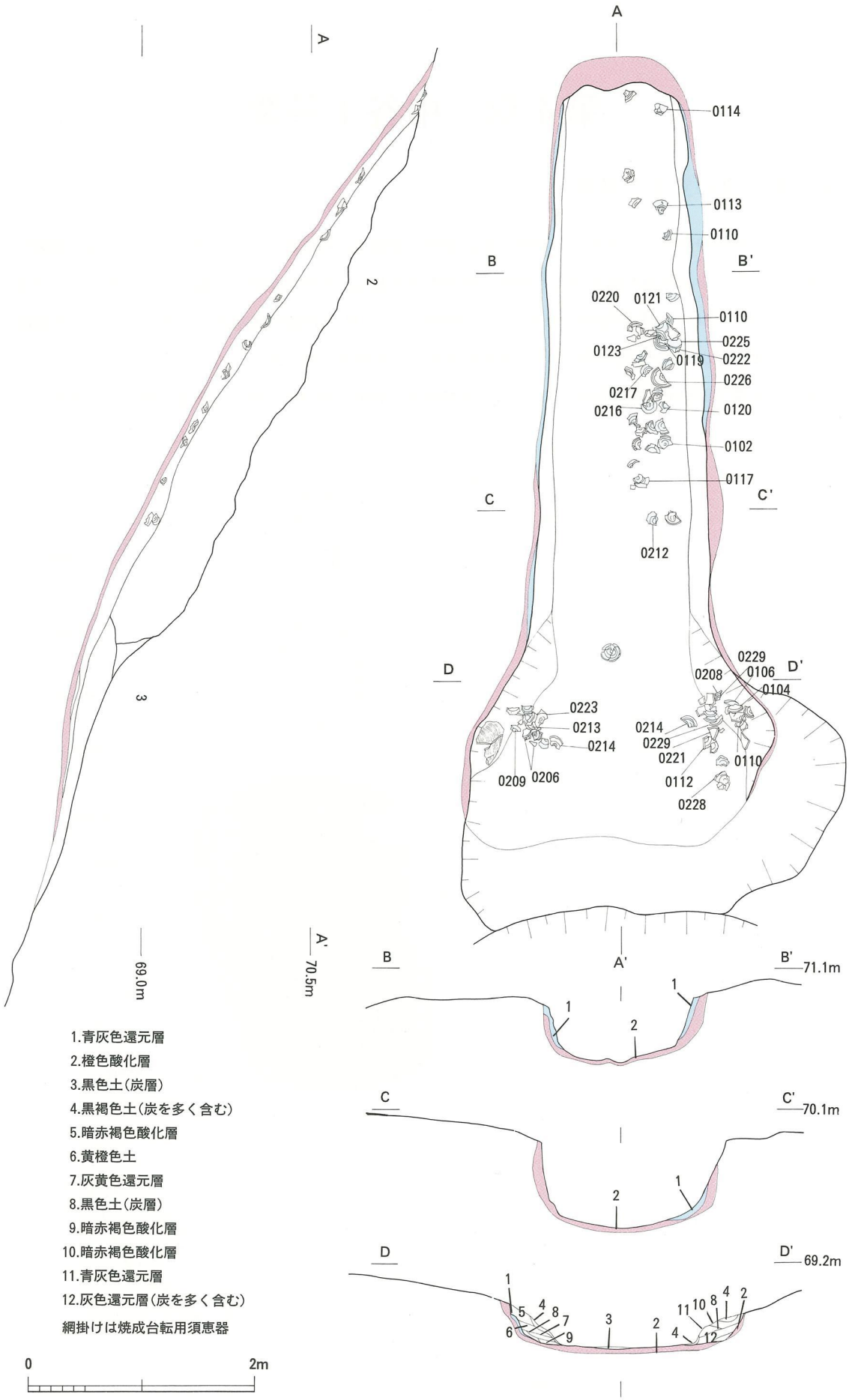
第４章　中谷１号窯

第１節　窯の立地と構造

北向き斜面側の裾部に立地する。標高は焚口で69mを測り、谷底からの比高差は約９ｍある。流紋岩質凝灰岩からなる基盤層を掘り込んだ半地下式の窖窯である。窯体先端部は以前の造成工事によって削平されて残存しない。残存長は6.3mあるが、床面の傾斜角度と側壁の残存高から割り出すと、先端部は１ｍ前後削平されたものと推定され、窯体の全長は７ｍあまりになろう。

床幅は先端で0.90m、焼成部中央で1.0m、燃焼部で1.20m、焚口で1.50mである。焚口はわずかにハ

挿図14　中谷１号窯　地形測量図



挿図15　中谷１号窯　窯体図（検出時）

は焼成部下部で27°前後、上部で37°前後、平均斜度は33°である。

床面には若干の遺物が残存していた。遺物の大半は杯A・杯B・皿Aで、いずれも残存率½前後である。割れ口の断面に再焼成を受けていることから焼成台に転用されたものであることがわかる。これらの遺物は床面の左側には遺存せず、右側に集中しており、この状況は左側の床面を足場にして製品を取り出したことを示している。

床面は素掘りのままで粘土を貼り付けた形跡が認められない。また、通常の須恵器窯に見られる固く焼締まった青灰色の還元層はなく、黄色～淡い赤褐色の酸化層が全体に広がり、一見すると床面を剥ぎ取った後のような様相を呈している。床面に密着した焼成台転用の須恵器は外面は灰色であるが、内面はいずれも備前焼のような淡い赤褐色～灰褐色をしているので、床面の焼成状況は酸化焔状態であったことがわかる。一方、側壁についてみると、床面ほどではないが、黄褐色～灰褐色を呈し、あまり強い還元状態におかれていなかったことは明らかである。実際、窯体内の遺物も焼成台転用以外の遺物は灰白色で、灰原の出土遺物中にも土師質焼成の遺物が多数含まれている。これらの状況から、少なくとも最終操業時の窯体内の焼成状況は、窯焚きの最終段階で多量の空気がはいったか、同じく最終段階で投入する薪の量が少なく過ぎたかなど何らかの理由で還元焔的雰囲気を保つことができず、酸化焔的状態のまま放冷した状況を示している。

焚口はわずかにハの字状に開く。検出時の焚口の左右には挿図16に示したように、焼土層が堆積し、その前面に多数の須恵器が放置されていた。須恵器片は焼成台転用のものも多く含まれており、窯出しの際に中から掻き出され、左右に振り分けられて置かれたものであろう。左右の焼土層は6～7層に分層できるが、除去すると挿図17に示した焚口の形状になる。この焼土層は焚口の補修に伴うものではなく、閉塞に用いられたものが完全に除去されずに左右に残されたものと判断される。燃焼部の被熱面は窯体内にとどまらず窯体外に大きく広がる。

側壁の垂直高は焼成部中央で0.8m、焚口で0.60mである。前述の通り、黄褐色～灰褐色を呈し、床と同じく、素掘りのままですさ混じりの粘土を貼り付けた痕跡が認められない。

灰原は東西約8m、南北約11mの範囲にわたり、灰層の厚さは最も厚い所で40cmである。灰原中央付近の最下層には窯壁を含んだ赤褐色土の堆積がある。灰原からの出土遺物量は70箱である。

灰原下方には炭土坑（SX02）が検出されている。

挿図16　中谷1号窯　窯体図

第２節　出土遺物の概要

窯体から杯Ｂ・杯Ａ・皿Ａ・皿Ｂ・鉢Ｄ・壺Ｑ・壺Ａ蓋等の遺物が出土している。窯体内の各遺物については、前節で述べたように大半が焼成台転用のもので、灰原の遺物よりも特に新しい要素が見られるということはないので、灰原の遺物と一括して概要を説明しておく。

杯Ｂ蓋（第25図　*0101*～*0108*／第27図　*0301*～*0340*）

頂部は平坦なもの（*0321*・*0336*など）もあるが、大半は丸みをもち、口縁端部は屈曲する。頂部はヘラ切り後、ナデ調整でヘラ切りの段を消す。口縁端部は丸くやや肥厚する。口径は16.1cm～18.4cmのものと12cm台のものがあるが、前者のものが大半を占める。このうちでも第７表（56頁）で示した通り、18.0cmが最も多い。また、*0106*（18.8cm）、*0107*（19.0cm）のようにやや径の大きなものもあるが、この２点は歪みが大きいので実際にはもっと径が小さくなろう。口径の小さなものには*0301*（12.3cm）がある。

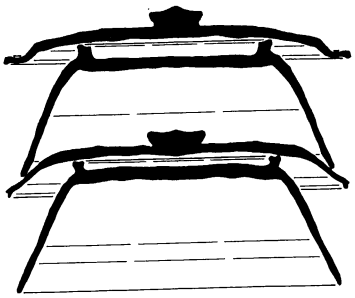
蓋の多くは*0328*・*0331*・*0338*（遺物写真図版34参照）のような組み合わせパズル状の割れ方をしている。パズル状に割れた蓋には、同一個体片の中で焼成の状況が異なるものがあり、焼成中の段階でパズル状に破損したことを示している。この状態は陶芸専門家から土練りの不足が原因であるとの指摘を受けた。内面に、１本線（*0304*・*0306*・*0310*・*0311*・*0312*・*0316*）・平行２本線（*0305*・*0318*）・交差２本線（×印　*0308*）の３種類のヘラ記号が刻まれている。

蓋の天井部外面の周縁には約１cm幅のリング状の降灰があり、内面には径10cm前後の器物との重ねの跡が残る。この痕跡に合致する器種は器高の高い杯Ｂの身で、天地を逆にした身と蓋を交互に重ねていけばこのようなこのような痕跡が残る。

つまみは扁平なボタン形で、中心がわずかに高い宝珠状の形状を呈する。また、わずかではあるが、頂部が平坦で台形状を呈するもの（*0106*・*0108*）、頂部が平らかわずかに窪むもの（*0105*・*0107*・*0310*）がある。

杯Ｂ身（第25図　*0109*～*0119*／第28図　*0401*～*0431*）

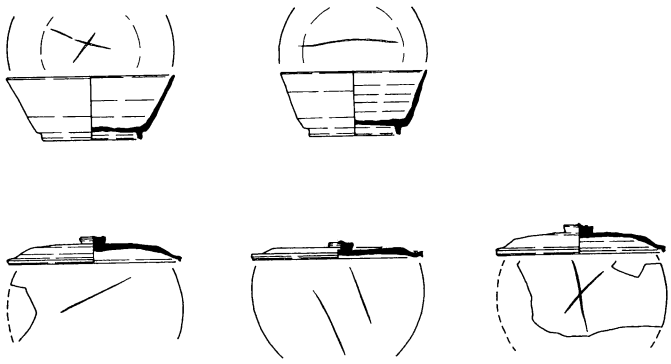
器高が6.6cm～7.1cmの一群（*0110*～*0119*、*0411*～*0431*）と3.5cm～4.5cmの一群（*0109*・*0401*～*0410*）の高低二者ある。器高の高い一群の口径は15.9cm～18.1cmであるのに対し、低い一群の口径は15.9cm以下である。口径16cmを境にして大小２つの群に分かれるが、器高の高い一群が圧倒的に多く、低い一群は本報告書に掲載の点数がほぼ全量に近い数字である。杯Ｂ蓋の項で述べたように、蓋の内外面には蓋と身を交互に重ねて焼成したことを示す痕跡が残されているが、身の方でも器高の高い一群にその痕跡が残されている。すなわち、降灰は高台の側面から口縁部までの体部外面のみで、体部内面および高台の畳付きから高台裏には降灰は認められず、伏せた身の上に蓋を載せて焼成した状態を示している。蓋の周縁は頂部から屈曲して水平になっており、この部分を利用して安定した状態で積み重ねができるようになっている。なお、器高の高い杯の中でも*0417*のように杯身だけを重ねて焼成が行われた痕跡を残しているものもある。



挿図17
中谷１号窯杯Ｂ重ね積み復元図

これに対して、小型の杯B身は身だけを重ねて焼成されており、*0402*と*0405*は内外面に火襷、*0404*・*0406*・*0409*は口縁部外面や底部内面に重ね焼の痕跡を残す。

体部内外面はナデ調整を行う。底部外面は、高台周囲のみロクロ削りが行われ、中心部は削り残されている。これは底部外面の調整というよりも高台の貼付けに伴う調整の延長と理解される。



挿図18　中谷1号窯　杯Bヘラ記号図

内面には1本線（*0403*・*0405*・*0409*・*0411*・*0412*・*0415*・*0425*・*0427*・*0110*）・交差2本線（×印*0305*・*0318*）の2種類のヘラ記号が刻まれている。このほか*0401*・*0404*・*0410*・*0112*・*0115*にもヘラ記号があるが、いずれも破片のため1本線か交差2本線か判断できない。

椀B（第28図　*0432*）

口径16.3cm、高さ8.8cm。体部は直上方向に直線的に立ち上がる。体部内外面ともナデ仕上げで、底部外面はロクロ削りを施している。

鋺形椀（第28図　*0433*）

口径18.1cm、高さ6.7cm。高台は高く、体部は高台際から湾曲して立ち上がる。底部外面はロクロ削りで仕上げる。

杯A（第26図　*0201*～*0220*／第30図　*0601*～*0649*）

平城宮分類での杯A・椀Aの区分は椀Aが杯Aよりも深い形態で、体部がほぼ真っ直ぐに立ち上がるのが特徴である。これに付け加えれば、椀Aは底部にロクロ削りが施され、体部と底部の境が明瞭であるということも杯Aとの区分の条件としている。但し、これらの区分条件では、杯Aの器高の高い一群中には区分が難しいものも存在するのも事実である。特に本窯の場合のように、時代の下るものについては目安の1つとしてきた底部のロクロ削りが省略されており、杯Aの器高の高いものと椀Aの明確な区分線を引くことができなくなっているが、とりあえず器高の低い一群を杯Aとし、高い一群を椀Aとして区分しておく。

杯Aとした一群の器高は2.7～3.3cmである。口径10cm前後の一群（*0601*～*0605*）と口径13cmから15cmの一群（*0201*～*0220*・*0606*～*0649*）の2つの群があるが、後者のほうが圧倒的に多い。底部はヘラ切り不調整である。なお、底部外面に板状の圧痕をもつものがあるが、いずれも内面中央に粘土を継ぎ足し、なで付けた痕跡を有している。恐らくはヘラ切りによって中央部の厚みがなくなったために、板の上に製品を置いて底部内面に粘土を充填したものと思われる。椀Aにも同じ痕跡をもつものがある。

椀A（第26図　*0221*／第31図　*0701*～*0708*）

体部がほぼ垂直に立ち上がり、底部と体部の境は明瞭である。底部はヘラ切りのまま不調整か軽くナデ調整行う程度である。また、杯Aと同じ底部外面に板状の圧痕をもつもの（*0705*）があり、内面に粘土を足した痕跡を残す。口径8.7cm～10.5cm、器高3.2cm～3.9cmの一群のほかに口径16.6cm、器高6.2cmの*0708*がある。

皿A（第26図　*0222*～*0227*／第31図　*0709*～*0746*）

15cm以下のものもあるが、大半は口径15.0cm～19.0cm、器高1.8cm～2.8cmで杯Aの口径を広くしたものである。底部外面のヘラ切りの痕跡をそのまま残しているものと軽くナデて段を消すものとヘラ削りを行うものがある。

皿B（第29図　*0501*～*0503*）

0502 は口径21.3cm、器高5.4cm、*0503* は口径22.1cm、器高5.1cmで、ともに5分の1程度の破片であるが、口径と器高から杯ではなく皿Bの身とした。体部内外面ともナデ調整である。

蓋（*0501*）は4分の1程度の破片で、復元径は23.7cmである。杯Bの蓋とは違い、頂部をロクロ削りを施している。破片の中心部が盛り上がりを見せはじめており、ナデの跡がこの盛り上がりを中心にリング状に巡っていることから、中心部には径6～7cmの環状形の鈕が付けられていたと推定される。

台付皿A（第25図　*0120*～*0124*／第29図　*0504*～*0509*）

口径16.5cm～17.6cm、器高3.2cm～4.3cm。斜めに開く皿部に高台を付けたものである。底部外面はヘラ切り不調整である。底部内面には同じ台付皿を重ね焼した痕跡が残る。

台付皿B（第29図　*0510*～*0513*）

口径5.0cm～5.6cm、器高7.8cm～11.0cm。蓋の天地を逆にした形のもので、口縁端部を内側に曲げる。口縁端部の形状は土師器の杯Aや須恵器の杯C・高杯に見られる端部の内側への巻き込みの延長線上の形と考え、杯C形態に高台を付けた台付皿とした。同じ形態のものは札馬36号窯・同41号窯から出土しており、当窯跡群特有の器形であろう。このうち、*0513* は体部の形態は直線的で丸みがなく、底部外面から体部外面にかけての調整は粗い。底部外面に爪形状圧痕を残している。

環状鈕付蓋（第29図　*0514*～*0515*）

0515 は口径17.6cm。丸みをもった頂部から屈曲して縁部につながる天井部をもつ。径3.6cmの小さな環状つまみをもつ。頂部はヘラ切りの段をヘラ状のものでナデて消すが、ヘラ削りのようにきれいに仕上がっていない。内外面に杯Bの蓋と同じ積み重ねの痕跡を残しており、杯Bと同じく、組み合う杯Lの身を伏せて置き交互に積み重ねて焼成しているものと思われる。

杯L（第29図　*0516*～*0524*）

器高が低いもの（*0516*）と器高が高く深手のもの（*0517*・*0518*）がある。後者のうち、*0518* はひずみが大きいので本来の形態と大きさは *0517* に近いものとなろう。*0516*～*0518*・*0523*・*0524* は体部と腰の境に明瞭な稜線をもつが、*0519*～*0522* は体部の稜が甘い。高台は杯Bの高台よりも高くわずかに踏ん張る。底部外面ナデ調整を行い、体部の調整は内外面はすべてロクロナデである。但し、明瞭な稜線をもつ *0517* は体部下半にロクロ削りを施している可能性がある。

杯E（第32図　*0801*・*0802*）

0801 は平底で彎曲する体部をもつ。体部下半および底部はロクロ削りを施す。口縁端面は平坦である。*0802* も同様の形態で *0801* よりもひとまわり大きい。体部外面から底部にかけて降灰があり、伏せた状態で焼成されている。

硯（第32図　*0803*）

同一個体の破片3片が出土している。このうち2片は上部に鍔状の突帯が巡り、方形の透かしがある。残りの1片は一見壺の底部が体部から剥離したような形状を示すが、高台の上に鍔状の突帯が巡る。この3点の破片から図のような円面硯を想定した。透かしの個数や硯面の形態については不明である。

高杯（第32図　*0804・0805*）

0804 は口径22.9cmの大型の高杯である。皿部の内面調整は不明であるが、底部外面はヘラ削りが施されている。*0805* は *0804* とは別個体の脚で、底径11.4cm、残存高11.9cmの大型の高杯である。皿部内面には別の高杯を上に載せて焼成した痕跡を残す。

鉢A（第32図　*0806*）

いわゆる鉄鉢形と呼ばれている形態の鉢で、本窯での出土はこの１点のみである。

鉢D（第32図　*0807～0814*）

口縁部は「く」の字形に屈曲し、口縁端面は平坦である。底部は平底である。片口を有するものと思われるが、片口の破片は出土していない。

壺蓋（第26図　*0228*／第33図　*0901～0912*）

口径6.8cmのものから16.3cmのものまである。天井部は平坦で、ヘラ切りによって生じた凹凸を削って消すが、ヘラ切りの跡は細い渦巻き状の溝になって残る。口縁端部は内側を切り込んで接地面を小さくしているもの（*0905～0907・0909～0911*）と平坦に仕上げるもの（*0904・0908・0912*）がある。つまみの形は擬宝珠形のもの（*0904～0908*）と扁平なボタン形（*0902・0903*）がある。

壺A（第33図　*0915*）

口径11.3cm。いちじく形の体部に直立する口縁をもつ。共蓋の痕跡は認められない。

壺M（第33図　*0913～0914*）

口径6.8cmと7.2cmの小型の壺である。頸部はほぼ真っ直ぐに立ち上がり口縁部を外反させる。頸部と体部の接合は２段接合である。

壺N（第33図　*0916～0921*）

卵形の体部にやや外反する頸部をもつ。口縁部は上端部を内側に傾け、下端部を外方に引き出す。頸部と体部の接合は２段接合である。底部は平底で高台はもたない。*0921* の底部は豆粒大の押圧痕が中心部に集中して見られるが、押圧原体は不明である。

壺L（第26図　*0231*／第33図　*0922～0927*）

卵形の体部にやや外反する頸部をもつ。頸部は真っ直ぐ立ち上がり、口縁部近くで大きく外反させる。口縁端部は直上につまみ上げる。わずかに肩が張り、頸部と体部の接合は２段接合である。底部は付高台をもつ。なお、*0925* と *0926* は高台のすぐ上に布目痕があり、湿台の痕跡の可能性がある。

壺Q（第26図　*0229*／第44図　*1001～1013*）

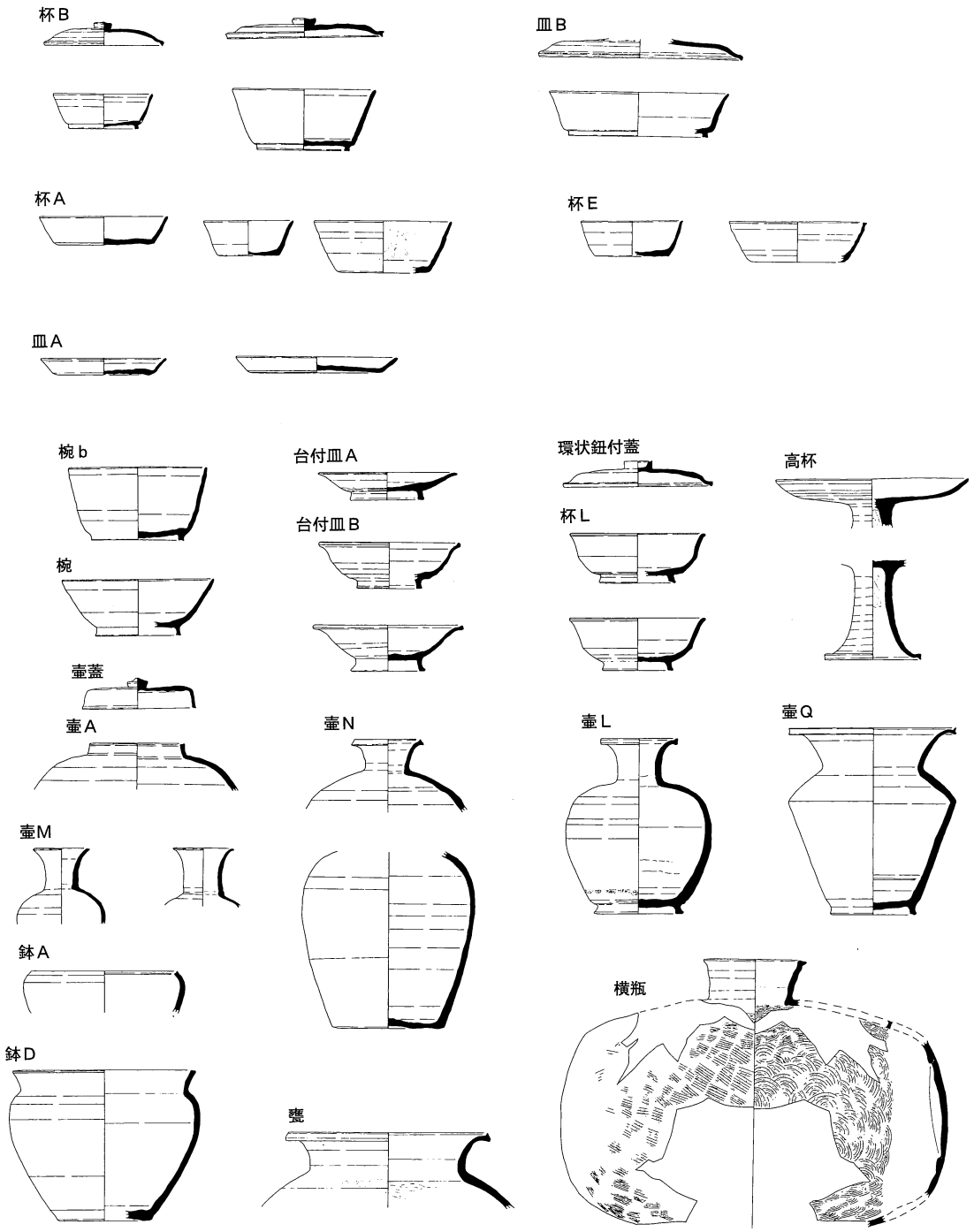
頸部は斜めに開いて立ち上がる。口縁部は大きく外反するが、口縁上端部は内傾する。肩は稜をもち、体部下半をヘラ削りする。体部はやや胴長である。

横瓶（第35図　*1108*）

口縁端部は平坦で外側にわずかに突出する。口径10.6cm、長径46.6cm、推定高32.0cm。

甕（第26図　*0231*／第35図　*1101～1107*）

口径20cm～30cm前後の中型の甕である。外反する頸部をもち、口縁部は端部を上方につまみあげ、口縁下端部を下方に引き出す。*1107* は口径39.7cmのやや大型の甕で、大きく外反する口縁部をもつ。



挿図19　中谷１号窯　器種構成図（S21：８）

第５章　中谷２号窯

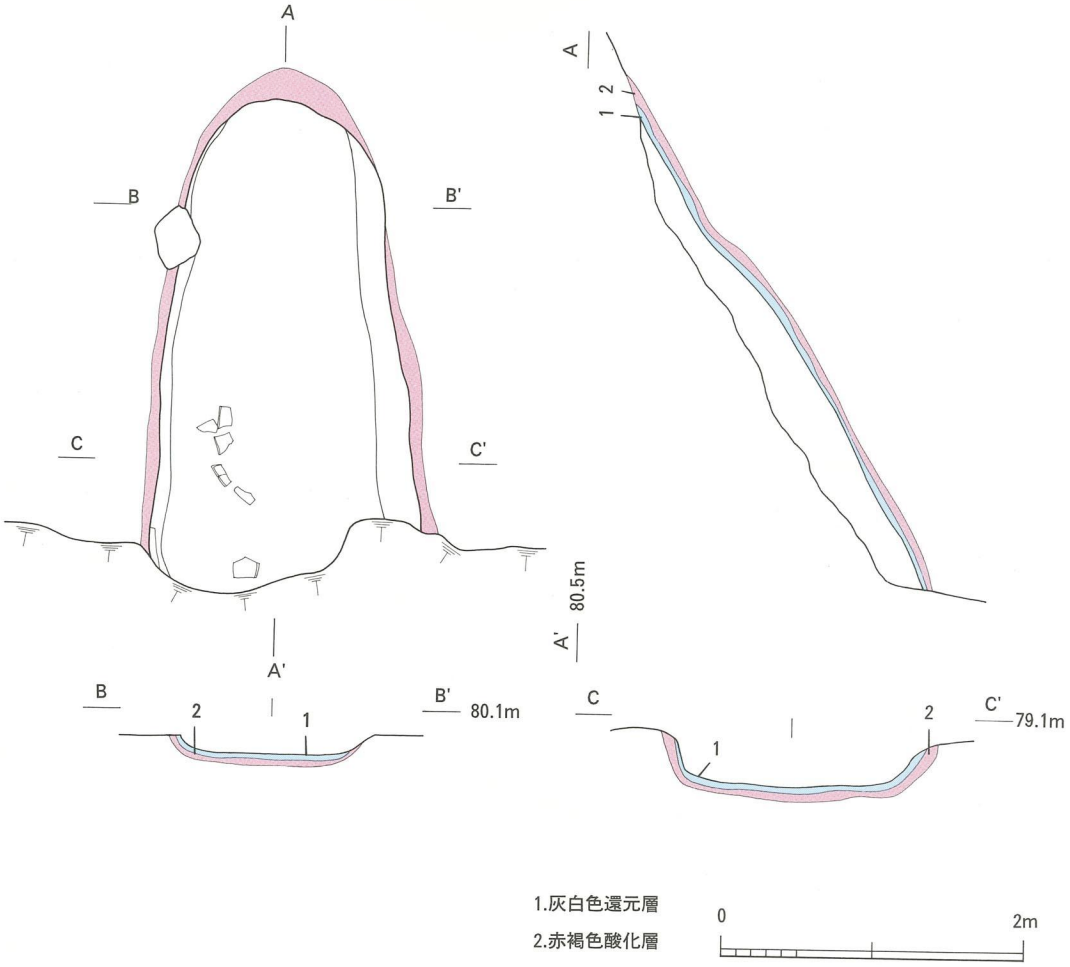
第１節　窯の立地と構造

１号窯からは約50m谷奥にはいった位置にあり、１号窯と同じ北向き斜面の裾部に構築されている。２号窯の西側の斜面は谷地形となっており、２号窯の窯体部はちょうど谷地形の落ち際に近い位置にある。標高は窯体の先端部で80mで、谷底との比高差は約13mある。

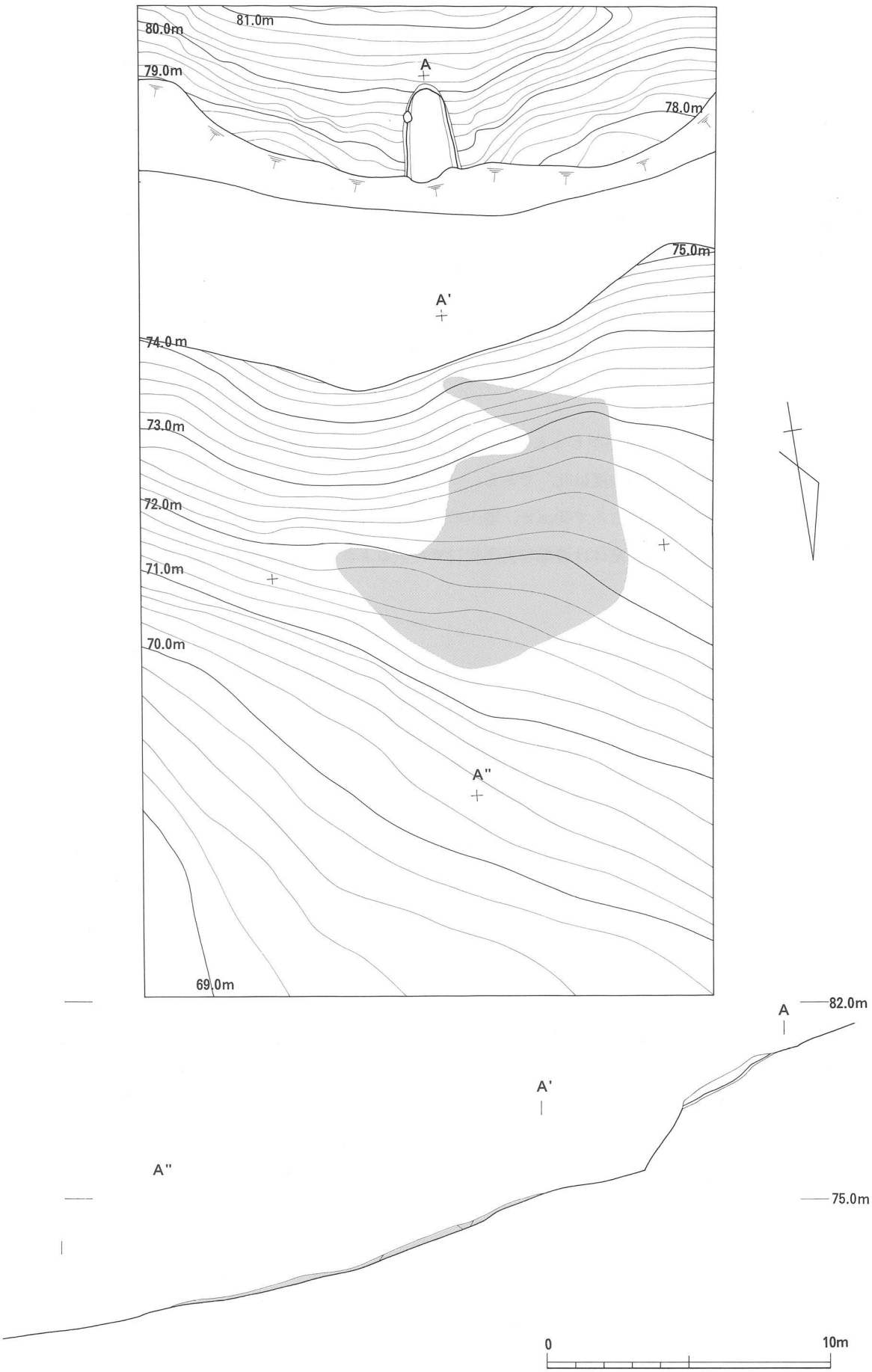
窯体の下部は以前の土取り工事によって削平されて残存しない。土取り工事による切断部から排煙口までの窯体の残存長は3.2mある。これまでの調査窯で中谷２号窯と同じ形態の窯の全長は６～７mであるから、中谷２号窯の全長を同程度の長さとすると、窯体下部は全体の約２分の１程度失われていたことになる。

残存部分の窯体床幅は切断部がもっとも広く1.4mを測り、先に向かって窄まっていく砲弾形の平面プランを呈する。床面の傾斜角度は30°である。

側壁の残存高は最も高いところで40cmで、地山の掘り込みは浅く、窯体構築部の半分以上を地上に露出させた地上式の窯である。窯体は遺構写真図版11でわかるように、左側壁を境として２つの岩脈が貼



挿図20　中谷２号窯　窯体図



挿図21　中谷２号窯　地形測量図

化がほとんど進んでいない。このため、左側壁では壁面の凹凸が少なく、床面とのコーナ部は角をなし、壁は直線的に立ち上がるが、右側壁および床面は岩脈の節理による凹凸が顕著で、側壁と床面のコーナ部は丸く、壁はカーブを描いて立ち上がり、この2つの基盤岩の性質の違いがそのまま壁・床に反映されている。

窯体は上記の通り、素掘りのままで側壁および床には粘土による被覆は認められない。通常の須恵器窯に見られる固く焼け締まった青灰色ではなく、あまり焼結していない灰白色の還元層が全体に広がる。床面には焼成台に転用された大型の甕片が遺存していた。

灰原は窯体よりもやや離れた下方の緩い斜面に形成されている。これは窯体付近の傾斜が約30°あり、焚口から排出された灰や須恵器の破片は焚口付近では堆積せず下方に流れ落ちてしまったものと思われる。灰原から遺物の出土量は遺物コンテナ25箱である。

第2節　出土遺物の概要

窯体からの出土遺物は糸切り椀が1点出土している以外はすべて焼成台転用の甕である。従って、ここでは窯体と灰原の遺物を一括して述べる。

なお、8世紀代の須恵器の分類名称および記号については、平城宮分類を準用しているが、9世紀以降の須恵器については各地の須恵器の生産地の衰退という側面もあって、統一的な分類名称がない。従って、ここでは、同じ播磨の代表的な窯跡群の1つである緑ヶ丘窯跡群の出土遺物の分類表記を準用する。但し、緑ヶ丘窯跡群の分類表記では8世紀代の須恵器の分類名称と混同する恐れがあるので、新しく出現する器種の分類記号については、椀b（ヘラ切りの平高台椀）、椀c（糸切りの平高台椀）の小文字を用いることにし、従来から続く器種については8世紀代の須恵器の分類名称をそのまま用いる。

椀c（第36図）

前述の通り、糸切り平高台をもつものを椀cとする。体部に削り出しの段をもつもの（*0109*～*0117*）ともたないもの（*0101*～*0104*）がある。底部内面の見込み部には外側からの絞りによって段ができている。

c1（*0101*～*0104*）

口径14.8cm～15.8cm、器高6.3cm～6.5cm。体部に削り出しの段をもたない。体部はやや直線的に斜め上方に立ち上がり、器壁は内外面ともに凹凸が激しい。体部は糸切り後、底部周辺を削り出して、高さ6～7mmの高台を作りだしている。この削り出しの時に高台の側面は合わせて整形されている。

c2（*0109*～*0117*）

口径15.4cm～18.1cm、器高6.8cm。体部の中央の上部側を削り出して段を設ける。体部は段をもたない*0101*～*0104*のそれよりも湾曲している。また、器壁は内外面ともに*0101*～*0104*に比べて凹凸は少なく、滑らかである。*0110*は段が2段に削り出されている。また、*1017*は体部上位に削り出しの段と沈線があり、砂粒を多く含む。

椀b（第36図　*0118*～*0119*）

ヘラ切りの平高台をもつものを椀bとする。*1019*は口径16.4cm、器高6.1cm、高台径7.6cm、高台高0.4cm。ヘラ切りによって生じた段をヘラ状工具で消すが、段の痕跡は細い渦巻き状の溝になって残る。底

部から体部にかけて内外面ともに火襷の跡が残る。*1018* は口径15.4cm、器高5.7cm、高台径8.0cm、高台高0.8cm。ヘラ切りの跡をヘラ削りによって消している。また、体部下半から高台損面にかけてもヘラ削りによって面を整形している。底部から体部にかけて内外面ともに火襷の跡が残る。

椀a（第36図　*0120*～*0126*）

斜めに開く体部に貼り付けの輪高台をもつ。ヘラ切り不調整。口縁まで復元できたものはないが、口径に対して底径は6.6cm～7.2cmと小さく、高台高も5mm前後と低い。*0122* は底部外面に爪形状圧痕をもつ。*0125*・*0126* のように径9cm前後、8～9mmの高い高台をもつものもある。

皿a（第36図　*0127*～*0132*）

口径13cm～17.4cm、高さ1.7cm～2.4cm。体部は斜めに低く立ち上がり、口縁近くで直上方向に角度を変える。口縁部は外側に折り返され、端面を水平にする。底部ヘラ切り不調整。

台付皿a（第36図　*0133*～*0134*）

皿aに高台をつけたものである。底部外面ヘラ切り不調整。*0133* は口径15.6cm、高台径6.7cm、高さ4cm。

杯A（第37図　*0201*～*0211*）

口径に対して、底径が小さく、体部の傾きの角度が大きい。底部はヘラ切り不調整のもの（*0201*・*0205*）とナデによって段を消しているもの（*0210*）がある。口径12.0cm～15.9cmで、器高は3.1cm～4.1cmのもの（*0201*～*0209*）と口径14.6～15.9cm。器高8.8cm～9.3cmのもの（*0210*・*0211*）がある。*0211* は体部外面は凹凸が激しいが、内面は凹凸がなく滑らかにに仕上げる。

椀A（第37図　*0212*）

体部と底部の境付近から底部外面をロクロ削りする。体部外面もていねいにヘラ等で調整している点から杯Aと区分した。体部は真っ直ぐに立ち上がる。

杯E（第37図　*0213*）

平底に彎曲する体部をもつ。体部下半から底部にかけてはロクロ削りを施す。口縁端面は平坦である。

双耳壺（第37図　*0214*～*0223*）

外反する頸部をもち、口縁部は内傾する。頸部と体部の接合は2段接合である。肩に突帯と2方に耳をもつ。

0220 は肩部に1条の突帯と1条の沈線を巡らす。耳は上半分を欠くが、粘土紐の上端を突帯に貼り付け、反転させて、突帯の2cm下の位置に下半分を再接着させる。耳は2本の粘土紐を貼り合わせたもので、ヘラによって断面台形状に整形されている。*0221* は突帯の耳の下端部が突帯上に貼り付けられており、恐らく上下2本の突帯をもつ双耳壺の破片であろう。耳は *0220* と同じく2本の粘土紐を貼り合わせたものである。*0217* は肩の部分の破片で、突帯の直上には爪形状の模様が連続的に続く。*0222* と *0223* は耳の上半部の破片で粘土紐を丸めて作られている。*0218*・*0219* は器壁をヘラナデ調整をして整える。底部は恐らく手板の上で粘土を円盤状にしたものであろう。

壺A（第37図　*0224*～*0225*）

0224 は口径12.9cm。頸部は短く直立するが、口縁はわずかに外反する。肩部にヘラ描きの花押状の模様がある。外面には叩きの痕跡がわずかに残るが、内面のあて具跡はヘラ状工具によって消されている。*0225* は底径16.2cm。壺Aの脚であろう。

壺M（第37図　*0226*～*0229*）

口径5.7cmの小型の壺である。頸部はほぼ真っ直ぐに立ち上がり口縁部を外反させる。*0227・0229* の底部には糸切りの平高台をもつ

壺（第37図　*0230*）

底部径6.6cmの小型の壺の底部である。形態および大きさから壺E的な形態である。

鉢D（第38図）

Ｄａ（*0301*～*0306*）

体部はゆるやかに湾曲して立ち上がる。口縁部は「く」の字形に屈曲し、片口をもつ。口縁端面は平坦である。底部は平高台をもつ。底部の切り離しは糸切りではなく、ヘラ切りと思われるが、破片が小さいので判然としない。口縁部と肩部の間に *0306* のように明瞭な稜をもつものがある。

Ｄｂ（*0307*～*0311*）

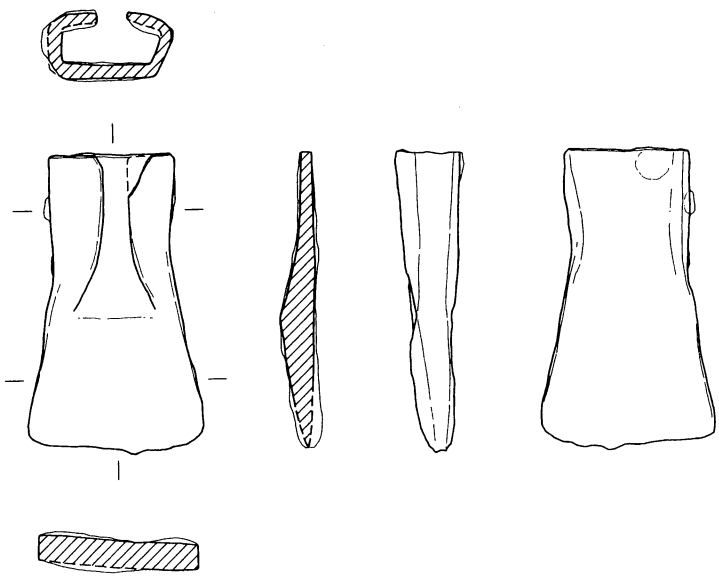
Ｄａのように口縁端部を丸く納めるのではなく、口縁端面は平坦で、端部を上方につまみ上げるか外側に引き出す。

甕A（第38図　*0312*～*0316*／第39図 *0401*～*0408*）

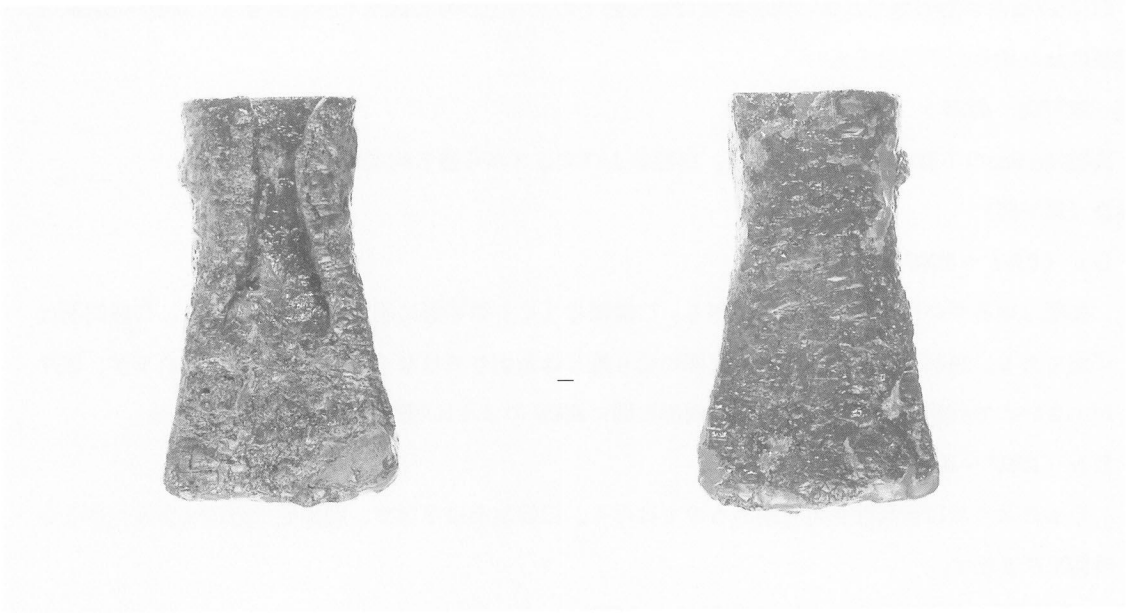
口径19cm～27cm前後の中型と口径36cmの大型の甕がある。口縁端面は平坦で、口縁上端部は内側に突出し、口縁下端部は外側に突出する。*0408* は平底の底部片である。

鉄斧（挿図　22・23）

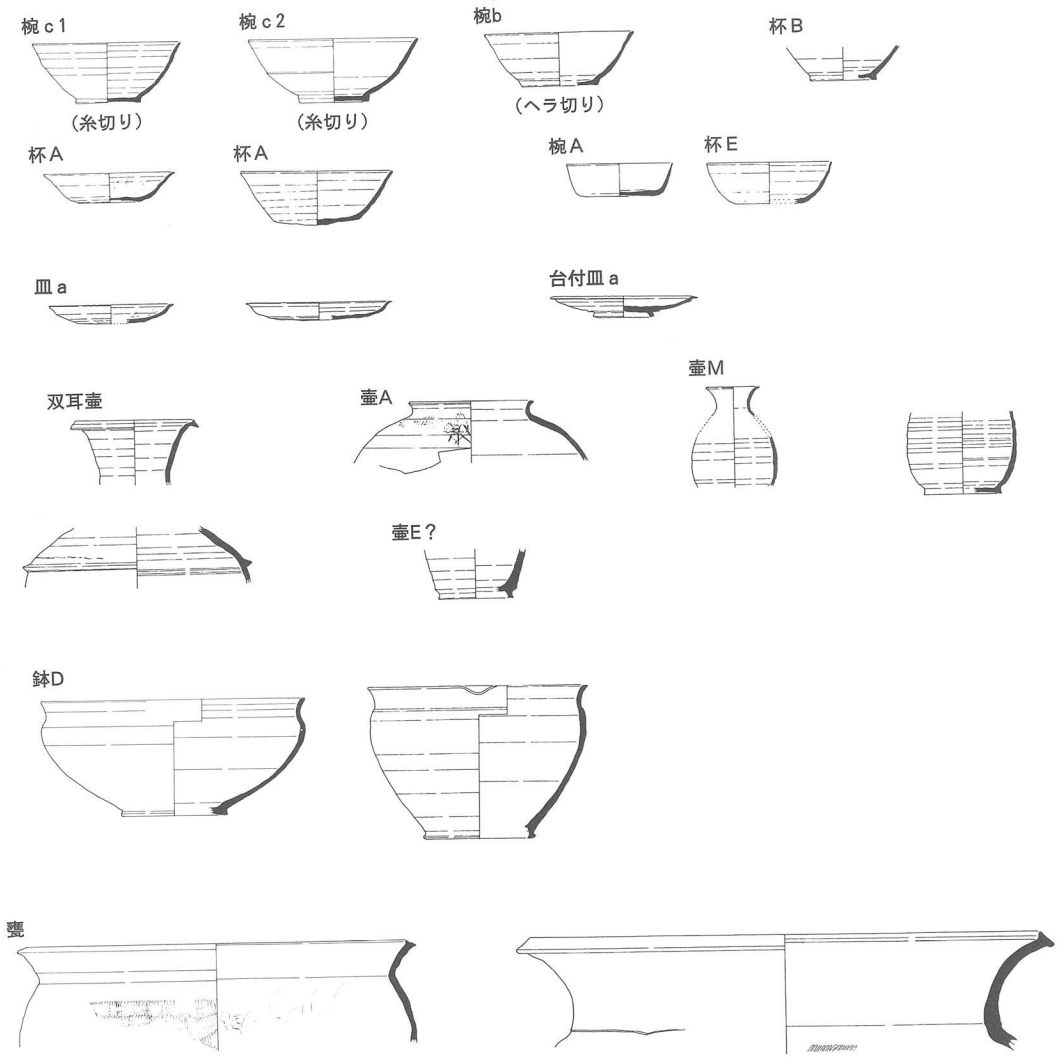
灰原より出土した。平面形は撥形で体部の左右を箱形に折り曲げた無肩袋式である。折り曲げられた部分は不完全鍛造である。長さは8.0cm、刃の部分の幅4.6cm、頸部の幅3.4cm、体部の厚さ1.6cmを測る。出土直後は痛みが激しく、刃の部分などが剥離していた。形状から体部の袋部分に柄を差し込んで使用する手斧横斧）であると見られる。手斧は普通、板などの面の切削に用いられ、原木の切り出し切断や割裂には不向きである。窯の周囲で木材の加工を行う必然性は乏しい。どのような経過を経て本窯の灰原内に混入したのかはわからない。但し、近世での例で、縦向けに柄に取り付けて使用した例もあるので、縦斧として薪割りなどに使用されていた可能性が考えられる。



挿図22　中谷２号窯　出土鉄斧　実測図



挿図23　中谷２号窯　出土鉄斧

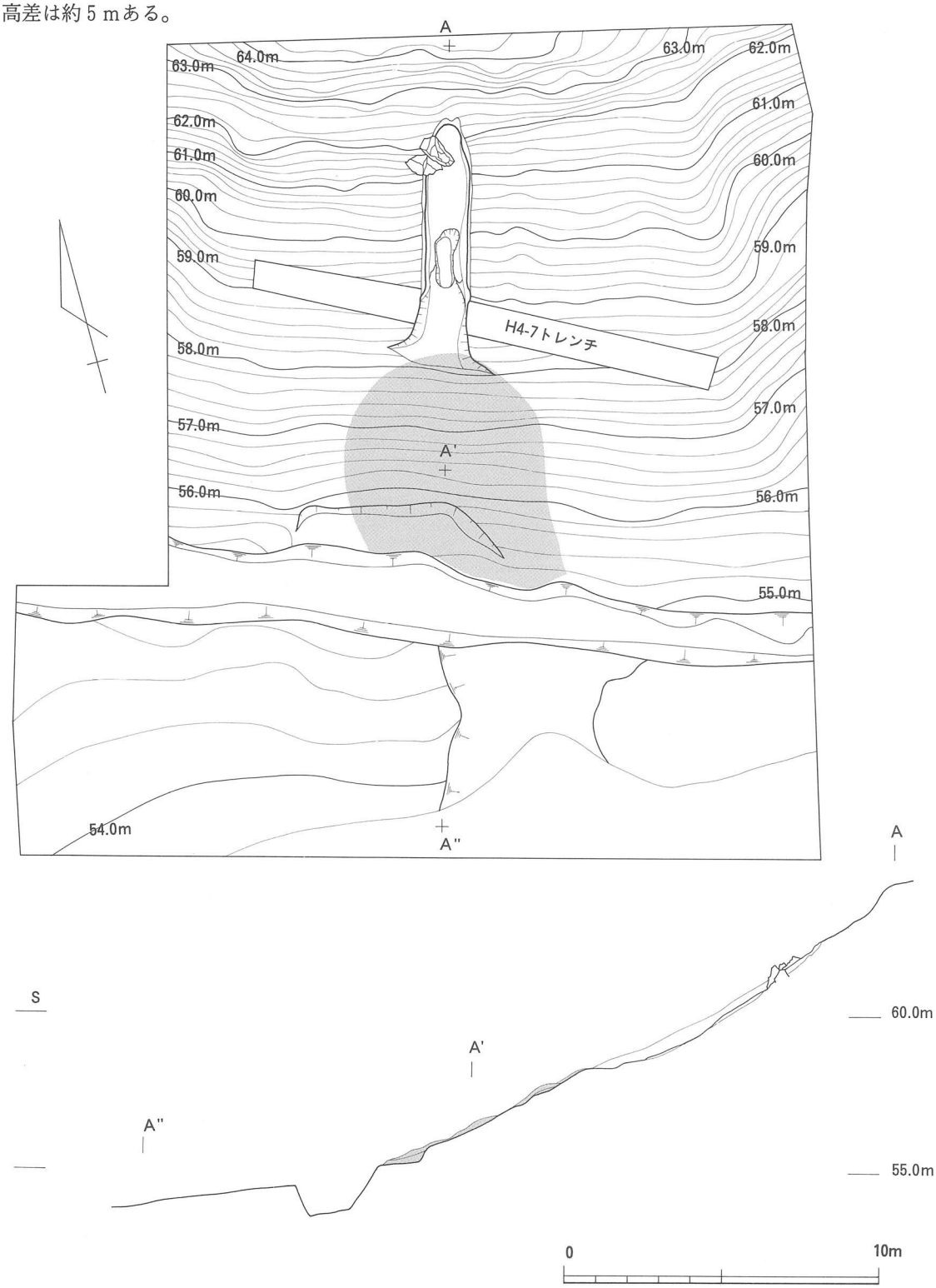


挿図24　中谷２号窯　器種構成図（S：１：８）

第6章　中谷3号窯

第1節　窯の立地と構造

谷の開口部付近に立地する。中谷支群中、最も東端に位置する。標高は焚口で58.5mで、谷からの比高差は約5mある。



挿図25　中谷3号窯　地形測量図

今回実施の中谷支群の調査窯の中で、唯一窯体が完存していた窯である。窯体の全長は6.8mを測る。床幅は先端部0.9m、焼成部C断面付近1.0m、焼成部B断面付近1.2m、焚口1.25mで、ほとんど床幅が変わらない筒形の平面プランをもつ窯である。

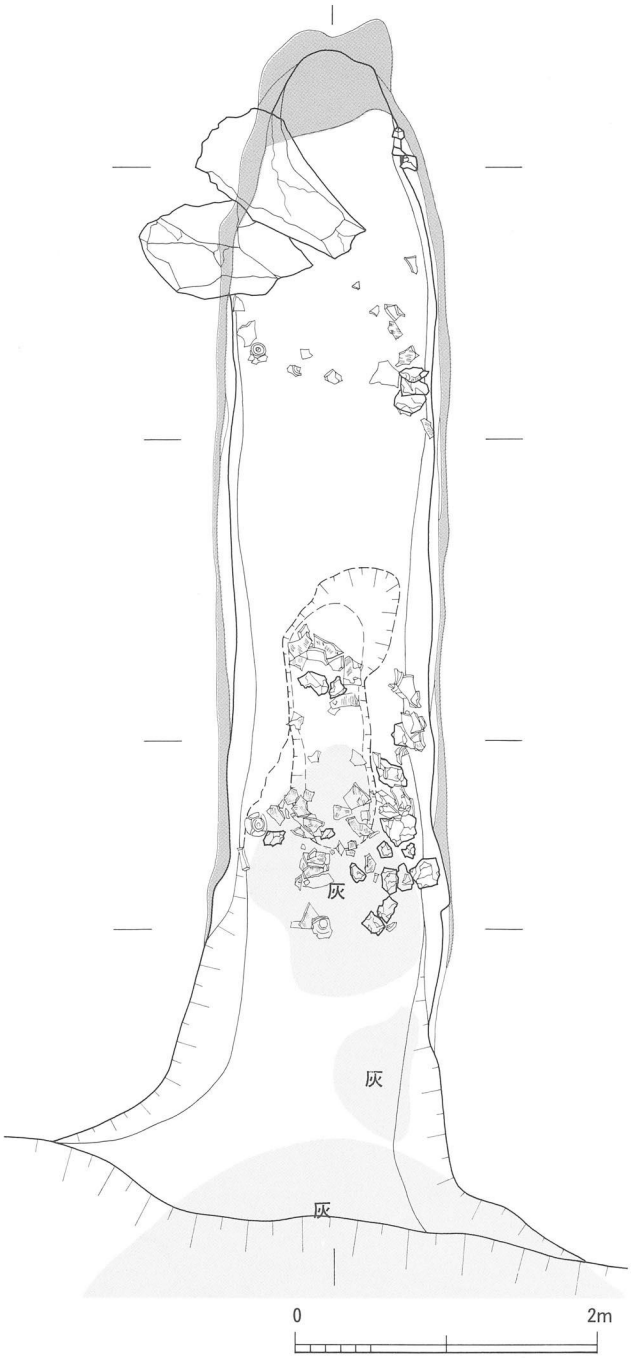
床面の傾斜角度は燃焼部付近で20°、焼成部で31°を測り、燃焼部と焼成部との境付近から傾斜角度をかえることなく、先端部までほぼ直線的に立ち上がる。平均斜度は32.5°である。床面は素掘りのままで、粘土で被覆した形跡はない。

側壁の残存高はもっとも残りのよい所で0.3mで、窯体の構造部がほとんど地上に露出した地上式の窯である。窯体先端部は露頭した岩を破砕せずに、岩の上に窯壁を積み上げて構築している。

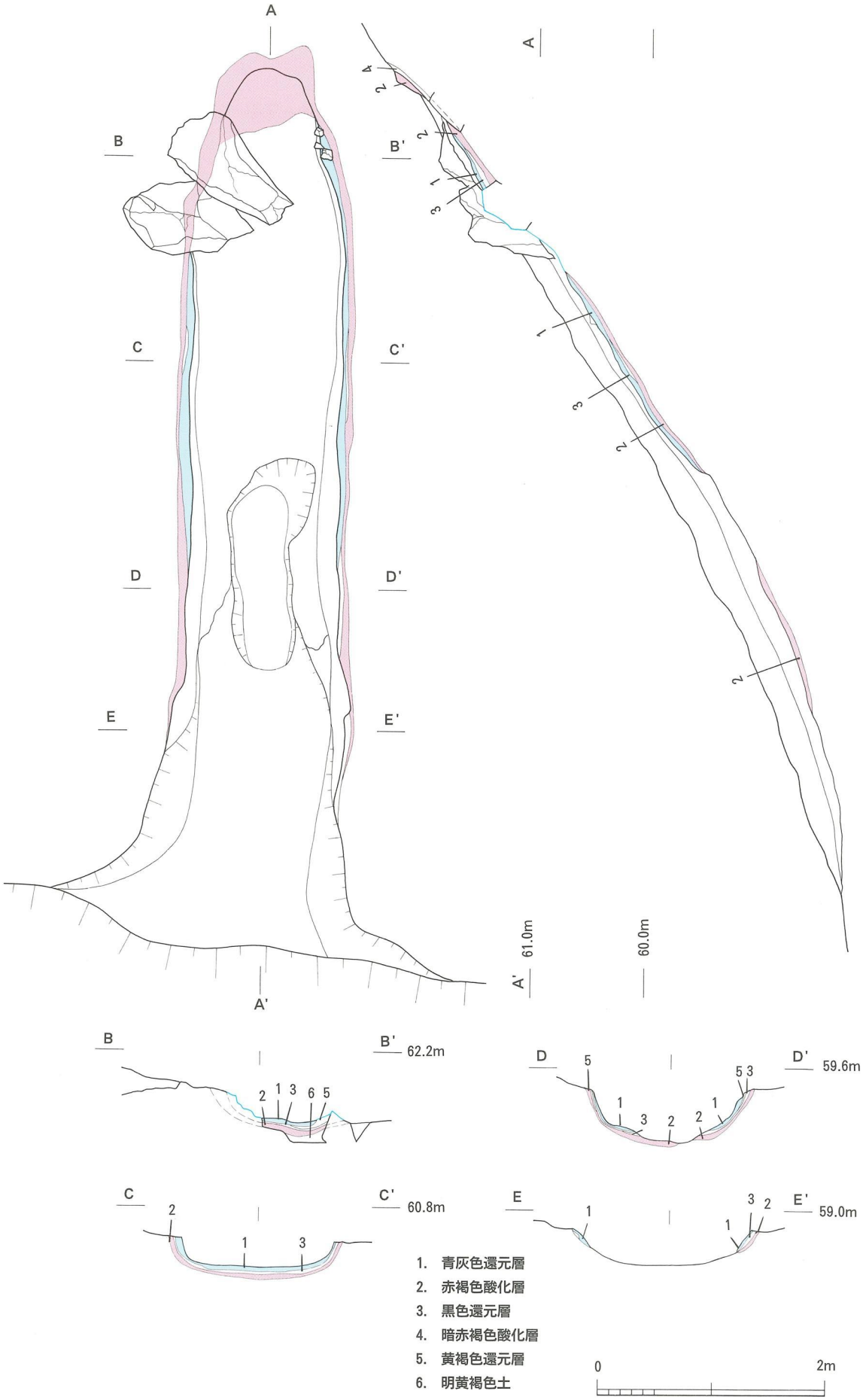
遺物は窯体の焼成部上方と燃焼部に残存していた。このうち、焼成部上方の遺物は大半が焼成台転用の須恵器である。焼成部には焼成台として須恵器のほかに自然石が用いられている。石の下には、安定のために甕の破片を差し込んでいる(遺構写真図版16参照)。燃焼部の遺物は椀および甕の破片である。これらの遺物は人頭大の石10数個を含んだ黄褐色土中に包含されていた。

燃焼部から焼成部にかけて、不定形の落ち込みがあり、焚口に向かってハの字形に開く。 内部には窯壁片を含んだ黄褐色土が堆積しており、底面には被熱は及んでいない。平面プランはいびつな形状を示すが、舟底状ピットと判断される。本来の平面プランの形状は長楕円形にであったと思われるが、周囲の床が何らかの理由で崩れ、不定形状に広がったものであろう。燃焼部には薄い灰の堆積が認められた。

前庭部は溝状に掘られ、延長約1.5mある。灰原は前庭部から楕円状に広がるが、末端は農業用水路によって削平されている。灰の堆積は薄く、最も厚い所で20cmである。灰原からの出土遺物量は遺物コンテナ35箱である。なお、灰原の末端部付近で灰層の下から幅6.5mのテラス状のカット面が検出されたが、ピットなどの遺構は認められなかった。



挿図26　中谷3号窯　窯体図（検出時）



挿図27　中谷３号窯　窯体図

第２節　出土遺物の概要

窯体からは杯Ａ・椀・皿・壺・甕が出土しているが、ここでは窯体と灰原の遺物を一括して述べる。なお、須恵器の分類名称および記号については、中谷２号窯と同じである。

椀ｃ（第40図・第41図）

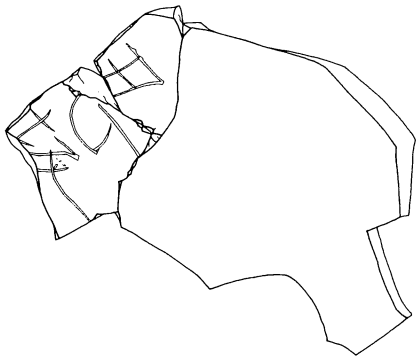
糸切り平高台をもつものを椀ｃとする。体部に削り出しの段をもつもの（ｃ１）ともたないもの（ｃ２）がある。底部内面の見込み部には外側からの絞りによって段ができている。口径14.8㎝～20.6㎝、器高5.5㎝～6.5㎝、高台径7.0㎝～8.0㎝、高台高５㎜～７㎜。

ｃ１（*0107*・*0108*・*0201*～*0205*）

体部に削り出しの段をもたない。体部はやや直線的に斜め上方に立ち上がる。*0107*・*0202*・*0203*は大きく口縁部が開き、口縁部が外反する。*0202*の底部の切り離しは静止糸切りである。

ｃ２（*0207*～*0216*）

体部の中央の上部側を削り出して段を設ける。体部は段をもたない*0201*～*0203*のそれよりも湾曲し、器壁は内外面ともに凹凸は少なく、滑らかである。*0210*は歪みが大きいので、口径はもう少し縮まり、器高も高くなろう。また、*0215*は２段に削り出されている。*0216*は底部側を天にして「忍坂」とヘラ描きされている。「忍坂」は「おさか」または「おしさか」と読む。神武紀や垂仁紀に「忍坂邑」（現桜井市忍坂）の地名が見え、天武紀等にはこの地名にちなんだ「忍坂直大摩侶」らの名がみえる。当該の「忍坂」については播磨では初出の資料である。「忍坂」が姓であるとすると左側に名が刻まれていた可能性があるが、欠損して残存しない。製品としてはていねいな仕上げが行われ、火襷が目立つ。



挿図28　中谷３号窯　刻書須恵器

椀ｂ（第41図　*0217*～*0219*）

ヘラ切りの平高台をもつものを椀ｂする。*2019*はヘラ切り不調整。*1017*はヘラ切りによって生じた段をナデ消すが、その痕跡は残る。ともに高台の高さは低く4㎜。*2018*は高台径7.0㎝、高台高0.8㎝。ヘラ切りの跡をヘラ削りによって消し、体部下半から高台側面にかけてもヘラ削りによって面を整形している。内面には１本線のヘラ記号がある。

杯Ｂ（第41図　*0220*～*0231*）

斜めに開く体部に貼り付けの低い輪高台をもつ。口縁まで復元できたものは*0230*の１点しかないが、ひずみが大きい。底径は口径に対して小さく、ヘラ切り不調整。*0220*は底部外面に爪形状圧痕をもつ。

杯Ａ（第40図　*0101*～*0105*／第42図　*0301*～*0308*）

口径に対して、底径が小さく、体部の傾きが大きい。体部外面は凹凸が激しいが、底面は凹凸がなく滑らかに仕上げる。底部はヘラ切り不調整である。器高が3.1㎝～3.7㎝の低い一群（*0101*～*0105*・*0301*

～*0307*）と5.1cmの器高の高い*0308*がある。*0308*の底部はヘラ切りの平高台のようにも見える。

皿a（第40図　*0106*／第42図　*0309*～*0315*）

口径11.4cm～15.1cm、高さ2.2cm～2.9cm。体部は斜めに低く立ち上がり、口縁近くで直上方向に角度を変える。口縁部は外側に折り返され、端面を水平にする。底部ヘラ切り不調整。

鉢D（第42図　*0316*～*0319*）

体部はゆるやかに湾曲して立ち上がる。口縁部はくの字形に屈曲し、片口をもつ。口縁端面は平坦である。底部は平高台をもつ。底部の切り離しは糸切りではなく、ヘラ切りと思われるが、破片が小さいので判然としない。

鉢A（第40図　*0110*／第42図　*0320*）

本窯では1個体のみである。内外面ともナデ調整である。

壺A（第40図　*0110*／第42図　*0322*・*0323*）

*0322*は口縁部の破片と耳の破片がそれぞれ1片ずつ出土したもので直接接合できなかったが、胎土・色調から同一個体と判断し、図上復元したものである。*0323*は底部のみで、*0324*のような盤になる可能性もあるが、外面に叩きの跡がかすかに残されており、一応壺の底部と考えておく。

盤A（第42図　*0324*）

口径41.0cm、高さ10.4cm。口縁部は内側に突出する。

壺（第40図　*0110*／第42図　*0321*）

卵形の体部をもつ。底部の切り離しは糸切りでもヘラ切りでもない。恐らく手板の上に円盤状にした粘土を置き、その上に粘土紐を巻き上げて成形したと思われる。

双耳壺（第43図　*0401*～*0407*）

外反する頸部をもつ。口縁上端部は上につまみ上げられ、下端部は外方に引き出されている。頸部と体部の接合は2段接合である。

肩に突帯と2方に耳をもつ。突帯は2本もつもの（*0406*）と1本の突帯と突帯の代わりに1条の沈線を巡らすもの（*0402*・*0403*・*0407*）がある。耳は偏平にした粘土紐の上端部を親指で押さえ付けて接着し、下端部は親指と人指し指ではさみ込むようにして接着している。体部は*0402*のように叩きの痕跡を残すものもある。

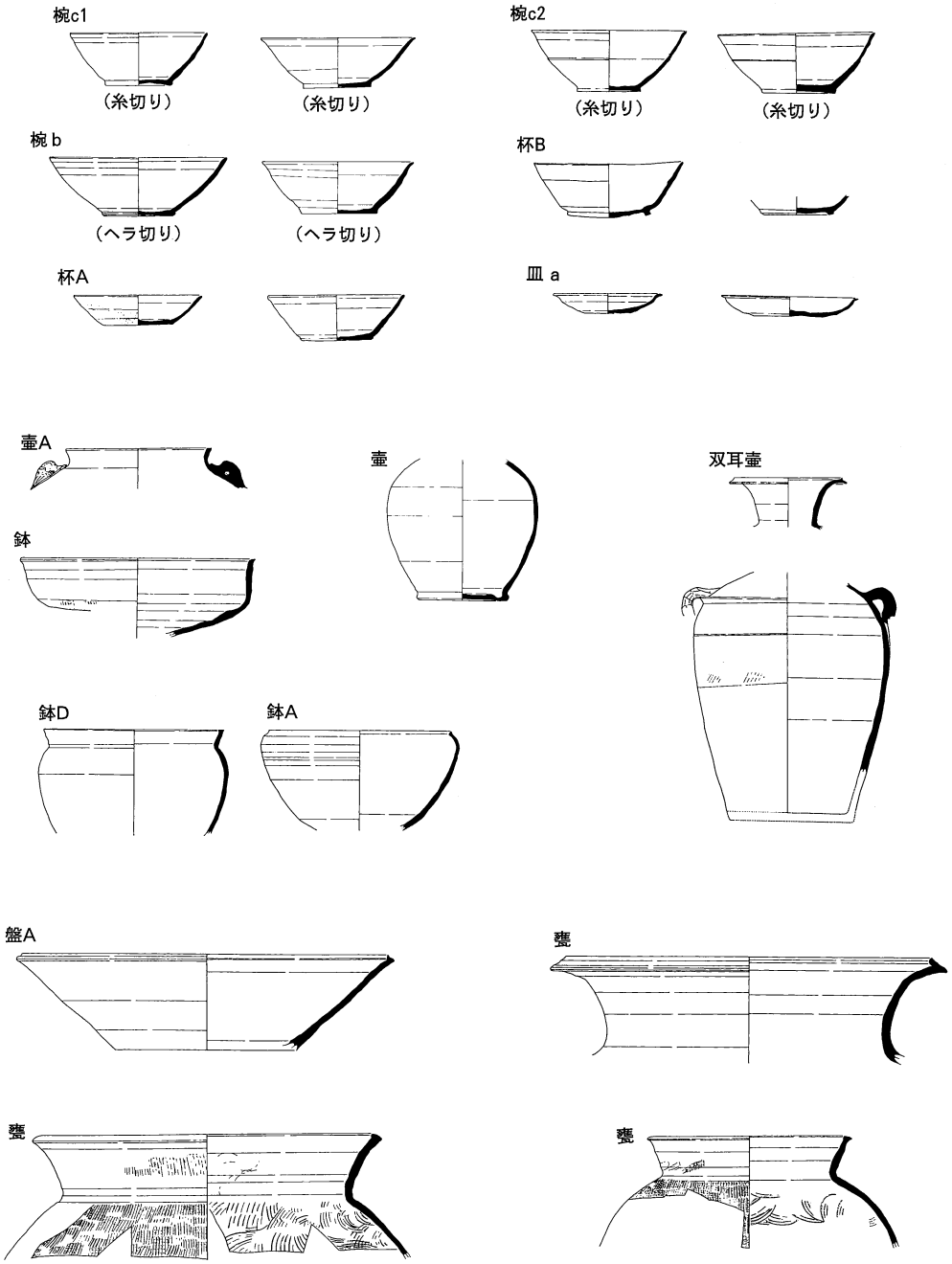
甕（第40図　*0112*～*0115*／第43図　*0501*～*0507*第44図　*0601*～*0606*）

口径30cm以上の大型の甕が多いのが特徴である。口縁部は内側に突出する。

鉢（第40図　*0109*）

口径25.9cm、器高8.7cm。直立する体部とやや外反する口径をもつ。

底部外面全体に叩きの跡がある。



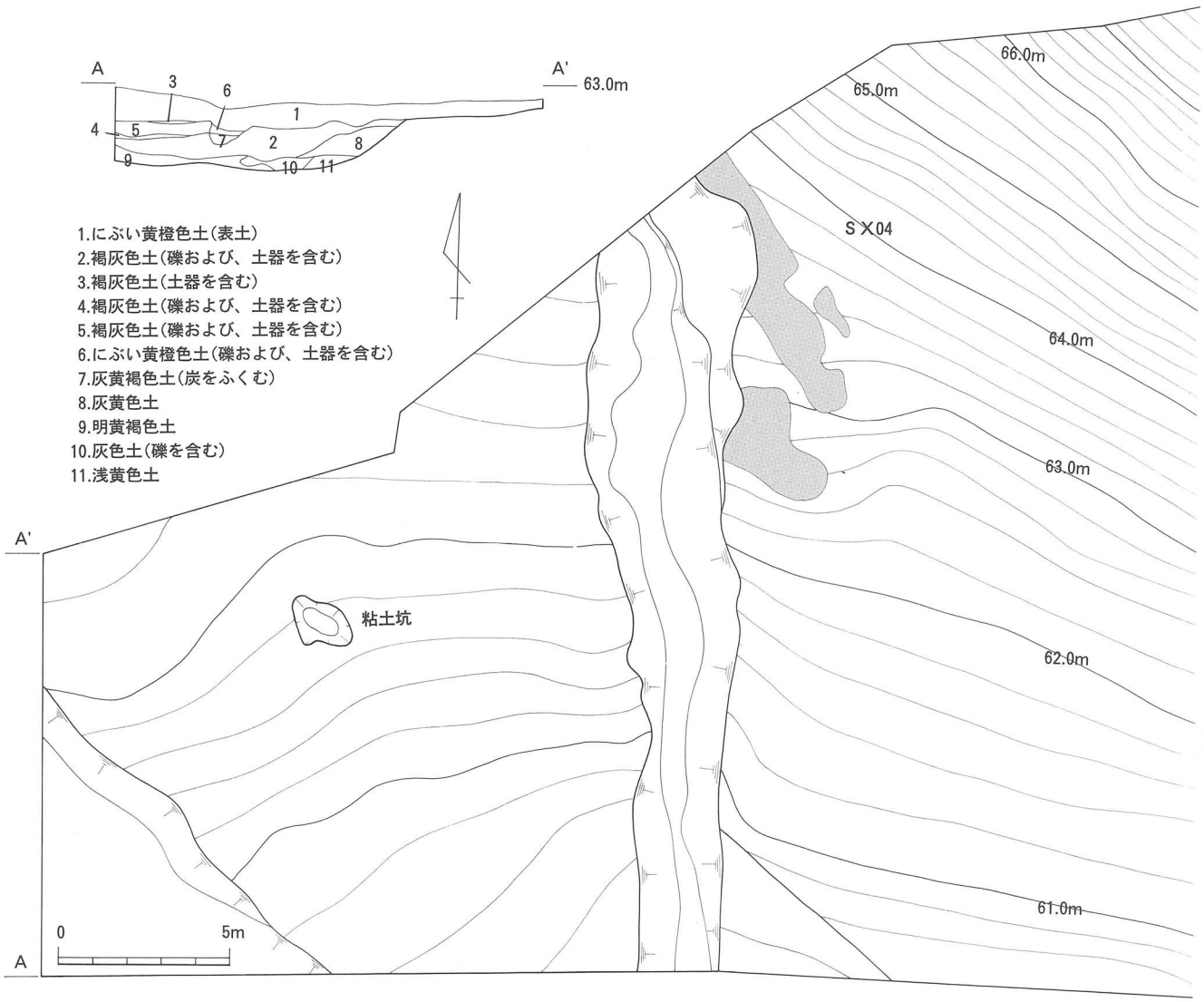
挿図29　中谷３号窯器種構成図（S：１：８）

第７章　その他の遺構

第１節　中谷５号窯

中谷５号窯は、調査区の北西に想定される窯で、加古川市の遺跡地図には中谷12号窯と掲載されている周知の窯である。今回の調査対象地外であったため、窯体及び灰原の調査は実施しなかった。しかし、調査区の南西隅の流路や西壁の断面から杯Ｂ（*0101*）、椀ｃ（*0105*～*0110*）、双耳壺（*0111*～*0118*）、甕（*0119*～*0122*）などの遺物が採取された。

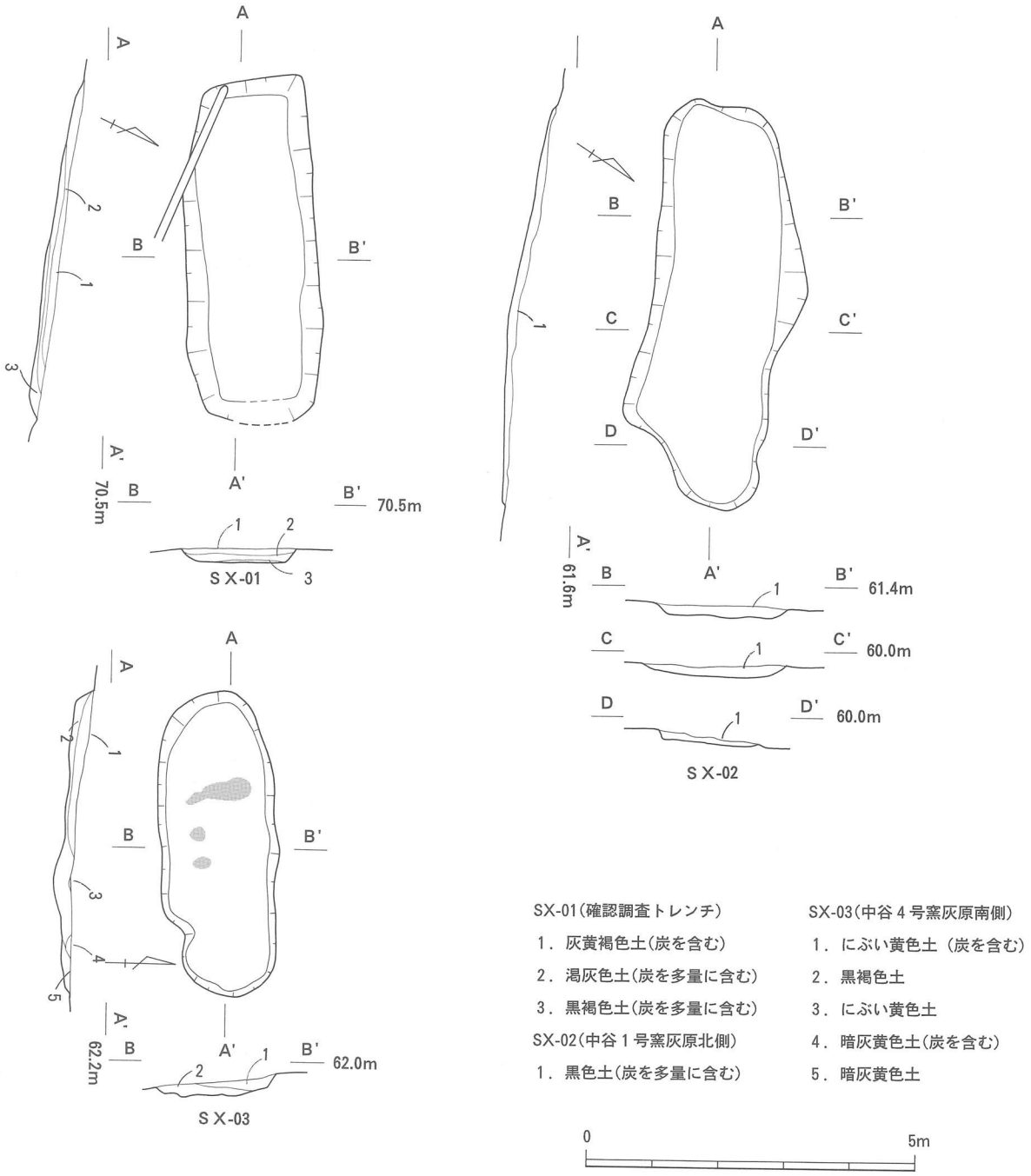
また、調査区の西側の標高62ｍ付近の平坦部から、長径部 1.5ｍ、短径部 1.0ｍ、深さ20㎝を測る不定形な平面形の土坑が検出された。土坑内の埋土は、きめの細かい淡褐色粘質土である。堆積の状況から、埋土である粘土は流水の作用で自然に堆積したものではなく、何らかの目的で人為的にためられていた可能性がある。中谷４号窯、中谷５号窯のうちのどちらに伴うものであるかは不明である。



挿図30　中谷５号窯　地形測量図

第２節　炭土坑

今回の調査では、遺物が出土しない炭を多量に包含した土坑（ＳＸ01～04）が４基発見された。ＳＸ01は、谷奥部の標高およそ70.4ｍの地点に立地し、長軸 5.2ｍ、短軸 2.0ｍ、深さ20㎝を測る長方形を呈している。ＳＸ02は、中谷１号窯の灰原北側の緩やかに傾斜する標高およそ61.5ｍの地点に立地しており、長軸 6.1ｍ、短軸 2.3ｍ、深さ15㎝を測る不整形な楕円形状を呈している。ＳＸ03は、中谷４号窯の灰原からわずかに南東に離れた地点から発見され、周囲にも炭が浅く堆積する土坑状のものが確認されている。遺構は長軸 4.6ｍ、短軸 1.8ｍ、深さ20～30㎝を測り、床面には焼土の痕跡が部分的に残っていた。また、中谷４号窯の調査区を南北に分断する流路の東側落ち際の北端部でも炭の堆積層（ＳＸ04）が発見され、東西約10ｍ、南北約３ｍの範囲に広がっている。



挿図31　炭土坑遺構図

第8章　まとめ

第1節　中谷4号窯出土遺物について

1．遺物の特徴について

中谷4号窯出土遺物の特徴は、第1に器種構成が豊富なこと、第2に金属写しの器種を多量に生産していること、第3にヘラ磨きや細かなロクロ削り調整を施した精良品が金属写しの製品だけではなく、杯類・皿類にも数多く認められる点である。これらの諸特徴について、以下簡単にまとめておきたい。

(1)器種構成

中谷4号窯の遺物の特徴の1つとして、まず、器種構成が豊富なことがあげられる。本窯は後に述べる通り、天平年間前半代の平城宮土器Ⅲ（以下、平城宮Ⅲと略する）古段階の窯跡である。本窯では30数器種にのぼる須恵器が出土しており、本窯1基で8世紀前半代の器種組成を概観することができる。

個々の器種についてみると、皿A～Dなどの皿類の種類と出土量の多さが他の窯跡と比べて際立っている。単に遺物コンテナ数だけの比較になるが、皿A～D（皿Bの蓋を含む）・皿Fの皿類の出土の割合は全体の約20%にも達する。この数字は重量比に近い数字であり、個体数に直せば、違った数字にはなるが、それにしてもこれまで調査が行われた諸窯の中では、皿の占める比率が突出していることには変わりがない。

このうち、皿Bは官衙等での使用に限られる器種で、1つの窯跡から出土する点数は極めて限られており、本窯での出土点数の多さは特徴的である。また、皿Aのうち体部が短く内湾する皿Aaを生産している窯跡は、播磨周辺では今のところ同じ志方窯跡群中の西ノ池1号窯[1]・三田市の落合窯[2]が知られるのみで、生産窯が限られている。しかも、落合窯の場合は出土点数はわずかである。

(2)金属器写しの器種の多種・多量生産

第2の特徴は金属写しの製品が多種・多量に生産されている点である。金属写しの器種としては、稜椀（杯L）・鉄鉢（鉢A）・杯E・水瓶のほか鋺形椀 *(0409)* などがある。これらの器種は全て外面にヘラ磨き、若しくは細かなロクロ削りを施しており、金属器写しのイメージをより効果的に高めている。中でも稜椀の出土量は蓋と身合わせて遺物コンテナ10箱に及び、掲載図以外にも多数の稜椀の残片がある。正確な個体数はわからないが、個体数は蓋と身をあわせて全体で100個体を超えるものと思われ、1つの窯跡からの出土量としてはこれまでの調査諸窯の中で群を抜いている。さらに、注目される点は出土量の多さだけではなく、蓋・身ともに数種のバリエーションを有し、この中にはこれまでに出土例のない初出の器形も含まれている点である。環状鈕付蓋についてはすべてが稜椀の蓋になるかどうかは検討の余地があるが、ここではとりあえず環状鈕付蓋を一括して稜椀の蓋として扱い、出土の稜椀について若干のまとめを行なっておきたい。

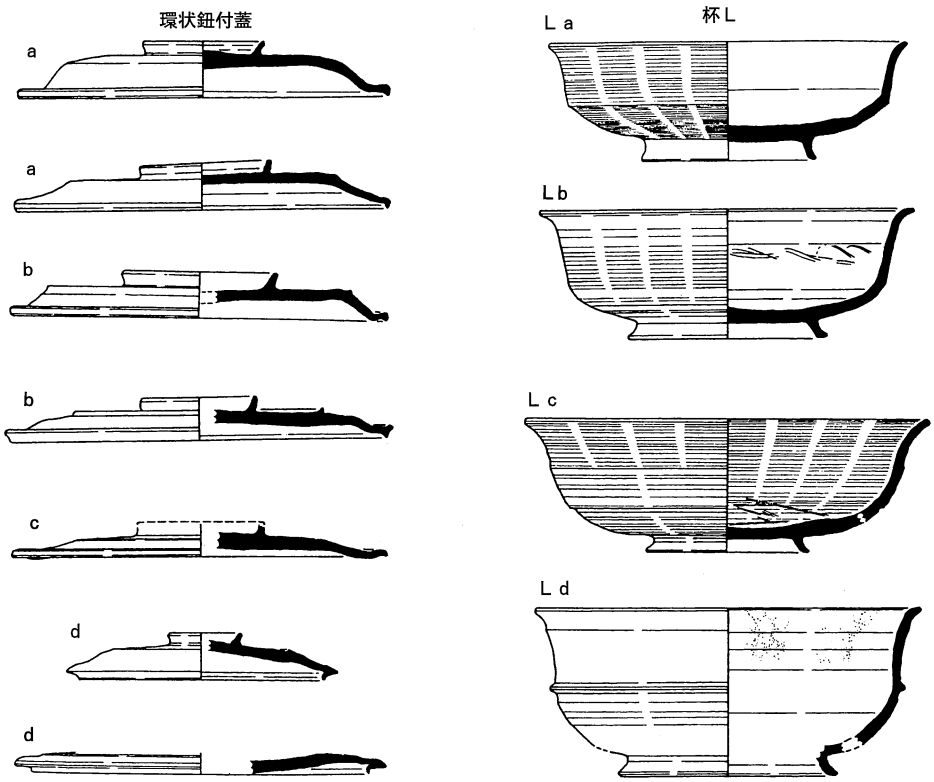
杯A・B（蓋を含む）	36.2%
皿A～D（蓋を含む）	19.8%
稜椀	4.2%
高杯	4.1%
壺	11.6%
鉢	1.1%
盤	1.1%
横瓶	2.0%
平瓶	0.6%
甕	9.8%
その他	11.6%
計	102.1%

第4表　中谷4号窯
器種別出土量比（コンテナ数）
（小数点第2位切上げ）

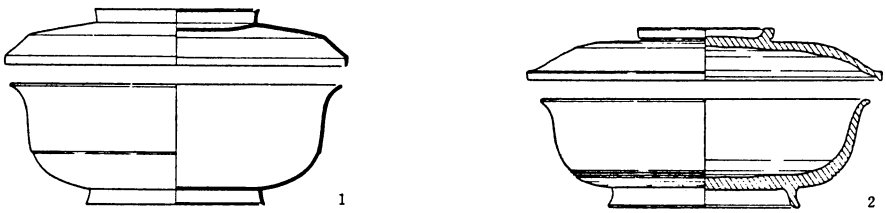
環状鈕付蓋については5種に仮分類している。このうちLa *(0805)* タ

イプは一般的に見られるタイプで、本窯においても環状鈕付蓋の中でもっとも出土量が多い。これに対して、天井部に環状の突起を巡らす環状鈕付蓋ｂタイプ *(0814)* や天井部に丸みがなく器高が低い環状鈕付蓋ｃタイプ *(0820)* は今のところ出土例を確認していない。また、内面にかえりをもつ環状鈕付蓋ｄタイプ *(0826)* については、岡山県津寺遺跡[3]や美作国府跡[4]などの遺跡に出土例があるが、本窯出土のものとやや形状が異なる。

一方、身については４種類に仮分類している。このうちＬａ *(0906)* とＬｂタイプ *(0908)* は一般的な稜椀タイプで、本窯においても出土量が多い。これに対して、体部下半を削り出して段を作るＬｃタイプ *(0921)* の出土例は限られている。生産地での出土例としては陶邑古窯址群中の光明池22号窯[5]があり、西弘海氏が「金属器指向型」の「鋺形」土器として紹介している。[6] また、岐阜県の老洞１号窯中[7]に中央の沈線を介して体部上方と下方の間に段をもつ稜椀も、実見はしていないので確証はないが、この



挿図32　中谷４号窯出土稜椀分類図



挿図33　長刀坂古墓土椀と光明池22号出土稜椀
（西弘海1982年より引用）

Ｌｃタイプの稜椀と同じタイプかもしれない。生産窯以外では岡山県津寺遺跡出土のものがあり、中谷４号窯出土の*0921*に酷似している。Ｌｃタイプのモデルとしては西氏が光明池22号窯出土稜椀の祖形に求めた京都市嵯峨野長刀坂古墓例[8]、久保智康氏が紹介している法隆寺伝来の響銅製椀[9]など体部に明瞭な稜（または段）をもつ鋺に求められよう。また、体部中央に帯を巡らすＬｄタイプ（*0923*）は今のところ出土例が確認できない初出のものであるが、その祖形としては奈良西大寺や東京浅草寺などに所蔵例[10]がある密教法具の二器に求めたい。二器は蓋・鋺・皿の３種からなり、このうちの鋺は外に帯を巡らすのを常としており、本窯出土のＬｄタイプの稜椀と酷似している。なお、相生窯跡群で平安期に製作された突帯椀[11]も二器写しの須恵器として考えている。

稜椀の出現は平城宮では平城宮Ⅰ段階まで遡るとされており、生産窯では最も古く遡る窯跡として先述の老洞１号窯があり、平城宮Ⅰ段階末～Ⅱ段階並行期と考えられている。陶邑では光明池22号窯（中村編年Ⅳ－２段階、平城宮Ⅱ並行期）がある。播磨周辺では、中谷４号窯と同じ志方窯跡群中の平城宮Ⅱ段階の西ノ池１号窯の出土例が最も古く遡る窯跡である。これらの窯跡に対して、平城宮Ⅲ古段階の中谷４号窯の稜椀は、これまでの編年観に従う限り、稜椀の初出の窯跡ではない。但し、複数のバリエーションを有し、この中にはこれまでに出土例が全く確認できないものや類例の少ない器形が含まれている点、生産量が極めて多い点、ヘラ磨きや細かなロクロ削りや選別した粘土を用いる点など整形のていねいさの点において時代的に先行するこれらの窯跡よりも時代が下る資料とは思えない要素を含んでいる。

同じ志方窯跡群中の西ノ池１号窯と中谷４号窯の稜椀を比較すると、両窯に共通する蓋ａ、身Ｌａ・ｂタイプの稜椀は小川真理子氏が指摘[12]するように、志方窯跡群の中谷４号窯の後続窯に受け継がれて生産されているが、蓋ｂ以下とＬｃ以下のタイプの稜椀は今のところ中谷４号窯のみに認められるもので、後続の窯には引き継がれていかない。このようにみると、４号窯における稜椀の生産量の多さは官からの生産要求に基づいてまとまった量が製作されたものであり、バリエーションの多さと４号窯以外にみられないタイプの存在は官から特別に複数の特定モデルを提示された結果であると想定したい。その特定モデルが金属器そのものであったか、金属器模倣の須恵器であったかは判断はできないが、もし、須恵器の特定モデルが存在していたとすると光明池22号窯をはじめとする陶邑の諸窯の製品に求められよう。

(3)精良品の生産

中谷４号窯からは多種・多量の須恵器が出土している。全般的に作りはていねいであるが、その中でも、器面にヘラ磨きや細かなロクロ削りを施したとりわけ精良な作りの一群がある。こうした精良な作りの須恵器は、金属器写しの製品を中心とした特定の器種全体に認められる場合と同一器種・器形の中の一部に認められる場合がある。

全体が精良な作りの製品で構成されている器種としては、金属器模倣の器以外に椀Ａ・皿Ａ・皿Ｂ・高杯がある。但し、これらの中にもヘラ磨き等のきめの細かい調整が体部内外面全体に及ぶものと外面のみに留まっているものがある。特に皿Ｂのうち「大」の刻書をもつものは最終調整のていねいさは高台にまで及んでおり、より上級の官への進上を窺わせる。また、一部の製品に精良品が認められる器種としては、杯Ａ、杯Ｂおよび皿Ｄなどの供膳具がある。

２．製品の供給先からみた中谷４号窯の性格

中谷４号窯産の製品は平城京二条大路南濠状遺構ＳＤ5100から出土している。[13] ＳＤ5100からは神亀２(725)～天平11（739)年の年紀をもつ二条木簡とともに一括投棄された土器が出土しており、[14] この土器群中に中谷４号窯産の須恵器が含まれている。ＳＤ5100出土遺物のうち、中谷４号窯の須恵器と判明したのはⅢＡ（№1499）のみであるが、報告書掲載図を見るかぎり、他にも中谷４号窯産の可能性がある須恵器が含まれている。ＳＤ5100から出土した二条木簡と土器群は左京三条二坊側の施設から投棄されたものとみられ、左京三条二坊側の施設は木簡の内容から長屋王邸の跡に造営された光明皇后の皇后宮と考えられている。ＳＤ5100出土遺物には多数の灯明器が含まれており、灯明器の多くは大型食器をはじめ、さまざまな器種を転用していることから、灯明器は常夜灯ではなく、法会等に臨時的に使用されたものと考えられている。中谷４号産のⅢＡも灯明器に転用されたものである。実見はしていないが、中谷４号窯産と思われるⅢＡは№1499以外にもう１～２点出土しており、いずれも外面をていねいにロクロ削りした精良品である。

平城京ＳＤ5100からのⅢＡの出土によって、中谷４号窯の製品のうち、質の高いものは宮廷、若しくは上級官庁に供給されていたことがわかる。平城宮に供給された中谷４号窯の製品は宮廷用の食器として常備されたものか催事の際に特別に作らせたものかはわからないが、恐らくは調納物ではなく、官からの特別の指示を受けて製作されたものであろう。中谷４号窯は在地向けの製品の生産を行うとともに郡衙・国衙を越えたより上級官庁向けの製品の製作を行っていたことになる。ただ、磨きを施す須恵器に限れば、姫路市北部の峰相山窯跡群でも生産されており、[15] 中谷４号窯以外にも精製の須恵器を生産していた窯が存在する。

３．中谷４号窯の年代比定について

中谷４号窯の製品の一部は、上述の通り、平城宮ＳＤ5100から出土している。ＳＤ5100出土土器は、共伴の二条木簡の年紀から恭仁京への遷都（740年）以前の天平年間前半の年代が確実に与えられる平城宮土器Ⅲ古段階の一括資料である。従って、中谷４号窯の出土資料は播磨における平城宮Ⅲ古段階の標識資料となるだけでなく、天平年間前半という定点年代が与えられる貴重な窯跡出土資料でもある。しかし、ＳＤ5100から出土した遺物は中谷４号窯産の製品の一部であって、中谷４号窯の須恵器全体を見通した場合、果して平城宮Ⅲ段階に位置づけられるかどうかという検証も必要とされるので、次に中谷４号窯の須恵器と平城宮編年について、構成器種・形態の変化・杯類の法量の３つの角度から比較検討しておきたい。[16]

(1)構成器種

構成器種はバラエティに富み、平城宮Ⅱ～Ⅲ段階に見られるほとんどの器種がそろっている。この中で個々の器種の消長についてみると、平城宮におけるⅢＥ（灯明皿）の存続は平城宮Ⅱ段階まで、また、壺Ｌの出現はこれまでのところ平城宮Ⅲ中段階とされているが、中谷４号窯が平城宮Ⅲ古段階とすると、ⅢＥの存続期間が平城宮Ⅲ古段階まで下り、壺Ｌの出現は逆に平城宮Ⅲ古段階まで遡ることになる。このほか、平城宮Ⅱ段階から出現する壺Ｅは中谷４号窯では見当たらないが、時期が下る投松６号窯他では出土しているので、志方窯跡群周辺では出現が時期的に遅れるのかもしれない。

(2)形態の変化

鉢Ａ（鉄鉢）の底部は全て尖底である。平城宮において、鉢Ａは平城宮Ⅲ段階で尖底のものが出現後、平底のものは姿を消す。また、提梁をもつ平瓶は平城宮Ⅰ段階で出現し、以後、提梁をもつ平瓶が一般

化する。中谷４号窯の平瓶は提梁をもつが、中谷４号窯より１段階古い西ノ池１号窯（平城宮Ⅱ段階）では提梁をもたないので、中谷４号窯を平城宮Ⅲ古段階とすると、志方窯跡群周辺での提梁をもつ平瓶の出現は平城宮Ⅲ古段階まで下ることになる。

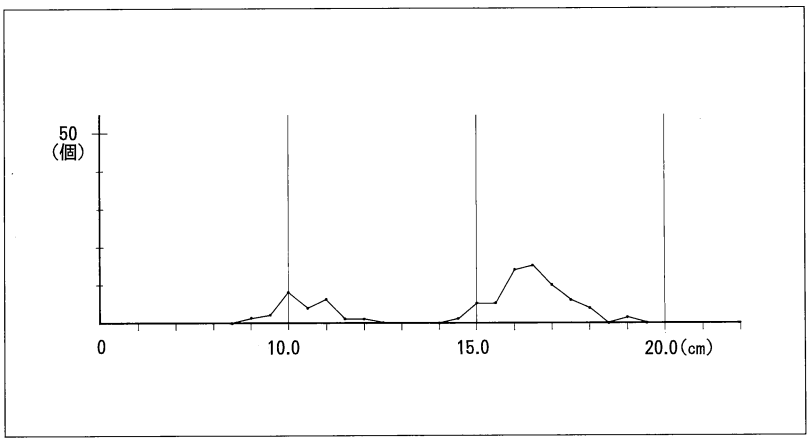
(3)法量分化

平城宮では杯Ａ・Ｂにおける高低２者の分離が飛鳥Ⅳに始まり、平城宮Ⅲ古段階で土器の法量分化、法量の拡大化が頂点に達し、それ以降は縮小化をたどる。そして、平城宮Ⅳ段階以降、器高の高い系統が姿を消す。しかし、次節で詳述するように、少なくとも中谷４号窯段階までは器高の低い系統が主体であり、中谷４号窯と中谷１号窯間のある段階を境にして、器高の高い系統が主体を占めるようになり、平城宮における法量変化の傾向とは逆のパターンを示す。また、土器の法量分化、法量の拡大化が最も著しいのは白沢３・５号窯（平城宮Ⅰ）段階で、中谷４号窯の段階ではすでに縮小化の方向に進んでいる。

以上、器種の消長・器種の形態変化・法量分化の点からみてきたように、器種構成および器種の形態変化の点では平城宮土器Ⅲ古段階と共通する様相を示しているが、細かな点まですべてが合致しているわけではない。また、杯類の法量の分化と変化についても違った傾向を示すが、複数の生産地の製品が流入している消費地たる都城と生産地の違い、選別された宮廷用製品が供給されている都城と在地向けの製品を主体としている生産地との製品の種類・質の違いなどがあり、必ずしも都城の土器の様相がそのまま生産地にストレートに適用できるわけではない。ひとまず、中谷４号窯を平城宮土器Ⅲ古段階の窯として、８世紀代の播磨の須恵器編年の軸に置き、平城宮編年と相互検証を試みて行くことにしたい。

第２節　中谷４号窯と１号窯の杯類の法量分布

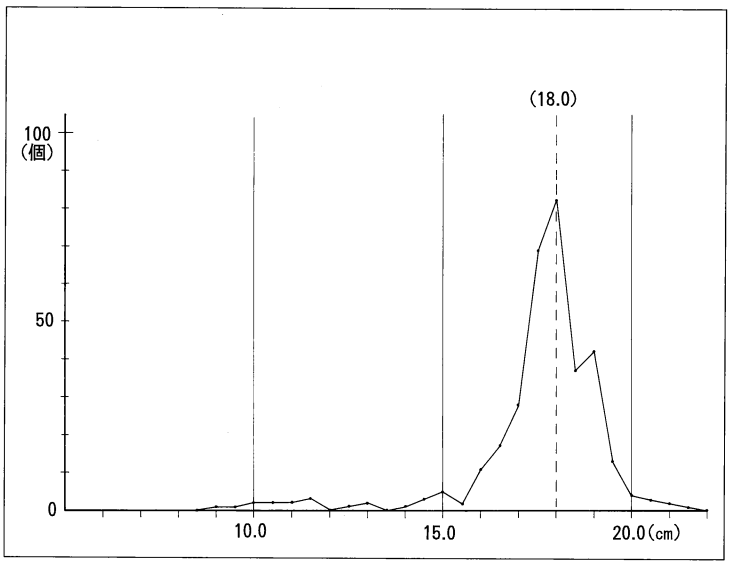
平城宮の土器の特徴は杯・皿などの食器類の法量分化と規格性にあり、その規格性が土器群の差を越えてみとめられる事実をもって法量の規格性が生産の場で要求されていたと指摘されている。[17] 播磨国は須恵器の調納を義務づけられた生産国の１つではあるが、これまで、平城宮で指摘されてきた食器類の法量分化や規格性については、生産地側からの立場から細かな分析・検討が行われてきたわけではない。そこで、今回報告の５基の窯跡のうち、８世紀代の中谷１号窯と中谷４号窯について、杯類を対象に統計処理を行い、食器類の法量の分化や変化について生産地側の立場から分析結果を提示しておきたい。なお、２基の窯跡の年代については、中谷４号窯を８世紀前葉（平城宮Ⅲ古）、中谷１号窯を８世紀末葉頃に比定している。また、比較のため既報告の７世紀末～８世紀初め（飛鳥Ⅴ・平城宮Ⅰ）期の白沢３号窯[18]の数量統計を参考資料として加える。



第５表　白沢３号窯　杯Ｂ身 口径別個体数グラフ

杯B

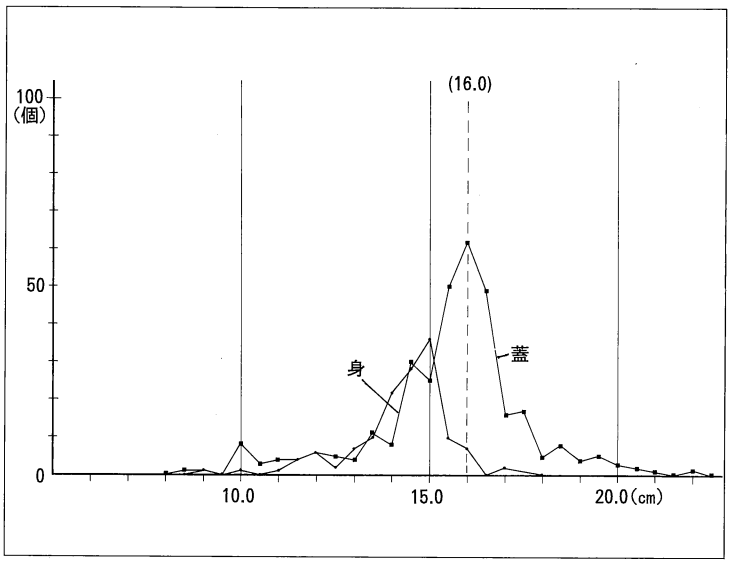
4号窯と1号窯における蓋と身の口径別の個数分布を第7表に示す。蓋と身の法量別の数量分布の関係については表をみて明らかなように、4号窯・1号窯ともに蓋か身のどちらかを約1㎝平行移動させれば全く同じ分布形状を示しているので、蓋と身では統計処理数の違いはあるもののデーター的には実態を反映しているものと考えてよかろう。



第6表　白沢3号窯　杯B蓋　口径別個体数グラフ

〔蓋〕

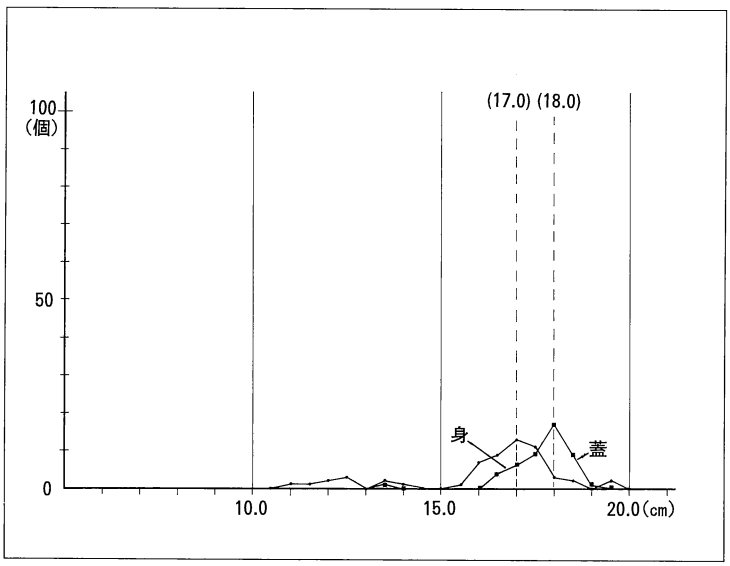
まず、蓋の分布に関してみると、白沢3号窯と中谷4号窯は裾広がりの単峰型の分布形状を示し、口径の範囲は10㎝から22㎝前後とほぼ同じである。しかし、峰の頂点は白沢3号窯が18㎝であるのに対して、中谷4号窯は16㎝で、分布の峰の形状が全体に左に大きくずれている。一方、中谷1号窯は白沢3号窯や中谷4号窯のような裾広がりの単峰型の分布形状は示さず、大きな峰と小さな峰の2つの山に完全に分離した双峰型の形状を示している。但し、分布の大きな峰の頂点は白沢3・5号窯と同じ18㎝である。



第7表-1　中谷4号窯　杯B蓋・身　口径別個体数グラフ

〔身〕

次に杯Bの身の法量分布について見る。白沢3号窯については、実測分のみの統計でありデーター数が不足しているために、蓋のように明瞭な分布の形状は示していないが、蓋の分布の形状から恐らく17㎝を峰の頂点とする単峰型であると思われる。4号窯と1号窯



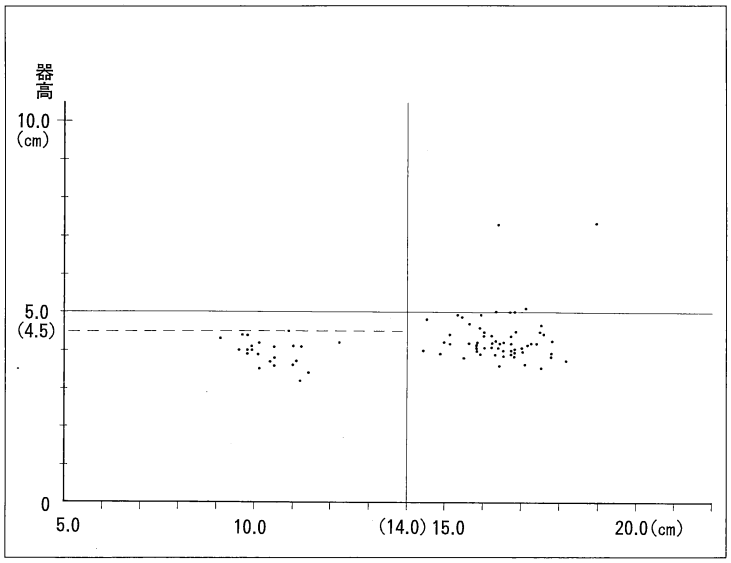
第7表-2　中谷1号窯杯B蓋・身　口径別個体数グラフ

については第７表で示されている通り、４号窯は口径15cm、１号窯は17cmをそれぞれ分布の峰の頂点としている。

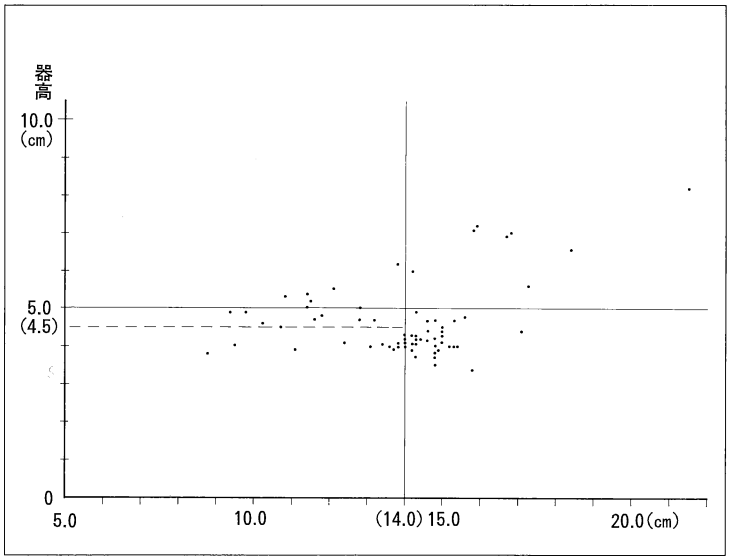
続いて器高と口径の法量分布を第８表に示す。まず、白沢３号窯についてみておくと、口径9cm～13cmと口径15～19cmの大きく２群に分かれるが、前者は器高4.5 cm以下、後者は器高５cm以下といずれも器高が低いのが特徴である。器高の高い杯Ｂも存在するが、出土点数はわずか３点で、器形・調整は器高の低い杯Ｂとは異なりやや特殊品的な要素をもつ。なお、口径10cm～13cmと口径15～19cmの杯Ｂの出土量比は表では接近しているようにみえるが、実測した資料だけを図にプロットしたもので、実際は蓋の口径別の数量分布が示しているように圧倒的な差がある。

中谷４号窯では、白沢３号窯よりも器高の高い一群が増加しているが、高い一群については計測（実測）可能な資料をほぼ全てプロットしたもので、出土量比は器高の低い一群に比べれば圧倒的に少なく１％に満たない。器高の低い一群は口径9cm～13cm未満の一群と口径13～17cmの一群の２群に分かれ、それぞれの器高は白沢３号窯と同じく前者が4.5cm以下、後者が５cm以下である。器高の低い一群については、白沢３号窯よりも口径の縮小化が見られる。

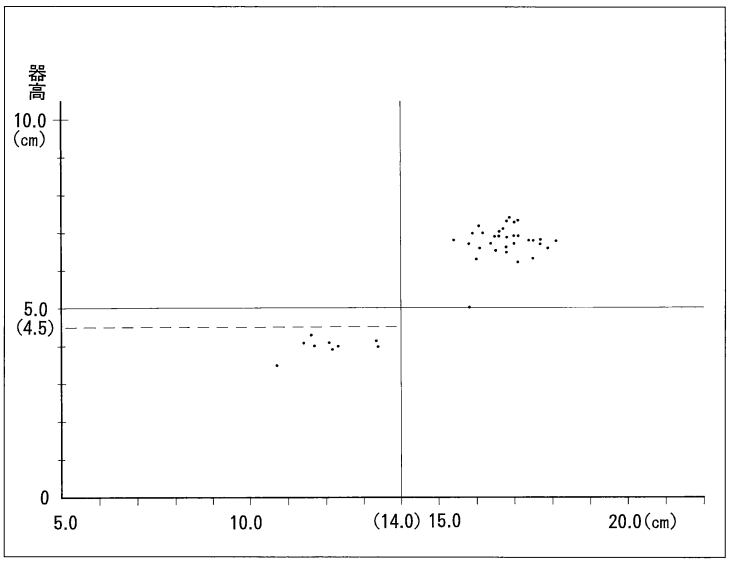
中谷１号窯は口径別の数量分布では、大小２つのグループに分かれる双峰型を示すが、法量分布に



（１）白沢３号窯



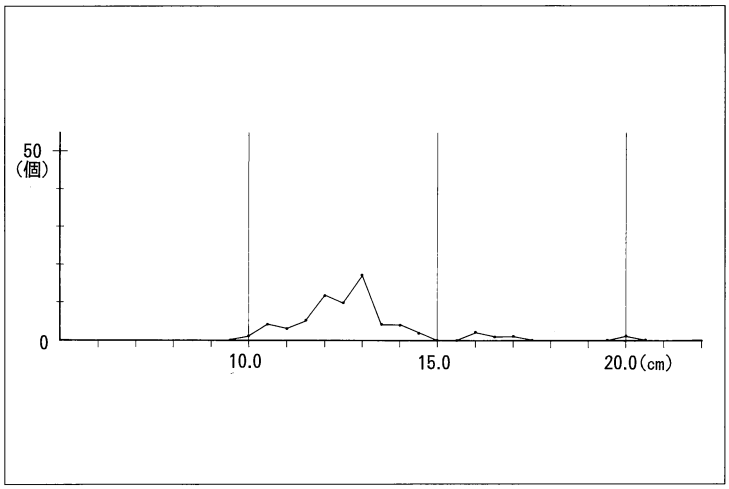
（２）中谷４号窯



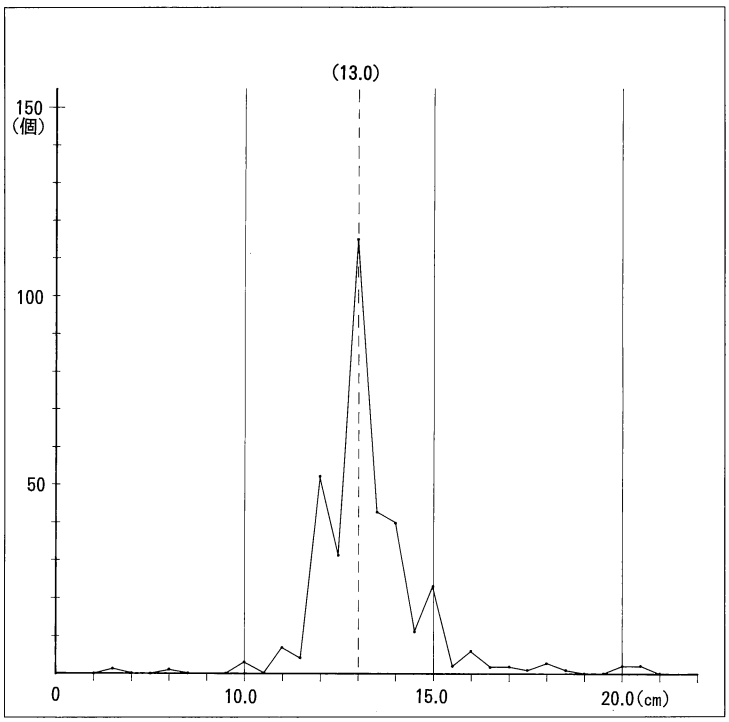
（３）中谷１号窯

第８表　杯B身法量分布図

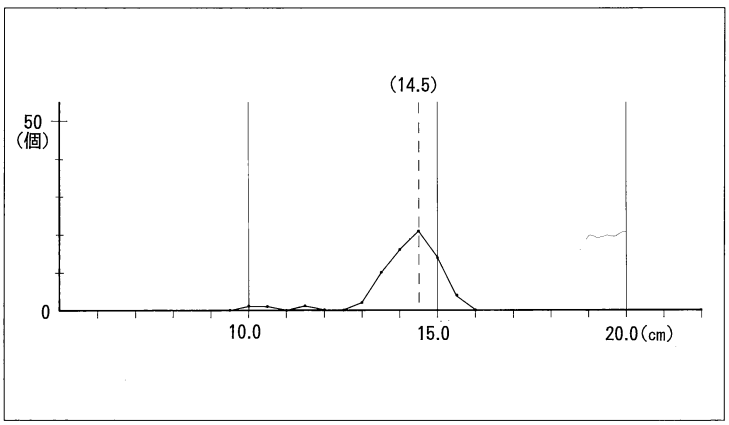
おいても、口径16cm～18cm、器高6.5cm～7cmの一群と口径10cm～16cm、器高3.5cm～4.5cmの大小2つのグループに完全に分かれる。すなわち、中谷4号窯で多数を占めていた器高の低い系統の杯Bは口径の大きな一群が消え、小さな一群のみが残存する。逆に少数であった器高の高い一群が多数を占めるようになるが、器高の高い一群のうち、口径の小さな一群は消えており、完全に法量が大小の2つに2極化しているのが大きな特徴である。



（1）白沢3号窯



（2）中谷4号窯



（3）中谷1号窯

第9表　杯A口径個体数グラフ

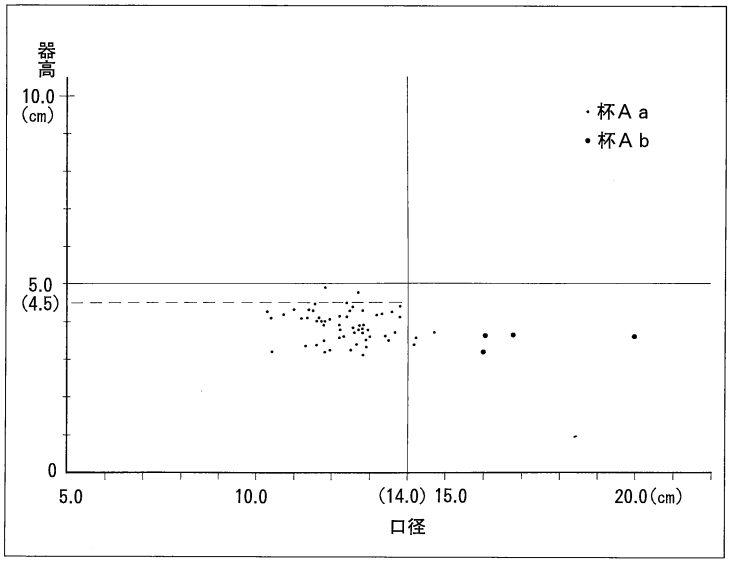
杯A

口径別の数量分布を第9表に示す。白沢3号窯と中谷4号窯については、口径15cm以上の大きな一群が認められるが、この一群はいずれも底部をヘラ削りしたもので、底部ヘラ切り不調整（杯Aa）の一群に限ると口径は15cm以下で、13cmを分布の頂点とした単峰型の分布形状を示す。また、中谷1号窯については、14.5cmと10.5cmを分布の峰の頂点とした双峰型の分布形状を示すが、口径の小さな一群についてはきわめて少量である。器高に関しては、白沢3号窯・中谷4号窯・中谷1号窯いずれも低い系統のものが主体で、器高の高いものについては中谷4号窯などにごく少量みとめられるが、底部にヘラ削り調整を施すなどやや特殊品的な要素がある。

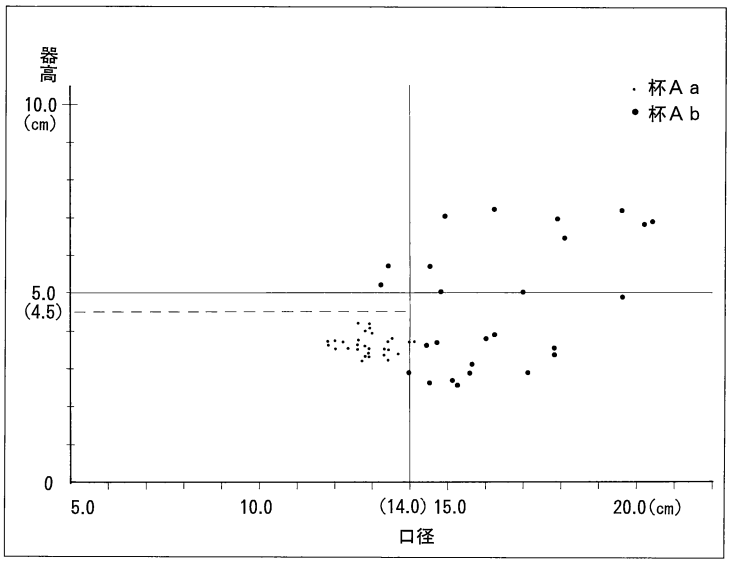
以上が当窯跡群の出土遺物の法

量分布の概要である。平城宮における杯A・Bの高低二者の分離は飛鳥Ⅳ（7世紀後半）に始まり、平城宮Ⅱで完成するが、平城宮Ⅲ～Ⅴにかけて杯類が小型化し、法量が縮小化するとの見解が西弘海氏ら[19]によって示されてきた。最近では、平城宮土器Ⅲ古段階の基準資料であるSD5100・5300・5310出土土器の整理および分析が行われた結果、土器の法量分化および法量の拡大化は平城宮土器Ⅲ古段階で頂点に達し、それ以降は縮小化をたどることが明らかにされている。[20]

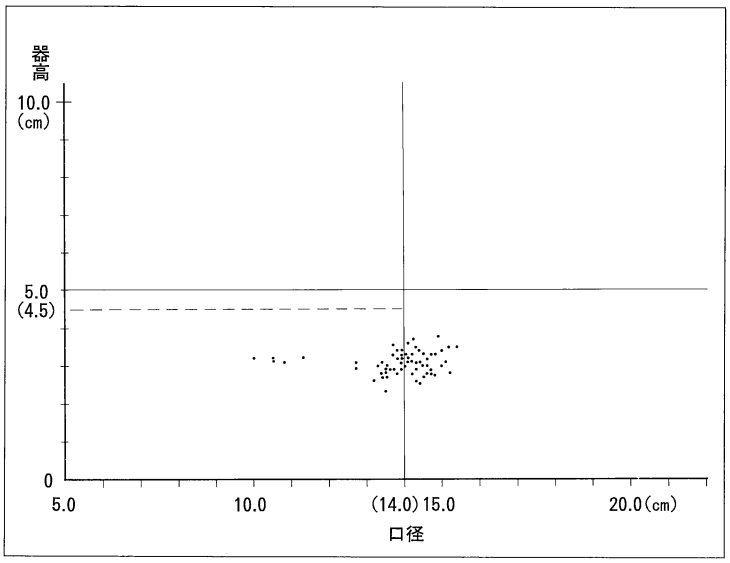
これに対して、白沢3・5号窯から中谷4号窯・中谷1号窯に至る法量の変化は杯Bに関して言えば、少なくとも平城宮Ⅲ古段階までは器高の低い系統が主体で、器高の高い杯Bの出土点数は白沢3号窯で3～4点、中谷4号窯ではやや増加し20点を越えるが、いずれも低い一群に比べれば微々たる数量で、平城宮で認められる高低2者の分離といえるような状況ではない。また、中谷1号窯段階では器高の高い一群が主体をなすようになり、9世紀には器高の高い一群は底径が小さくなり、椀形の形状にかわる。このような変化は平城宮Ⅲ以降、器高の高い一群が次第に姿を消す平城宮における杯類の法量変化とは異なる傾向を示している。上記の通り、志方窯跡群では、杯類の主体は器高の低い一群から器高の高い一群に移るが、器高の低い系統に限れば、平城宮で



（1）白沢3号窯



（2）中谷4号窯



（3）中谷1号窯

第10表　杯A身法量分布図

指摘される杯類の縮小化・法量分化の減少の傾向は当てはまる。但し、法量分化、法量の拡大化の頂点は平城宮Ⅰ段階の白沢3号窯にあり、平城宮Ⅲ古段階の中谷4号窯段階では法量の縮小化・法量分化の減少が見られる。

杯Aについては、平城宮において認められる著しい法量分化は認められず、高低2者の分離も認められない。

第3節　まとめにかえて

播磨における7～8世紀の須恵器の編年については、永井信弘氏による姫路市北西部に分布する峰相山窯跡群を中心とした編年案[21]や中村浩氏による札馬編年[22]がある。今回の報告ではこれらの編年案との比較検討については、山陽自動車道関連で発掘調査事業調査を実施した志方窯跡群投松支群の遺物整理事業の終了を待って行うこととして、[23]ここでは中谷4号窯を中心とした奈良時代前半代までと中谷1号窯を中心とした奈良時代後半以降の2つに分割して志方窯跡群における編年の大まかな見通しだけを述べておきたいと思う。

加古川市内には東の白沢窯跡群と西の志方窯跡群の東西2つの窯跡群があり、白沢窯跡群の方が早く7世紀代に開窯し、白沢窯跡群の閉窯前後に志方窯跡群が開窯する。従って操業窯の時代的な流れも、白沢6号窯[24]（飛鳥Ⅳ～Ⅴ）→白沢3・5号窯（飛鳥Ⅴ・平城Ⅰ）→西ノ池窯1号窯（平城Ⅱ）→中谷4号窯（平城Ⅲ古）順となる。個々の窯跡の出土遺物の詳細については触れないが、西ノ池1号窯が中谷4号窯より先行する要素としては、報告書掲載図面を見る限り、杯類の法量分化が豊富である点、平瓶に提梁を有しない点と口縁部に波状文をもつ甕の存在などがある。

中谷4号窯より後続の窯としては、中谷1号窯があるが、中谷4号窯と中谷1号窯では、杯Bの法量や構成器種などからみて時代差が大きい。中谷1号窯については中村編年札馬Ⅰ型式最古の札馬2号窯および札馬36号窯とほぼ同時期の窯と判断されるが、年代比定については、今の所8世紀末葉を中心とした漠然とした時期設定しかできない。見通しとしては長岡京期をややさかのぼる時期に考えているが、中谷1号窯と相前後する時期の投松支群の整理の完了を待って改めて検討することにしたい。

また、中谷2号窯と3号窯は杯Bから糸切りの椀への移行期の窯跡であり、9世紀中頃を中心とした年代を想定しているが、この時期の窯跡についても、投松支群の整理が完了すれば、8世紀後半から9世紀にかけての型式変遷の中で位置づけを行なうことができるので、投松支群の整理を行なったうえで検討したい。

このほか、窯体構造の形態については、中谷4号窯と中谷1号窯のように半地下式の窖窯構造の窯体をもつ窯跡と中谷2号窯・中谷3号窯のように窯体架構部を地上に大きくとる地上式の窯体構造をもつ窯跡がある。前者は8世紀代、後者は9世紀代の窯跡であり、8世紀末葉から9世紀前半のある時点を境に半地下式から播磨特有の地上式への窯構造の転換が行われていることが推察できる。恐らく転換期の窯跡としては現在整理中の投松1・2・3・7号窯あたりに求めることができると思われるので、窯体構造の変遷や構造の特徴および構造の問題等については投松窯跡群の報告書のなかでまとめて記述する予定である。

註

（1） 藤井祐介・高島信之・丹治康明他　『西ノ池古窯址群調査報告書』1979年　西ノ池古窯址群発掘調査団

（2） 山田清朝・山本雅和「落合窯」『青野ダム建設に伴う発掘調査事業調査報告書１』1987年　兵庫県教育委員会

（3） 亀山行雄・大橋雅也他『津寺遺跡』1997年　日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会

（4） 「美作国府跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査事業調査３』1973年　岡山県教育委員会

（5） 中村浩他『陶邑Ｉ』1976年　財団法人　大阪文化財センター

（6） 西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考　小林行雄博士古稀記念論文集』1982年　平凡社

『平城宮発掘調査報告　Ⅶ』奈良国立文化財研究所　1976年

（7） 楢崎彰一・荻野繁春他『老洞古窯跡群発掘調査報告書』1981年　岐阜市教育委員会

（8） 西弘海　前掲註（6）

（9） 久保智康「東寺伝来の金銅製供養具－平安時代前期土器の形態と機能に関して－」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』1999年　森郁夫先生還暦記念論文集刊行会

(10) 石田茂作『佛教考古學論攷』1977年　思文閣出版

(11) 西口和彦・森内秀造『相生市・緑ヶ丘窯址群』1986年　兵庫県教育委員会

(12) 小川真理子「稜椀研究の再検討－播磨志方窯跡群にみる稜椀の様相－」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』1999年　森郁夫先生還暦記念論文集刊行会

(13) 奈良国立文化財研究所　巽淳一郎氏の教示を得え、実際に奈良国立文化財研究所において、中谷４号窯産ⅢＡとＳＤ５１００出土ⅢＡの現物同士を照合して確認した。

(14) 奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－』奈良市教育委員会　1995年

(15) 小柴治子「磨かれた須恵器－本町遺跡と打越奥山窯跡群－」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』1999年　森郁夫先生還暦記念論文集刊行会

(16) 平城宮における須恵器の器種の消長と形態の変化については、下記の報告書の記述による。

『平城宮発掘調査報告　Ⅶ』1976年　奈良国立文化財研究所

『平城宮発掘調査報告　ⅩⅢ』1991年　奈良国立文化財研究所

(17) 西弘海　前掲註（６）

(18) 森内秀造・深江英憲『白沢３・５号窯』1999年　兵庫県教育委員会

(19) 西弘海　前掲註（６）

(20) 前掲註（14）

(21) 森内秀造・永井信弘「播磨とその周辺の須恵器」『古代の土器研究第２回シンポジウム　律令的土器様式の西・東２　須恵器』1993年　古代の土器研究会

永井信弘「峰相山窯跡群について１」『ひょうご考古』第３号　1997年　兵庫考古研究会

(22) 中村浩他　『札馬古窯跡群発掘調査事業調査報告書』1982年　加古川市教育委員会

(23) 投松支群の発掘調査報告書については、平成12年度刊行予定。

(24) 吉識雅仁・中村弘『白沢放山遺跡』1998年　兵庫県教育委員会

中谷４号窯

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
0101	1	－	杯B蓋(乙)	(9.8)	1.7	－	窯体
0102	1	7	杯B蓋(乙)	11.4	2.4	－	窯体
0103	1	7	杯B蓋(乙)	12.3	1.4	－	窯体
0104	1	－	杯B蓋(乙)	13.4	1.9	－	窯体
0105	1	－	杯B蓋(乙)	14.4	2.6	－	窯体
0106	1	7	杯B蓋(乙)	15.2	2.5	－	窯体
0107	1	－	杯B蓋(乙)	15.0	2.6	－	窯体
0108	1	7	杯B蓋(乙)	16.2	2.1	－	窯体
0109	1	7	杯B蓋(乙)	(16.1)	2.9	－	窯体
0110	1	7	杯B蓋(乙)	16.8	3.3	－	窯体
0111	1	－	杯B(乙)	(13.1)	4.0	(10.0)	窯体
0112	1	7	杯B(乙)	13.7	3.9	9.9	窯体
0113	1	－	杯B(乙)	13.8	4.0	10.8	窯体
0114	1	7	杯B(乙)	(14.0)	4.3	(10.0)	窯体
0115	1	－	杯B(乙)	14.0	4.0	10.0	窯体
0116	1	－	杯B(乙)	(14.0)	4.2	(9.2)	窯体
0117	1	－	杯B(乙)	(14.0)	4.0	11.2	窯体
0118	1	－	杯B(乙)	(14.1)	4.0	(10.0)	窯体
0119	1	－	杯B(乙)	14.2	4.3	10.6	窯体
0120	1	－	杯B(乙)	(14.3)	3.7	(9.0)	窯体
0121	1	7	杯B(乙)	14.3	4.2	10.0	窯体
0122	1	－	杯B(乙)	(14.3)	4.1	(10.0)	窯体
0123	1	－	杯B(乙)	(14.8)	3.7	(10.1)	窯体
0124	1	－	杯B(乙)	(14.8)	4.2	(10.4)	窯体
0125	1	－	杯B(乙)	(15.8)	3.4	(11.0)	窯体
0126	1	－	杯B(乙)	(15.6)	4.8	(10.0)	窯体
0127	1	－	杯B(乙)	(10.7)	4.5	(7.8)	窯体
0128	1	－	杯B(乙)	(12.8)	5.0	9.5	窯体
0129	1	－	皿Aa	(11.8)	(3.8)	(10.0)	窯体
0130	1	7	皿Aa	(12.8)	(4.0)	10.0	窯体
0131	1	－	皿Aa	(12.8)	(3.6)	(10.0)	窯体
0132	1	7	皿Aa	(12.8)	3.3	(9.2)	窯体
0133	1	－	皿Aa	(13.3)	(3.4)	9.2	窯体
0134	1	－	皿Aa	(13.3)	3.4	(9.7)	窯体
0135	1	－	皿Aa	(13.4)	3.7	(10.4)	窯体
0136	1	－	皿Aa	(13.7)	3.4	(10.6)	窯体
0137	1	－	皿Aa	(14.1)	3.7	11.0	窯体
0138	1	－	皿Aa	(14.0)	3.7	(10.8)	窯体
0139	1	7	椀A	(8.8)	3.8	(7.2)	窯体
0140	1	7	杯Lb(稜椀)	(20.0)	(5.9)	(11.5)	窯体
0141	1	－	杯Lb(稜椀)	(22.0)	－	－	窯体
0201	2	7	皿Aa	(23.2)	3.8	18.8	窯体
0202	2	－	皿Aa	(23.0)	－	－	窯体
0203	2	－	皿Ab	(26.0)	2.5	(20.0)	窯体
0204	2	－	皿Ab	(29.4)	(2.6)	(25.6)	窯体
0205	2	－	皿Ca	(28.4)	1.5	(25.0)	窯体
0206	2	－	皿Da	(20.8)	(2.8)	7.0	窯体
0207	2	7	皿Da	(23.9)	2.6	(21.0)	窯体
0208	2	－	皿B	(25.8)	5.0	(20.0)	窯体
0209	2	－	皿B	(26.0)	5.6	(20.0)	窯体
0210	2	－	皿B	(27.4)	5.5	(21.0)	窯体
0211	2	7	盤	(46.2)	4.1	(40.2)	窯体
0212	2	－	鉢F(すり鉢)	(15.9)	－	－	窯体
0213	2	7	器台形土器	(11.6)	－	－	窯体
0214	2	－	高杯	－	－	(12.9)	窯体
0215	2	7	横瓶	9.6	－	－	窯体
0216	2	7	水瓶	5.5	－	－	窯体
0217	2	－	鉢A(鉄鉢)	(21.3)	－	－	窯体
0218	2	－	鉢A(鉄鉢)	(21.6)	－	－	窯体
0301	3	－	杯B蓋(乙)	(10.0)	1.7	－	灰原
0302	3	－	杯B蓋(乙)	(10.0)	(1.7)	－	灰原
0303	3	8	杯B蓋(乙)	(10.9)	2.0	－	灰原
0304	3	8	杯B蓋(乙)	10.9	1.5	－	灰原
0305	3	－	杯B蓋(乙)	(10.0)	1.7	－	灰原
0306	3	－	杯B蓋(乙)	(12.0)	(1.8)	－	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
0307	3	8	杯B蓋(乙)	12.0	2.0	−	灰原
0308	3	−	杯B蓋(乙)	(12.0)	1.8	−	灰原
0309	3	8	杯B蓋(乙)	12.6	2.0	−	灰原
0310	3	8	杯B蓋(乙)	(13.3)	1.7	−	灰原
0311	3	8	杯B蓋(乙)	13.5	1.8	−	灰原
0312	3	8	杯B蓋(乙)	13.5	1.8	−	灰原
0313	3	−	杯B蓋(乙)	(14.0)	2.1	−	灰原
0314	3	−	杯B蓋(乙)	(14.0)	2.0	−	灰原
0315	3	−	杯B蓋(乙)	(14.0)	2.4	−	灰原
0316	3	−	杯B蓋(乙)	(14.1)	3.3	−	灰原
0317	3	8	杯B蓋(乙)	(14.3)	2.4	−	灰原
0318	3	−	杯B蓋(乙)	(14.4)	2.0	−	灰原
0319	3	−	杯B蓋(乙)	14.5	2.0	−	灰原
0320	3	8	杯B蓋(乙)	(14.6)	(2.4)	−	灰原
0321	3	8	杯B蓋(乙)	(14.5)	2.3	−	灰原
0322	3	8	杯B蓋(乙)	14.9	1.3	−	灰原
0323	3	8	杯B蓋(乙)	(15.0)	3.8	−	灰原
0324	3	−	杯B蓋(乙)	(15.6)	3.3	−	灰原
0325	3	−	杯B蓋(乙)	15.6	2.0	−	灰原
0326	3	8	杯B蓋(乙)	15.7	1.2	−	灰原
0327	3	−	杯B蓋(乙)	(15.8)	1.8	−	灰原
0328	3	8	杯B蓋(乙)	(15.9)	2.0	−	灰原
0329	3	8	杯B蓋(乙)	16.2	1.9	−	灰原
0330	3	8	杯B蓋(乙)	(16.0)	2.4	−	灰原
0331	3	8	杯B蓋(乙)	16.0	2.8	−	灰原
0332	3	−	杯B蓋(乙)	16.2	2.7	−	灰原
0333	3	−	杯B蓋(乙)	(16.2)	3.1	−	灰原
0334	3	−	杯B蓋(乙)	(16.6)	1.8	−	灰原
0335	3	−	杯B蓋(乙)	16.7	2.4	−	灰原
0336	3	−	杯B蓋(乙)	(18.2)	2.5	−	灰原
0337	3	8	杯B蓋(乙)	(8.4)	1.2	−	灰原
0338	3	8	杯B蓋(甲)	9.7	1.9	−	灰原
0339	3	8	杯B蓋(甲)	(10.0)	1.4	−	灰原
0340	3	−	杯B蓋(甲)	(10.0)	(1.4)	−	灰原
0341	3	−	杯B蓋(甲)	(10.5)	1.1	−	灰原
0342	3	8	杯B蓋(甲)	(10.6)	2.3	−	灰原
0343	3	−	杯B蓋(甲)	(11.4)	1.8	−	灰原
0344	3	−	杯B蓋(甲)	(11.8)	1.4	−	灰原
0345	3	−	杯B蓋(甲)	(12.0)	(1.8)	−	灰原
0346	3	8	杯B蓋(甲)	(14.9)	2.5	−	灰原
0347	3	8	杯B蓋(甲)	(17.8)	1.8	−	灰原
0348	3	8	杯B蓋(甲)	(18.0)	2.6	−	灰原
0349	3	8	杯B蓋(甲)	(18.3)	(3.3)	−	灰原
0350	3	−	杯B蓋(甲)	(18.6)	1.9	−	灰原
0351	3	8	杯B蓋(甲)	(19.6)	2.4	−	灰原
0352	3	−	杯B蓋(甲)	−	−	−	灰原
0353	3	−	杯B蓋(甲)	−	−	−	灰原
0401	4	9	杯B蓋(乙')	(13.9)	2.4	−	灰原
0402	4	9	杯B蓋(乙')	(14.9)	1.9	−	灰原
0403	4	9	杯B蓋(乙')	(15.2)	1.9	−	灰原
0404	4	9	杯B蓋(乙')	14.2	3.3	−	灰原
0405	4	9	杯B蓋(乙')	(15.2)	(3.1)	−	灰原
0406	4	9	杯B蓋(乙')	(16.1)	1.8	−	灰原
0407	4	9	杯B蓋(乙')	(14.6)	1.6	−	灰原
0408	4	9	杯B蓋(乙')	(16.0)	1.5	−	灰原
0409	4	9	鋺形椀	8.0	3.9	(7.4)	灰原
0410	4	9	鋺形椀	17.2	9.0	11.8	灰原
0411	4	−	杯B(甲)	−	−	7.2	灰原
0412	4	−	杯B(甲)	−	−	4.8	灰原
0413	4	−	杯B(甲)	(18.0)	3.3	(11.8)	灰原
0414	4	−	杯B(甲)	(9.5)	4.0	6.4	灰原
0415	4	−	杯B(甲)	10.8	5.3	8.0	灰原
0416	4	9	杯B(甲)	9.4	4.9	6.4	灰原
0417	4	9	杯B(甲)	9.8	4.9	6.8	灰原
0418	4	9	杯B(甲)	10.2	4.9	7.4	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
0419	4	9	杯B(甲)	(15.9)	7.2	12.0	灰原
0420	4	9	杯B(甲)	(16.8)	7.0	(10.7)	灰原
0421	4	10	杯B(甲)	(17.3)	5.6	(11.9)	灰原
0422	4	9	杯B(甲)	(18.4)	6.6	(14.0)	灰原
0423	4	9	杯B(甲)	(21.5)	8.2	12.8	灰原
0501	5	−	杯B(乙)	8.8	3.8	6.8	灰原
0502	5	−	杯B(乙)	(11.1)	3.9	(9.0)	灰原
0503	5	−	杯B(乙)	(12.4)	4.1	(9.0)	灰原
0504	5	−	杯B(乙)	(13.2)	4.7	(9.2)	灰原
0505	5	10	杯B(乙)	(13.4)	4.1	(10.2)	灰原
0506	5	−	杯B(乙)	(13.6)	4.0	(9.6)	灰原
0507	5	10	杯B(乙)	13.8	4.0	10.6	灰原
0508	5	10	杯B(乙)	(13.8)	4.1	(10.0)	灰原
0509	5	10	杯B(乙)	14.2	3.9	9.3	灰原
0510	5	−	杯B(乙)	(14.2)	(4.1)	(10.0)	灰原
0511	5	−	杯B(乙)	(14.3)	(4.3)	(10.6)	灰原
0512	5	10	杯B(乙)	14.3	4.9	11.7	灰原
0513	5	−	杯B(乙)	(14.4)	(4.2)	(9.9)	灰原
0514	5	10	杯B(乙)	(14.6)	4.2	(10.4)	灰原
0515	5	10	杯B(乙)	(14.6)	4.4	(11.4)	灰原
0516	5	−	杯B(乙)	(14.6)	(4.7)	(11.4)	灰原
0517	5	−	杯B(乙)	(14.8)	4.7	(10.2)	灰原
0518	5	10	杯B(乙)	(14.8)	3.5	(11.0)	灰原
0519	5	10	杯B(乙)	(14.8)	5.0	(10.8)	灰原
0520	5	−	杯B(乙)	(14.9)	3.9	(10.4)	灰原
0521	5	10	杯B(乙)	(15.0)	(4.5)	(11.1)	灰原
0522	5	10	杯B(乙)	(15.0)	4.3	11.2	灰原
0523	5	−	杯B(乙)	(15.0)	(4.1)	(11.0)	灰原
0524	5	−	杯B(乙)	(15.0)	4.4	(10.2)	灰原
0525	5	10	杯B(乙)	15.2	4.0	11.7	灰原
0526	5	−	杯B(乙)	(15.3)	4.0	(9.0)	灰原
0527	5	10	杯B(乙)	(15.3)	(4.7)	(10.9)	灰原
0528	5	−	杯B(乙)	(15.4)	4.0	(10.6)	灰原
0529	5	−	杯B(乙)	(17.1)	(4.4)	(12.6)	灰原
0530	5	10	杯B(乙)	11.4	5.0	9.1	灰原
0531	5	−	杯B(乙)	(11.4)	5.4	(7.4)	灰原
0532	5	−	杯B(乙)	11.6	4.7	8.4	灰原
0533	5	10	杯B(乙)	(11.5)	(5.2)	9.4	灰原
0534	5	−	杯B(乙)	(11.8)	4.8	(8.7)	灰原
0535	5	10	杯B(乙)	(12.8)	(4.7)	(9.0)	灰原
0536	5	10	杯B(乙)	(12.1)	(5.5)	(8.5)	灰原
0537	5	−	杯B(乙)	(13.8)	(6.2)	(8.5)	灰原
0538	5	−	杯B(乙)	(14.2)	6.0	(10.4)	灰原
0539	5	10	杯B(乙)	15.8	7.1	11.1	灰原
0540	5	−	杯B(乙)	(16.6)	−	−	灰原
0541	5	−	杯B(乙)	(16.7)	6.9	(12.6)	灰原
0542	5	−	杯B(乙)	19.8	−	−	灰原
0601	6	11	杯Aa	(11.8)	3.6	8.6	灰原
0602	6	11	杯Aa	12.0	3.7	9.4	灰原
0603	6	11	杯Aa	12.0	3.5	11.4	灰原
0604	6	11	杯Aa	(6.1)	(3.7)	(9.8)	灰原
0605	6	−	杯Aa	(12.4)	3.5	9.6	灰原
0606	6	11	杯Aa	12.6	3.6	9.6	灰原
0607	6	11	杯Aa	12.6	3.5	9.1	灰原
0608	6	11	杯Aa	12.6	3.7	9.6	灰原
0609	6	11	杯Aa	12.6	4.2	9.7	灰原
0610	6	11	杯Aa	12.7	3.2	10.0	灰原
0611	6	−	杯Aa	(12.8)	3.3	(10.4)	灰原
0612	6	−	杯Aa	(12.8)	4.2	(10.2)	灰原
0613	6	11	杯Aa	(12.8)	4.2	8.8	灰原
0614	6	11	杯Aa	12.9	3.4	10.0	灰原
0615	6	11	杯Aa	12.9	3.5	10.1	灰原
0616	6	11	杯Aa	(13.0)	3.9	10.4	灰原
0617	6	11	杯Aa	13.3	3.5	10.1	灰原
0618	6	11	杯Aa	13.4	3.2	9.7	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
0619	6	−	杯Aa	(13.4)	3.5	(10.3)	灰原
0620	6	11	杯Aa	13.5	3.8	10.0	灰原
0621	6	11	杯Ab	14.5	2.6	11.6	灰原
0622	6	−	杯Ab	(14.0)	(3.6)	(10.3)	灰原
0623	6	−	杯Ab	(14.7)	(3.7)	(9.2)	灰原
0624	6	11	杯Ab	15.6	2.9	10.9	灰原
0625	6	11	杯Ab	13.8	2.9	11.1	灰原
0626	6	−	杯Ab	(15.1)	(2.7)	(10.8)	灰原
0627	6	11	杯Ab	(15.2)	(3.6)	(13.2)	灰原
0628	6	−	杯Ab	(15.6)	3.1	(13.4)	灰原
0629	6	−	杯Ab	(16.0)	(3.8)	(13.4)	灰原
0630	6	−	杯Ab	(16.2)	(3.9)	(10.4)	灰原
0631	6	−	杯Ab	(17.1)	(2.9)	(13.0)	灰原
0632	6	−	杯Ab	(17.8)	(3.4)	(16.2)	灰原
0633	6	−	杯Ab	(17.8)	3.5	(15.5)	灰原
0634	6	−	杯Ab	(19.6)	(4.8)	(16.8)	灰原
0635	6	−	杯Ab	(13.2)	5.2	9.5	灰原
0636	6	−	杯Ab	(13.4)	(5.7)	(10.4)	灰原
0637	6	11	杯Ab	(14.8)	5.0	(10.7)	灰原
0638	6	11	杯Ab	(16.2)	7.2	9.6	灰原
0639	6	−	杯Ab	(18.1)	(6.4)	(6.4)	灰原
0640	6	−	杯Ab	(19.6)	(7.2)	(15.0)	灰原
0641	6	−	杯Ab	(14.5)	(5.7)	(10.2)	灰原
0642	6	11	杯Ab	(17.0)	(5.0)	(11.6)	灰原
0643	6	−	杯Ab	(17.9)	(7.0)	(11.1)	灰原
0644	6	11	杯Ab	(20.2)	(6.8)	(14.0)	灰原
0645	6	−	杯Ab	(20.4)	(6.9)	(14.8)	灰原
0701	7	12	椀A	8.6	4.5	6.4	灰原
0702	7	12	椀A	8.7	5.2	7.3	灰原
0703	7	12	椀A	(9.0)	4.8	(7.0)	灰原
0704	7	12	椀A	9.4	4.8	7.2	灰原
0705	7	−	椀A	(10.0)	4.0	7.0	灰原
0706	7	12	椀A	10.3	5.1	8.1	灰原
0707	7	12	椀A	(10.6)	5.4	(9.8)	灰原
0708	7	12	椀A	(11.0)	5.2	7.9	灰原
0709	7	12	椀A	(11)	5.8	(8.4)	灰原
0710	7	−	杯E(甲)	(11.8)	−	−	灰原
0711	7	12	杯E(甲)	(12.6)	4.5	(7.9)	灰原
0712	7	−	杯E(甲)	(13.8)	5.7	(8.6)	灰原
0713	7	12	杯E(甲)	13.9	6.2	12.6	灰原
0714	7	12	杯E(甲)	(14.3)	(5.5)	(9.5)	灰原
0715	7	12	杯E(甲)	(13.7)	5.3	4.7	灰原
0716	7	12	杯E(甲)	(15)	−	−	灰原
0717	7	12	杯E(甲)	(13.7)	(5.3)	(8.2)	灰原
0718	7	12	杯E(甲)	(15.2)	(5.8)	(11.0)	灰原
0719	7	12	杯E(甲)	(18.6)	(4.8)	(11.4)	灰原
0720	7	12	杯E(甲)	(16)	−	−	灰原
0721	7	−	杯E(甲)	(16.2)	−	−	灰原
0722	7	−	杯E(甲)	(17.1)	−	−	灰原
0723	7	−	杯E(乙)	(13.0)	(3.0)	(8.4)	灰原
0724	7	−	杯E(乙)	(13.1)	(3.0)	(9.5)	灰原
0725	7	12	杯E(乙)	12.0	4.1	6.5	灰原
0726	7	−	杯E(乙)	(13.6)	(4.0)	(10.3)	灰原
0727	7	−	杯C	(12.6)	(3.4)	(8.3)	灰原
0728	7	−	杯C	(14.4)	(2.8)	(10.4)	灰原
0729	7	12	杯C	(14.8)	2.6	(10.9)	灰原
0730	7	−	杯C	(15.0)	2.1	(10.3)	灰原
0731	7	−	杯C	(15.2)	(2.6)	(12.5)	灰原
0732	7	−	杯C	(15.4)	2.3	(10.7)	灰原
0733	7	−	杯C	(15.7)	(2.2)	(11.2)	灰原
0734	7	−	杯C	(15.8)	(3.2)	(11.3)	灰原
0735	7	−	杯C	(17.8)	(2.7)	(14.0)	灰原
0736	7	12	皿E	8.5	2.4	6.8	灰原
0737	7	12	皿E	(8.7)	−	−	灰原
0738	7	−	皿E	(9.2)	2.9	(5.6)	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
0739	7	12	皿E	(9.2)	2.7	(6.8)	灰原
0740	7	−	皿E	(9.3)	(2.8)	(6.1)	灰原
0741	7	12	皿E	(10.0)	2.6	(6.9)	灰原
0742	7	12	皿E	(11.6)	2.7	(8.6)	灰原
0743	7	−	皿E	(12.2)	(2.7)	(8.0)	灰原
0744	7	12	皿E	(12.7)	(3.1)	(10.0)	灰原
0801	8	13	環状鈕付蓋a	20.0	2.1	−	灰原
0802	8	13	環状鈕付蓋a	(19.8)	2.1	−	灰原
0803	8	13	環状鈕付蓋a	20.0	(2.1)	−	灰原
0804	8	13	環状鈕付蓋a	20.1	1.9	−	灰原
0805	8	13	環状鈕付蓋a	19.4	3.1	−	灰原
0806	8	13	環状鈕付蓋a	(20.3)	3.2	−	灰原
0807	8	13	環状鈕付蓋a	(21.6)	(2.7)	−	灰原
0808	8	13	環状鈕付蓋a	20.6	3.0	−	灰原
0809	8	13	環状鈕付蓋a	18.2	2.3	−	灰原
0810	8	13	環状鈕付蓋a	(20.0)	(2.4)	−	灰原
0811	8	13	環状鈕付蓋a	19.7	2.4	−	灰原
0812	8	13	環状鈕付蓋a	(23.0)	2.3	−	灰原
0813	8	13	環状鈕付蓋a	14.6	2.3	−	灰原
0814	8	14	環状鈕付蓋b	(20.0)	2.3	−	灰原
0815	8	14	環状鈕付蓋b	(21.6)	(1.3)	−	灰原
0816	8	14	環状鈕付蓋b	(19.0)	2.5	−	灰原
0817	8	14	環状鈕付蓋b	(22.2)	(1.7)	−	灰原
0818	8	14	環状鈕付蓋c	(20.0)	(0.7)	−	灰原
0819	8	14	環状鈕付蓋c	(20.8)	(1.4)	−	灰原
0820	8	13	環状鈕付蓋c	(20.0)	(1.9)	−	灰原
0821	8	−	環状鈕付蓋c	(20.9)	(1.2)	−	灰原
0822	8	14	環状鈕付蓋d	(19.8)	(2.1)	−	灰原
0823	8	14	環状鈕付蓋d	−	−	−	灰原
0824	8	14	環状鈕付蓋d	−	−	−	灰原
0825	8	14	環状鈕付蓋d	(16.4)	(1.1)	−	灰原
0826	8	14	環状鈕付蓋d	(13.0)	2.5	−	灰原
0827	8	−	環状鈕付蓋d	(16.1)	(1.9)	−	灰原
0828	8	−	環状鈕付蓋e	(18.8)	(3.0)	−	灰原
0901	9	−	杯La(稜椀)	(21.7)	−	−	灰原
0902	9	−	杯La(稜椀)	(21.4)	−	−	灰原
0903	9	15	杯La(稜椀)	(17.4)	(5.7)	(9.4)	灰原
0904	9	−	杯La(稜椀)	(20.0)	(6.2)	(10.8)	灰原
0905	9	15	杯La(稜椀)	(20.0)	6.3	(9.7)	灰原
0906	9	15	杯La(稜椀)	18.5	6.3	9.0	灰原
0907	9	15	杯La(稜椀)	(21.2)	6.8	10.6	灰原
0908	9	−	杯La(稜椀)	−	−	(10.0)	灰原
0909	9	−	杯La(稜椀)	−	−	(10.0)	灰原
0910	9	−	杯Lb(稜椀)	(18.4)	−	−	灰原
0911	9	−	杯Lb(稜椀)	(19.5)	−	−	灰原
0912	9	−	杯Lb(稜椀)	(18.2)	−	−	灰原
0913	9	−	杯Lb(稜椀)	(21.0)	−	−	灰原
0914	9	−	杯Lb(稜椀)	−	−	(12.1)	灰原
0915	9	15	杯Lb(稜椀)	(19.2)	−	−	灰原
0916	9	15	杯Lb(稜椀)	(20.5)	−	−	灰原
0917	9	15	杯Lb(稜椀)	(20.8)	(4.9)	(17.0)	灰原
0918	9	15	杯Lb(稜椀)	(19.6)	11.9	(10.4)	灰原
0919	9	−	杯Lc(稜椀)	(17.5)	−	−	灰原
0920	9	15	杯Lc(稜椀)	(18.4)	5.1	(6.9)	灰原
0921	9	15	杯Lc(稜椀)	(21.2)	7.2	8.5	灰原
0922	9	15	杯Lc(稜椀)	(21.6)	−	−	灰原
0923	9	15	杯Ld(稜椀)	20.4	(9.9)	(11.4)	灰原
1001	10	−	皿Aa	(21.6)	(2.6)	(16.6)	灰原
1002	10	17	皿Aa	(22.8)	4.9	18.6	灰原
1003	10	17	皿Aa	23.2	3.3	18.1	灰原
1004	10	17	皿Aa	23.4	3.9	9.3	灰原
1005	10	17	皿Aa	(23.4)	(4.1)	(21.0)	灰原
1006	10	17	皿Aa	23.4	2.2	−	灰原
1007	10	−	皿Aa	(23.6)	2.8	(19.8)	灰原
1008	10	17	皿Aa	(23.6)	3.0	(19.2)	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
1009	10	—	皿Aa	(23.6)	2.8	(17.2)	灰原
1010	10	17	皿Aa	24.9	3.4	20.0	灰原
1011	10	—	皿Aa	(23.4)	(3.5)	(18.2)	灰原
1012	10	—	皿Aa	23.8	3.2	18.4	灰原
1013	10	—	皿Aa	(22.6)	3.1	(17.6)	灰原
1014	10	17	皿Aa	23.6	2.5	18.8	灰原
1015	10	17	皿Ab	(16.0)	(2.1)	(12.8)	灰原
1016	10	—	皿Ab	(17.8)	1.7	(10.5)	灰原
1017	10	—	皿Ab	(20.0)	1.6	(15.3)	灰原
1018	10	17	皿Ab	14.2	(2.1)	(11.5)	灰原
1019	10	17	皿Ab	(14.6)	2.1	(11.4)	灰原
1020	10	17	皿Ab	(15.1)	—	—	灰原
1021	10	—	皿Ab	(15.8)	(2.3)	(13.4)	灰原
1022	10	17	皿Ab	15.8	2.0	13.1	灰原
1023	10	—	皿Ab	(16.4)	1.9	(14.2)	灰原
1024	10	—	皿Cb	16.4	1.7	15.0	灰原
1025	10	—	皿Cb	(16.7)	—	—	灰原
1026	10	—	皿Cb	(16.9)	—	—	灰原
1027	10	17	皿Cb	17.4	2.2	(14.2)	灰原
1028	10	17	皿Cb	(17.0)	1.8	(15.6)	灰原
1029	10	—	皿Cb	(17.6)	(1.7)	(17.0)	灰原
1030	10	17	皿Cb	15.8	—	—	灰原
1031	10	17	皿Cb	16.0	—	—	灰原
1032	10	—	皿Cb	(18.0)	(2.0)	(17.0)	灰原
1033	10	17	皿Ca	19.2	2.3	15.5	灰原
1034	10	—	皿Ca	(19.3)	—	—	灰原
1035	10	—	皿Ca	(19.6)	—	—	灰原
1036	10	—	皿Ca	(2.0)	(2.5)	(15.0)	灰原
1037	10	—	皿Ca	(20.2)	(1.8)	(17.2)	灰原
1038	10	17	皿Ca	20.7	2.0	15.6	灰原
1039	10	—	皿Ca	(23.6)	(1.9)	(21.0)	灰原
1101	11	—	皿Db	(17.2)	2.1	15.5	灰原
1102	11	—	皿Db	(17.8)	2.3	(16.0)	灰原
1103	11	—	皿Db	(18.6)	(3.0)	(14.9)	灰原
1104	11	—	皿Db	(19.0)	2.3	(14.2)	灰原
1105	11	—	皿Db	(19.4)	2.1	(15.4)	灰原
1106	11	—	皿Db	(19.8)	2.0	(15.0)	灰原
1107	11	—	皿Db	(19.8)	(2.8)	17.0	灰原
1108	11	—	皿Db	(20.0)	(2.4)	(15.8)	灰原
1109	11	—	皿Db	(20.5)	2.1	(17.8)	灰原
1110	11	—	皿Db	(20.0)	(3.4)	(15.6)	灰原
1111	11	—	皿Db	(18.2)	(2.5)	(12.5)	灰原
1112	11	—	皿Db	(19.1)	(2.6)	(12.9)	灰原
1113	11	18	皿Db	19.1	2.3	14.8	灰原
1114	11	—	皿Db	(19.3)	(2.5)	(13.4)	灰原
1115	11	—	皿Db	(21.6)	(2.6)	(16.6)	灰原
1116	11	18	皿Db	19.9	2.6	16.2	灰原
1117	11	18	皿Db	20.0	3.1	17.0	灰原
1118	11	—	皿Db	(20.2)	(2.8)	(15.1)	灰原
1119	11	18	皿Db	(23.2)	2.0	(20.6)	灰原
1120	11	—	皿Db	23.3	(2.4)	20.6	灰原
1121	11	18	皿Db	19.2	2.4	16.5	灰原
1122	11	18	皿Db	20.5	2.8	17.5	灰原
1123	11	18	皿Db	20.9	2.8	18.3	灰原
1124	11	18	皿Db	21.3	2.7	18.5	灰原
1125	11	—	皿Db	(22.0)	(2.3)	(18.8)	灰原
1126	11	18	皿Db	22.4	2.9	19.3	灰原
1127	11	18	皿Db	(22.6)	(2.8)	(18.9)	灰原
1128	11	18	皿Db	(24.0)	2.7	21.8	灰原
1129	11	—	皿Db	(15.6)	—	—	灰原
1130	11	—	皿Db	(17.8)	(2.6)	(10.8)	灰原
1131	11	—	皿Db	(20.2)	(2.5)	9.2	灰原
1132	11	—	皿Db	(22.2)	(3.2)	11.4	灰原
1133	11	—	皿Db	(18.1)	—	—	灰原
1134	11	18	皿Db	21.0	3.4	11.4	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
1201	12	18	皿B蓋	20.3	4.7	—	灰原
1202	12	—	皿B蓋	(21.8)	3.0	—	灰原
1203	12	—	皿B蓋	20.5	3.0	—	灰原
1204	12	—	皿B蓋	21.8	3.7	—	灰原
1205	12	—	皿B蓋	(24.1)	5.1	—	灰原
1206	12	—	皿B蓋	(27.4)	4.8	—	灰原
1207	12	18	皿B蓋	29.0	5.2	—	灰原
1208	12	18	皿B蓋	(28.0)	4.6	—	灰原
1209	12	18	皿B蓋	(29.4)	5.7	—	灰原
1210	12	—	皿B蓋	(30.7)	(2.0)	—	灰原
1211	12	—	皿B蓋	(31.8)	(1.7)	—	灰原
1212	12	18	皿B蓋	(28.2)	5.4	—	灰原
1213	12	18	皿B蓋	(28.4)	4.1	—	灰原
1214	12	19	皿B	(27.7)	5.1	(22.9)	灰原
1215	12	19	皿B	28.1	5.3	23.2	灰原
1216	12	19	皿B	(26.0)	5.0	(24.6)	灰原
1217	12	—	皿B	(26.8)	(5.9)	(21.6)	灰原
1301	13	19	皿B	21.0	6.0	(16.2)	灰原
1302	13	—	皿B	(23.7)	4.4	(18.5)	灰原
1303	13	19	皿B	(27.9)	6.3	(22.6)	灰原
1304	13	19	皿B	(21.05)	4.8	(17.5)	灰原
1305	13	19	皿B	(22.1)	4.8	(17.5)	灰原
1306	13	19	皿B	(26.9)	5.5	(20.3)	灰原
1307	13	19	皿B	27.0	5.4	20.1	灰原
1308	13	19	皿B	(27.0)	5.2	(23.3)	灰原
1309	13	19	皿B	(27.3)	5.5	(22.6)	灰原
1310	13	19	皿B	(28.9)	6.5	(24.2)	灰原
1311	13	—	皿B	(29.8)	6.3	(26.0)	灰原
1312	13	—	皿B	(29.8)	(6.4)	(23.0)	灰原
1313	13	—	皿B	(21.6)	(4.6)	(18.0)	灰原
1314	13	19	皿B	(20.1)	(4.6)	(16.5)	灰原
1315	13	—	皿B	(26.0)	4.7	20.2	灰原
1401	14	—	高杯	(18.0)	—	—	灰原
1402	14	—	高杯	(18.0)	—	—	灰原
1403	14	20	高杯	18.0	—	—	灰原
1404	14	20	高杯	16.2	—	—	灰原
1405	14	20	高杯	16.4	—	—	灰原
1406	14	—	高杯	(17.4)	—	—	灰原
1407	14	—	高杯	(32.4)	—	—	灰原
1408	14	—	高杯	(24.8)	—	—	灰原
1409	14	—	高杯	(27.5)	—	—	灰原
1410	14	—	高杯	(24.8)	—	—	灰原
1411	14	—	高杯	(28.2)	—	—	灰原
1412	14	—	高杯	(28.7)	—	—	灰原
1413	14	20	高杯	(31.8)	—	—	灰原
1414	14	20	高杯	(24.8)	(12.0)	(14.2)	灰原
1415	14	—	高杯	—	—	15.7	灰原
1416	14	20	高杯	(23.8)	12.0	13.1	灰原
1417	14	20	高杯	(30.2)	—	—	灰原
1418	14	—	高杯	(18.8)	—	—	灰原
1419	14	20	高杯	(31.4)	—	—	灰原
1420	14	—	高杯	(29.1)	—	—	灰原
1421	14	20	高杯	(29.6)	—	—	灰原
1422	14	20	高杯	(31.8)	—	—	灰原
1423	14	—	高杯	(30.5)	—	—	灰原
1424	14	20	高杯	—	—	(12.4)	灰原
1425	14	20	高杯	—	—	(16.2)	灰原
1426	14	20	高杯	(14.5)	—	(10.6)	灰原
1427	14	20	高杯	—	—	(10.0)	灰原
1501	15	21	壷L	9.8	—	—	灰原
1502	15	—	壷L	—	—	—	灰原
1503	15	—	壷L	—	—	—	灰原
1504	15	21	壷L	(9.7)	—	—	灰原
1505	15	21	壷L	8.2	17.8	(11.3)	灰原
1506	15	—	壷L	—	—	—	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
1507	15	21	水瓶	2.6	−	−	灰原
1508	15	−	水瓶	−	−	−	灰原
1509	15	21	水瓶	−	−	(8.0)	灰原
1510	15	21	水瓶	−	−	−	灰原
1511	15	−	壷蓋？	(10.8)	(2.0)	−	灰原
1512	15	21	壷蓋？	(7.3)	1.8	−	灰原
1513	15	−	壷蓋	−	−	−	灰原
1514	15	21	壷蓋	(8.2)	(2.5)	−	灰原
1515	15	21	壷蓋	(7.7)	2.9	−	灰原
1516	15	21	壷蓋	(7.8)	2.6	−	灰原
1517	15	21	壷蓋	(11.0)	2.1	−	灰原
1518	15	−	壷蓋	10.7	−	−	灰原
1519	15	−	壷蓋	(12.1)	−	−	灰原
1520	15	−	壷蓋	(13.6)	(2.3)	−	灰原
1521	15	−	壷蓋	(14.2)	(2.2)	−	灰原
1522	15	21	壷蓋	(15.7)	4.4	−	灰原
1523	15	21	壷蓋	(16.5)	4.5	−	灰原
1524	15	21	壷蓋	13.8	3.1	−	灰原
1525	15	21	壷蓋	−	−	−	灰原
1601	16	22	壷C	3.0	−	−	灰原
1602	16	22	壷D	(5.0)	(3.5)	(6.1)	灰原
1603	16	22	壷D	(5.6)	(2.3)	(5.4)	灰原
1604	16	22	壷C	(6.8)	(6.5)	(6.9)	灰原
1605	16	−	壷C	−	−	−	灰原
1606	16	−	壷B	(9.2)	−	−	灰原
1607	16	−	壷B	(12.3)	−	−	灰原
1608	16	−	壷B	(8.9)	−	−	灰原
1609	16	−	壷B	(15.1)	−	−	灰原
1610	16	22	壷B	(9.7)	13.8	(11.3)	灰原
1611	16	22	壷B	−	−	13.3	灰原
1612	16	−	壷B	−	−	(13.1)	灰原
1613	16	−	壷A	(10.0)	−	−	灰原
1614	16	−	壷A	(14.6)	−	−	灰原
1615	16	22	壷A	12.2	−	−	灰原
1616	16	22	壷A	−	−	−	灰原
1617	16	22	獣足	−	12.0	−	灰原
1618	16	22	獣足	−	10.8	−	灰原
1701	17	23	壷K	11.3	9.0	17.3	灰原
1702	17	23	壷K	10.3	(19.6)	(9.0)	灰原
1703	17	23	壷K	(10.2)	19.1	9.5	灰原
1704	17	23	壷K	11.8	21.8	11.1	灰原
1705	17	−	壷K	10.3	−	−	灰原
1706	17	−	壷K	(9.1)	−	−	灰原
1707	17	−	壷K	−	−	9.3	灰原
1708	17	23	壷K	(9.1)	(19.6)	10.1	灰原
1709	17	23	壷K	9.9	(12.4)	10.2	灰原
1710	17	23	壷K	−	−	−	灰原
1711	17	−	壷K	−	−	−	灰原
1712	17	−	壷K	−	−	−	灰原
1801	18	24	壷Q	(17.7)	−	−	灰原
1802	18	24	壷Q	(21.0)	−	−	灰原
1803	18	−	壷Q	(21.0)	−	−	灰原
1804	18	−	壷Q	(17.8)	−	−	灰原
1805	18	−	壷Q	(18.5)	−	−	灰原
1806	18	24	壷Q	(19.2)	−	−	灰原
1807	18	−	壷Q	(21.0)	(18.8)	8.8	灰原
1808	18	24	壷Q	(12.4)	−	−	灰原
1809	18	24	壷Q	(12.3)	(9.1)	(8.9)	灰原
1810	18	24	壷Q	13.9	12.2	9.9	灰原
1811	18	24	壷Q	(16.3)	14.2	11.2	灰原
1812	18	24	壷Q	(16.6)	16.4	11.9	灰原
1813	18	24	壷Q	(16.0)	16.3	(12.0)	灰原
1901	19	25	鉢Aa（鉄鉢）	(18.7)	−	−	灰原
1902	19	25	鉢Aa（鉄鉢）	(21.0)	−	−	灰原
1903	19	25	鉢Aa（鉄鉢）	(21.2)	−	−	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
1904	19	25	鉢Aa(鉄鉢)	(21.3)	—	—	灰原
1905	19	25	鉢Aa(鉄鉢)	(21.6)	—	—	灰原
1906	19	25	鉢Aa(鉄鉢)	(21.7)	—	—	灰原
1907	19	25	鉢Aa(鉄鉢)	(22.4)	—	—	灰原
1908	19	25	鉢Aa(鉄鉢)	(22.8)	—	—	灰原
1909	19	25	鉢Aa(鉄鉢)	(23.0)	—	—	灰原
1910	19	25	鉢Aa(鉄鉢)	(24.0)	—	—	灰原
1911	19	—	鉢Aa(鉄鉢)	—	—	—	灰原
1912	19	—	鉢Aa(鉄鉢)	—	—	—	灰原
1913	19	—	鉢Aa(鉄鉢)	—	—	—	灰原
1914	19	25	鉢Ab	(25.8)	—	—	灰原
1915	19	25	鉢Ab	(27.5)	—	—	灰原
1916	19	25	鉢Ab	(27.8)	—	—	灰原
2001	20	—	鉢	(22.0)	—	—	灰原
2002	20	27	鉢	(26.0)	—	—	灰原
2003	20	—	鉢	—	—	(18.0)	灰原
2004	20	27	鉢F(すり鉢)	(17.4)	13.7	(11.7)	灰原
2005	20	—	鉢F(すり鉢)	—	—	—	灰原
2006	20	—	把手付椀	(11.8)	—	—	灰原
2007	20	16	把手付椀	(11.6)	4.8	(8.7)	灰原
2008	20	16	硯	(15.6)	5.6	(18.1)	灰原
2009	20	16	硯	(19.4)	5.5	(20.4)	灰原
2010	20	16	硯	—	—	(22.7)	灰原
2011	20	16	硯	—	—	(27.0)	灰原
2012	20	16	硯	30.0	—	—	灰原
2013	20	16	特殊土器	—	—	(23.2)	灰原
2014	20	16	特殊土器	(23.0)	—	—	灰原
2015	20	16	特殊土器	—	—	(10.7)	灰原
2016	20	—	特殊土器	(11.0)	(3.0)	(8.8)	灰原
2017	20	—	特殊土器	(11.0)	—	—	灰原
2018	—	27	鉢F底部	—	—	—	灰原
2101	21	26	蓋	(19.8)	1.5	—	灰原
2102	21	26	蓋	(18.8)	1.5	—	灰原
2103	21	26	蓋	(20.2)	1.8	—	灰原
2104	21	26	甑	(24.8)	—	—	灰原
2105	21	26	甑	25.8	—	—	灰原
2106	21	—	甑	(23.8)	—	—	灰原
2107	21	—	盤A把手	—	—	—	灰原
2108	21	—	盤A把手	—	—	—	灰原
2109	21	—	盤A把手	—	—	—	灰原
2110	21	26	盤A	(35.8)	(9.8)	(26.4)	灰原
2111	21	26	盤A	(48.8)	(10.3)	(35.0)	灰原
2112	21	26	盤A	(46.0)	(11.9)	(32.6)	灰原
2201	22	—	横瓶	(13.0)	(8.3)	—	灰原
2202	22	26	横瓶	9.3	25.8	—	灰原
2203	22	26	平瓶	12.8	(16.2)	17.9	灰原
2204	22	—	平瓶	(13.3)	(9.2)	(20.4)	灰原
2205	22	26	平瓶	10.3	14.1	15.8	灰原
2206	22	—	平瓶把手	—	—	—	灰原
2301	23	—	甕A	(21.5)	—	—	灰原
2302	23	27	甕A	(22.7)	—	—	灰原
2303	23	27	甕A	(26.0)	—	—	灰原
2304	23	—	甕A	(25.8)	—	—	灰原
2305	23	—	甕A	(29.6)	—	—	灰原
2306	23	—	甕A	(25.8)	—	—	灰原
2307	23	—	甕A	(26.3)	—	—	灰原
2308	23	27	甕A	(24.8)	—	—	灰原
2309	23	—	甕A	(31.0)	—	—	灰原
2310	23	27	甕A	(27.2)	—	—	灰原
2311	23	27	甕B	(19.7)	—	—	灰原
2312	23	27	甕B	(16.3)	—	—	灰原
2313	23	27	甕B	(17.8)	—	—	灰原
2314	23	—	土師器甕	(18.3)	—	—	灰原
2315	23	27	土師器甕	(14.7)	—	—	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
2401	24	28	甕C	(44.0)	—	—	灰原
2402	24	28	甕C	(54.6)	—	—	灰原
2403	24	27	甕C	(38.0)	—	—	灰原
2404	24	28	甕F	(46.2)	—	—	灰原
2405	24	28	甕A	(53.5)	—	—	灰原
2406	24	28	甕A	(66.2)	—	—	灰原

中谷１号窯

報告書番号	図面番号	写真図版番号	口　径	器　高	底　径	器　種	遺　構
0101	25	—	(16.8)	(2.6)	—	杯B蓋	窯体
0102	25	—	(16.8)	(2.9)	—	杯B蓋	窯体
0103	25	—	(17.3)	(2.8)	—	杯B蓋	窯体
0104	25	—	(18.1)	(2.6)	—	杯B蓋	窯体
0105	25	—	(18.2)	2.6	—	杯B蓋	窯体
0106	25	—	(18.8)	1.6	—	杯B蓋	窯体
0107	25	—	(18.4)	(2.4)	—	杯B蓋	窯体
0108	25	—	—	—	—	杯B蓋	窯体
0109	25	—	(13.3)	(4.1)	(6.6)	杯B	窯体
0110	25	—	(15.7)	(6.7)	(8.9)	杯B	窯体
0111	25	33	(15.4)	6.8	(9.4)	杯B	窯体
0112	25	33	(15.9)	(7.0)	(10.2)	杯B	窯体
0113	25	33	(16.2)	(7.0)	(9.4)	杯B	窯体
0114	25	—	(16.6)	(6.9)	(9.6)	杯B	窯体
0115	25	—	(16.7)	(7.1)	(9.9)	杯B	窯体
0116	25	—	(17.4)	(6.8)	(10.0)	杯B	窯体
0117	25	—	(17.7)	(6.7)	(9.6)	杯B	窯体
0118	25	—	(17.7)	(6.6)	(12.6)	杯B	窯体
0119	25	—	(18.1)	(6.8)	(9.0)	杯B	窯体
0120	25	—	(16.7)	4.2	(8.1)	台付皿A	窯体
0121	25	33	16.9	6.1	14.3	台付皿A	窯体
0122	25	33	(17.3)	4	10.3	台付皿A	窯体
0123	25	33	(17.2)	3.5	8.4	台付皿A	窯体
0124	25	—	—	—	(8.9)	台付皿A	窯体
0201	26	33	13.3	3.0	10.6	杯A	窯体
0202	26	—	(13.4)	3.1	(9.8)	杯A	窯体
0203	26	33	13.4	2.7	9.9	杯A	窯体
0204	26	33	13.5	2.8	10.1	杯A	窯体
0205	26	33	13.5	3.0	10.6	杯A	窯体
0206	26	33	13.6	2.9	10.3	杯A	窯体
0207	26	33	13.8	2.8	10.0	杯A	窯体
0208	26	—	(13.9)	3.3	10.0	杯A	窯体
0209	26	—	(14.0)	3.3	(10.0)	杯A	窯体
0210	26	33	(14.1)	3.1	11.1	杯A	窯体
0211	26	—	(14.1)	3.1	10.5	杯A	窯体
0212	26	—	(14.2)	3.3	(10.7)	杯A	窯体
0213	26	—	(14.2)	3.1	11.0	杯A	窯体
0214	26	—	(14.2)	3.7	(8.0)	杯A	窯体
0215	26	—	(14.3)	2.9	(11.9)	杯A	窯体
0216	26	33	14.5	2.7	11.0	杯A	窯体
0217	26	—	(14.5)	3.0	(11.4)	杯A	窯体
0218	26	—	(14.7)	2.8	11.0	杯A	窯体
0219	26	—	(15.0)	(3.4)	12.3	杯A	窯体
0220	26	33	15.4	3.5	7.5	杯A	窯体
0221	26	—	(10.0)	3.15	(7.2)	椀A	窯体
0222	26	—	(18.2)	(1.9)	(15.6)	皿A	窯体
0223	26	33	(17.4)	2.6	13.6?	皿A	窯体
0224	26	—	(18.0)	2	(14.7)	皿A	窯体
0225	26	—	(16.5)	(2.2)	(13.8)	皿A	窯体
0226	26	33	18.4	2.6	15.6	皿A	窯体

報告書番号	図面番号	写真図版番号	口　径	器　高	底　径	器　種	遺　構
0227	26	33	(18.9)	(2.0)	(15.9)	皿A	窯体
0228	26	33	(18.0)	(4.7)	—	壺の蓋	窯体
0229	26	33	(19.8)	(22.4)	(8.9)	壺Q	窯体
0230	26	33	(25.2)	—	—	鉢	窯体
0231	26	33	—	—	(8.5)	壺	窯体
0301	27	34	(13.5)	2.9	—	杯B蓋	灰原
0302	27	—	(16.1)	4.3	—	杯B蓋	灰原
0303	27	—	(16.2)	2.6	—	杯B蓋	灰原
0304	27	—	(16.3)	3.1	—	杯B蓋	灰原
0305	27	34	16.6	4.9	—	杯B蓋	灰原
0306	27	—	(16.5)	4.0	—	杯B蓋	灰原
0307	27	—	(17.0)	3.2	—	杯B蓋	灰原
0308	27	—	(17.0)	3.7	—	杯B蓋	灰原
0309	27	—	(17.0)	2.4	—	杯B蓋	灰原
0310	27	—	(17.2)	2.9	—	杯B蓋	灰原
0311	27	34	17.2	1.5	—	杯B蓋	灰原
0312	27	—	(17.3)	3.4	—	杯B蓋	灰原
0313	27	—	(17.4)	2.6	—	杯B蓋	灰原
0314	27	—	(17.4)	1.8	—	杯B蓋	灰原
0315	27	34	17.5	3.6	—	杯B蓋	灰原
0316	27	—	(17.5)	3.6	—	杯B蓋	灰原
0317	27	34	(17.5)	2.8	—	杯B蓋	灰原
0318	27	—	(17.6)	3.3	—	杯B蓋	灰原
0319	27	34	(17.6)	2.9	—	杯B蓋	灰原
0320	27	34	17.7	3.2	—	杯B蓋	灰原
0321	27	—	17.7	2.9	—	杯B蓋	灰原
0322	27	—	(17.7)	3.1	—	杯B蓋	灰原
0323	27	34	17.7	1.9	—	杯B蓋	灰原
0324	27	34	17.7	2.2	—	杯B蓋	灰原
0325	27	34	(17.8)	3.2	—	杯B蓋	灰原
0326	27	34	18.3	2.4	—	杯B蓋	灰原
0327	27	34	17.8	3.3	—	杯B蓋	灰原
0328	27	34	17.8	2.2	—	杯B蓋	灰原
0329	27	—	(17.8)	1.9	—	杯B蓋	灰原
0330	27	—	(17.8)	3.0	—	杯B蓋	灰原
0331	27	—	18.0	2.0	—	杯B蓋	灰原
0332	27	34	18.0	3.3	—	杯B蓋	灰原
0333	27	—	(18.0)	2.5	—	杯B蓋	灰原
0334	27	34	18.0	1.9	—	杯B蓋	灰原
0335	27	34	18.0	2.6	—	杯B蓋	灰原
0336	27	—	(18.2)	2.4	—	杯B蓋	灰原
0337	27	—	(18.4)	3.4	—	杯B蓋	灰原
0338	27	34	18.4	2.6	—	杯B蓋	灰原
0339	27	34	(18.4)	2.3	—	杯B蓋	灰原
0340	27	—	18.1	—	—	杯B蓋	灰原
0401	28	—	(10.7)	3.5	7.6	杯B	灰原
0402	28	35	(11.6)	4.3	8.4	杯B	灰原
0403	28	—	(11.7)	4.0	(7.5)	杯B	灰原
0404	28	35	11.4	4.1	8.1	杯B	灰原
0405	28	35	(12.1)	4.1	8.0	杯B	灰原
0406	28	—	(12.2)	3.9	(8.8)	杯B	灰原
0407	28	—	(12.3)	4.0	(8.1)	杯B	灰原
0408	28	—	—	—	7.9	杯B	灰原
0409	28	35	13.4	4.1	9.8	杯B	灰原
0410	28	—	(15.8)	5.0	(11.6)	杯B	灰原
0411	28	—	(16.0)	6.3	(10.0)	杯B	灰原
0412	28	—	(16.1)	(7.2)	(9.0)	杯B	灰原
0413	28	—	(16.1)	6.6	(10.4)	杯B	灰原
0414	28	35	(16.6)	7.0	(10.8)	杯B	灰原
0415	28	35	(16.4)	6.7	(9.4)	杯B	灰原
0416	28	35	(16.8)	6.9	10.2	杯B	灰原
0417	28	35	(16.5)	6.9	10.1	杯B	灰原
0418	28	—	(16.5)	6.5	10.4	杯B	灰原
0419	28	35	16.8	7.3	8.9	杯B	灰原
0420	28	—	16.8	6.6	10.1	杯B	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	口　径	器　高	底　径	器　種	遺　構
0420	28	—	16.8	6.6	10.1	杯B	灰原
0421	28	—	(16.8)	6.5	(9.5)	杯B	灰原
0422	28	35	16.9	7.4	9.9	杯B	灰原
0423	28	—	(17.0)	6.9	(11.0)	杯B	灰原
0424	28	35	17.1	7.3	11.5	杯B	灰原
0425	28	35	17.1	6.9	10.7	杯B	灰原
0426	28	35	(17.0)	6.7	(8.9)	杯B	灰原
0427	28	—	(17.1)	6.2	(10.8)	杯B	灰原
0428	28	—	(17.0)	7.3	(9.8)	杯B	灰原
0429	28	—	(17.5)	6.8	(18.9)	杯B	灰原
0430	28		(17.5)	6.3	(18.9)	杯B	灰原
0431	28	—	(17.9)	6.6	(10.6)	杯B	灰原
0432	28	—	(16.3)	8.8	(10.9)	椀B	灰原
0433	28	—	(18.1)	6.7	(10.2)	鋺形椀	灰原
0501	29	—	(23.7)	(2.4)	—	皿B蓋	灰原
0502	29	—	(21.4)	5.4	(16.6)	皿B	灰原
0503	29	—	(22.1)	5.1	(14.8)	皿B	灰原
0504	29	35	(16.0)	(3.3)	(8.5)	台付皿A	灰原
0505	29	—	(16.5)	3.95	7.1	台付皿A	灰原
0506	29	—	(16.9)	3.9	(9.0)	台付皿A	灰原
0507	29	35	17.3	3.3	10.2	台付皿A	灰原
0508	29	—	(17.5)	4.3	9.6	台付皿A	灰原
0509	29	35	(17.6)	4.0	(9.4)	台付皿A	灰原
0510	29	—	(16.6)	(5.6)	(7.8)	台付皿B	灰原
0511	29	35	17.6	5.6	11.0	台付皿B	灰原
0512	29	35	18.3	5.0	8.5	台付皿B	灰原
0513	29	35	(16.8)	5.3	9.8	台付皿B	灰原
0514	29	—	—	—	—	環状紐付蓋	灰原
0515	29	35	(17.6)	3.1	(3.3)	環状紐付蓋	灰原
0516	29	—	(15.8)	6.0	(8.8)	杯L(稜椀)	灰原
0517	29	35	(16.0)	(6.3)	(8.2)	杯L(稜椀)	灰原
0518	29	35	(17.5)	6.3	(8.2)	杯L(稜椀)	灰原
0519	29	—	(15.2)	—	—	杯L(稜椀)	灰原
0520	29	—	(15.4)	—	—	杯L(稜椀)	灰原
0521	29	—	(16.5)	—	—	杯L(稜椀)	灰原
0522	29	—	(17.2)	—	—	杯L(稜椀)	灰原
0523	29	—	(17.6)	—	—	杯L(稜椀)	灰原
0524	29	—	(17.8)	(4.4)	(15.0)	杯L(稜椀)	灰原
0601	30	36	10.5	3.2	8.5	杯A	灰原
0602	30	37	(10.0)	3.2	(6.4)	杯A	灰原
0603	30	—	(10.5)	—	—	杯A	灰原
0604	30	36	(5.4)	3.1	(8.3)	杯A	灰原
0605	30	36	11.3	3.2	1.8	杯A	灰原
0606	30	36	12.7	3.1	9.8	杯A	灰原
0607	30	—	(12.7)	2.9	10.4	杯A	灰原
0608	30	36	13.2	2.6	10.4	杯A	灰原
0609	30	—	13.5	2.9	10.8	杯A	灰原
0610	30	36	13.5	2.3	11.5	杯A	灰原
0611	30	36	13.5	2.7	8.3	杯A	灰原
0612	30	36	13.7	3.6	10.2	杯A	灰原
0613	30	36	13.7	3.3	9.2	杯A	灰原
0614	30	—	(13.7)	2.9	(9.5)	杯A	灰原
0615	30	—	(13.8)	3.4	(1.5)	杯A	灰原
0616	30	—	(13.8)	3.2	(9.2)	杯A	灰原
0617	30	36	13.9	3.2	9.8	杯A	灰原
0618	30	—	(13.9)	2.9	(10.1)	杯A	灰原
0619	30	—	(13.9)	3.1	(10.4)	杯A	灰原
0620	30	—	(13.9)	2.9	10.9	杯A	灰原
0621	30	—	(13.9)	3.4	(7.7)	杯A	灰原
0622	30	—	(14.0)	3.0	(10.9)	杯A	灰原
0623	30	36	14.1	3.2	10.3	杯A	灰原
0624	30	36	14.1	3.2	7.0	杯A	灰原
0625	30	—	14.1	3.2	10.6	杯A	灰原
0626	30	36	(14.2)	2.8	10.8	杯A	灰原
0627	30	36	14.3	2.6	11.2	杯A	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
0628	30	36	14.3	3.1	7.7	杯A	灰原
0629	30	36	(14.3)	3.5	10.4	杯A	灰原
0630	30	36	(14.4)	3.4	11.4	杯A	灰原
0631	30	36	14.4	2.5	10.5	杯A	灰原
0632	30	—	(14.4)	3.1	(9.8)	杯A	灰原
0633	30	36	(14.5)	2.2	10.5	杯A	灰原
0634	30	36	14.5	3.3	11.6	杯A	灰原
0635	30	—	(14.5)	3.1	(10.9)	杯A	灰原
0636	30	—	(14.6)	2.8	12.3	杯A	灰原
0637	30	—	(14.6)	(2.8)	(11.4)	杯A	灰原
0638	30	36	14.6	3.0	10.3	杯A	灰原
0639	30	—	(14.6)	3.2	(9.5)	杯A	灰原
0640	30	—	(14.7)	2.9	(6.9)	杯A	灰原
0641	30	36	(14.7)	3.3	7.2	杯A	灰原
0642	30	—	(14.8)	2.7	(11.0)	杯A	灰原
0643	30	36	14.8	3.4	3.6	杯A	灰原
0644	30	—	(14.9)	3.8	(10.6)	杯A	灰原
0645	30	36	15.0	3.0	(10.0)?	杯A	灰原
0646	30	—	(15.1)	3.1	(11.2)	杯A	灰原
0647	30	36	15.1	3.4	11.8	杯A	灰原
0648	30	—	(15.2)	3.5	(10.8)	杯A	灰原
0649	30	—	(15.2)	2.8	(11.9)	杯A	灰原
0701	31	37	(8.7)	3.6	4.6	椀A	灰原
0702	31	37	(9.4)	3.3	(5.6)	椀A	灰原
0703	31	—	(9.6)	3.8	(6.0)	椀A	灰原
0704	31	37	(9.8)	3.6	(7.4)	椀A	灰原
0705	31	37	(9.8)	3.8	(7.6)	椀A	灰原
0706	31	37	(10.3)	3.9	(4.2)	椀A	灰原
0707	31	37	(10.5)	4.2	(6.6)	椀A	灰原
0708	31	37	(16.6)	6.2	(11.0)	椀A	灰原
0709	31	37	(13.4)	2.15	(6.8)	杯A	灰原
0710	31	—	(13.9)	1.9	(5.2)	杯A	灰原
0711	31	—	(14.8)	2.0	(11.3)	杯A	灰原
0712	31	37	(14.9)	1.9	(11.6)	杯A	灰原
0713	31	—	(15.5)	(1.7)	(13.1)	杯A	灰原
0714	31	—	(15.6)	2.1	(12.4)	杯A	灰原
0715	31	—	(15.6)	2.0	13.3	杯A	灰原
0716	31	—	(15.8)	2.8	(12.9)	杯A	灰原
0717	31	—	(16.1)	(2.7)	(12.8)	杯A	灰原
0718	31	—	(16.4)	(2.0)	(13.0)	杯A	灰原
0719	31	37	(16.5)	(2.1)	12.1	杯A	灰原
0720	31	—	(16.7)	(3.2)	(15.1)	杯A	灰原
0721	31	—	(16.7)	2.1	(15.9)	杯A	灰原
0722	31	—	(16.7)	(3.3)	(10.8)	杯A	灰原
0723	31	—	(16.8)	2.3	(13.8)	杯A	灰原
0724	31	37	(16.8)	2.1	13.6	杯A	灰原
0725	31	—	(16.8)	2.2	(7.2)	杯A	灰原
0726	31	37	(16.8)	2.1	(12.6)	杯A	灰原
0727	31	—	(16.8)	2.7	(11.5)	杯A	灰原
0728	31	—	(17.0)	1.9	(0.5)	杯A	灰原
0729	31	37	16.9	1.8	13.4	杯A	灰原
0730	31	—	(17.3)	2.3	(8.0)	杯A	灰原
0731	31	—	(17.5)	2.3	(10.8)	杯A	灰原
0732	31	37	17.5	1.7	13.4	杯A	灰原
0733	31	—	(17.7)	1.8	(14.9)	杯A	灰原
0734	31	—	(17.7)	2.9	(15.2)	杯A	灰原
0735	31	—	(18.0)	(2.0)	(15.7)	杯A	灰原
0736	31	—	(18.0)	(2.4)	(16.7)	杯A	灰原
0737	31	—	(18.1)	(2.3)	(14.4)	杯A	灰原
0738	31	—	(18.1)	1.7	(15.2)	杯A	灰原
0739	31	—	(18.2)	2.2	(16.4)	杯A	灰原
0740	31	37	(18.3)	2.2	(14.7)	杯A	灰原
0741	31	—	(18.2)	2.2	(14.7)	杯A	灰原
0742	31	—	(18.6)	2.3	(13.7)	杯A	灰原
0743	31	37	18.7	2.6	16.2	杯A	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	器　種	口　径	器　高	底　径	遺　構
0744	31	37	(18.8)	(1.7)	(16.7)	杯A	灰原
0746	31	37	19.2	1.8	15.1	杯A	灰原
0801	32	37	(12.0)	4.4	(5.5)	杯E	灰原
0802	32	—	(15.7)	(4.9)	(11.2)	杯E	灰原
0803	32	38	—	—	—	硯	灰原
0804	32	38	(22.9)	—	—	高杯	灰原
0805	32	38	—	—	(11.4)	高杯	灰原
0806	32	37	(17.5)	—	—	鉢D	灰原
0807	32	37	(21.0)	(18.1)	(9.4)	鉢D	灰原
0808	32	37	(21.5)	—	—	鉢D	灰原
0809	32	37	(17.6)	—	—	鉢D	灰原
0810	32	—	—	—	(12.8)	鉢D	灰原
0811	32	—	—	—	(9.5)	鉢D	灰原
0812	32	—	—	—	(5.1)	鉢D	灰原
0813	32	37	(23.6)	—	—	鉢D	灰原
0814	32	37	(20.9)	—	—	鉢D	灰原
0901	33	—	(6.0)	—	—	壺蓋	灰原
0902	33	—	—	—	—	壺蓋	灰原
0903	33	—	—	—	—	壺蓋	灰原
0904	33	38	(6.7)	2.3	—	壺蓋	灰原
0905	33	38	12.9	(3.8)	—	壺蓋	灰原
0906	33	38	13.8	3.8	—	壺蓋	灰原
0907	33	38	12.4	3.8	—	壺蓋	灰原
0908	33	38	11.9	3.8	—	壺蓋	灰原
0909	33	—	(12.2)	—	—	壺蓋	灰原
0910	33	—	(16.1)	—	—	壺蓋	灰原
0911	33	—	(16.3)	—	—	壺蓋	灰原
0912	33	—	(13.3)	—	—	壺蓋	灰原
0913	33	38	6.3	—	—	壺M	灰原
0914	33	38	6.3	—	—	壺M	灰原
0915	33	—	(11.3)	—	—	壺A	灰原
0916	33	—	(9.9)	—	—	壺N	灰原
0917	33	—	9.0	—	—	壺N	灰原
0918	33	—	—	—	—	壺N	灰原
0919	33	—	7.9	—	—	壺N	灰原
0920	33	—	—	—	—	壺N	灰原
0921	33	38	—	—	13.4	壺N	灰原
0922	33	—	10.3	—	—	壺L	灰原
0923	33	—	10.1	—	—	壺L	灰原
0924	33	—	(9.5)	—	—	壺L	灰原
0925	33	38	9.1	(20.9)	10.2	壺L	灰原
0926	33	38	—	—	9.9	壺L	灰原
0927	33	—	—	—	(10.1)	壺L	灰原
1001	34	38	18.2	—	—	壺Q	灰原
1002	34	—	(18.5)	—	—	壺Q	灰原
1003	34	—	(18.6)	—	—	壺Q	灰原
1004	34	38	(16.8)	—	—	壺Q	灰原
1005	34	—	—	—	—	壺Q	灰原
1006	34	—	—	—	9.4	壺Q	灰原
1007	34	—	—	—	(11.4)	壺Q	灰原
1008	34	—	—	—	(10.4)	壺Q	灰原
1009	34	—	—	—	(12.9)	壺Q	灰原
1010	34	—	—	—	(9.4)	壺Q	灰原
1011	34	—	—	—	11.8	壺Q	灰原
1012	34	—	—	—	9.9	壺Q	灰原
1013	34	—	—	—	(10.5)	壺Q	灰原
1101	35	—	(19.9)	—	—	甕	灰原
1102	35	—	(20.8)	—	—	甕	灰原
1103	35	—	(20.6)	—	—	甕	灰原
1104	35	—	(22.6)	—	—	甕	灰原
1105	35	—	(23.0)	—	—	甕	灰原
1106	35	—	(25.0)	—	—	甕	灰原
1107	35	—	(39.7)	—	—	甕	灰原
1108	35	38	10.6	—	—	瓶	灰原

中谷２号窯

報告書番号	図面番号	写真図版番号	口　径	器　高	底　径	器　種	遺　構
0101	36	39	(14.8)	(6.3)	(8.0)	椀c1	灰原
0102	36	39	(15.6)	6.4	6.6	椀c1	灰原
0103	36	39	(15.8)	6.5	(7.0)	椀c1	灰原
0104	36	39	(15.0)	6.3	(7.1)	椀c1	灰原
0105	36	—	—	—	(7.4)	椀c	灰原
0106	36	—	—	—	7.0	椀c	灰原
0107	36	—	—	—	6.0	椀c	灰原
0108	36	—	—	—	(7.0)	椀c	灰原
0109	36	39	(18.0)	6.8	7.2	椀c2	灰原
0110	36	39	(15.4)	—	—	椀c2	灰原
0111	36	39	(15.4)	—	—	椀c2	灰原
0112	36	39	(15.5)	—	—	椀c2	灰原
0113	36	39	(16.2)	—	—	椀c2	灰原
0114	36	39	(17.2)	—	—	椀c2	灰原
0115	36	39	(17.6)	—	—	椀c2	灰原
0116	36	39	(18.1)	—	—	椀c2	灰原
0117	36	39	15.6	—	—	椀c2	灰原
0118	36	39	(15.4)	5.7	(8.0)	椀b	灰原
0119	36	39	(16.4)	(6.1)	(7.6)	椀b	灰原
0120	36	—	—	—	6.6	椀a	灰原
0121	36	—	—	—	(7.1)	椀a	灰原
0122	36	—	—	—	(7.7)	椀a	灰原
0123	36	—	—	—	7.8	椀a	灰原
0124	36	—		—	(7.2)	椀a	灰原
0125	36	—	—	—	(8.8)	椀a	灰原
0126	36	—	—	—	9.0	椀a	灰原
0127	36	—	(13.0)	(2.0)	(7.0)	皿a	灰原
0128	36	40	(15.7)	(2.0)	(13.8)	皿a	灰原
0129	36	—	(15.8)	1.7	(8.5)	皿a	灰原
0130	36	—	(16.0)	2.0	(9.0)	皿a	灰原
0131	36	40	(16.3)	(2.0)	(9.6)	皿a	灰原
0132	36	—	(17.4)	(2.4)	(12.2)	皿a	灰原
0133	36	40	(15.6)	2.3	(5.5)	台付皿a	灰原
0134	36	—	—	—	7.7	台付皿a	灰原
0201	37	40	(12.0)	—	—	杯A	灰原
0202	37	—	(13.2)	(3.7)	(8.4)	杯A	灰原
0203	37	—	(13.3)	(4.1)	(8.1)	杯A	灰原
0204	37	—	13.1	8.7	3.1	杯A	灰原
0205	37	40	(13.4)	3.6	6.5	杯A	灰原
0206	37	—	(14.0)	(3.4)	(8.6)	杯A	灰原
0207	37	—	(15.4)	(3.1)	(8.6)	杯A	灰原
0208	37	40	(14.2)	3.1	(8.0)	杯A	灰原
0209	37	40	(14.0)	(3.9)	(8.2)	杯A	灰原
0210	37	40	14.6	5.4	8.8	杯A	灰原
0211	37	40	15.9	5.8	9.3	杯A	灰原
0212	37	40	(11.2)	3.5	(8.2)	椀A	灰原
0213	37	—	(13.2)	(4.4)	(7.0)	杯E	灰原
0214	37	41	(12.5)	—	—	双耳壷	灰原
0215	37	41	(10.1)	—	—	双耳壷	灰原
0216	37	41	(11.2)	—	—	双耳壷	灰原
0217	37	41	—	—	—	双耳壷	灰原
0218	37	—	—	—	(11.6)	双耳壷	灰原
0219	37	—	—	—	(13.0)	双耳壷	灰原
0220	37	41	—	—	—	双耳壷	灰原
0221	37	41	—	—	—	双耳壷	灰原
0222	37	41	—	—	—	双耳壷	灰原
0223	37	41	—	—	—	双耳壷	灰原
0224	37	40	(12.9)	—	—	壷A	灰原
0225	37	—	—	—	(16.2)	壷A	灰原
0226	37	—	(5.7)	—	—	壷M	灰原
0227	37	41	—	—	(8.3)	壷	灰原
0228	37	—	—	—	(11.7)	壷	灰原

報告書番号	図面番号	写真図版番号	口　径	器　高	底　径	器　種	遺　構
0229	37	—	—	—	(8.6)	壺	灰原
0230	37	—	—	—	(6.6)	壺E?	灰原
0301	38	40	(14.7)	—	—	鉢Da	灰原
0302	38	40	(21.8)	—	—	鉢Da	灰原
0303	38	40	(32.8)	—	—	鉢Da	灰原
0304	38	40	(23.7)	—	—	鉢Da	灰原
0305	38	—	(27.8)	(12.3)	(11.4)	鉢Da	灰原
0306	38	40	(23.2)	16.2	(11.4)	鉢Da	灰原
0307	38	40	(23.0)	—	—	鉢Db	灰原
0308	38	40	(18.9)	—	—	鉢Db	灰原
0309	38	40	(21.0)	—	—	鉢Db	灰原
0310	38	40	—	—	—	鉢Db	灰原
0311	38	40	(11.8)	—	—	鉢Db	灰原
0312	38	41	(16.4)	—	—	甕	灰原
0313	38	41	(20.0)	—	—	甕	灰原
0314	38	41	(17.7)	—	—	甕	灰原
0315	38	41	(26.0)	—	—	甕	灰原
0316	38	—	(43.8)	—	—	甕	灰原
0401	39	—	(40.0)	—	—	甕	灰原
0402	39	41	(43.6)	—	—	甕	灰原
0403	39	41	(47.6)	—	—	甕	灰原
0404	39	41	(47.2)	—	—	甕	灰原
0405	39	41	(54.0)	—	—	甕	灰原
0406	39	41	(55.6)	—	—	甕	灰原
0407	39	41	(56.0)	—	—	甕	灰原
0408	39	41	—	—	—	甕	灰原

中谷3号窯

報告書番号	図面番号	写真図版番号	口　径	器　高	底　径	器　種	遺　構
0101	40	42	12.9	3.8	7.2	杯A	窯体
0102	40	42	13.9	3.6	7.6	杯A	窯体
0103	40	—	(13.9)	3.4	(8.0)	杯A	窯体
0104	40	42	14.0	3.3	7.8	杯A	窯体
0105	40	—	14.0	3.9	—	杯A	窯体
0106	40	—	(15.7)	(2.4)	(8.1)	皿a	窯体
0107	40	42	16.4	5.7	8.5	椀c1	窯体
0108	40	42	—	—	(6.7)	椀c1	窯体
0109	40	42	25.9	(8.7)	(11.3)	鉢	窯体
0110	40	42	—	—	(11.8)	瓶	窯体
0111	40	—	—	—	(15.0)	壺	窯体
0112	40	42	(37.0)	—	—	甕	窯体
0113	40	42	(41.0)	—	—	甕	窯体
0114	40	42	(49.6)	—	—	甕	窯体
0115	40	—	(54.4)	—	—	甕	窯体
0201	41	43	(15.0)	5.8	7.2	椀c1	灰原
0202	41	—	(17.4)	(6.5)	(7.0)	椀c1	灰原
0203	41	43	17.5	5.5	7.6	椀c1	灰原
0204	41	—	(14.8)	—	—	椀c1	灰原
0205	41	—	—	—	(7.1)	椀c	灰原
0206	41	—	—	—	(7.0)	椀c	灰原
0207	41	43	(17.0)	—	—	椀c2	灰原
0208	41	43	17.0	6.5	7.9	椀c2	灰原
0209	41	43	(17.4)	5.7	(7.1)	椀c2	灰原
0210	41	—	(19.2)	(5.2)	(8.0)	椀c2	灰原
0211	41	—	(17.4)	—	—	椀c2	灰原
0212	41	—	(17.6)	—	—	椀c2	灰原
0213	41	43	(20.6)	(5.6)	(8.0)	椀c2	灰原
0214	41	—	(15.8)	—	—	椀c2	灰原
0215	41	—	(18.3)	—	—	椀c2	灰原

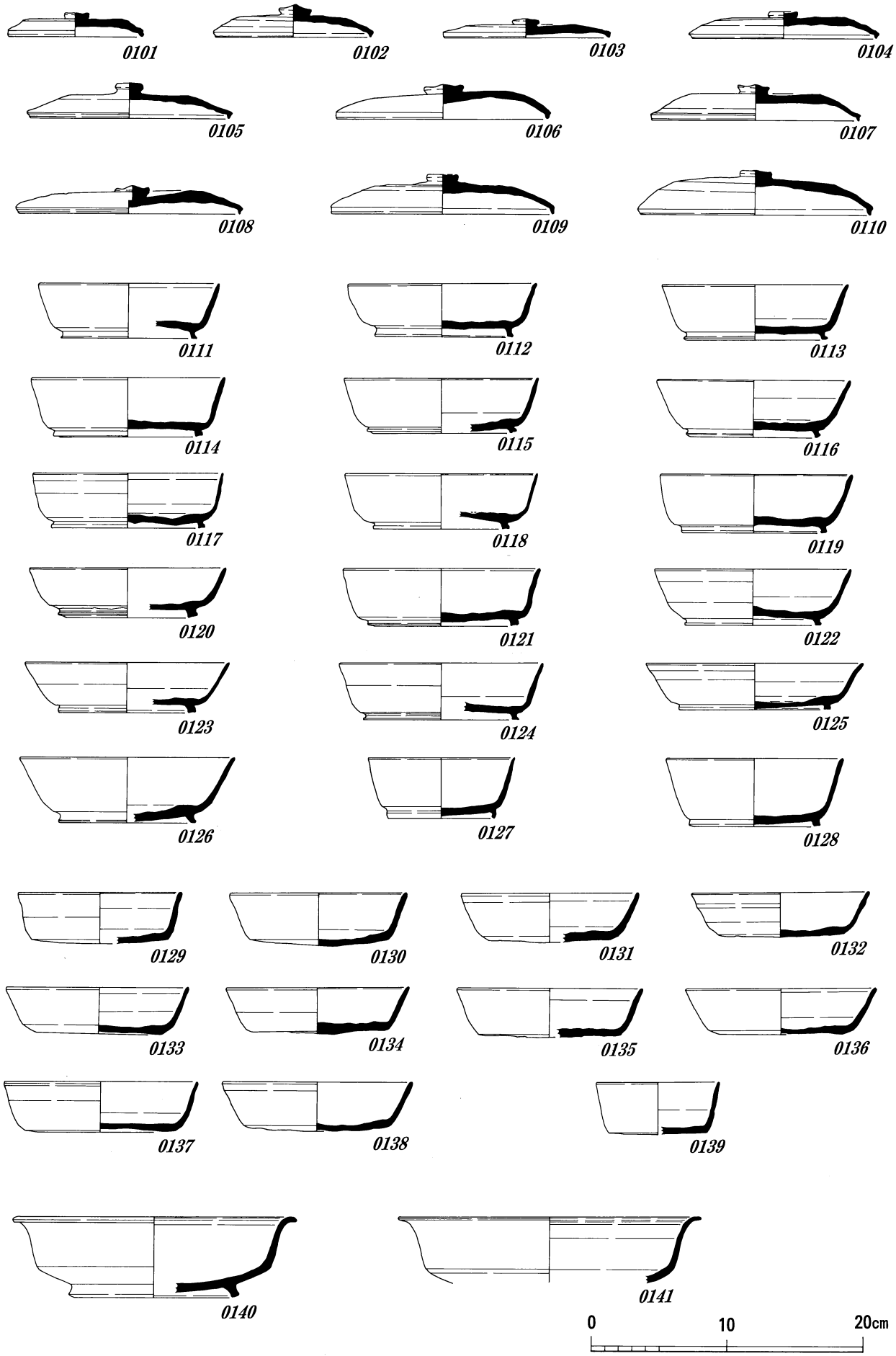
報告書番号	図面番号	写真図版番号	口　径	器　高	底　径	器　種	遺　構
0116	41	43	(15.9)	—	—	椀c2	灰原
0217	41	43	(19.4)	6.6	(8.0)	椀b	灰原
0218	41	43	—	—	(7.0)	椀b	灰原
0219	41	43	—	—	7.7	椀b	灰原
0220	41	44	—	—	8.0	椀c	灰原
0221	41	44	—	—	8.0	杯B	灰原
0222	41	44	—	—	7.8	杯B	灰原
0223	41	44	—	—	7.1	杯B	灰原
0224	41	44	—	—	7.4	杯B	灰原
0225	41	44	—	—	7.0	杯B	灰原
0226	41	44	—	—	10.0	杯B	灰原
0227	41	44	—	—	9.0	杯B	灰原
0228	41	44	—	—	(8.6)	杯B	灰原
0229	41	44	—	—	11.0	杯B	灰原
0301	42	44	(13.2)	3.1	7.8	杯A	灰原
0302	42	44	(13.5)	(3.6)	(7.2)	杯A	灰原
0303	42	—	(14.1)	3.4	(7.8)	杯A	灰原
0304	42	—	(14.4)	(3.6)	(7.2)	杯A	灰原
0305	42	—	(14.9)	(3.5)	(3.9)	杯A	灰原
0306	42	—	(12.9)	(3.7)	(7.0)	杯A	灰原
0307	42	44	(13.3)	(4.1)	(7.6)	杯A	灰原
0308	42	—	(14.8)	(5.1)	(7.5)	杯A	灰原
0309	42	44	(11.4)	(2.2)	(5.2)	皿a	灰原
0310	42	—	(12.3)	(2.6)	(5.5)	皿a	灰原
0311	42	44	(13.0)	2.2	(5.7)	皿a	灰原
0312	42	—	(13.6)	(2.5)	—	皿a	灰原
0313	42	44	(14.8)	(2.2)	(7.6)	皿a	灰原
0314	42	—	(15.0)	(2.9)	—	皿a	灰原
0315	42	44	(15.1)	2.3	9.1	皿a	灰原
0316	42	44	(11.0)	—	—	鉢D	灰原
0317	42	44	(13.8)	—	—	鉢D	灰原
0318	42	44	(20.0)	—	—	鉢D	灰原
0319	42	—	—	—	(8.0)	鉢D	灰原
0320	42	44	(20.0)	—	—	鉢A	灰原
0321	42	44	—	—	(8.3)	壺	灰原
0322	42	44	(16.0)	—	—	壺A	灰原
0323	42	—	—	—	(17.0)	壺A	灰原
0324	42	—	(41.0)	—	—	鉢	灰原
0401	43	—	(11.7)	—	—	双耳壺	灰原
0402	43	45	—	—	—	双耳壺	灰原
0403	43	45	(14.6)	—	—	双耳壺	灰原
0404	43	45	(16.8)	—	—	双耳壺	灰原
0405	43	45	—	—	—	双耳壺	灰原
0406	43	45	—	—	—	双耳壺	灰原
0407	43	—	(15.4)	—	—	双耳壺	灰原
0501	44	—	(26.3)	—	—	甕	灰原
0502	44	45	(20.7)	—	—	甕	灰原
0503	44	45	(20.9)	—	—	甕	灰原
0504	44	45	32.8	—	—	甕	灰原
0505	44	—	34.0	—	—	甕	灰原
0506	44	45	(38.0)	—	—	甕	灰原
0507	44	—	(36.6)	—	—	甕	灰原
0601	45	—	38.6	—	—	甕	灰原
0602	45	45	38.8	—	—	甕	灰原
0603	45	—	(39.3)	—	—	甕	灰原
0604	45	—	(40.6)	—	—	甕	灰原
0605	45	—	(46.0)	—	—	甕	灰原
0606	45	—	(44.4)	—	—	甕	灰原

中谷５号窯

報告書番号	図面番号	写真図版番号	口　径	器　高	底　径	器　種
０１０１	46	46	—	—	(5.4)	杯B
０１０２	46	46	—	—	(6.5)	杯B
０１０３	46	46	—	—	(8.0)	杯B
０１０４	46	46	—	—	(8.6)	杯B
０１０５	46	—	—	—	(6.0)	椀c
０１０６	46	—	—	—	(4.0)	椀c
０１０７	46	46	—	—	(4.0)	椀c
０１０８	46	46	—	—	(4.6)	椀c
０１０９	46	46	—	—	(6.7)	椀c
０１１０	46	46	—	—	(6.4)	椀c
０１１１	46	46	(11.1)	—	—	双耳壷
０１１２	46	—	—	—	—	双耳壷
０１１３	46	46	(23)	—	—	双耳壷
０１１４	46	46	—	—	—	双耳壷
０１１５	46	46	—	—	—	双耳壷
０１１６	46	46	—	—	(13.0)	双耳壷
０１１７	46	46	—	—	15	双耳壷
０１１８	46	—	—	—	(13.0)	双耳壷
０１１９	46	46	(27.9)	—	—	甕
０１２０	46	46	(32.2)	—	—	甕
０１２１	46	—	(39.6)	—	—	甕
０１２２	46	—	(42.1)	—	—	甕

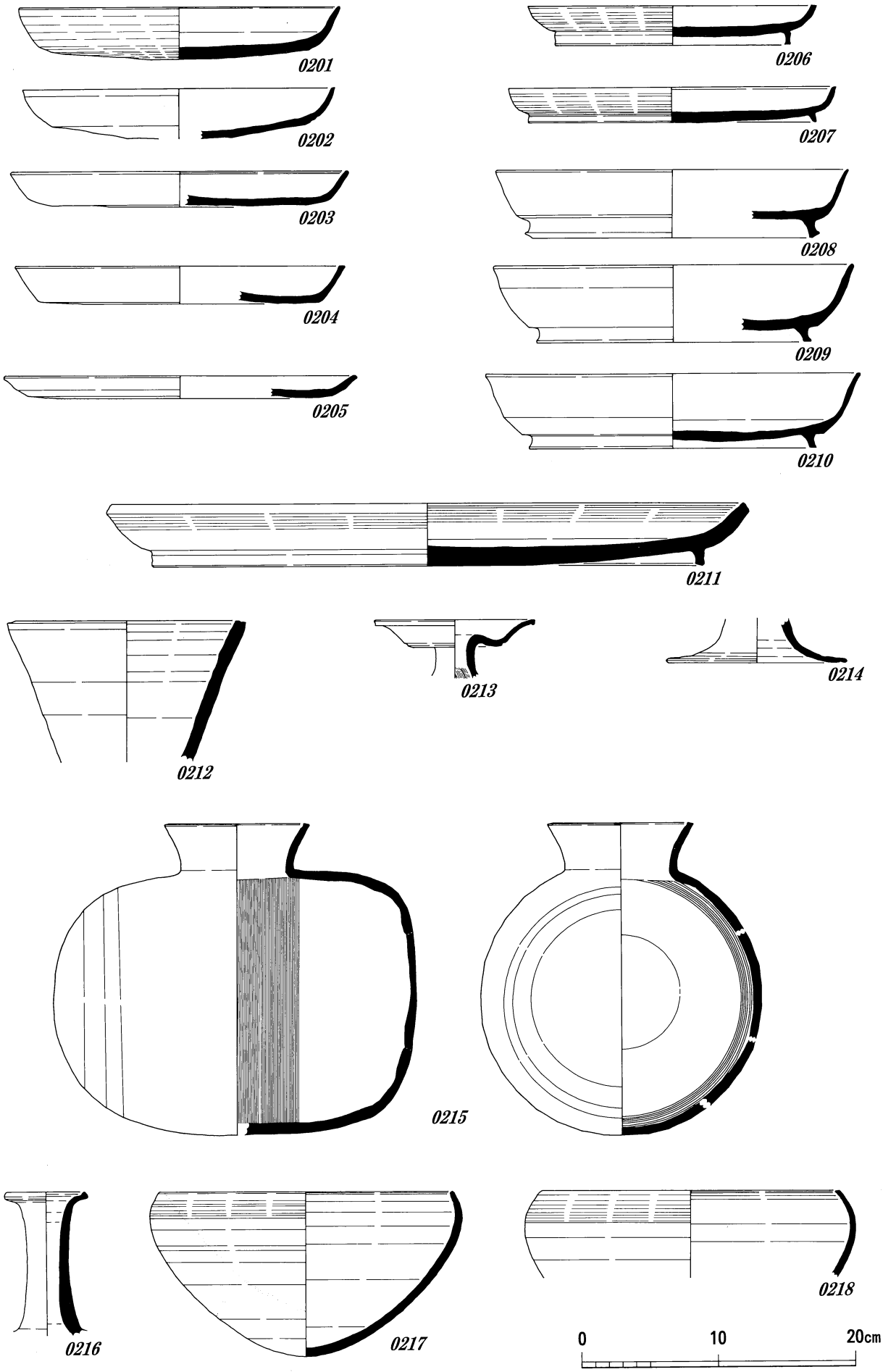
中谷4号窯窯体出土遺物1

第1図



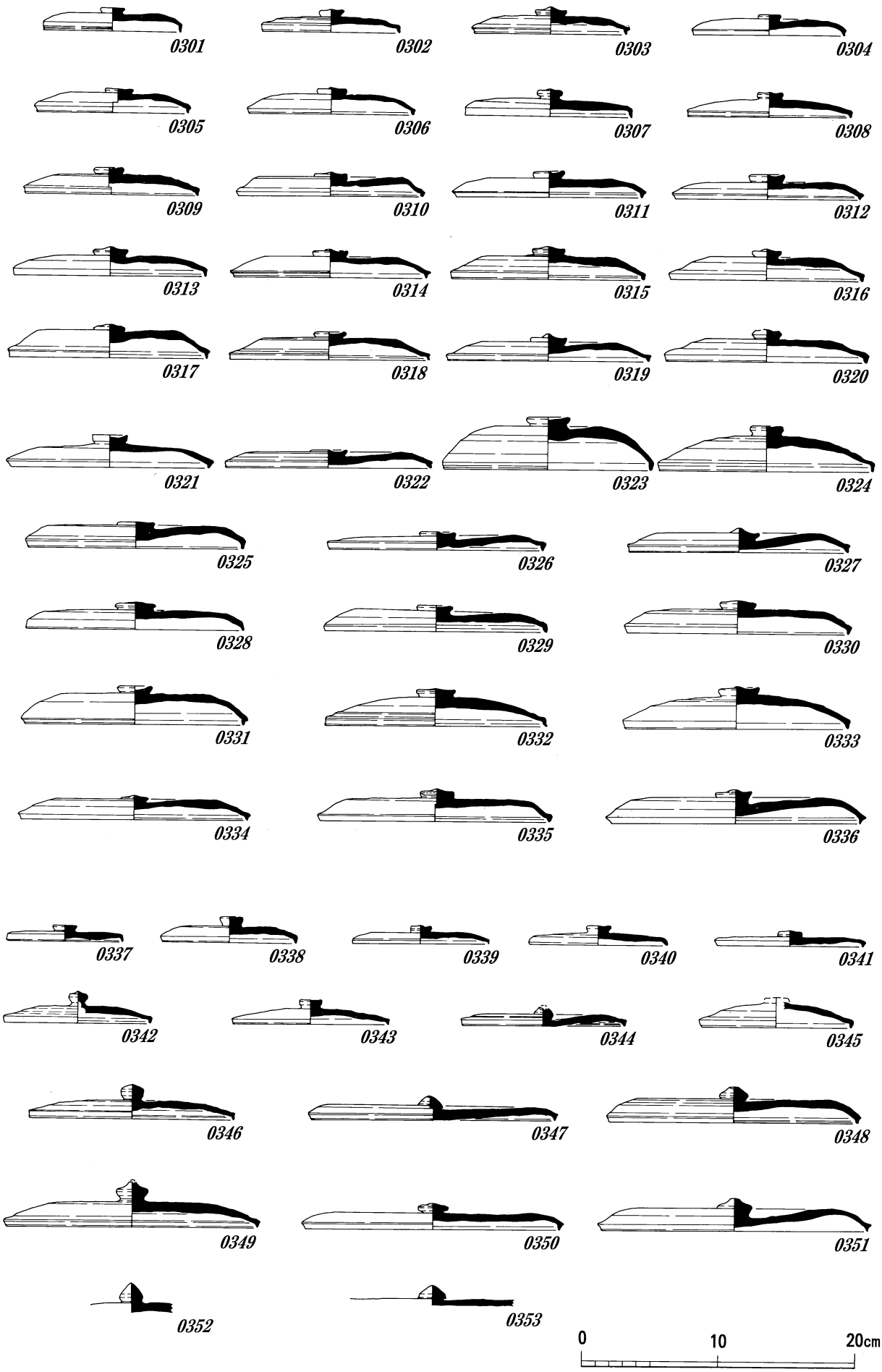
第2図

中谷4号窯窯体出土遺物2



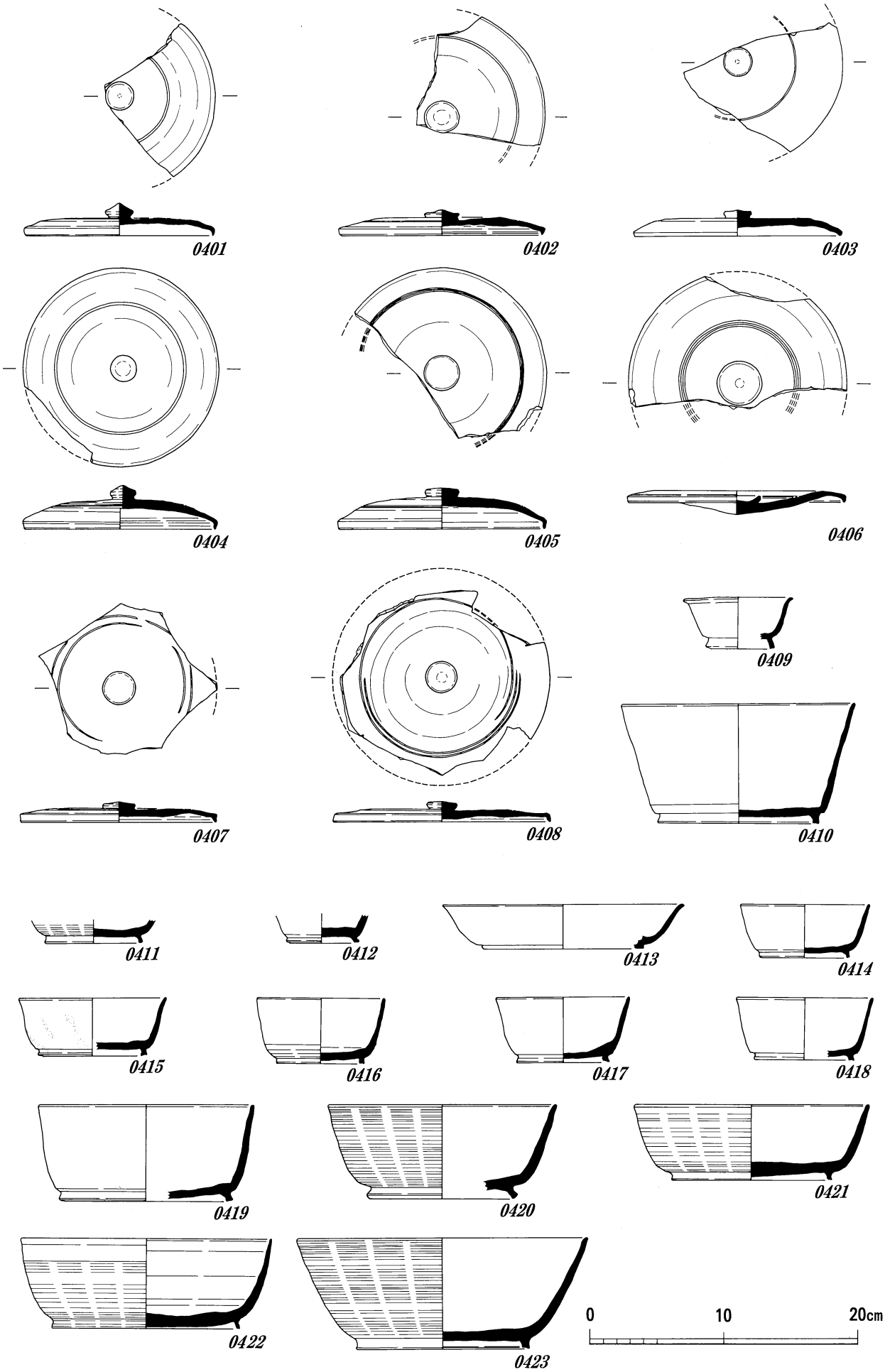
中谷4号窯灰原出土遺物1

第3図



第4図

中谷4号窯灰原出土遺物2



中谷4号窯灰原出土遺物3

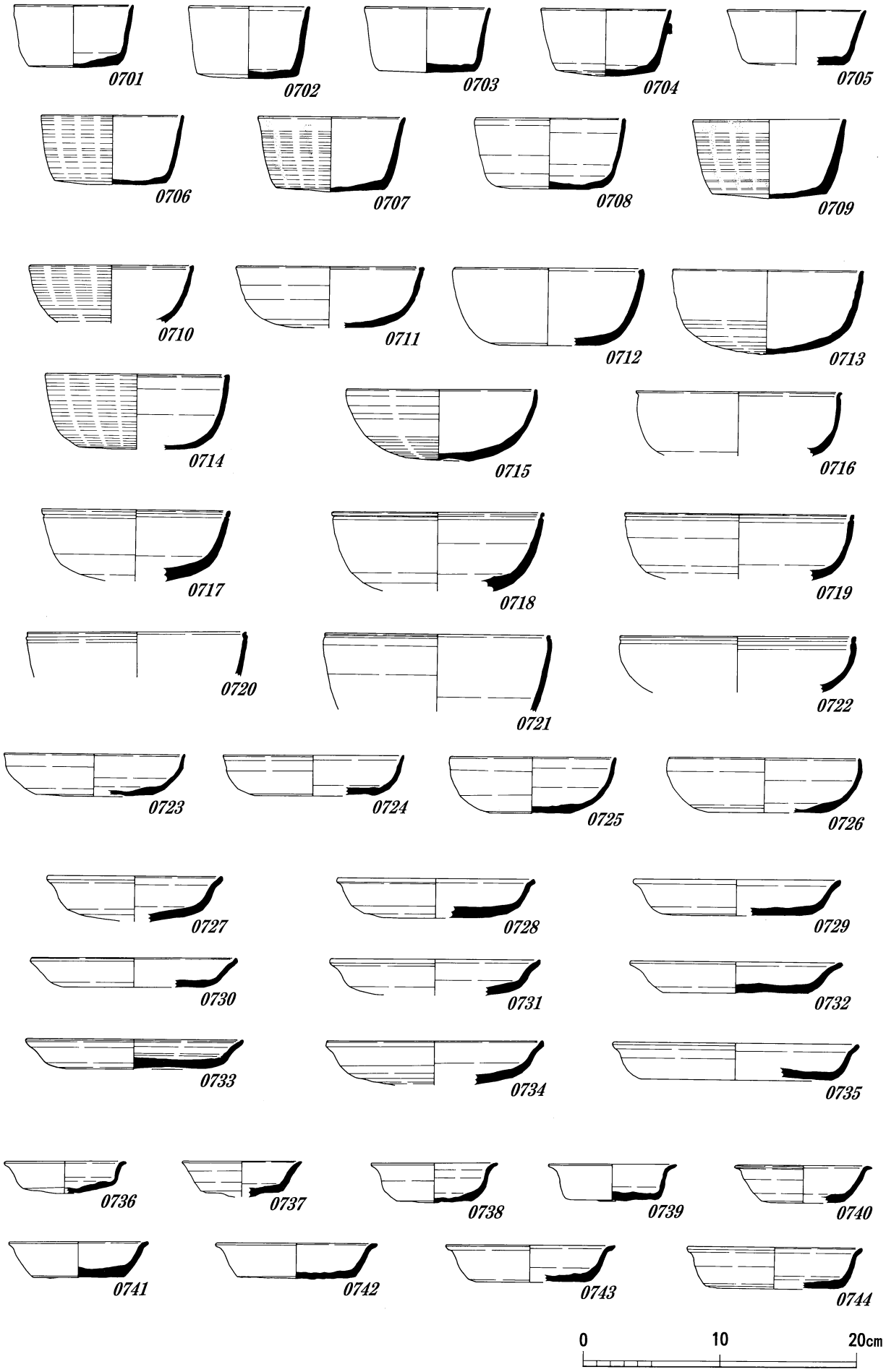
第5図

第6図

中谷4号窯灰原出土遺物4

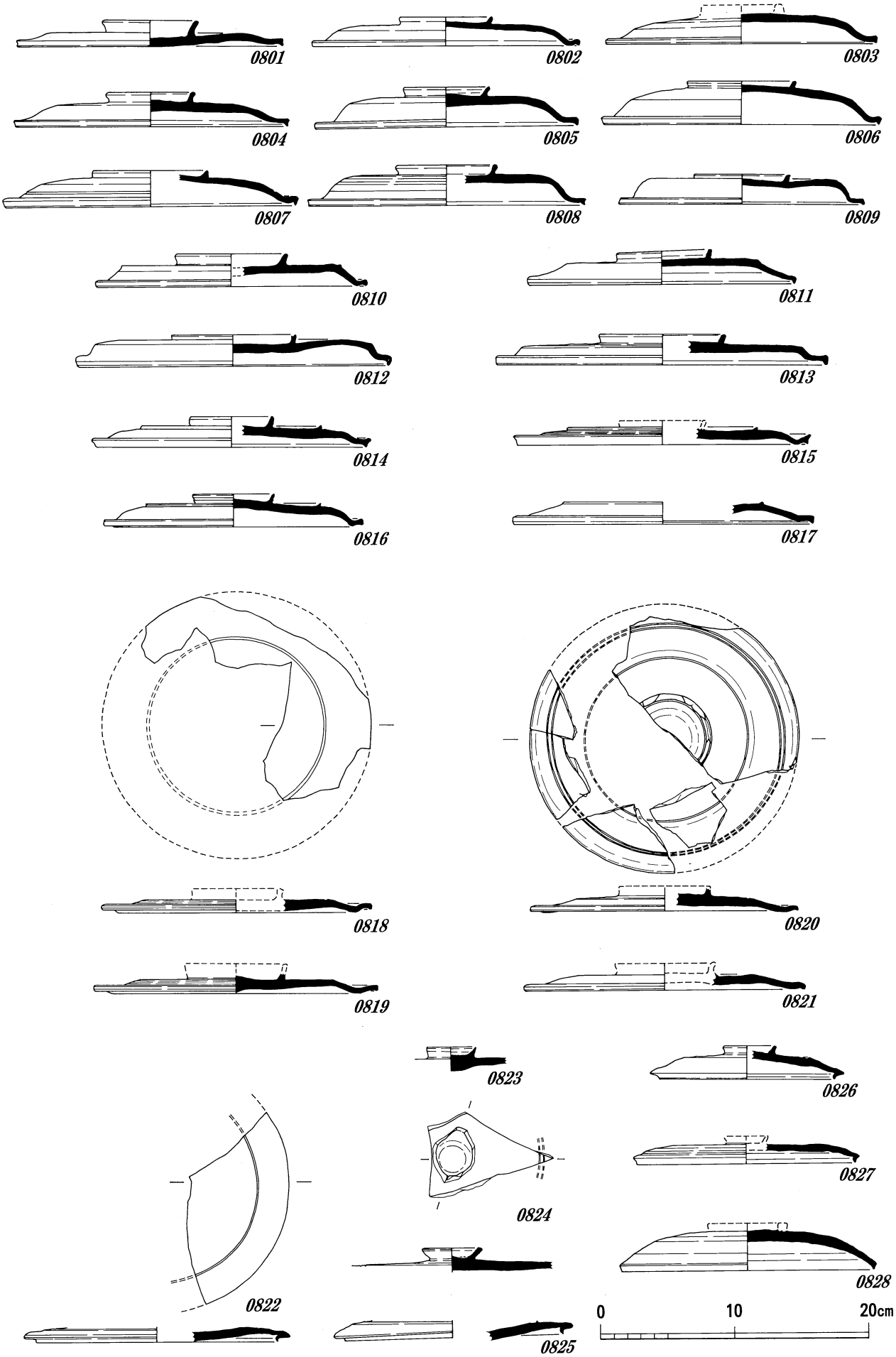
中谷4号窯灰原出土遺物5

第7図



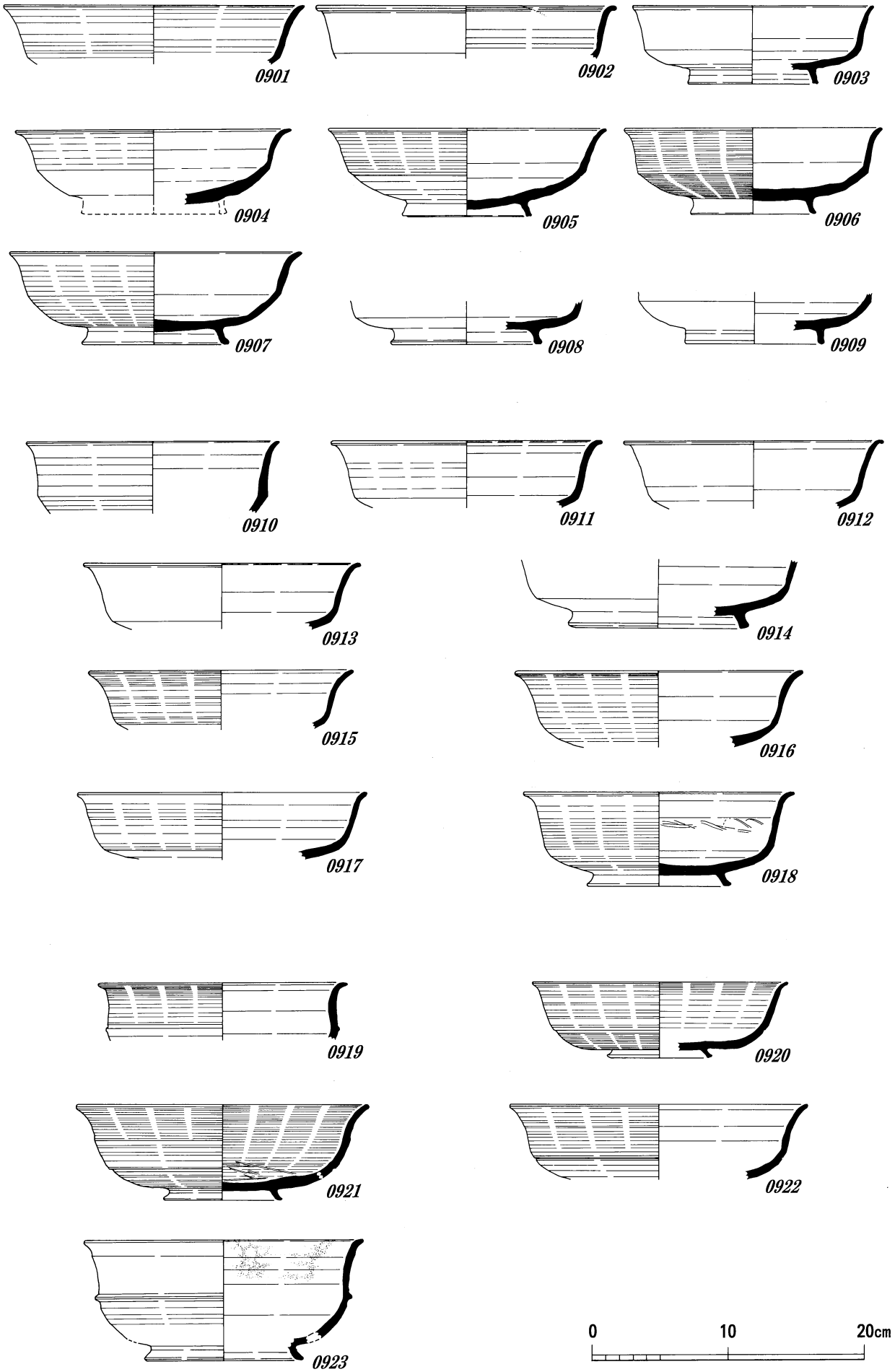
第8図

中谷4号窯灰原出土遺物6



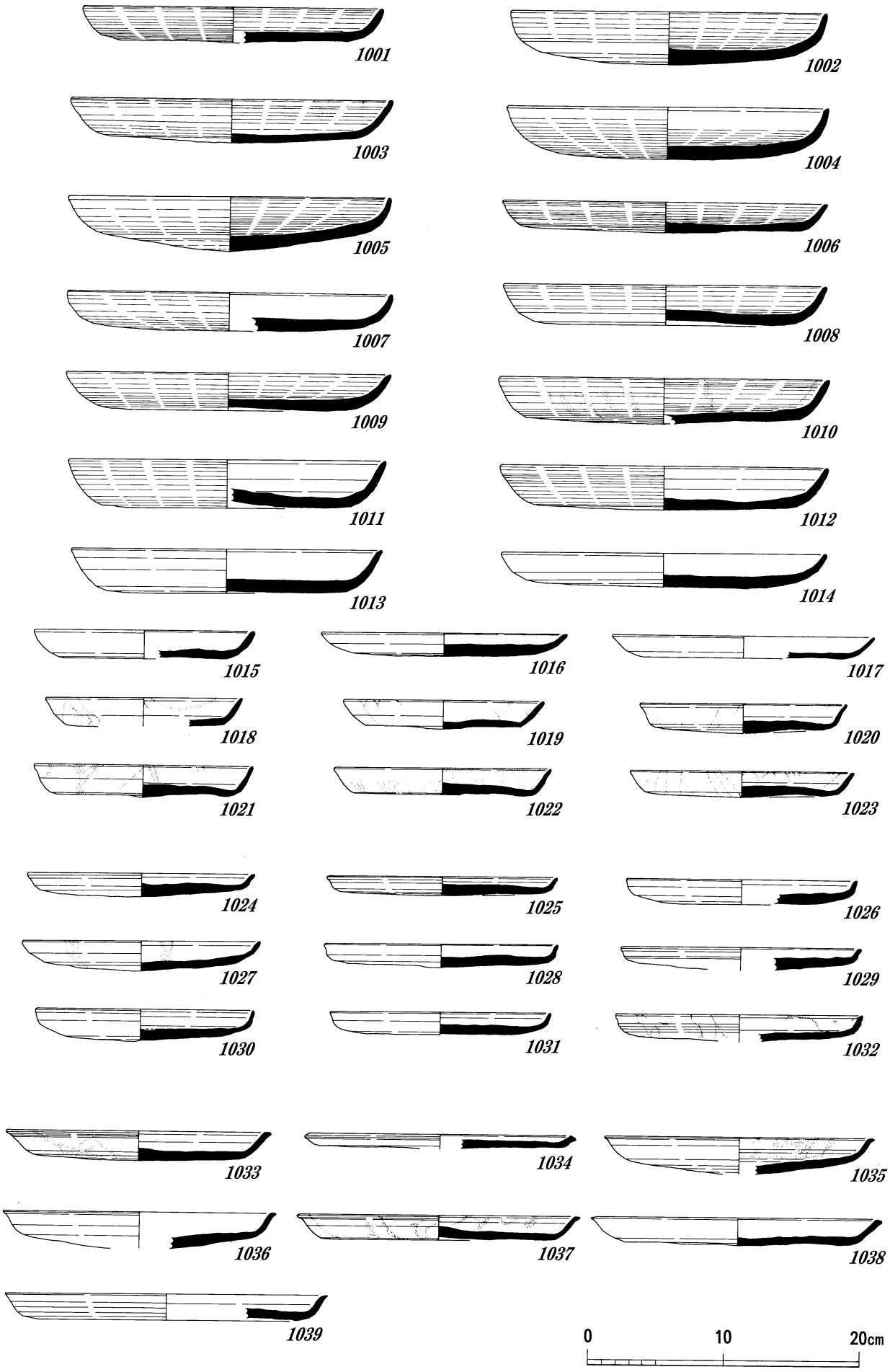
中谷4号窯灰原出土遺物7

第9図



第10図

中谷4号窯灰原出土遺物8

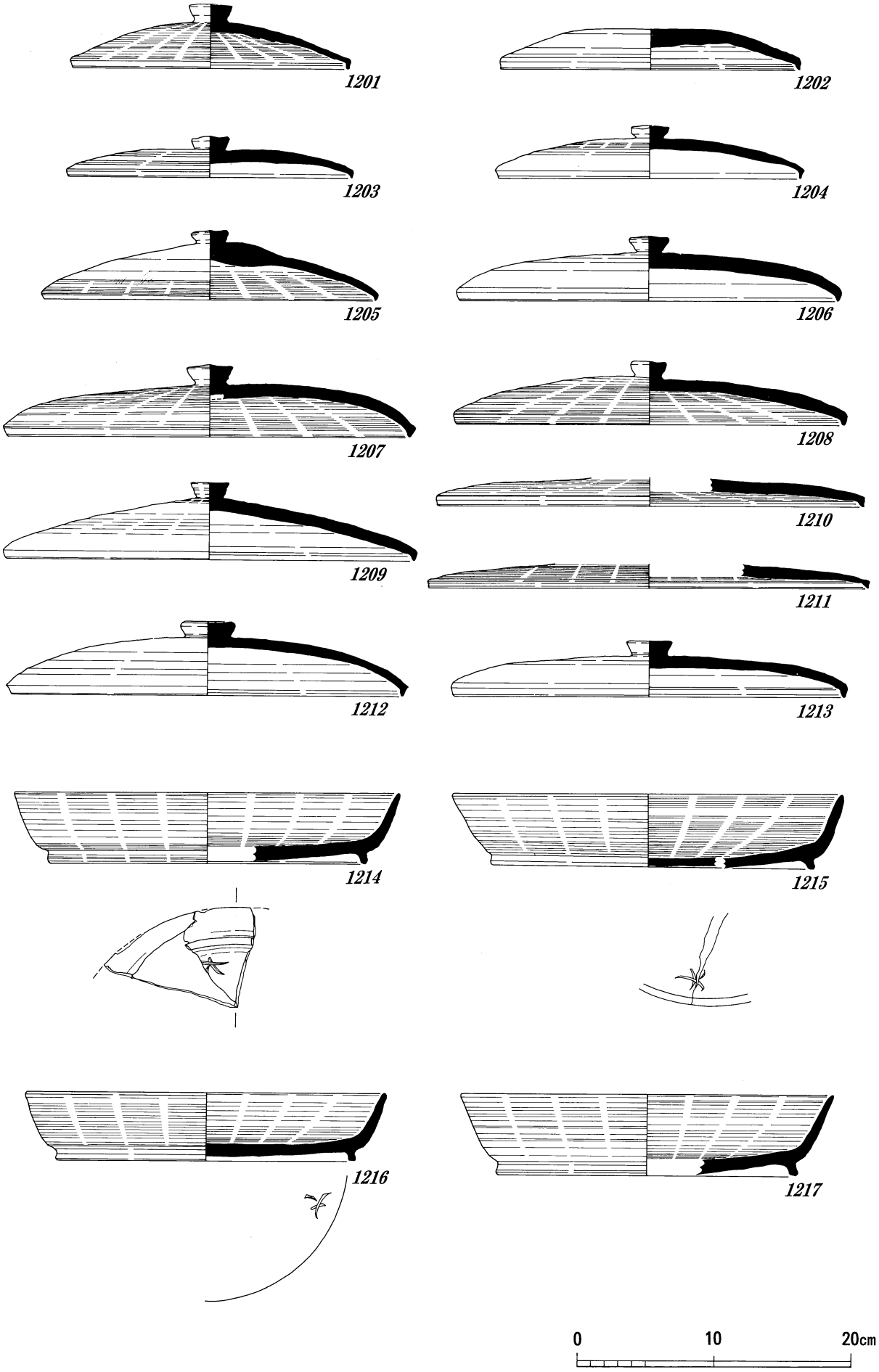


中谷4号窯灰原出土遺物9

第11図

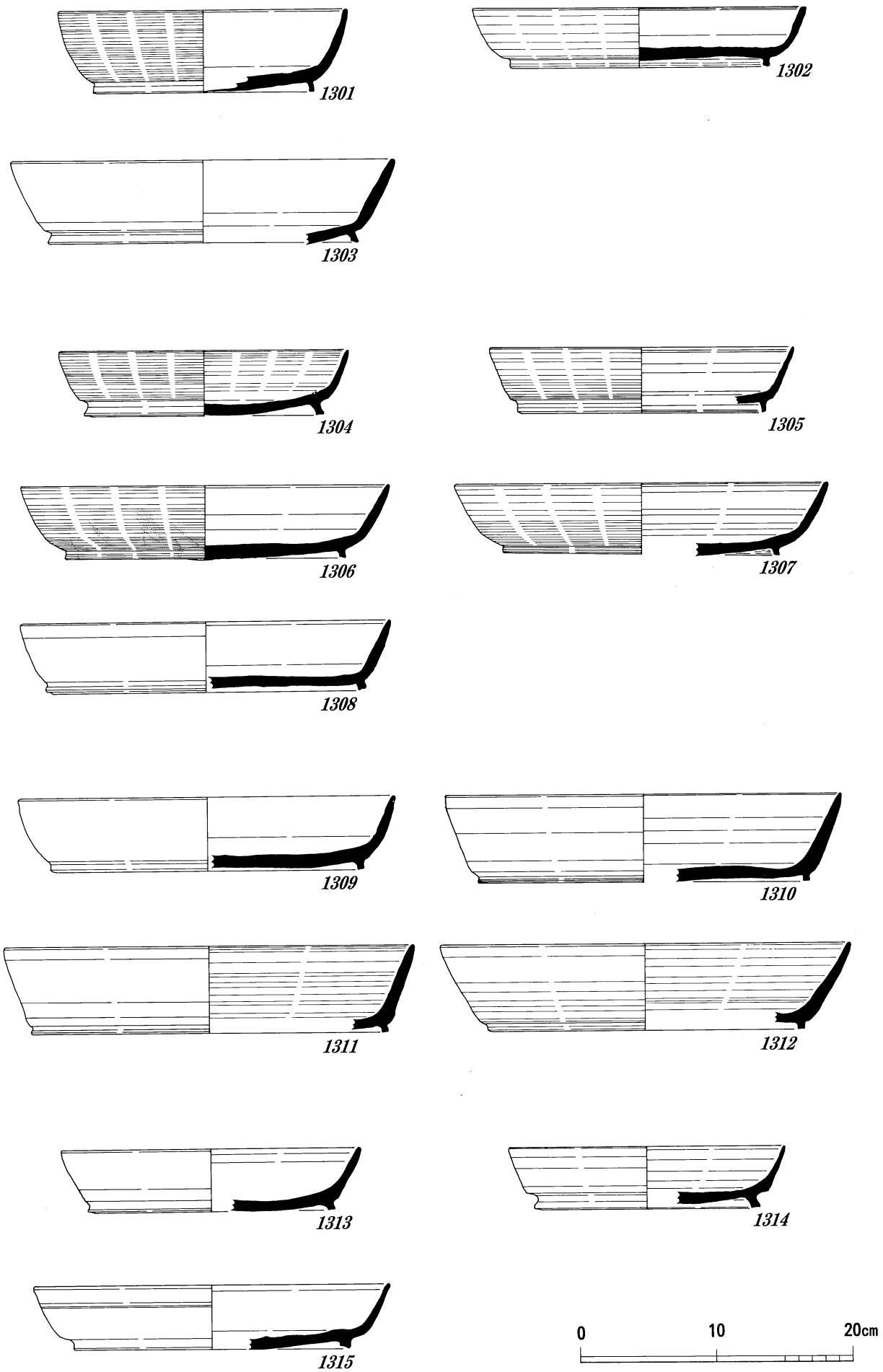
第12図

中谷4号窯灰原出土遺物10



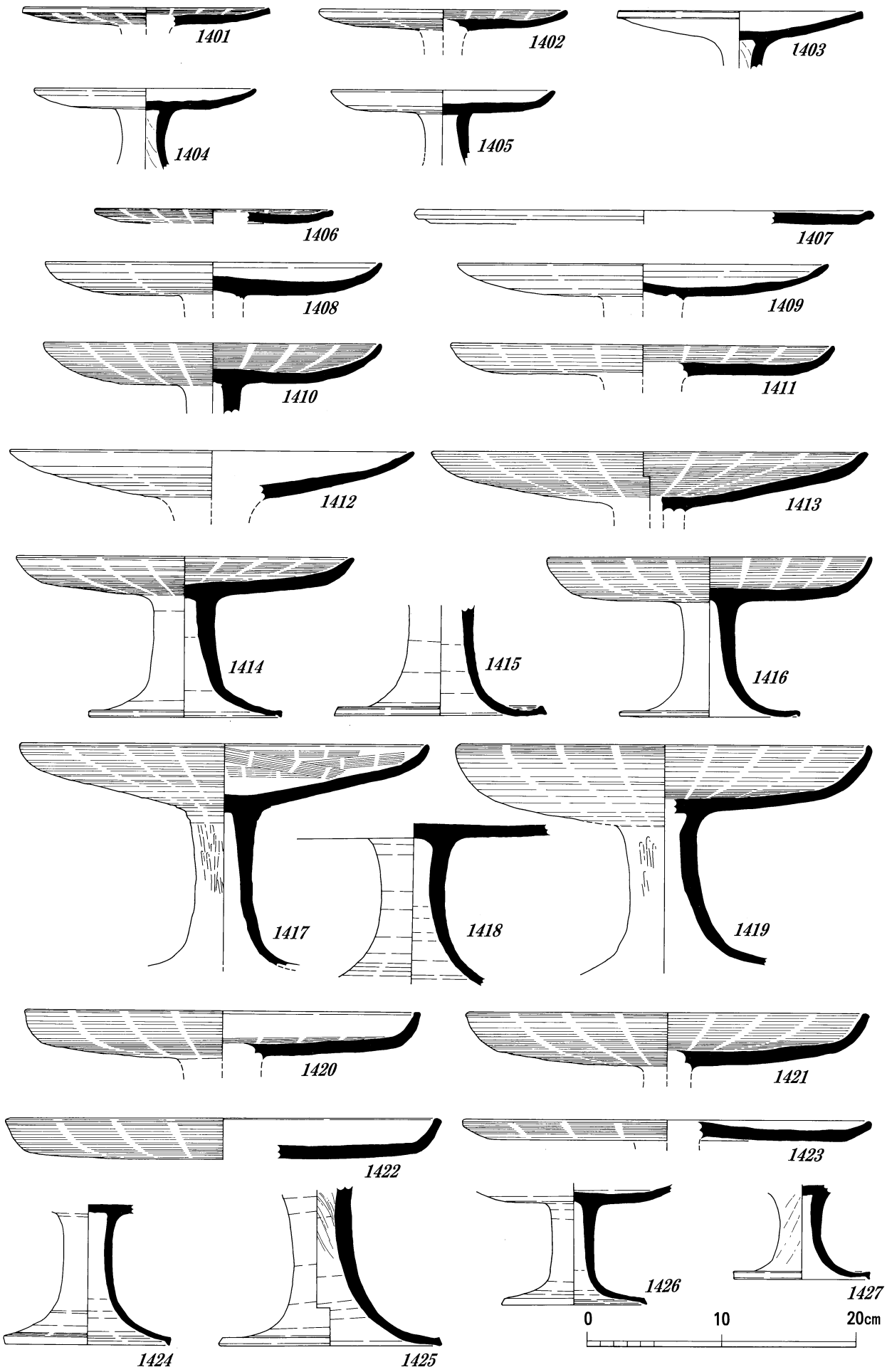
中谷4号窯灰原出土遺物11

第13図



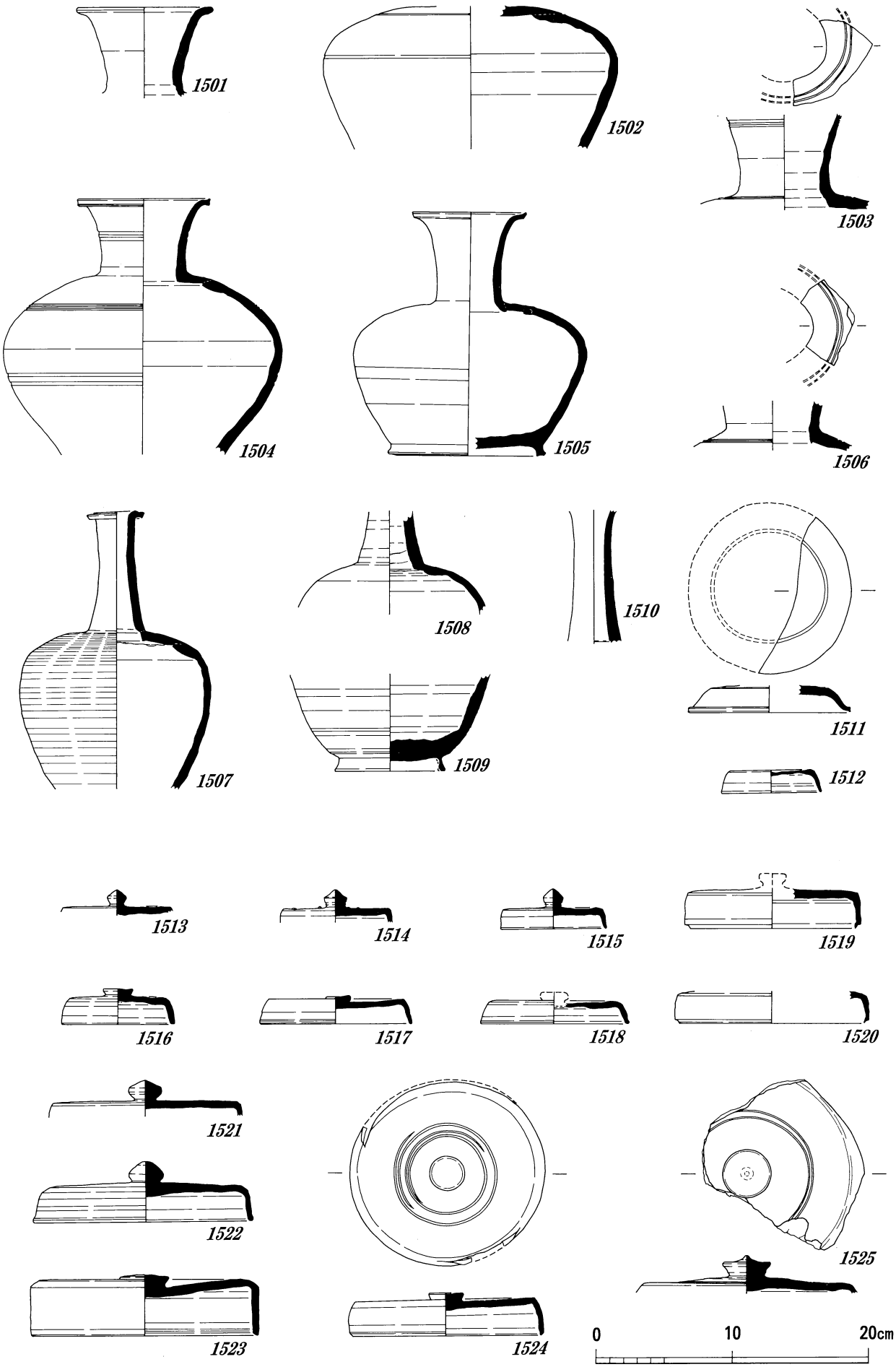
第14図

中谷4号窯灰原出土遺物12



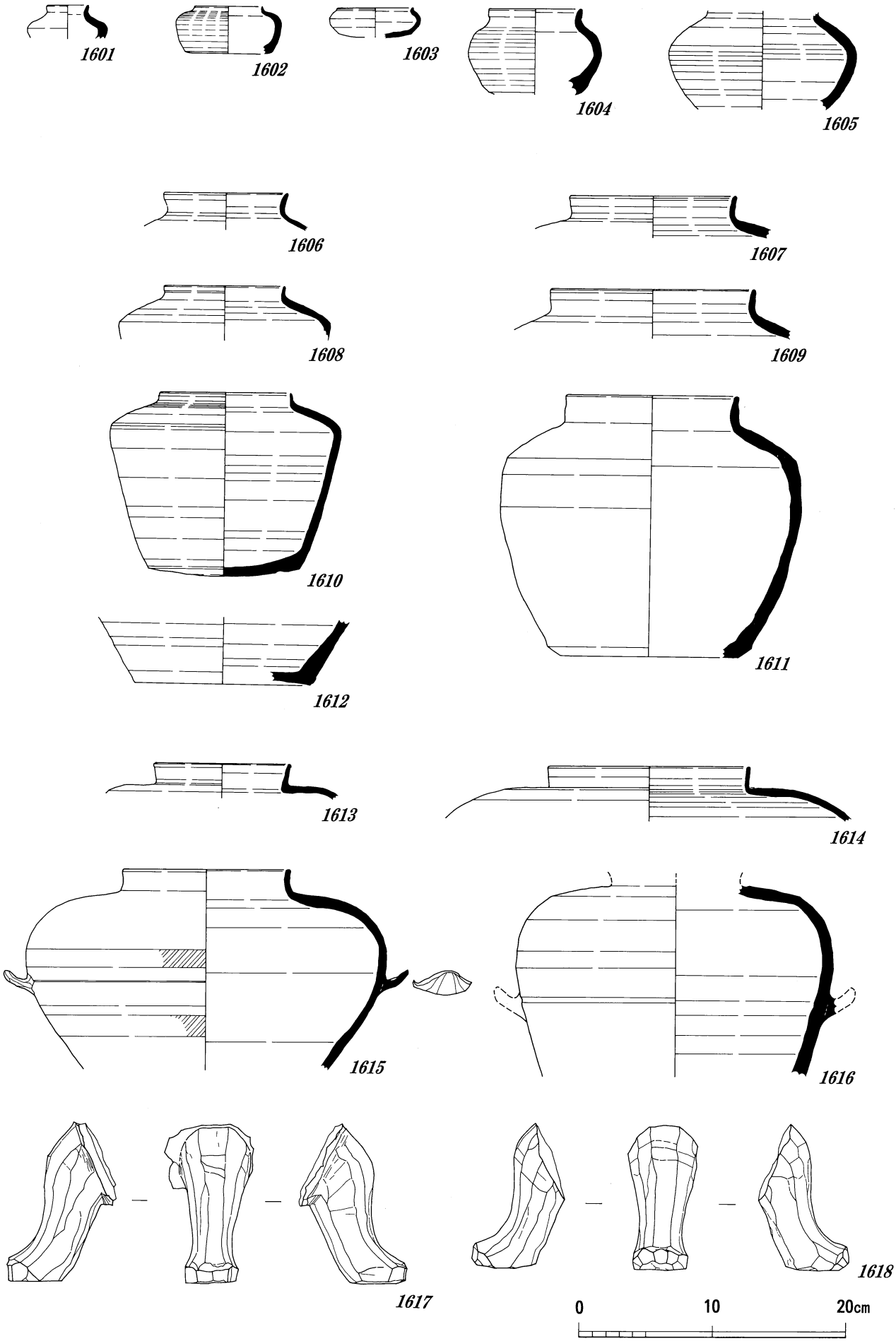
中谷4号窯灰原出土遺物13

第15図



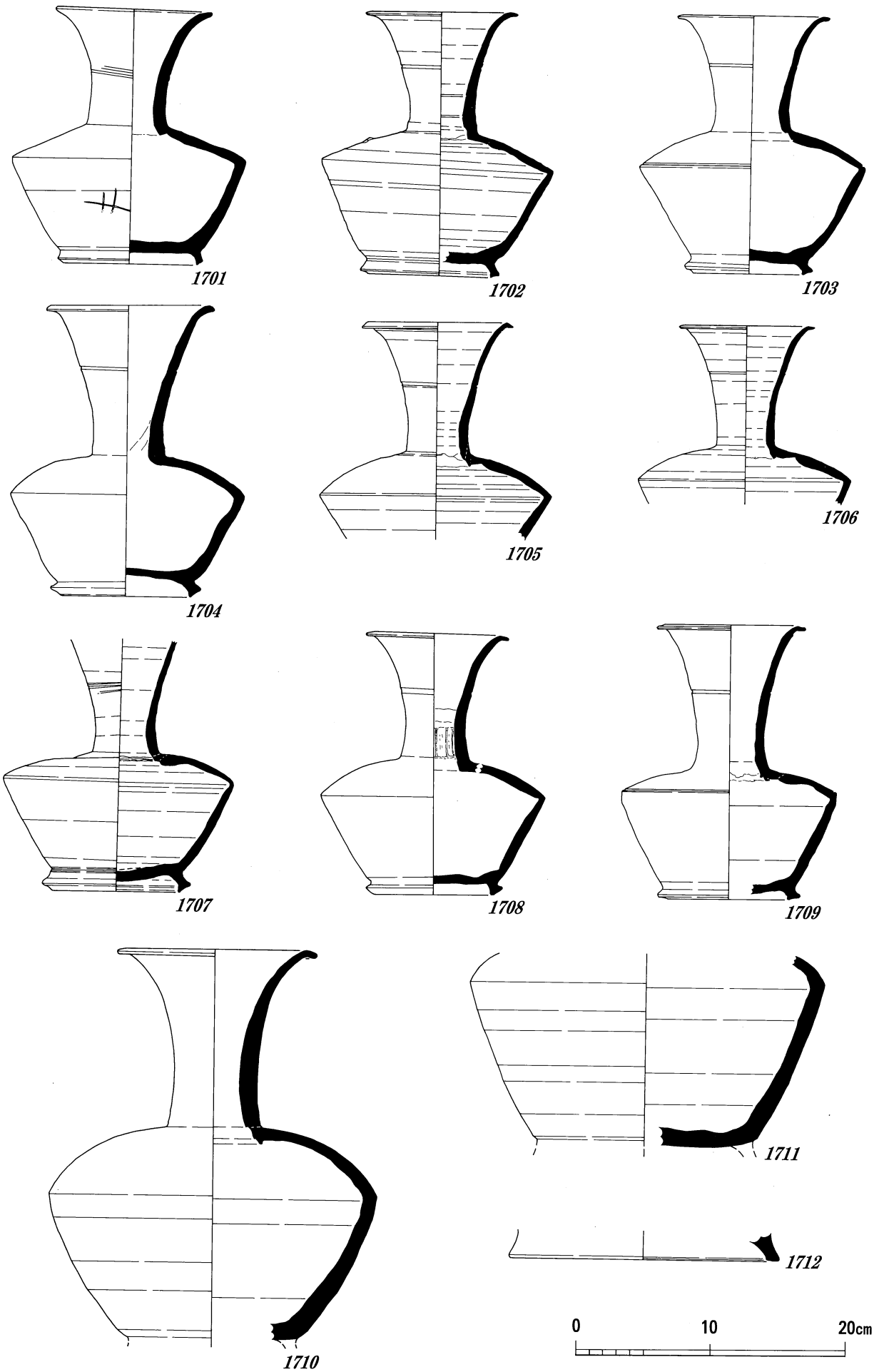
第16図

中谷4号窯灰原出土遺物14



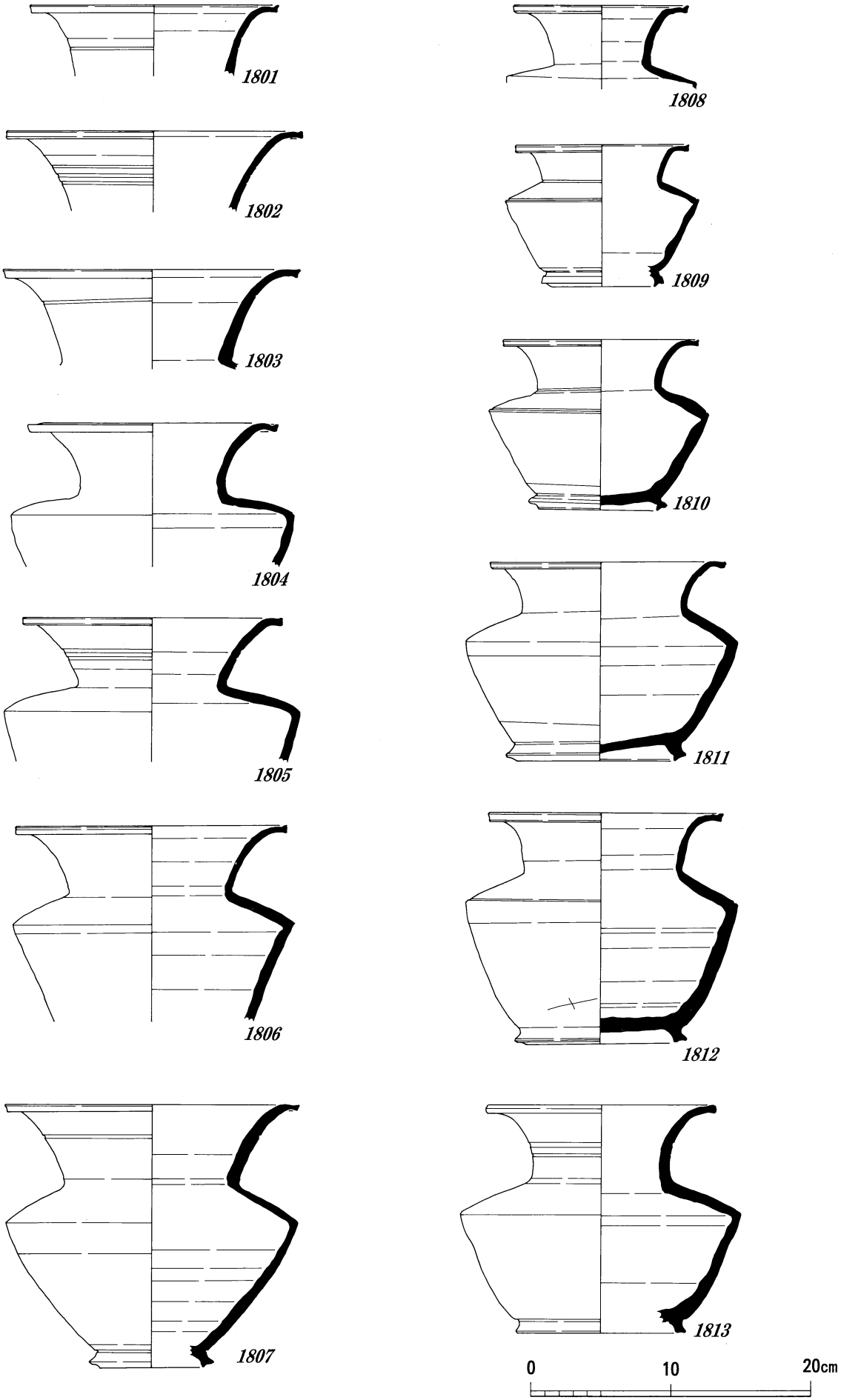
中谷4号窯灰原出土遺物15

第17図



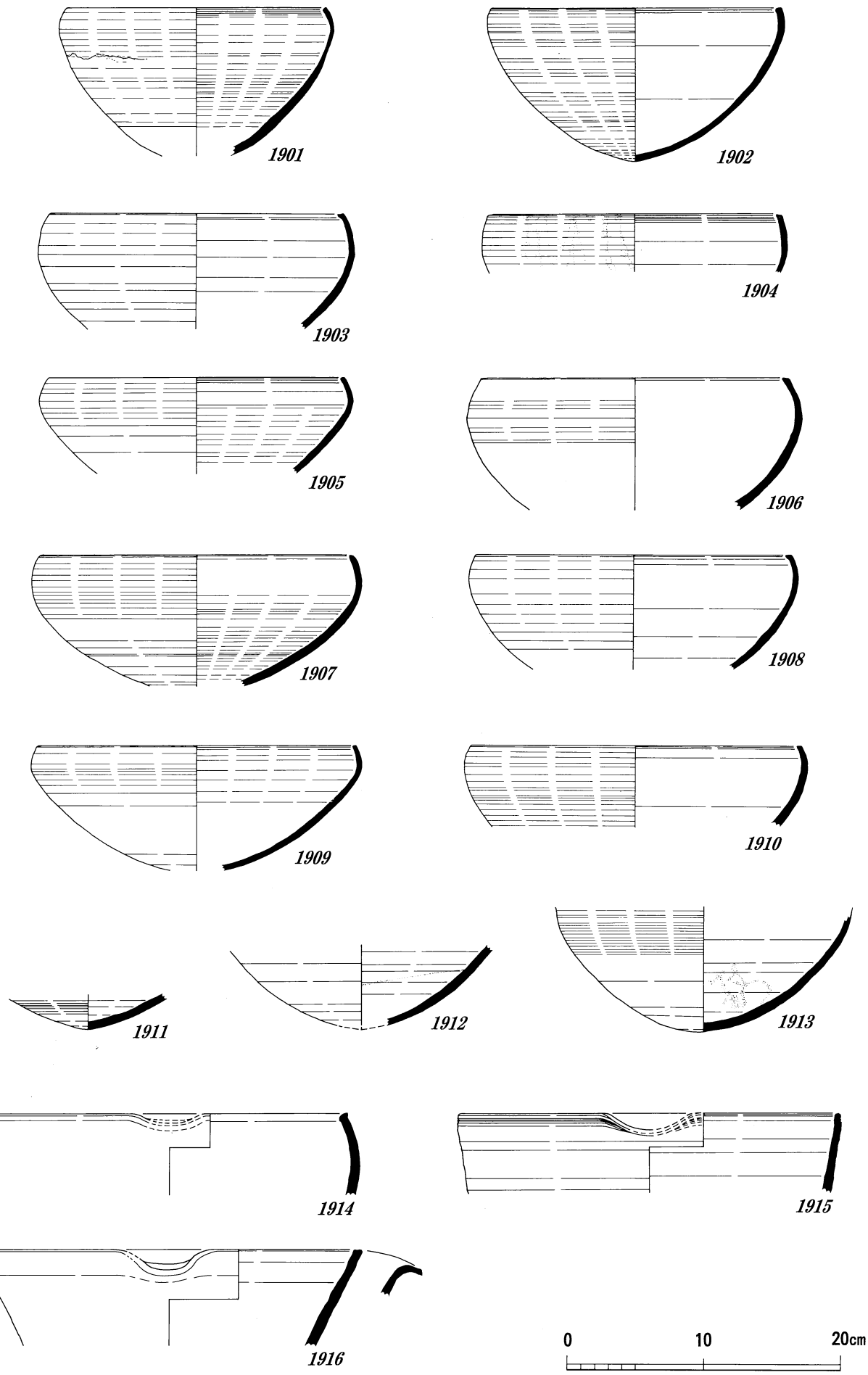
第18図

中谷4号窯灰原出土遺物16



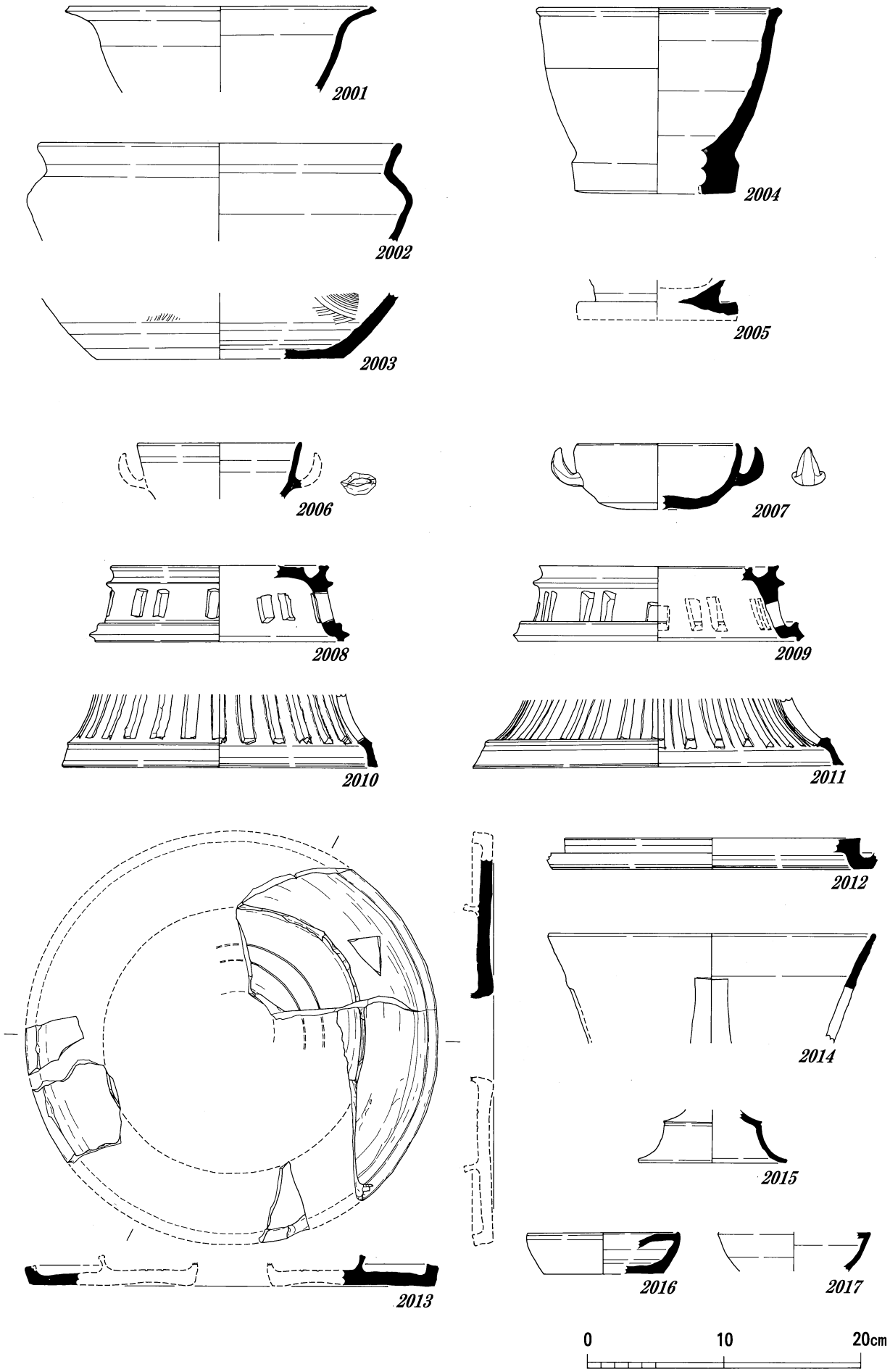
中谷4号窯灰原出土遺物17

第19図



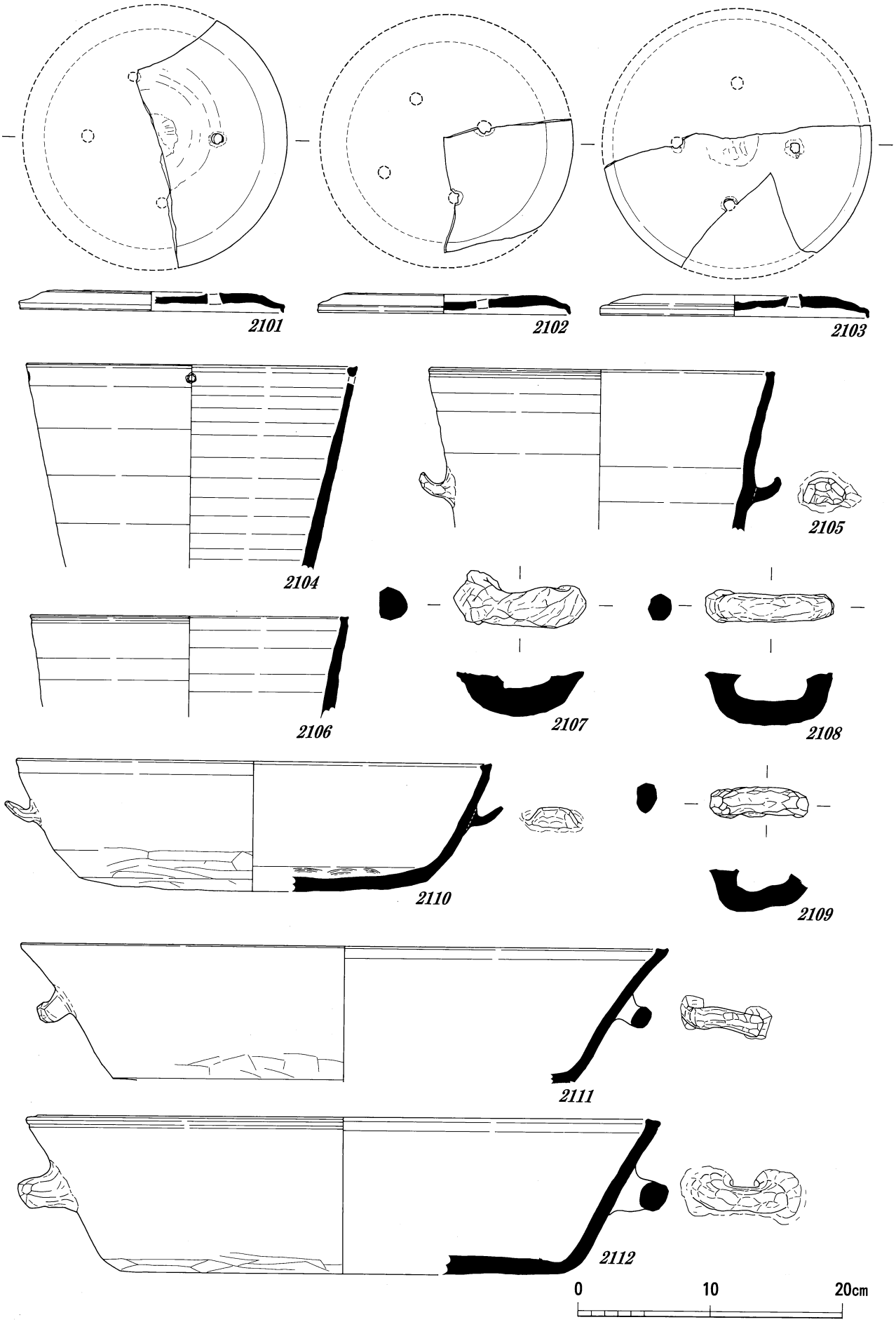
第20図

中谷4号窯灰原出土遺物18



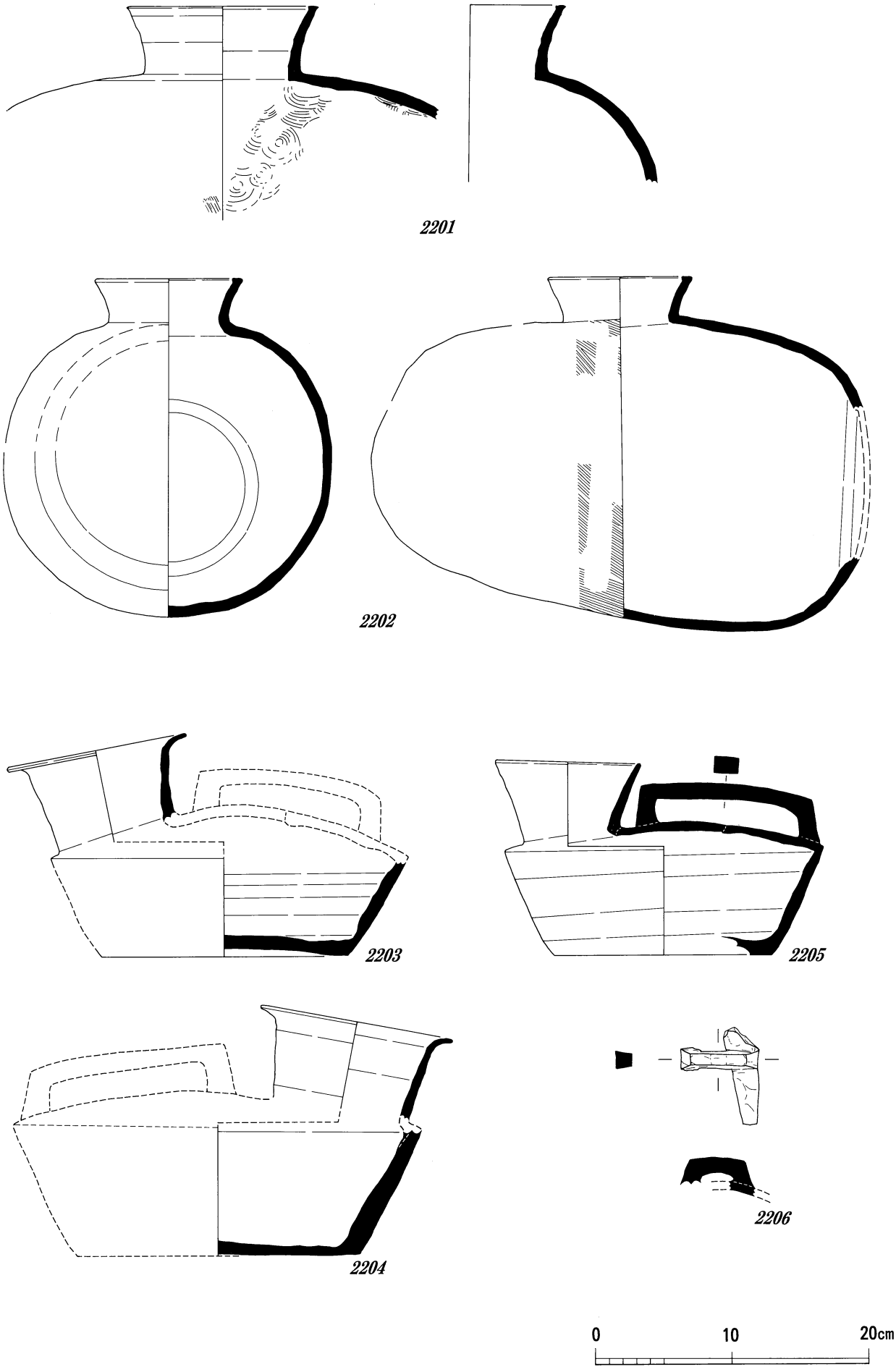
中谷4号窯灰原出土遺物19

第21図



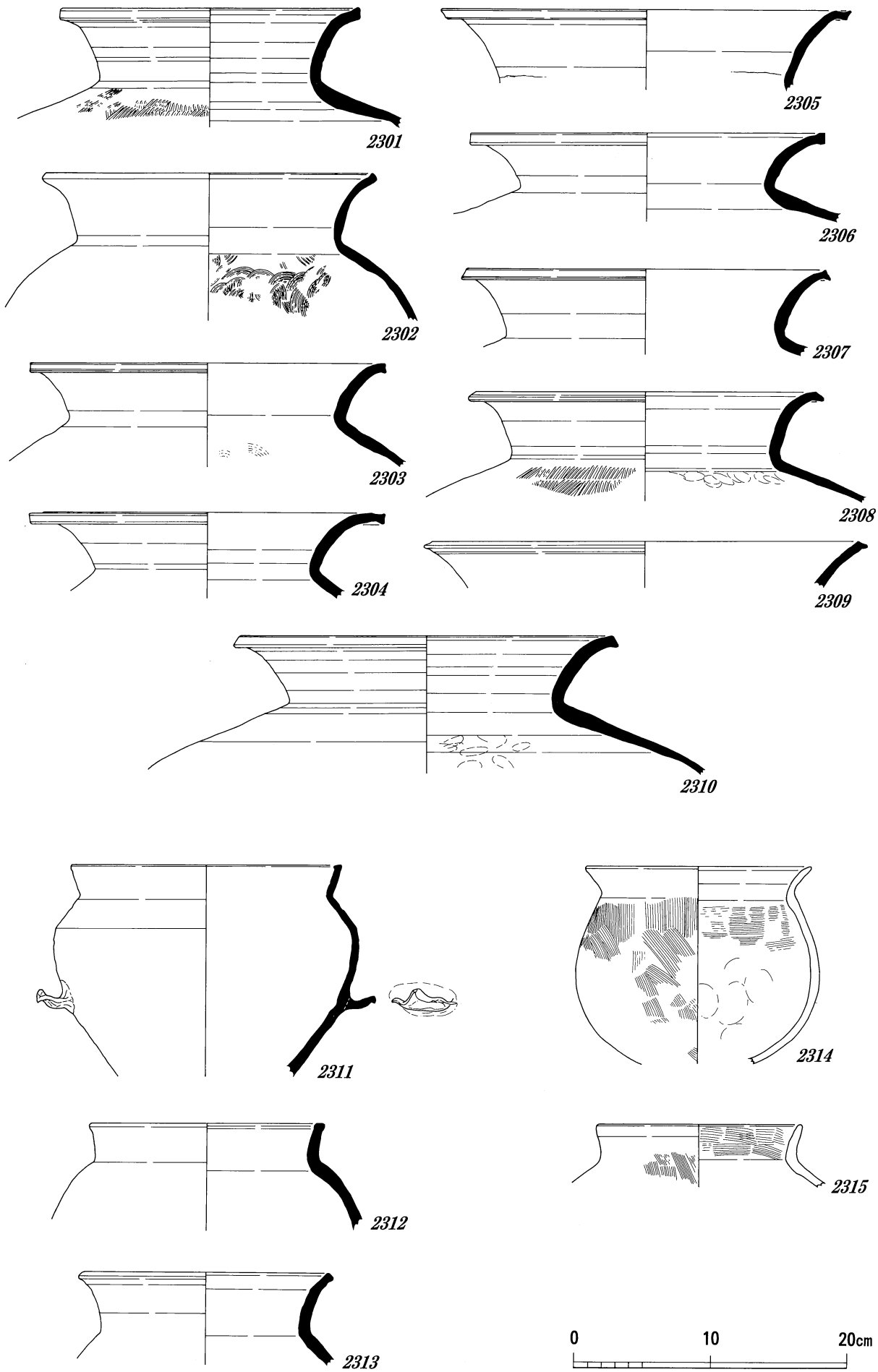
第22図

中谷4号窯灰原出土遺物20



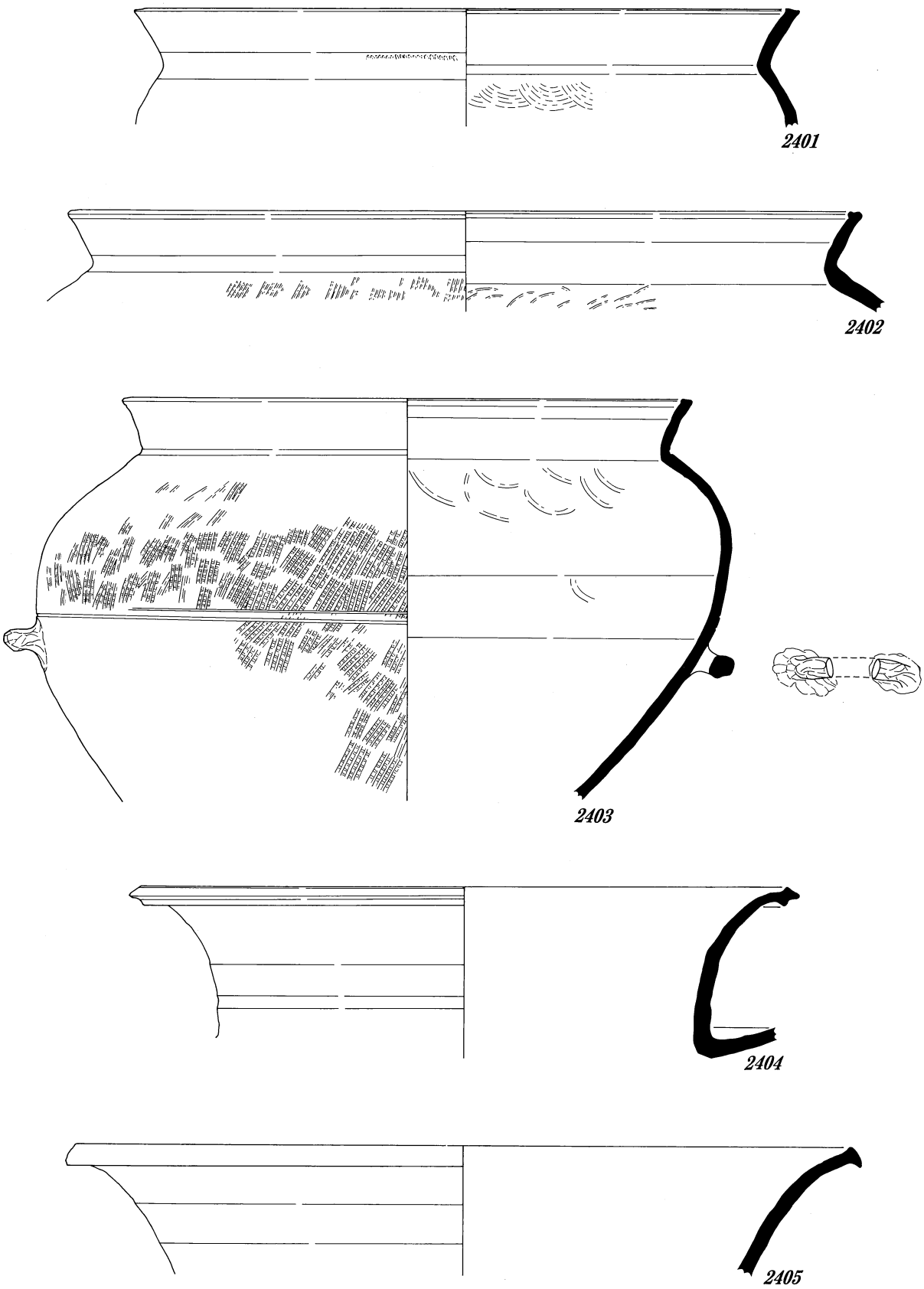
中谷4号窯灰原出土遺物21

第23図



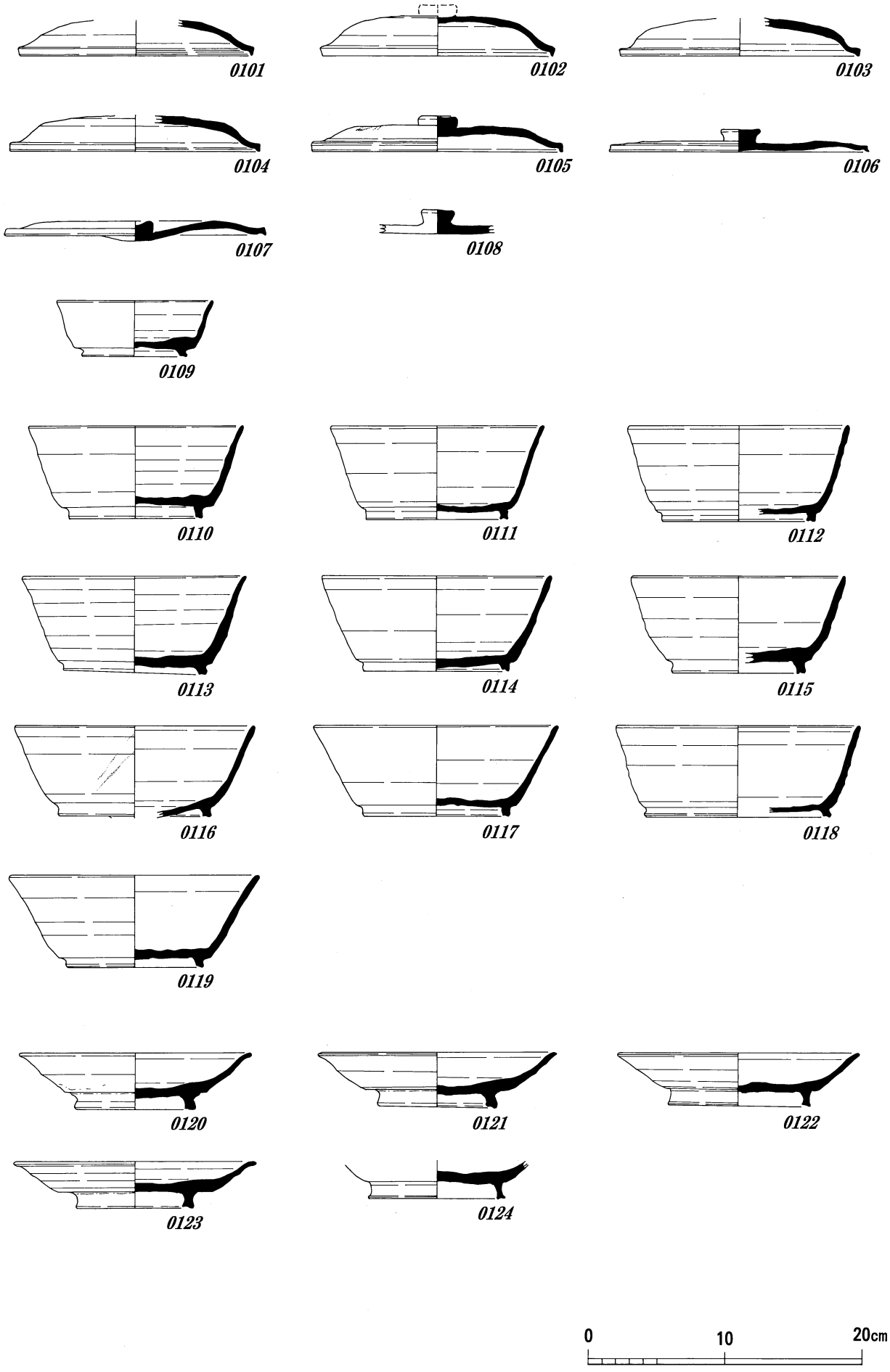
第24図

中谷4号窯灰原出土遺物22



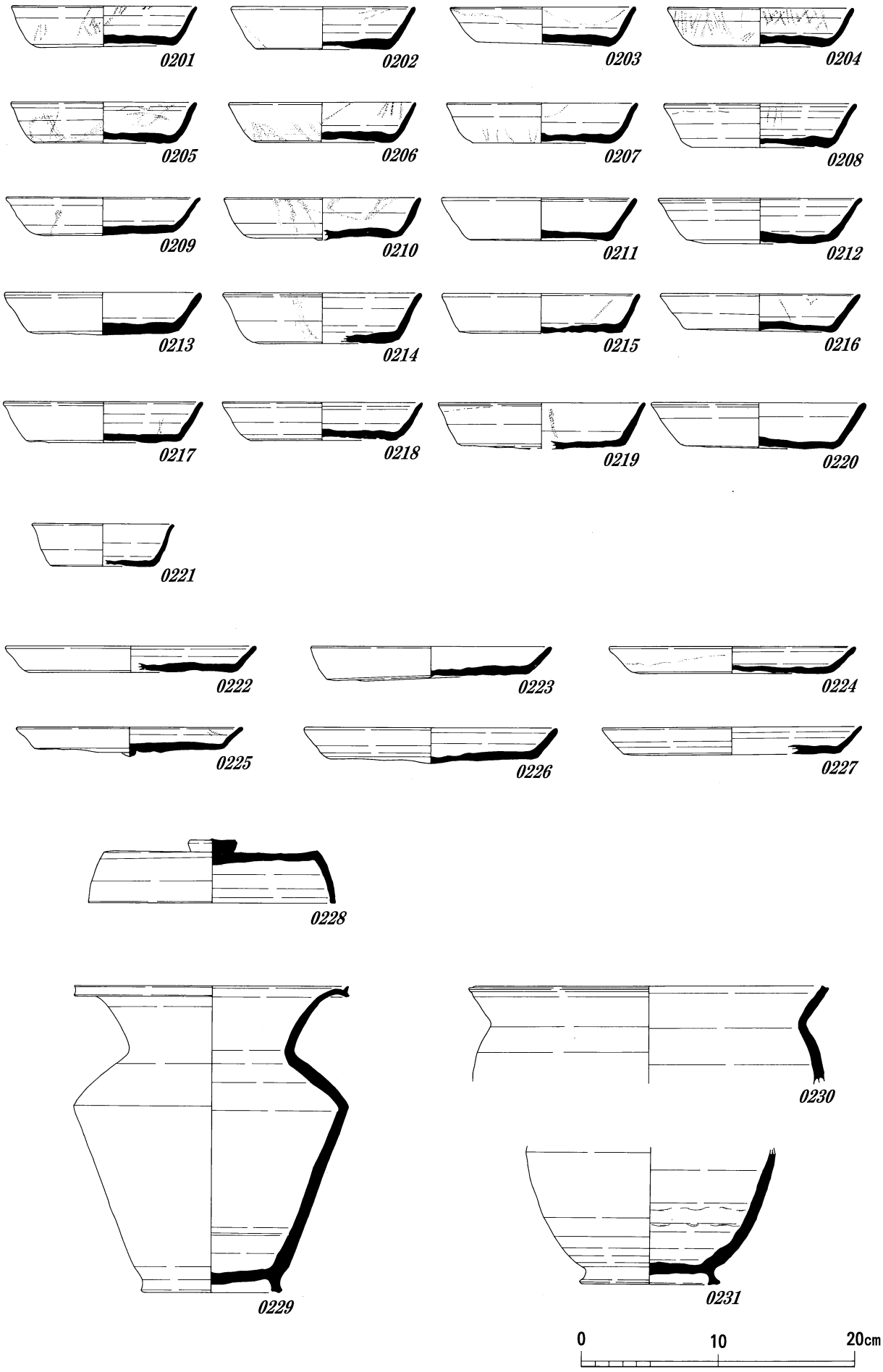
中谷1号窯窯体出土遺物1

第25図



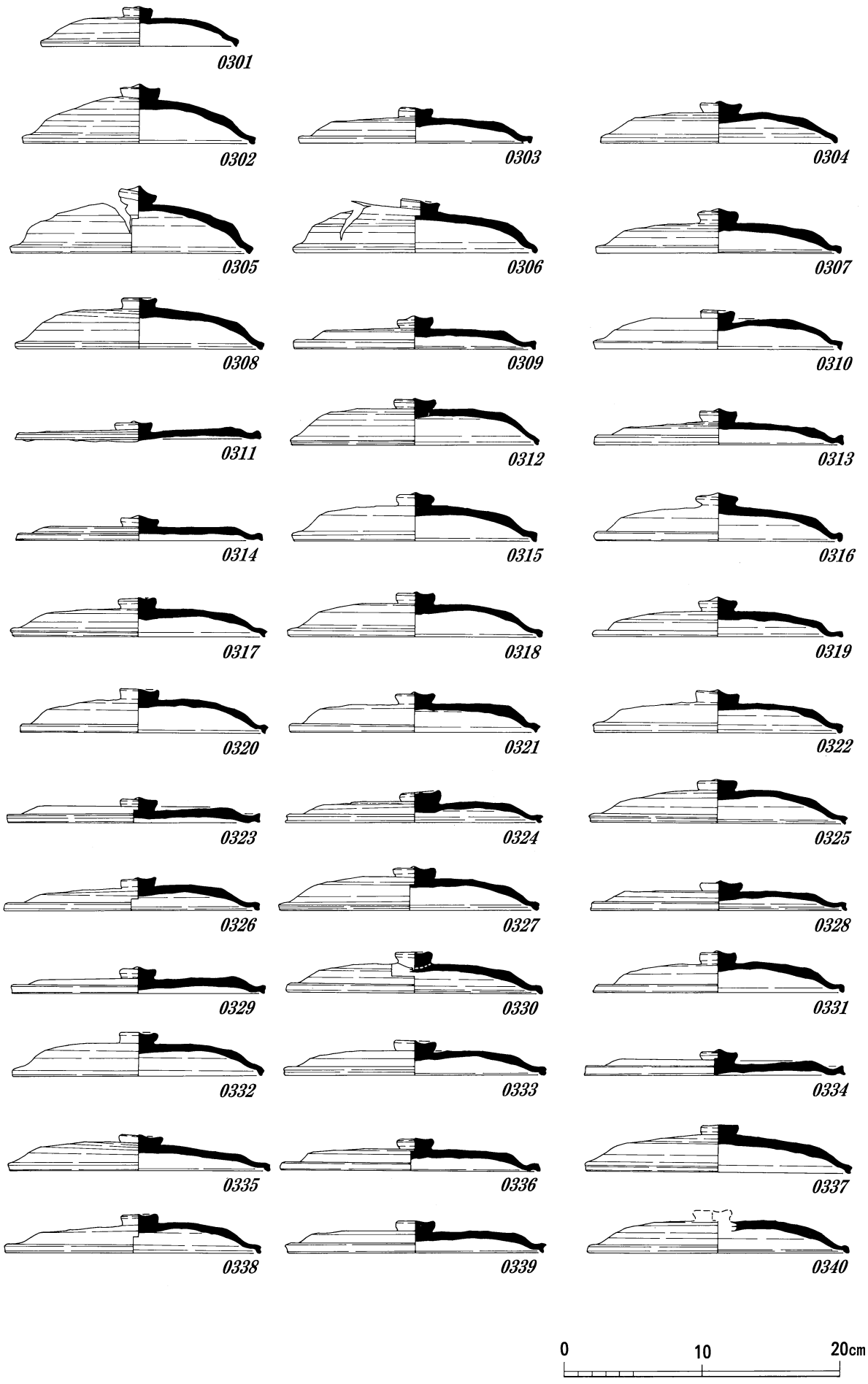
第26図

中谷1号窯窯体出土遺物2



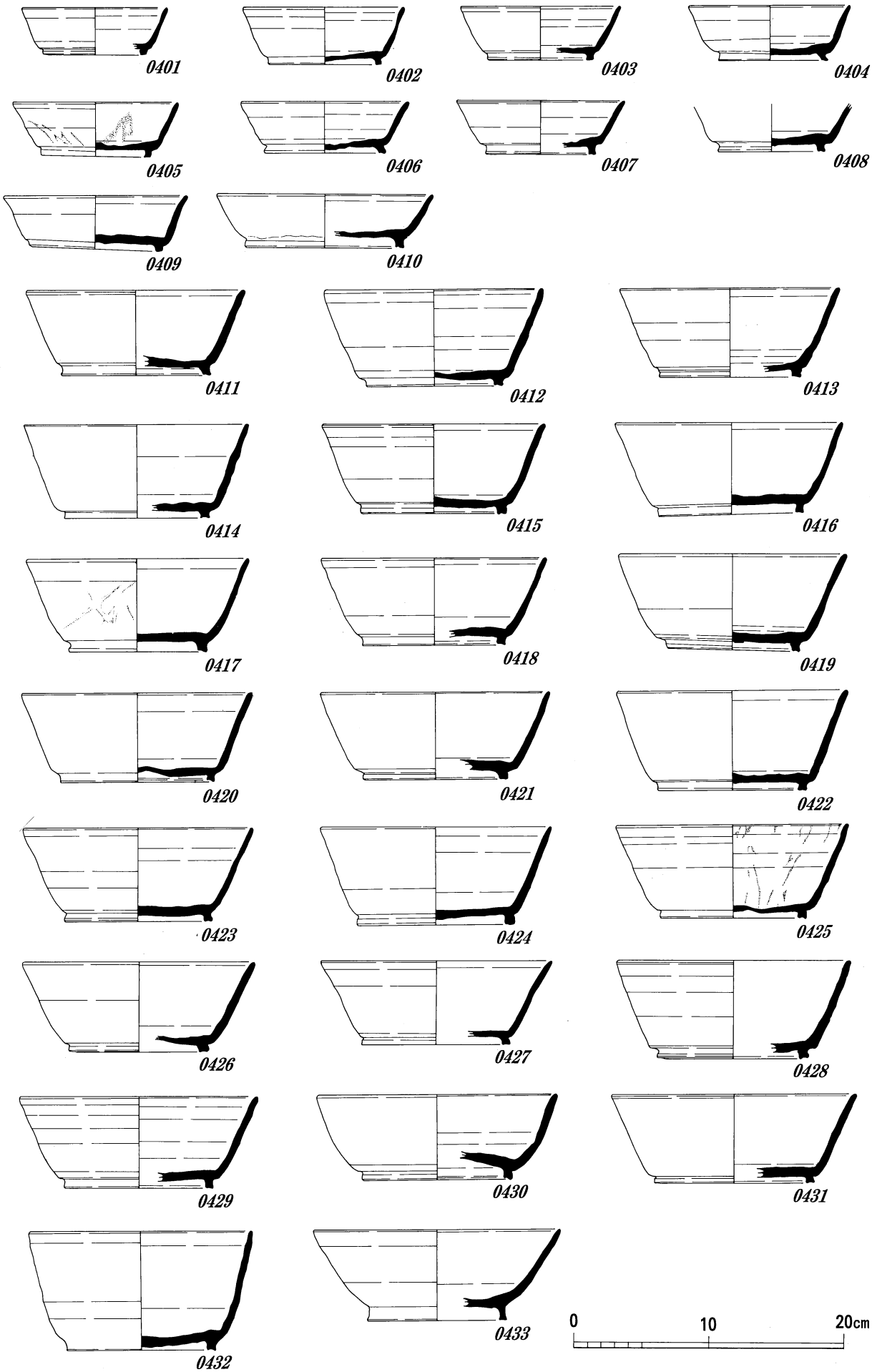
中谷1号窯灰原出土遺物1

第27図



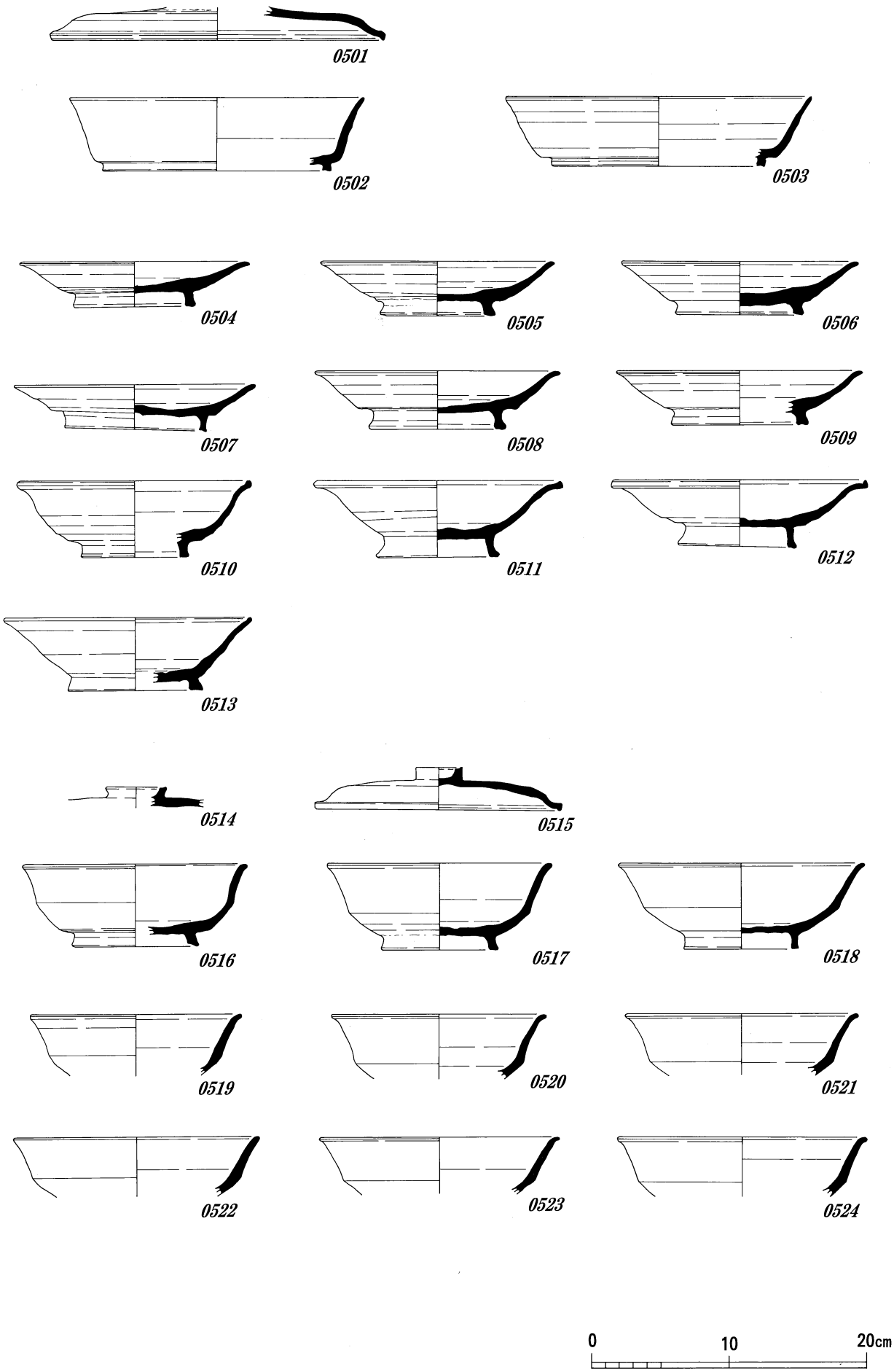
第28図

中谷1号窯灰原出土遺物2



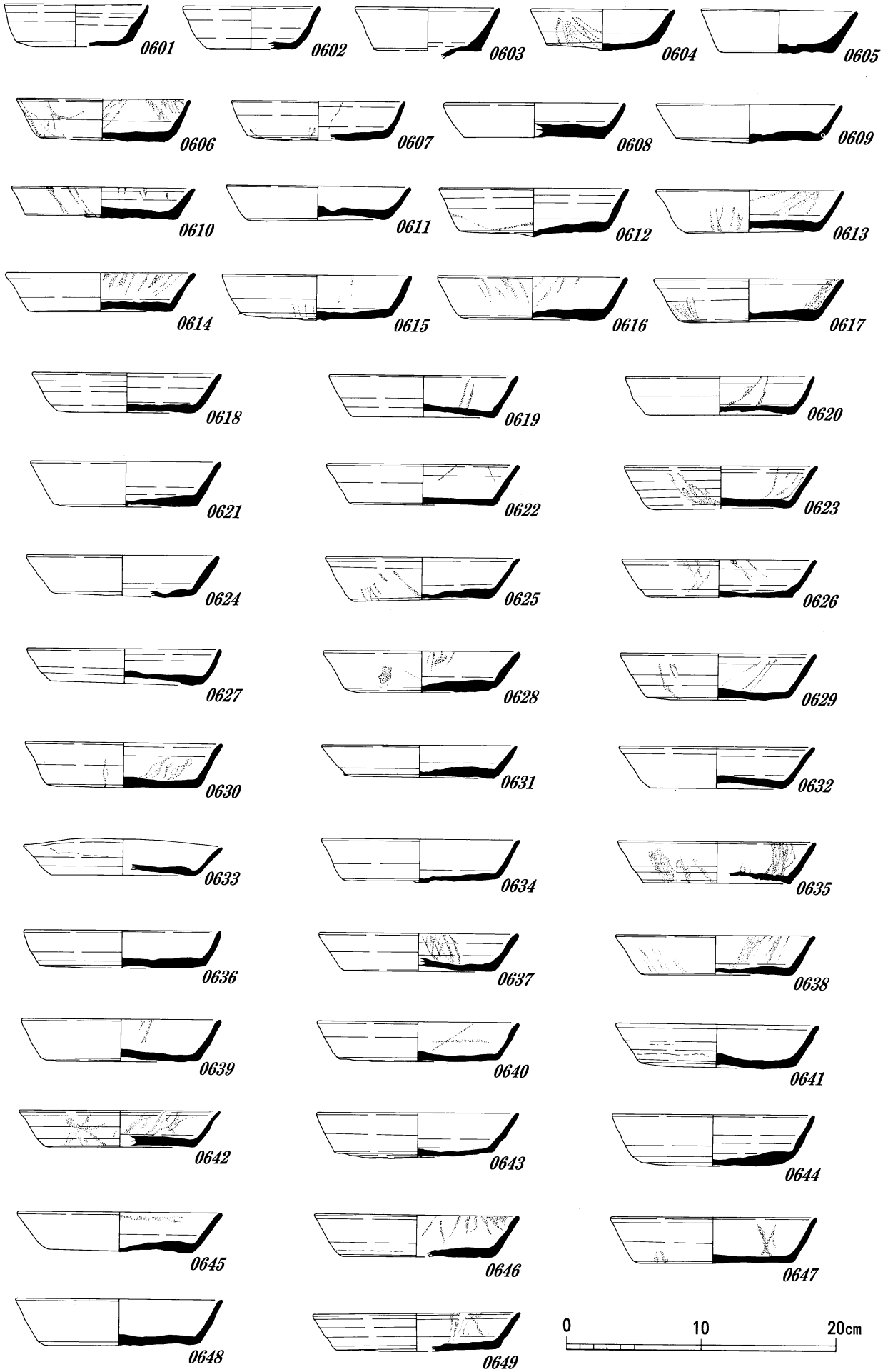
中谷1号窯灰原出土遺物3

第29図



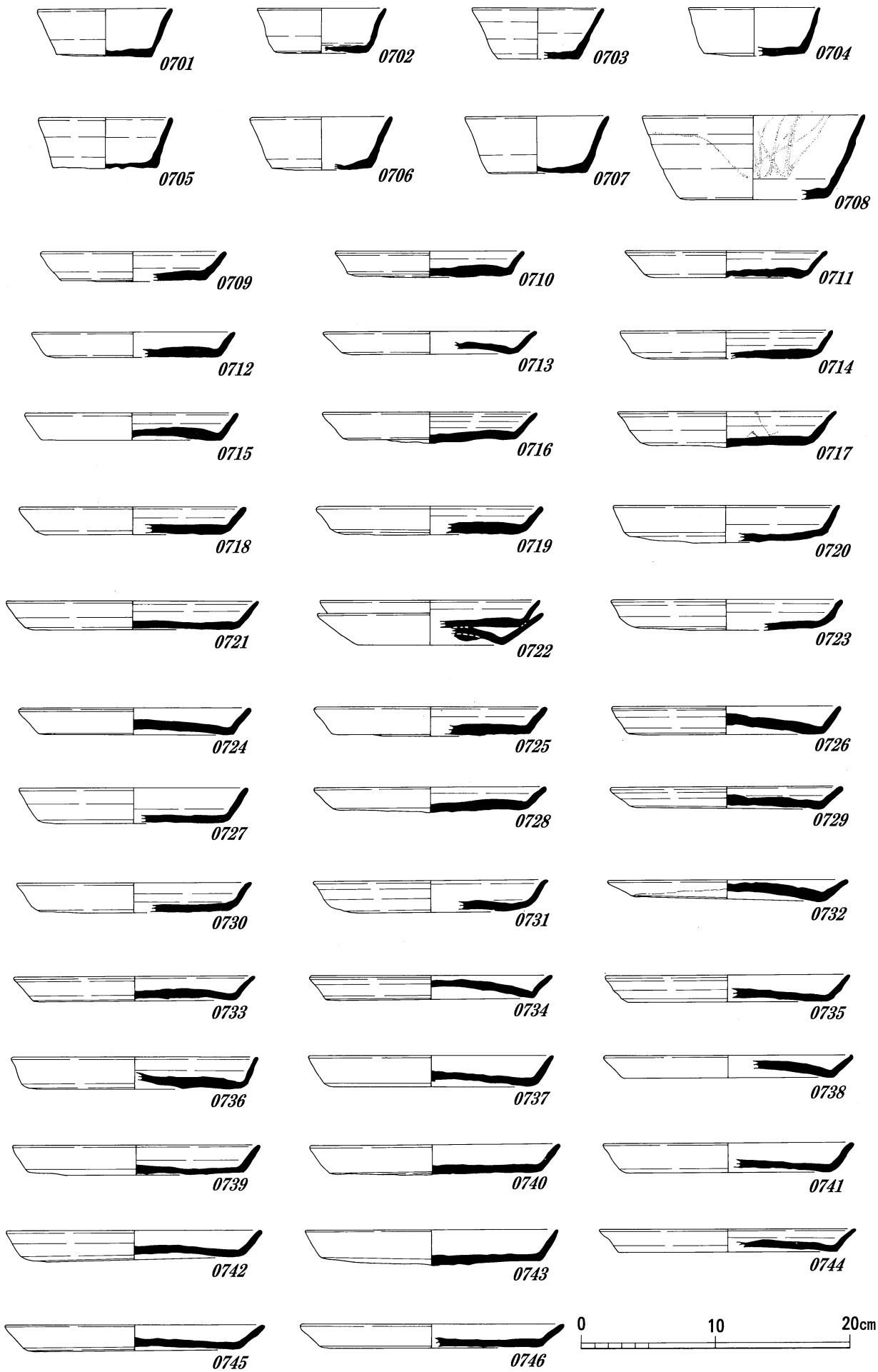
第30図

中谷1号窯灰原出土遺物4



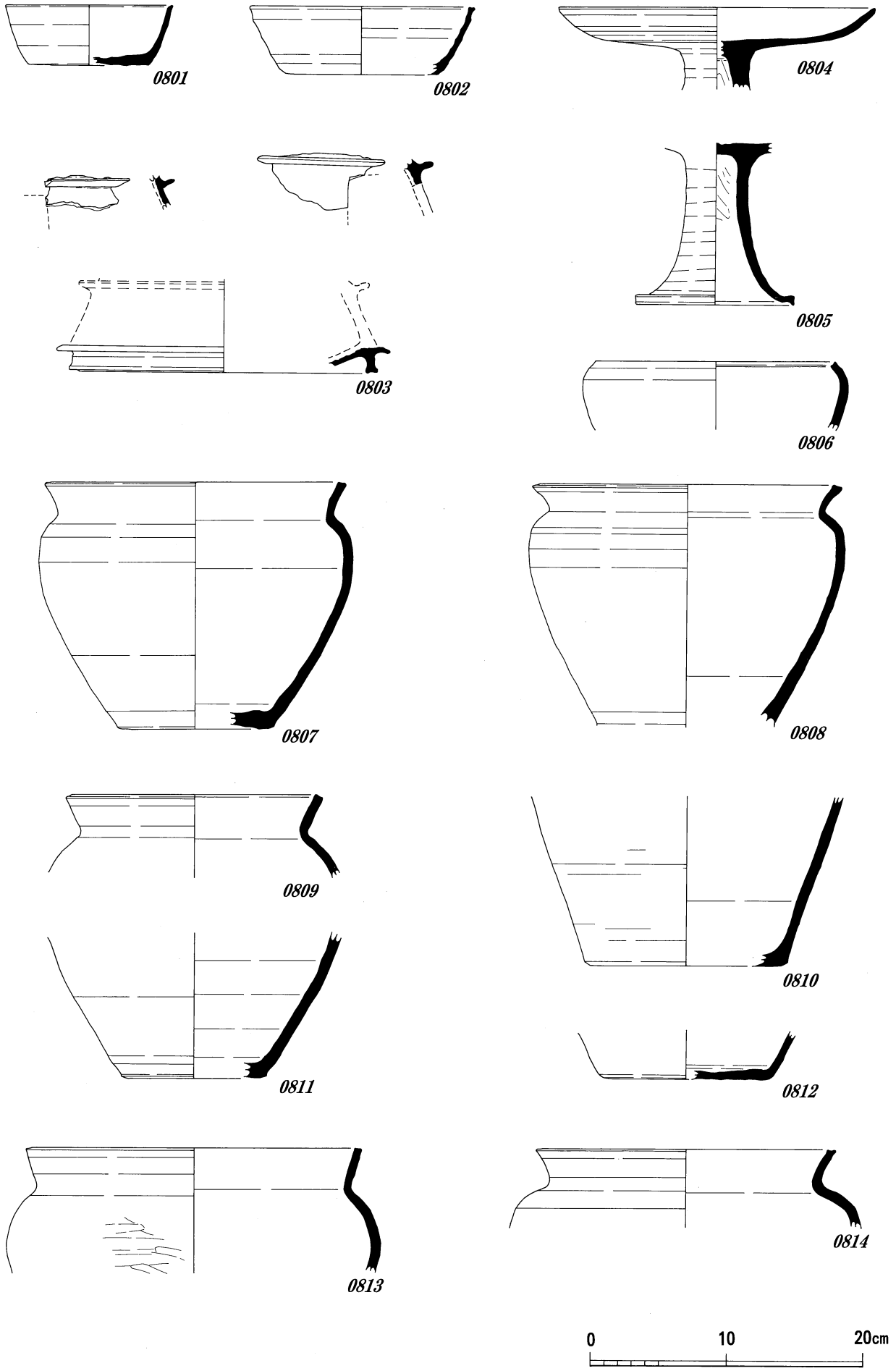
中谷1号窯灰原出土遺物5

第31図



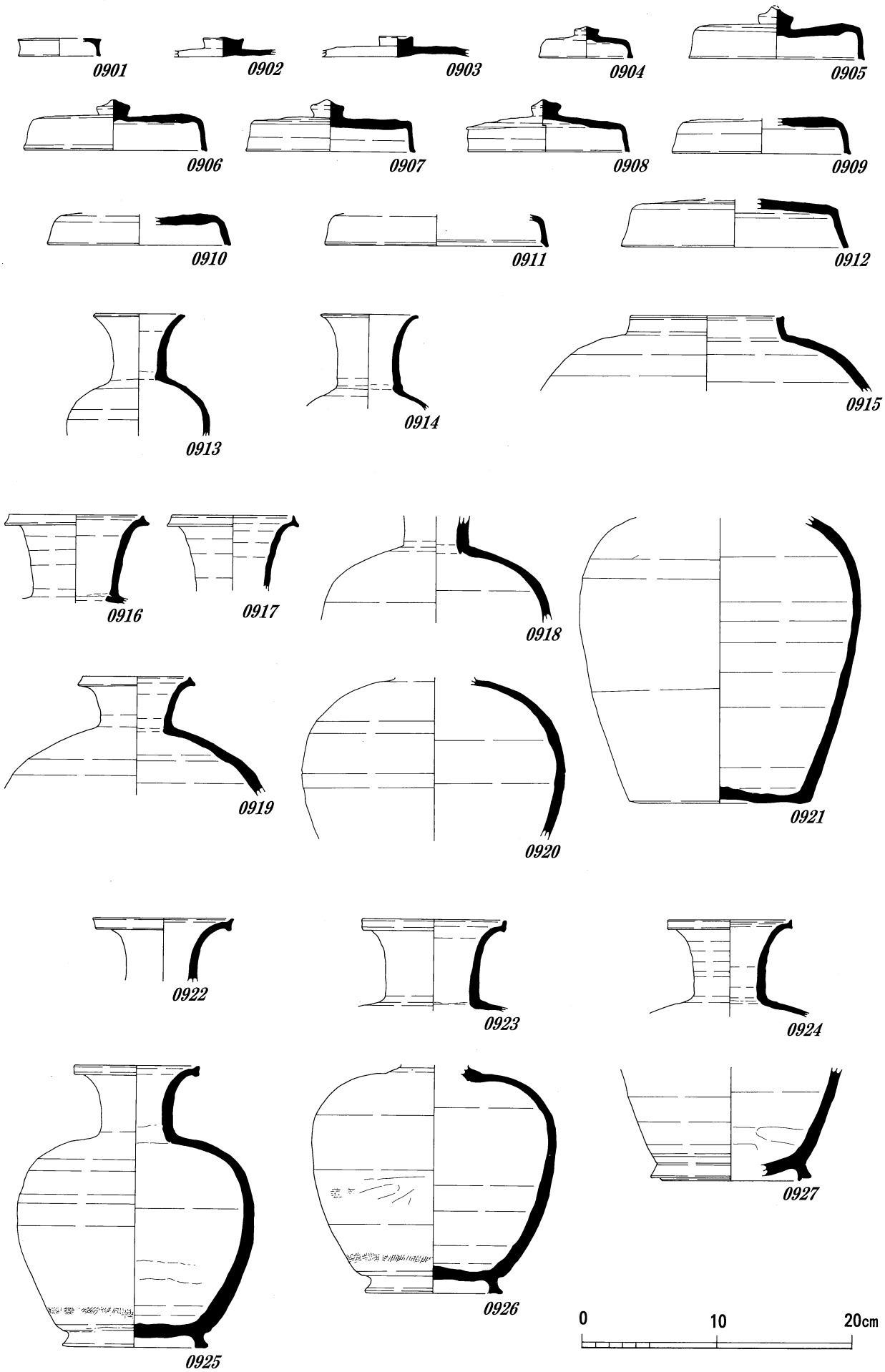
第32図

中谷1号窯灰原出土遺物6



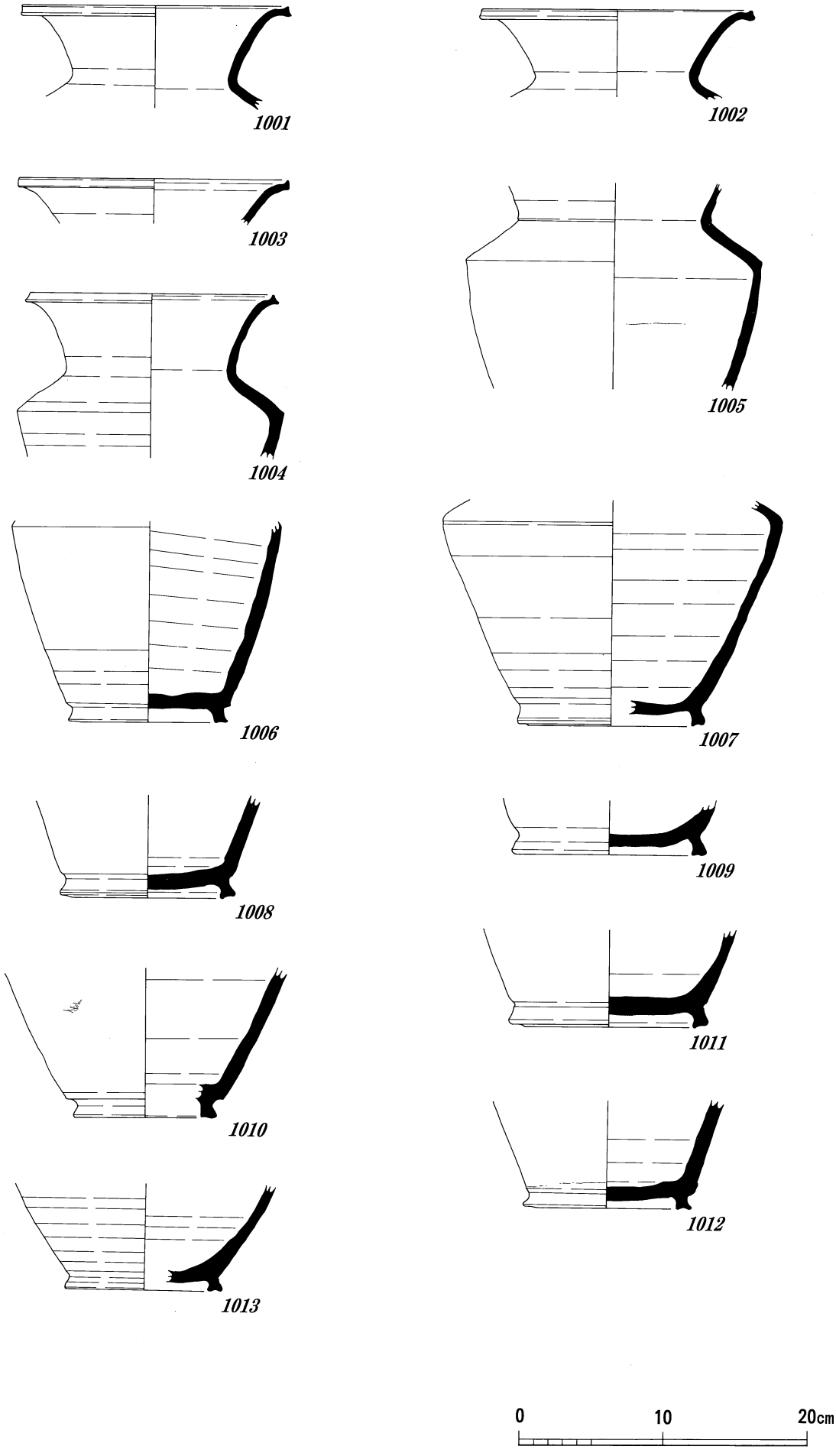
中谷1号窯灰原出土遺物7

第33図



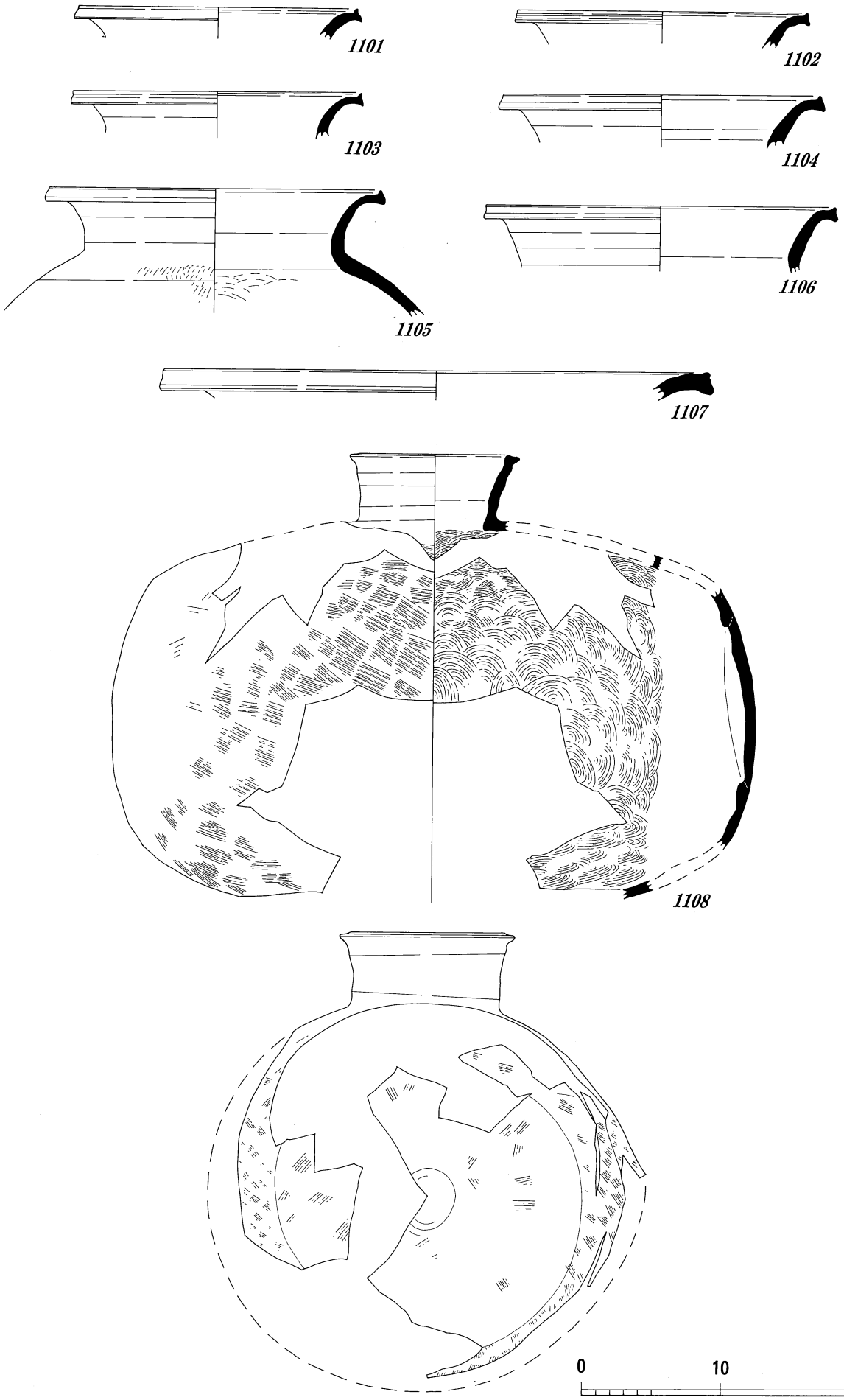
第34図

中谷1号窯灰原出土遺物8



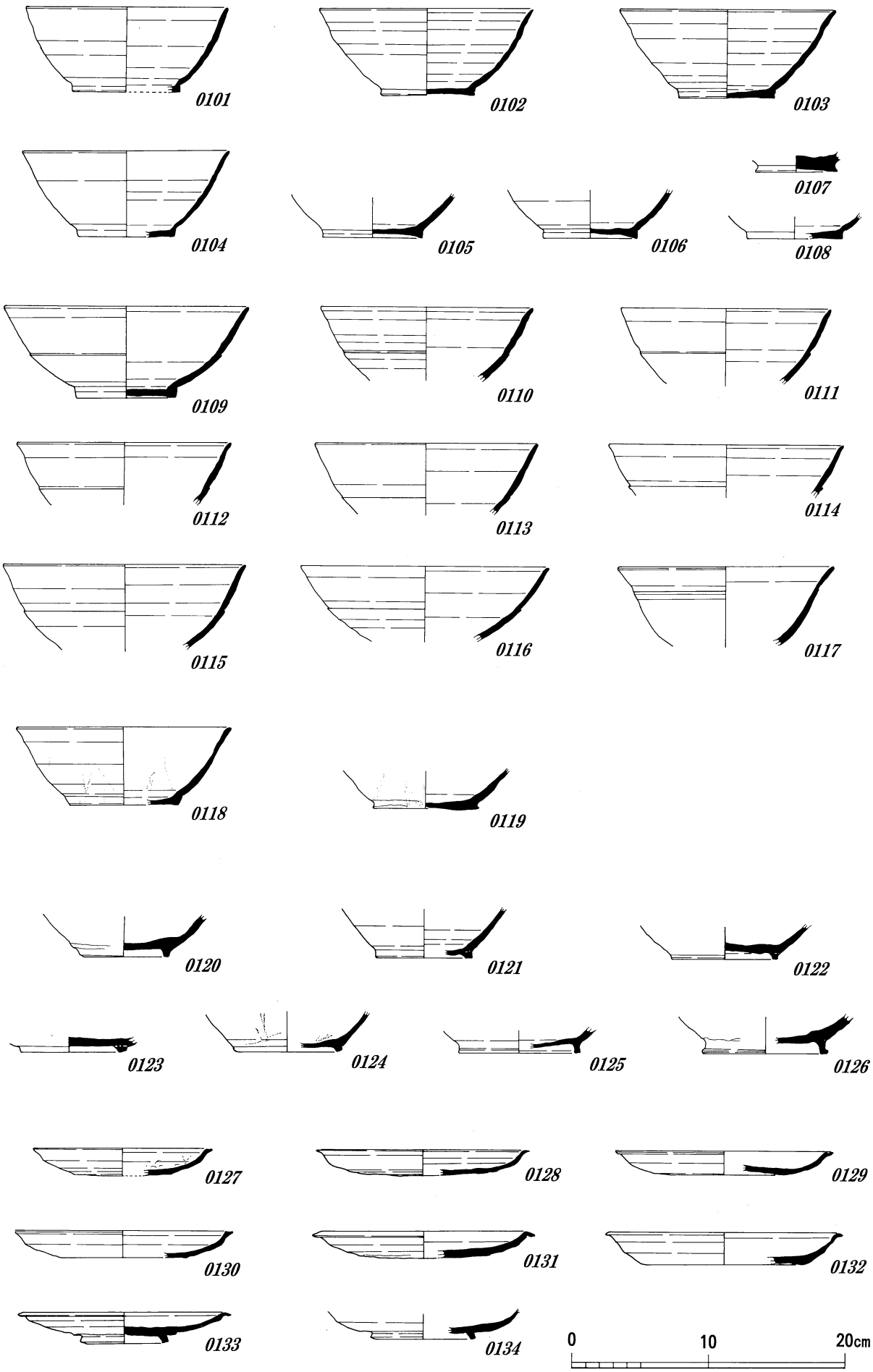
中谷1号窯灰原出土遺物9

第35図



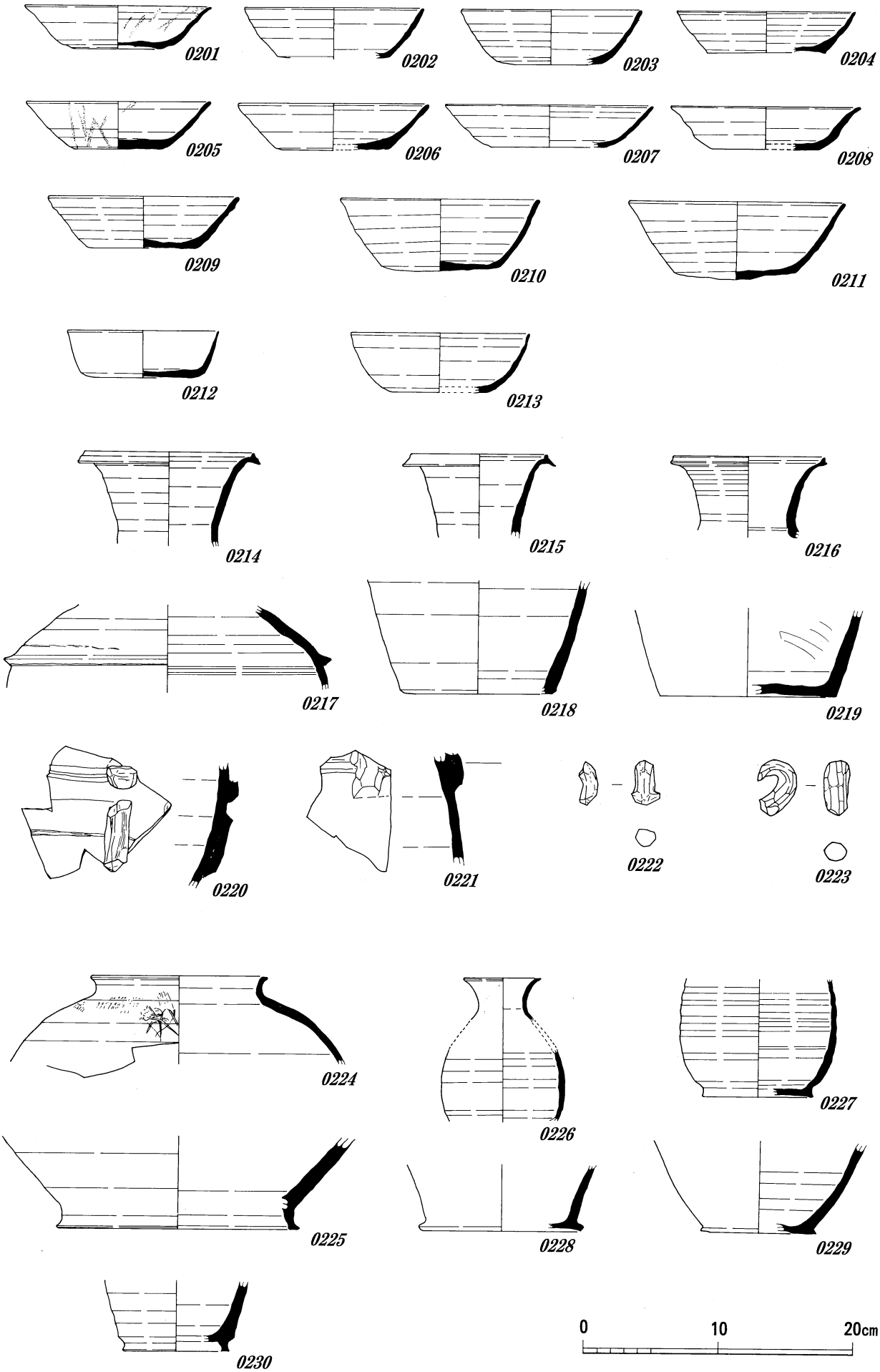
第36図

中谷2号窯出土遺物1



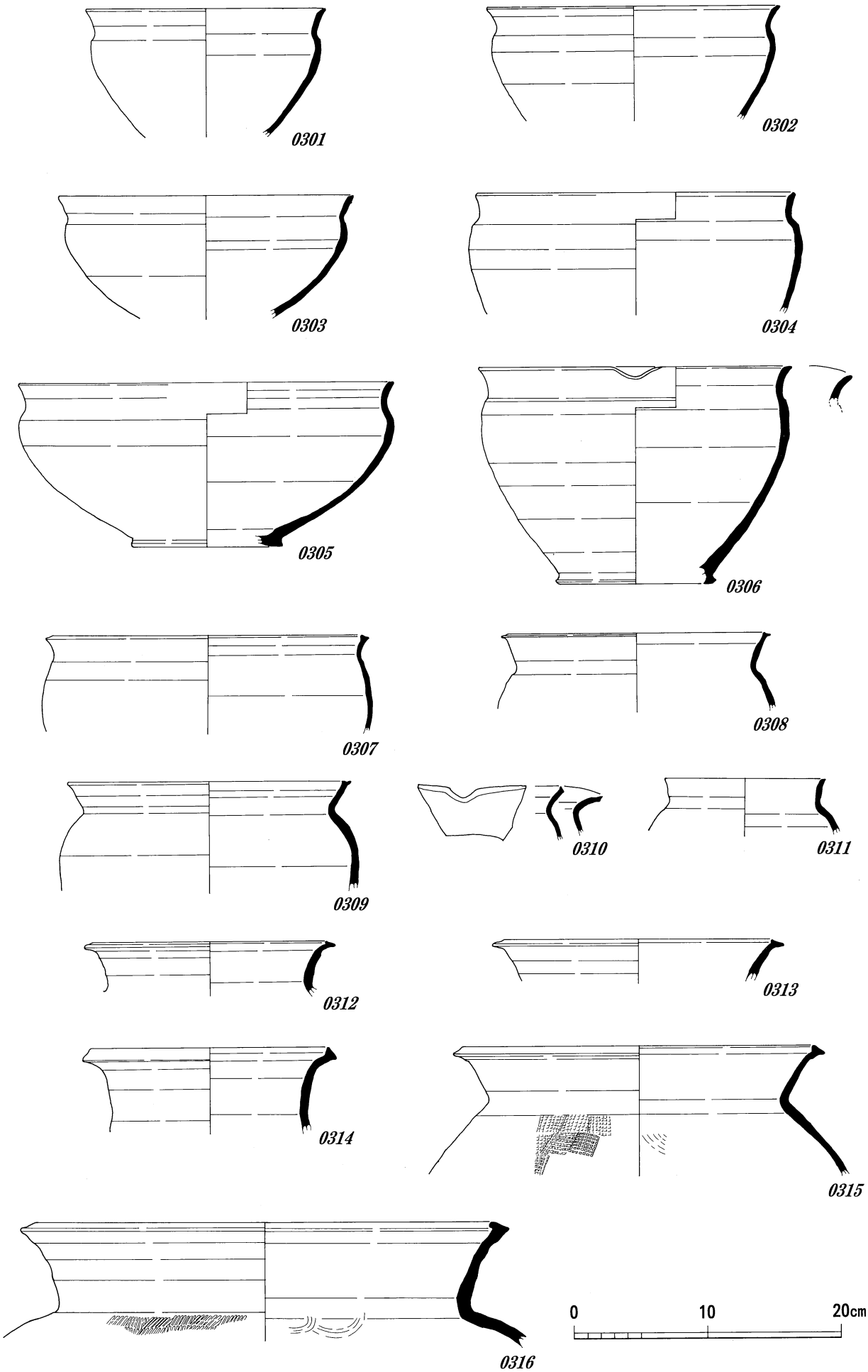
中谷2号窯出土遺物2

第37図



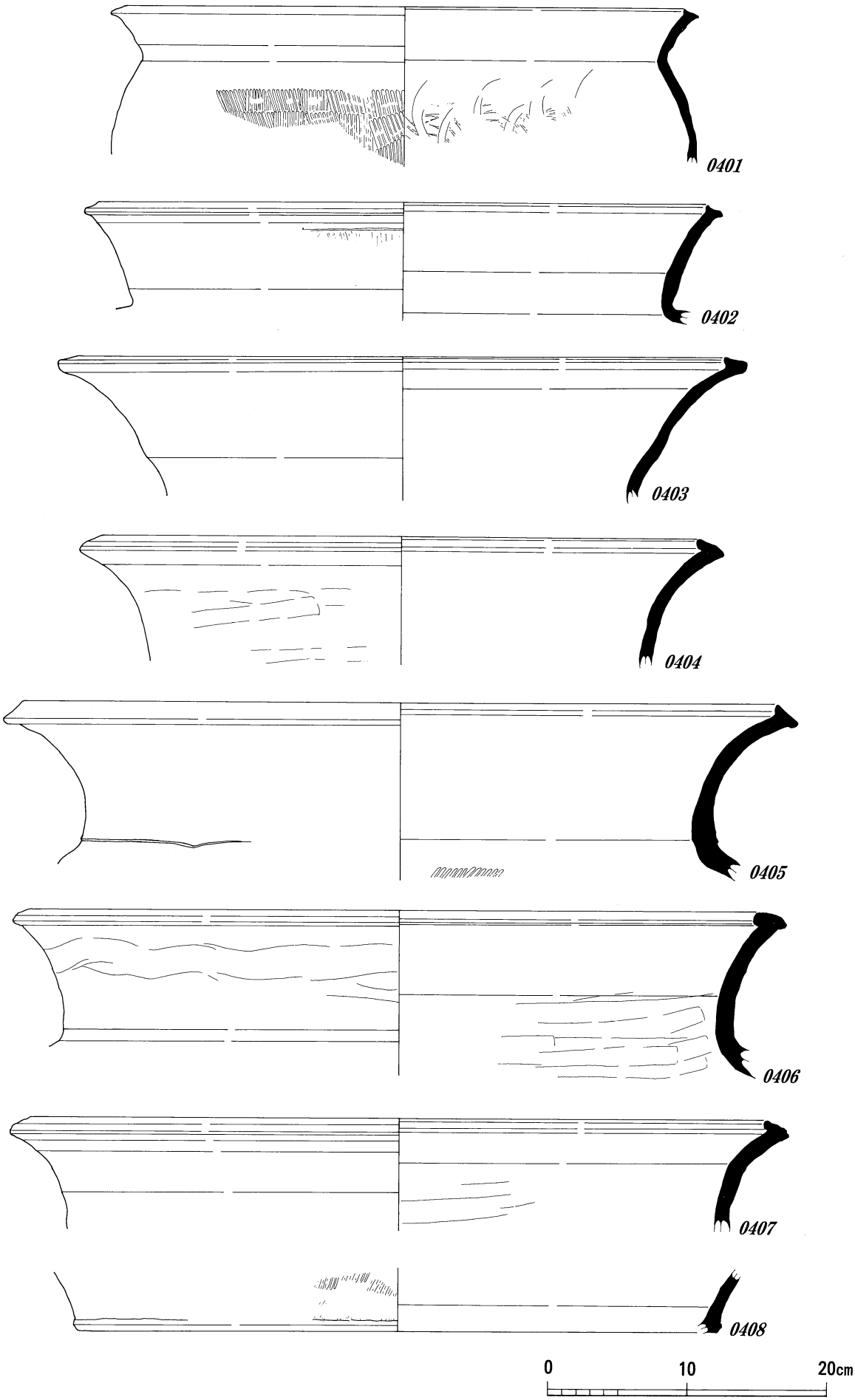
第38図

中谷2号窯出土遺物3



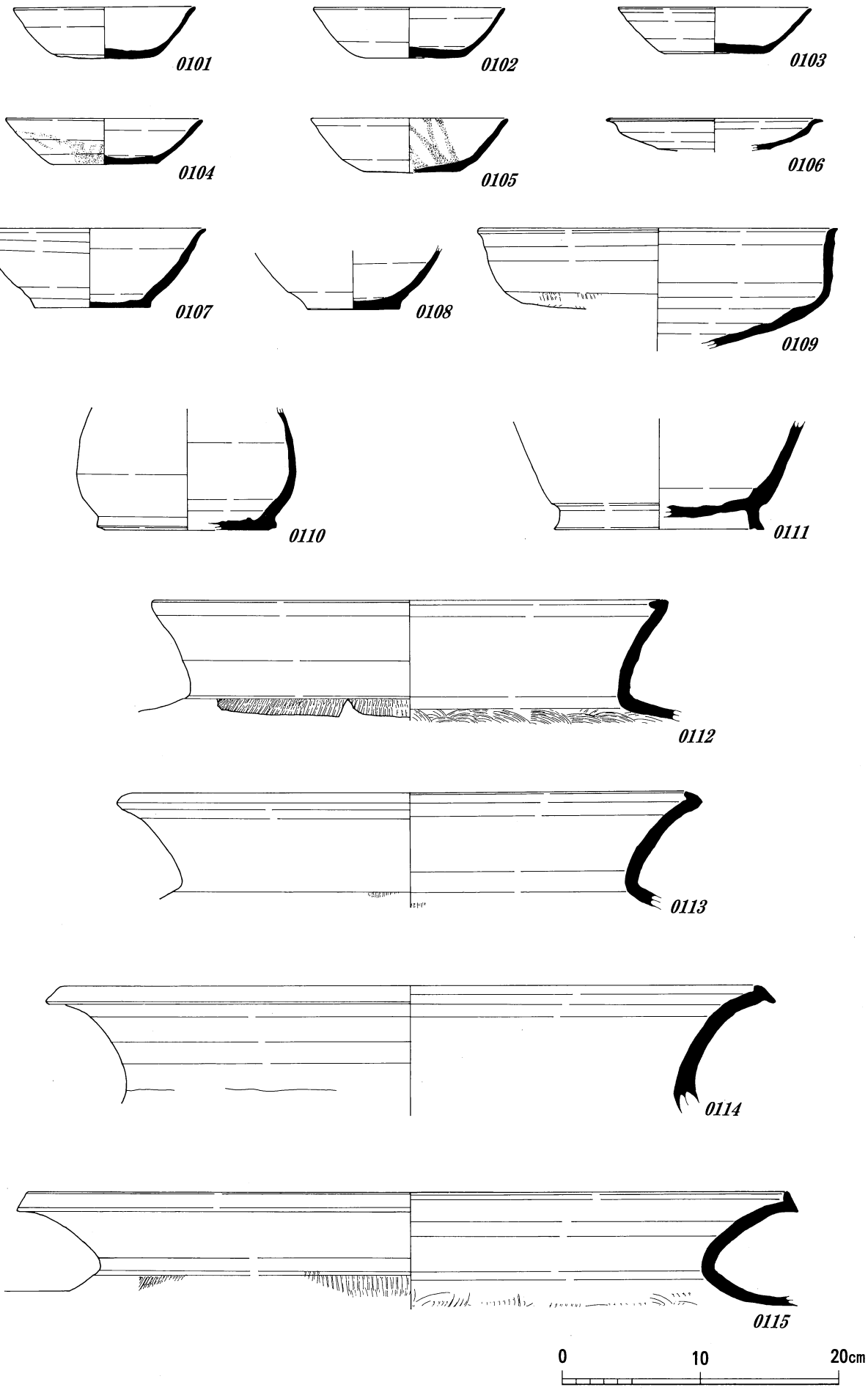
中谷2号窯出土遺物4

第39図



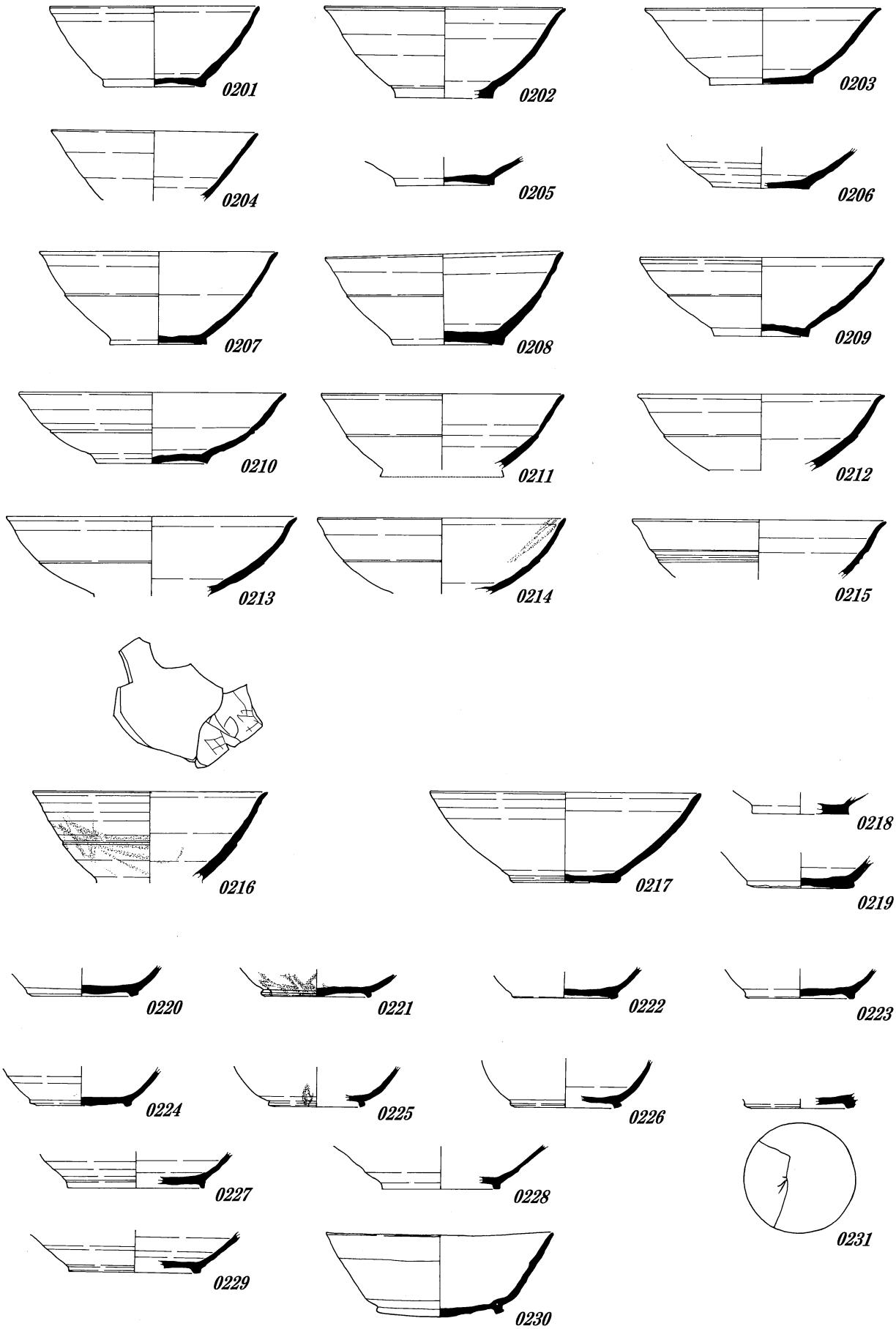
第40図

中谷3号窯窯体出土遺物



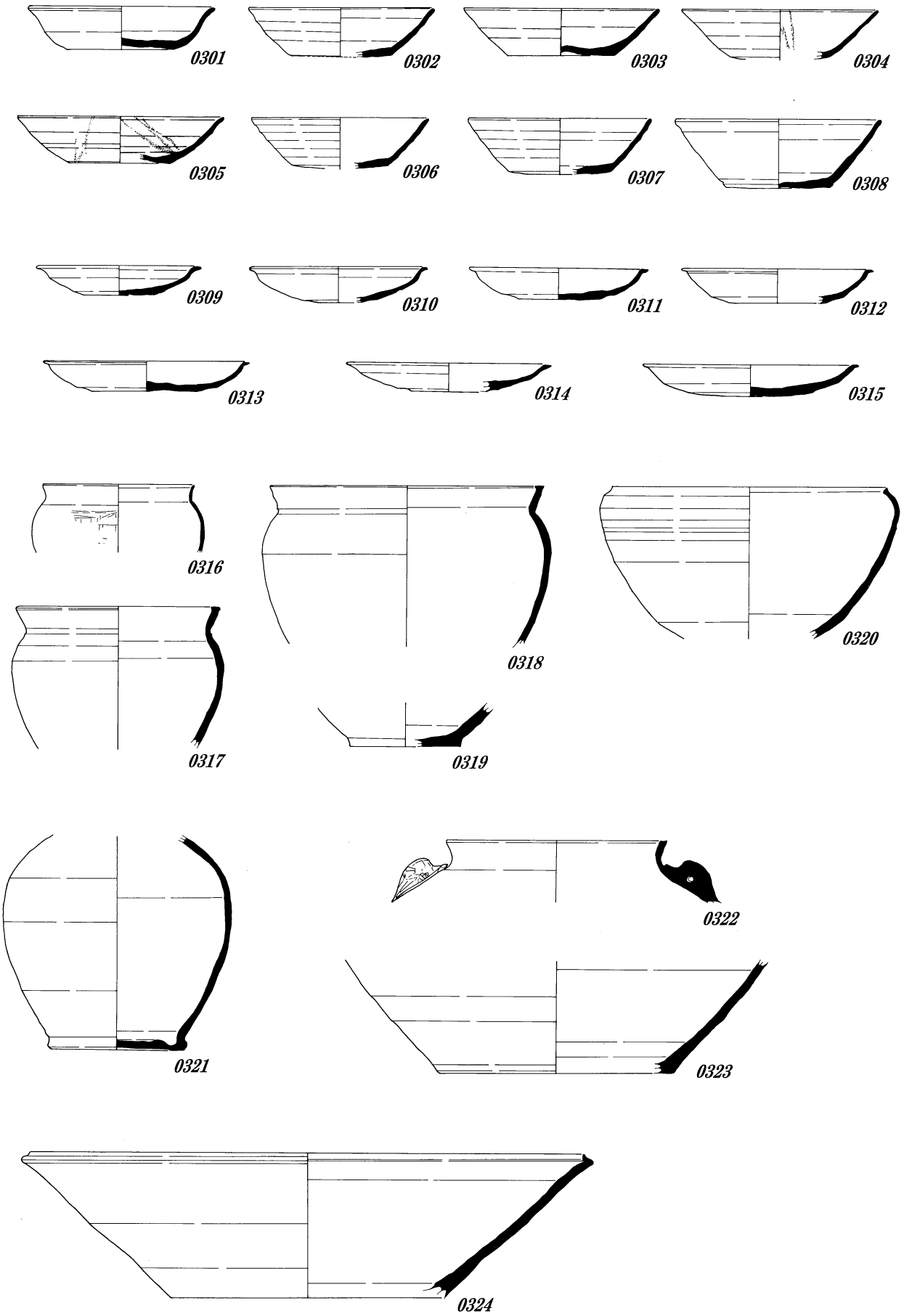
中谷3号窯灰原出土遺物1

第41図



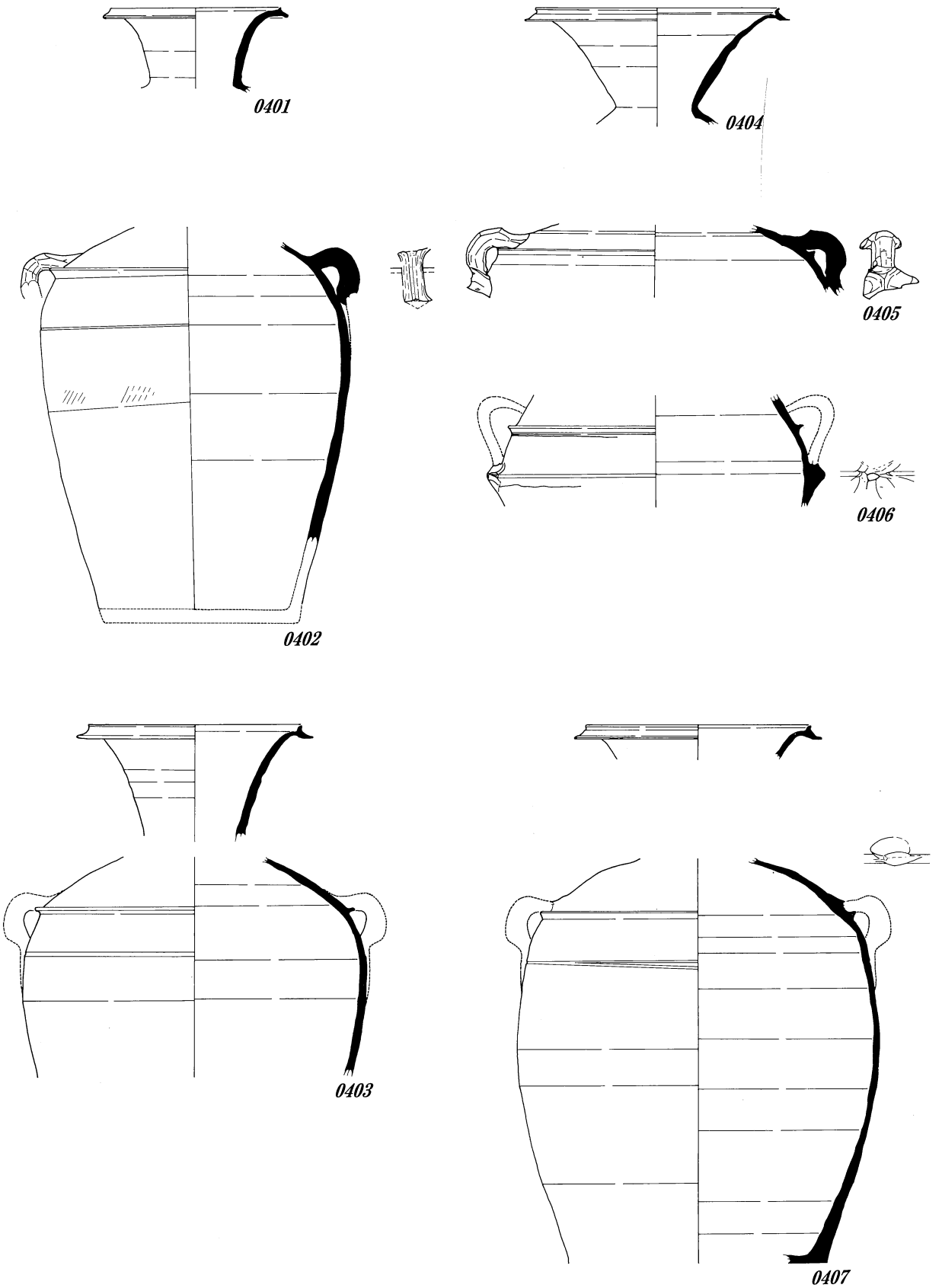
第42図

中谷3号窯灰原出土遺物2



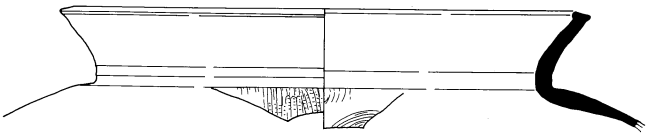
中谷3号窯灰原出土遺物3

第43図

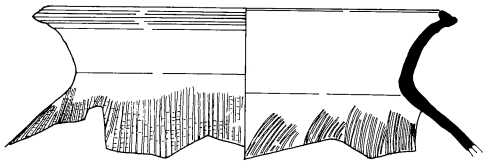


第44図

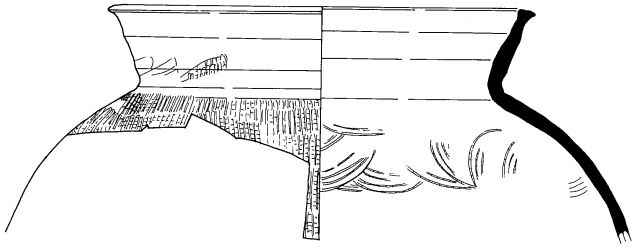
中谷3号窯灰原出土遺物4



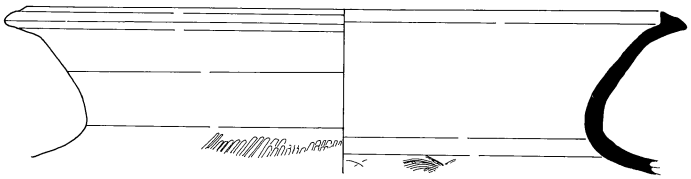
0501



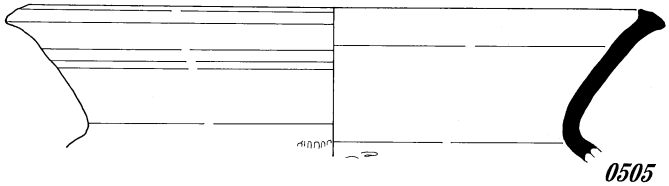
0502



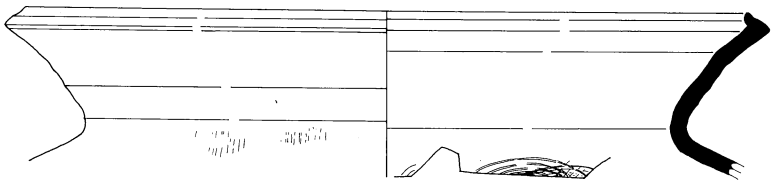
0503



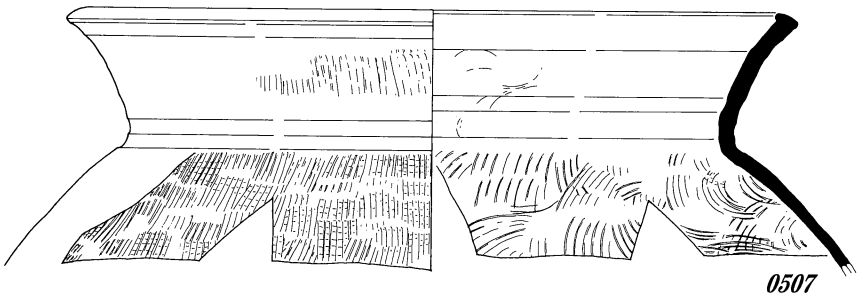
0504



0505



0506

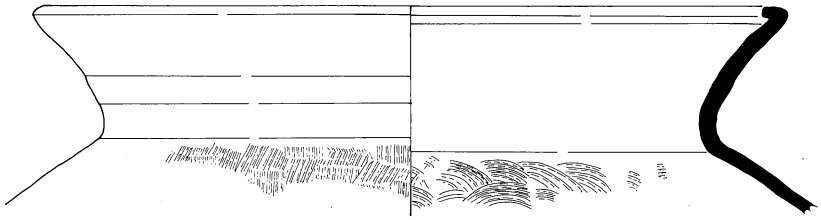


0507

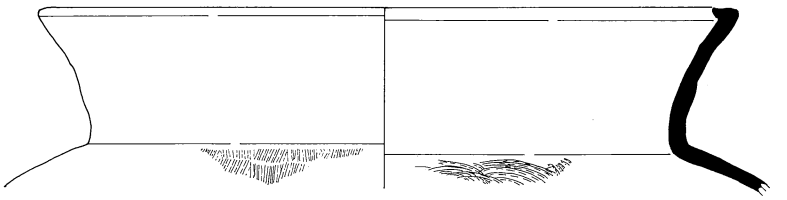
0 10 20cm

中谷3号窯灰原出土遺物5

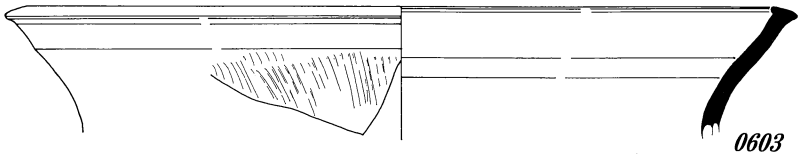
第45図



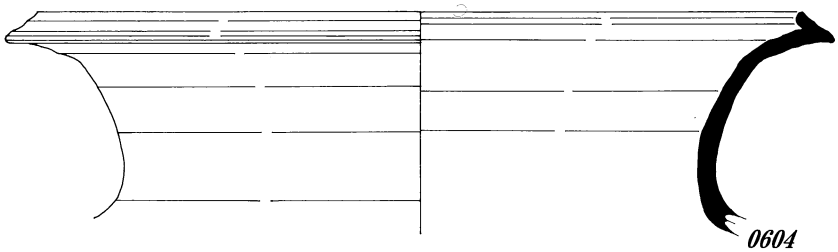
0601



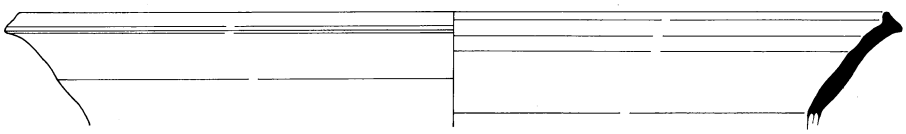
0602



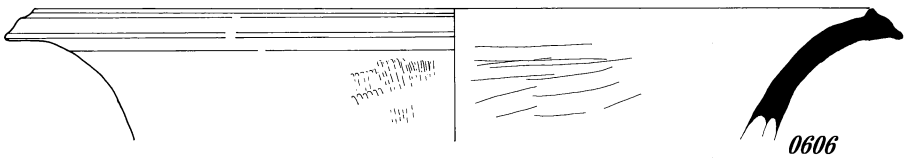
0603



0604



0605

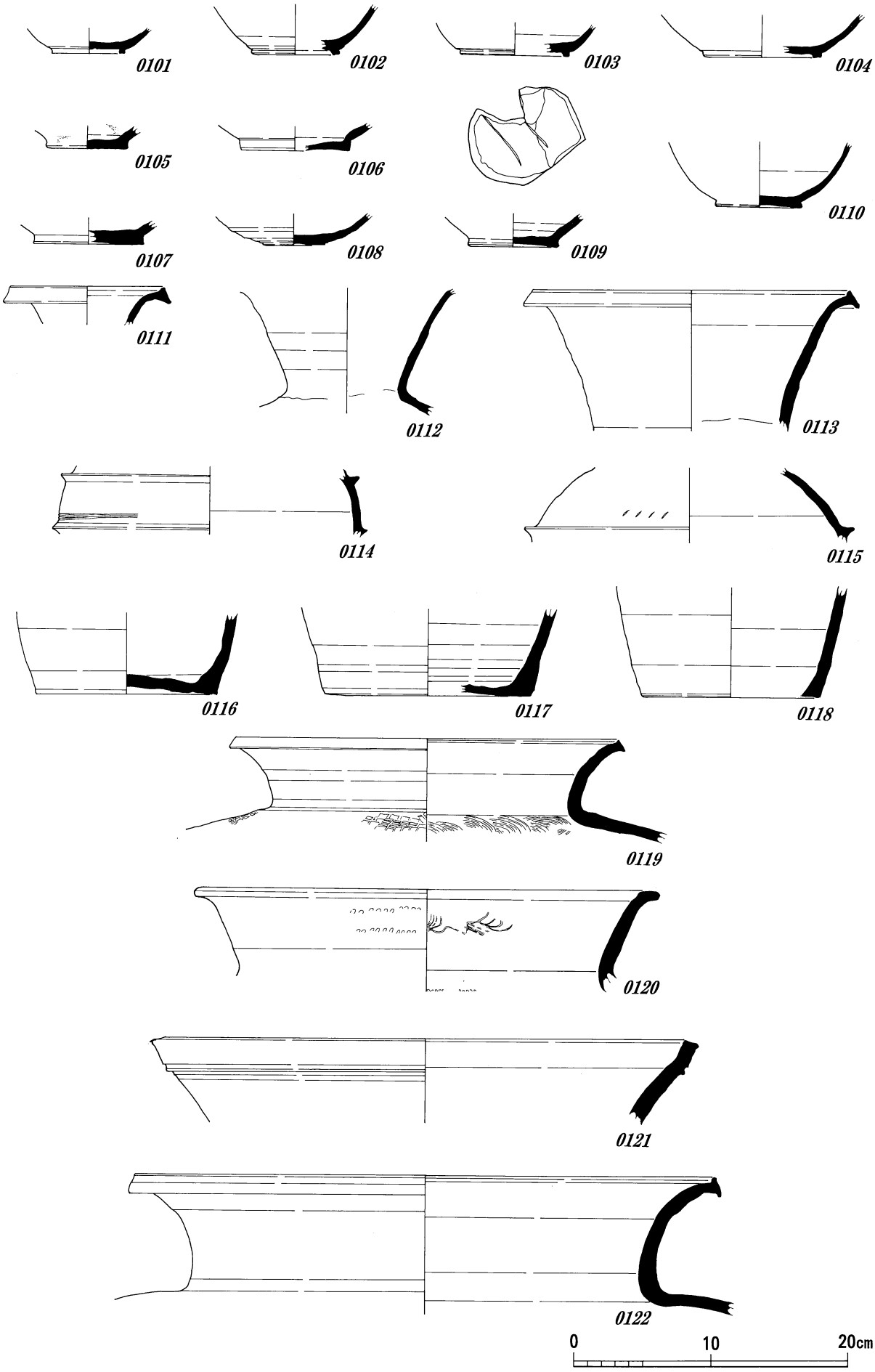


0606

0 10 20cm

第46図

中谷5号窯出土遺物



遺構写真図版

航 空 写 真

a．志方窯跡群遠景(南から)

b．中谷支群遠景(東から)

中 谷 4 号 窯

a．窯体

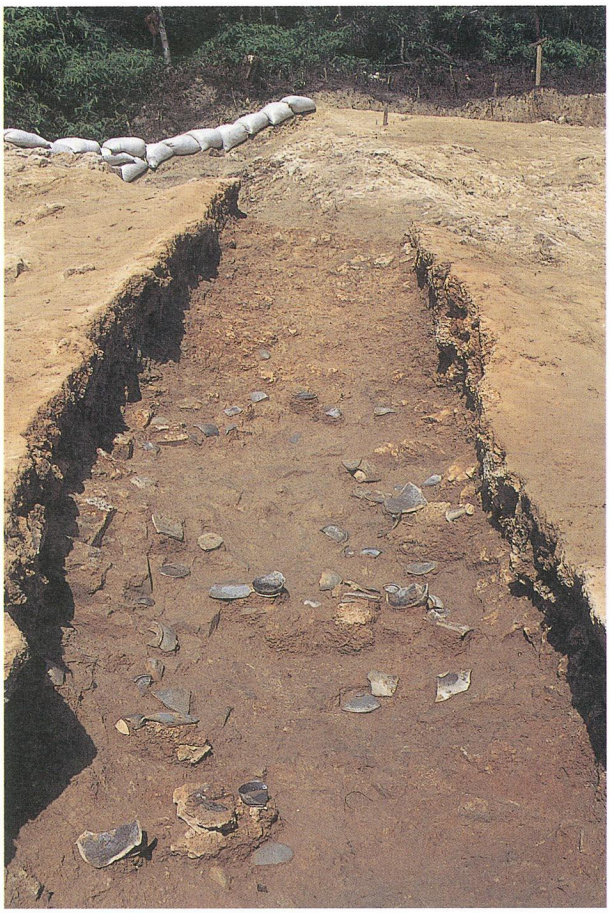
b．全景(南東から)

中 谷 4 号 窯

a．全景(南から)

b．灰原縦断面

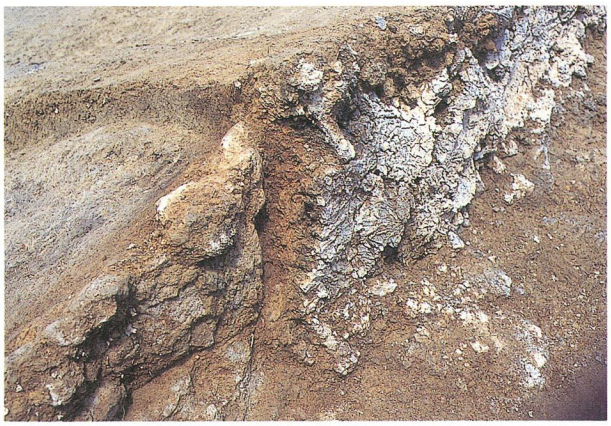
中 谷 4 号 窯



a．焼成部

b．焼成部左側壁

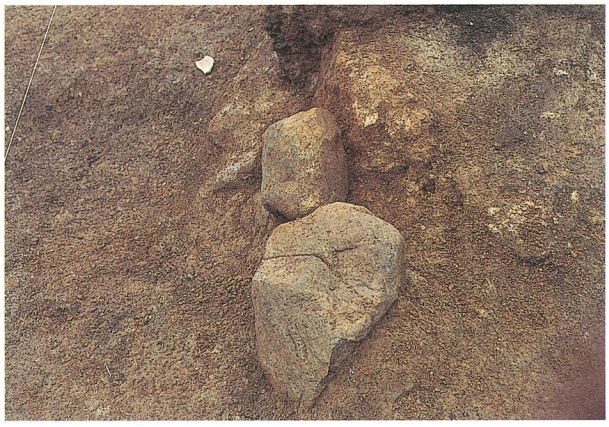
c．焼成部拡大



d．焼成部左側壁

e．焼成部右側壁

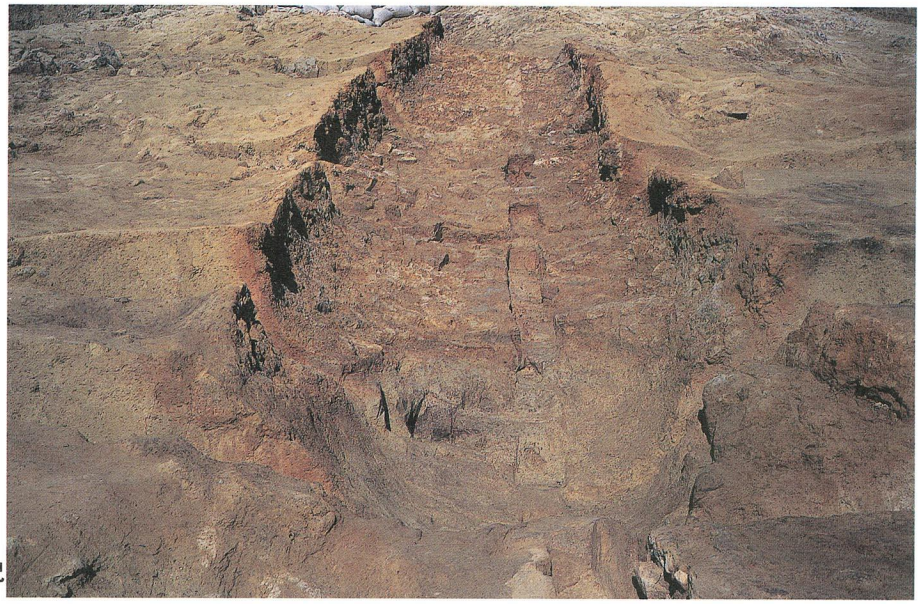
f．焚口右側壁(最終操業時)



g．焚口右側壁(貼壁除去後)

中 谷 4 号 窯

a．舟底状ピット検出状況

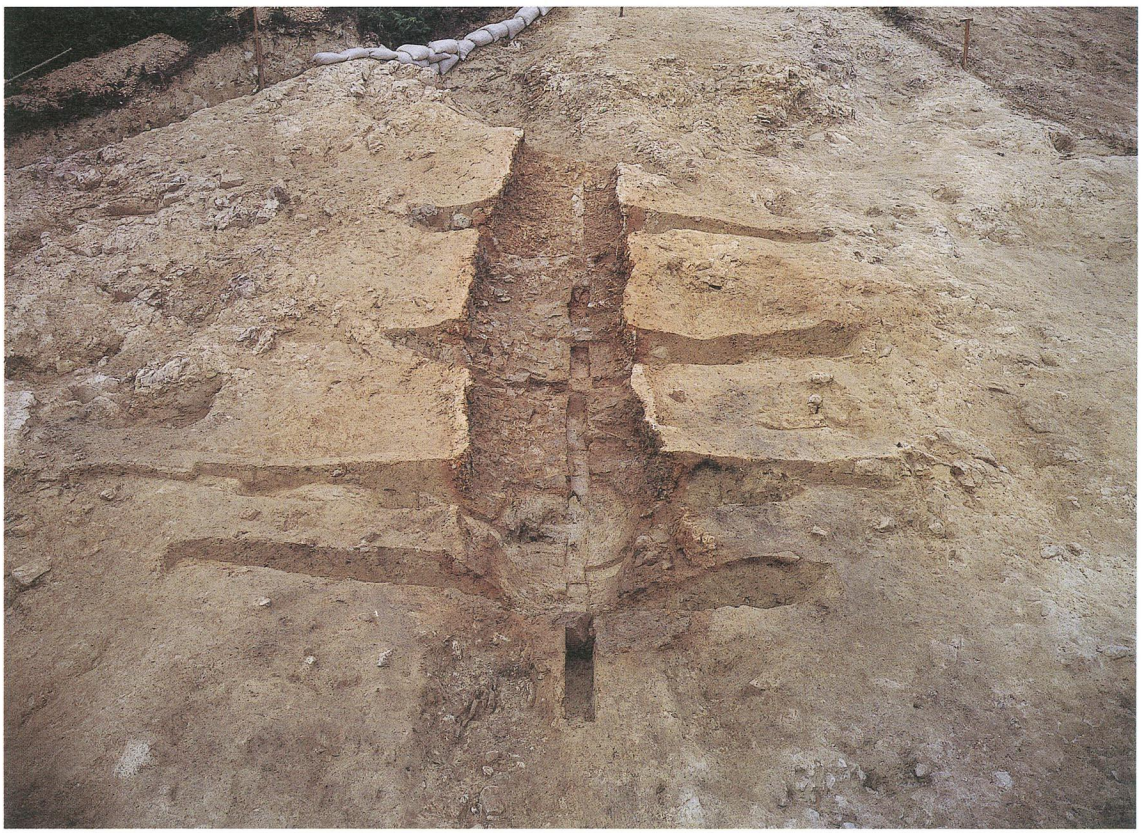


b．舟底状ピット完掘状況

c．舟底状ピット縦断面

中 谷 4 号 窯

a．窯体完掘状況



b．窯体断ち割り全景

中 谷 4 号 窯

a．断ち割りＡ断面(左)

b．断ち割りＡ断面(右)

c．断ち割りＢ断面(左)

d．断ち割りＢ断面(右)

e．断ち割りＣ断面(左)

f．断ち割りＣ断面(右)

g．断ち割りＤ断面(左)

h．断ち割りＤ断面(右)

中 谷 1 号 窯

a．窯体

b．全景(北より)

中 谷 1 号 窯

a．窯体
(北西より)

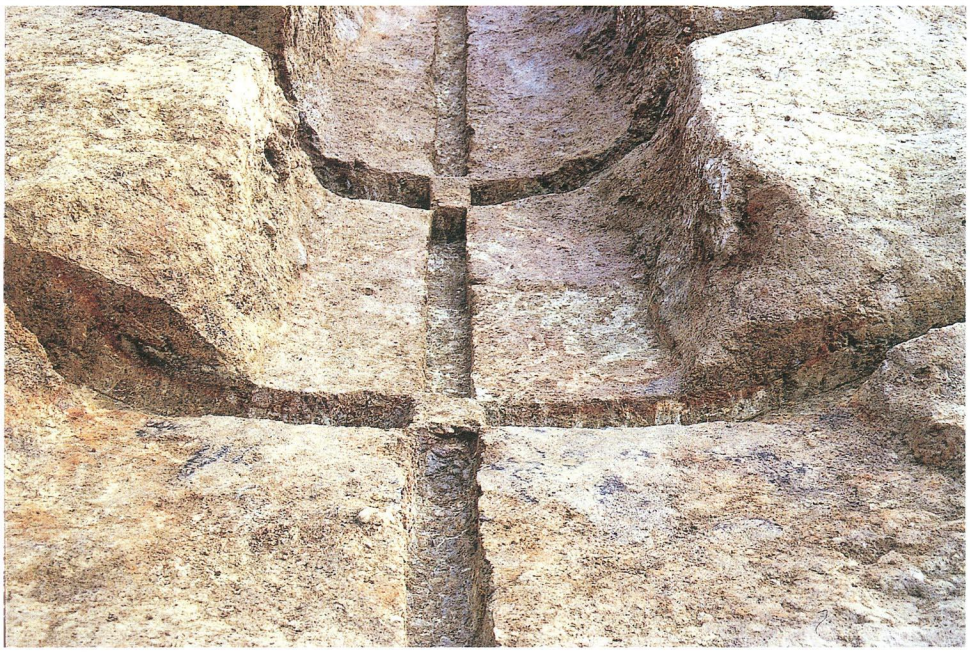
b．灰原縦横断セクション
(東より)

c．灰原縦断セクション
(北東より)

中 谷 1 号 窯

a．断ち割りＡ断面

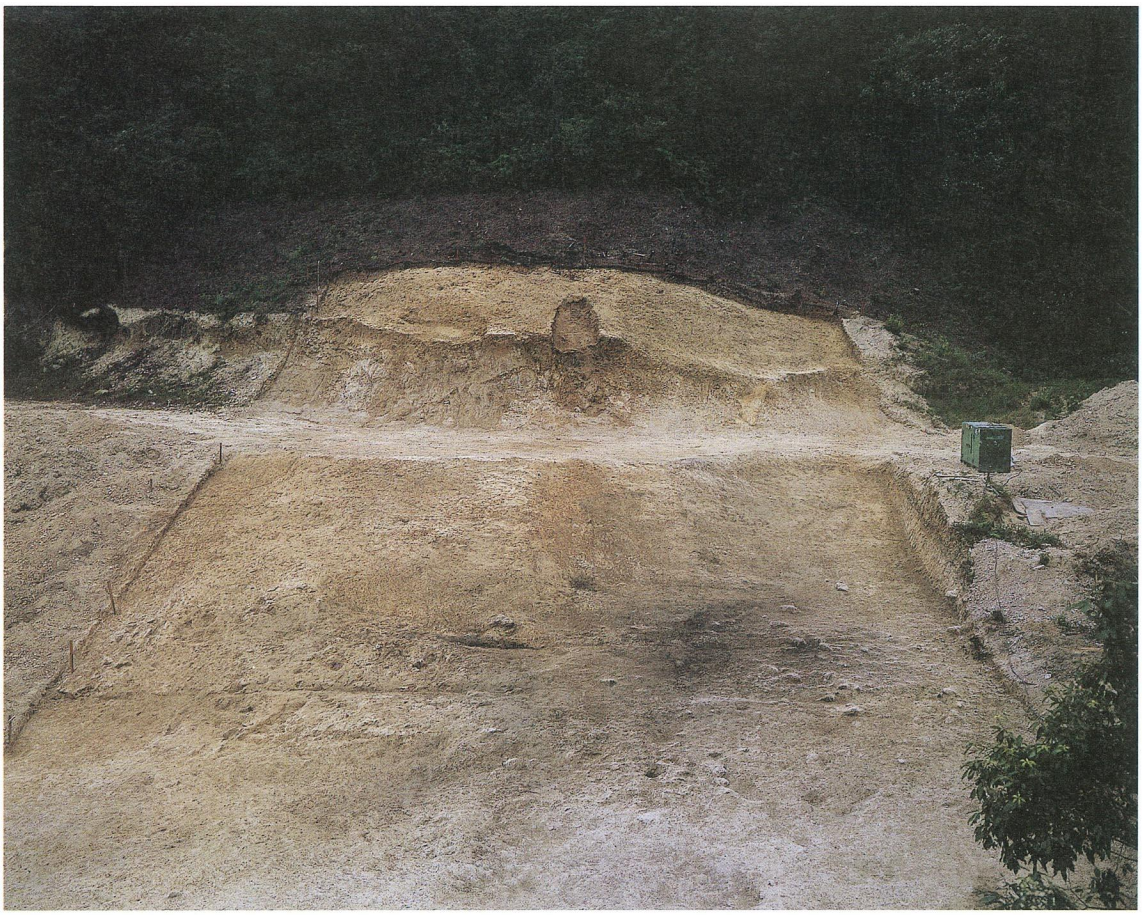
b．断ち割りＢ断面



c．断ち割りＣ断面

中 谷 2 号 窯

a．窯体

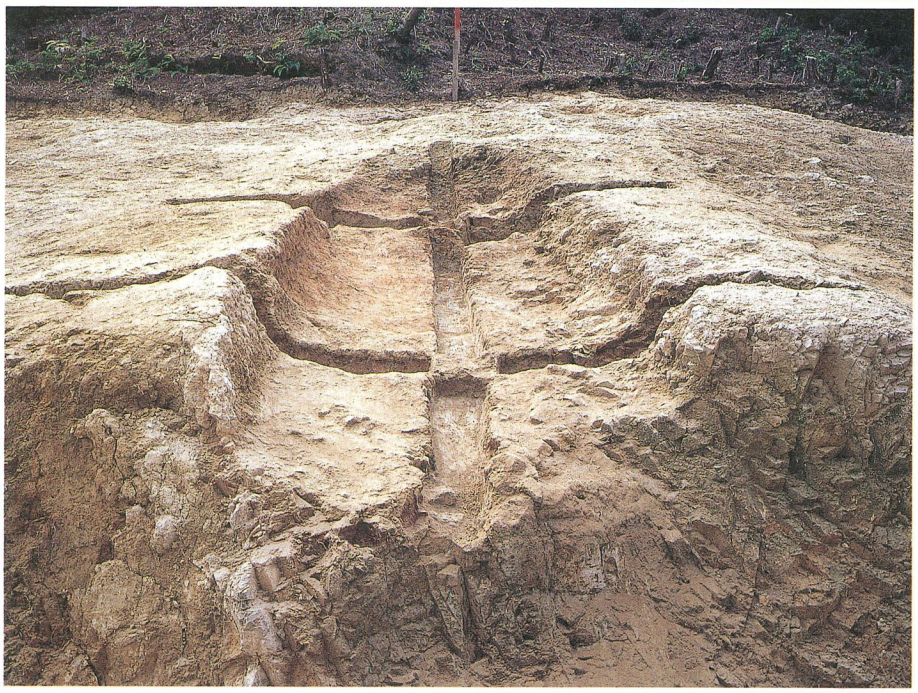


b．全景(北より)

中 谷 2 号 窯

a．窯体

b．灰原縦横断セクション
(北西より)



c．窯体断ち割り全景

中 谷 3 号 窯

a．窯体

b．全景(南より)

中 谷 3 号 窯

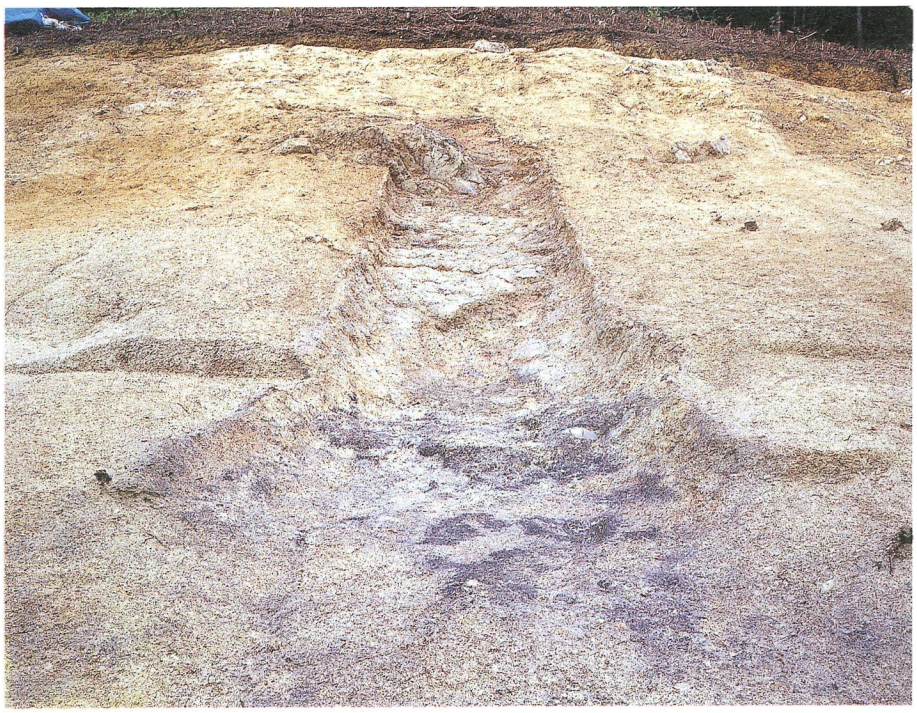
a．窯体完掘状況

b．全景(南西より)

中 谷 3 号 窯

a．窯体焚口縦断セクション
(南東より)

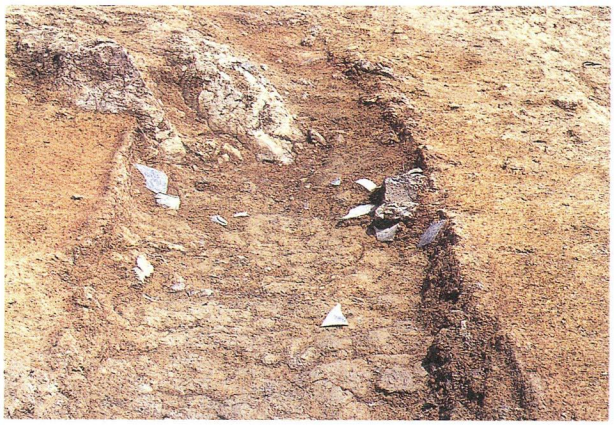
b．灰原縦横断セクション
(南西より)



c．窯体

中 谷 3 号 窯

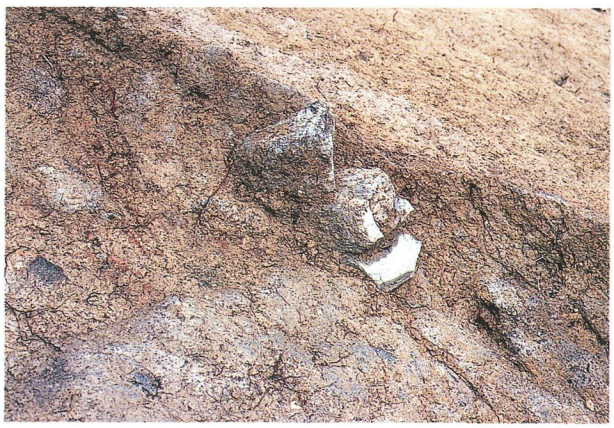
a．窯体先端部左側壁



b．窯体先端部(南より)

c．焼成部～焚口(窯体先端部より)

d．焼成部中央

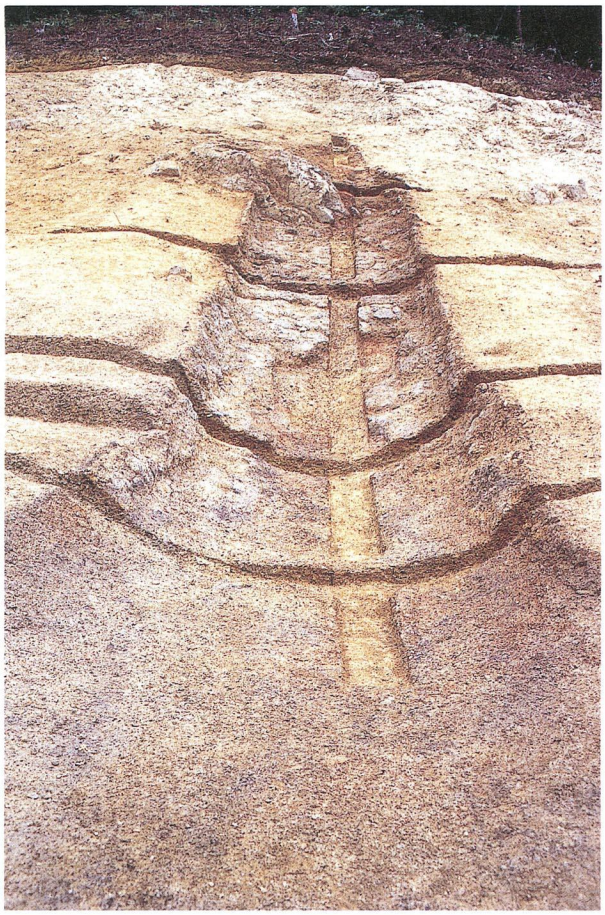


e．焼成台(自然石及び須恵器転用)

f．焚口遺物出土状況(左側壁側から)

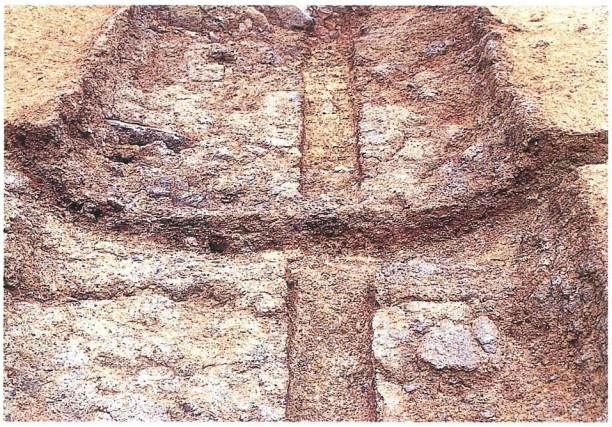
g．焚口遺物出土状況(南から)

中 谷 3 号 窯



a．窯体断ち割り全景

b．断ち割りＡ断面



c．断ち割りＢ断面

d．断ち割りＣ断面

e．断ち割りＤ断面

f．断ち割り縦断面

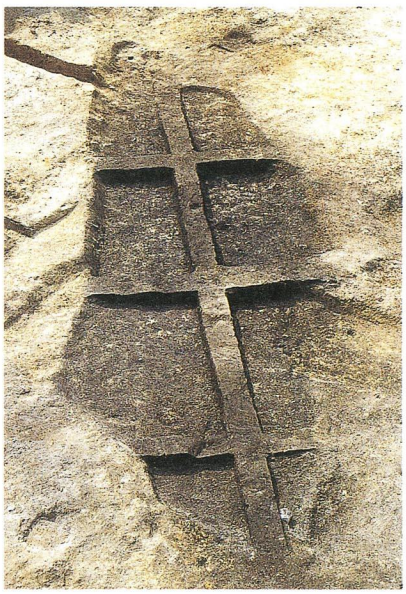
g．断ち割り縦断面

炭 土 坑

SX04

SX03

SX01



SX02

遺物写真図版

a．中谷 4 号窯出土須恵器

b．中谷 1 号窯出土須恵器

a．中谷 2 号窯出土須恵器

b．中谷 3 号窯出土須恵器　c．中谷 3 号窯出土「忍坂」刻書須恵器

中谷 4 号窯出土須恵器抜粋 1

0921

0906

0923

中谷 4 号窯出土須恵器抜粋 2

0811

0814

1208

1216

1010

中谷 4 号窯出土須恵器抜粋 3

0409

0642

1505

1810

1507

1704

中谷 4 号窯出土須恵器抜粋 4

1134

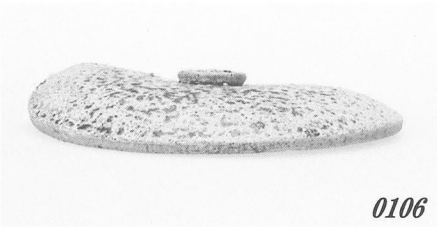
1902

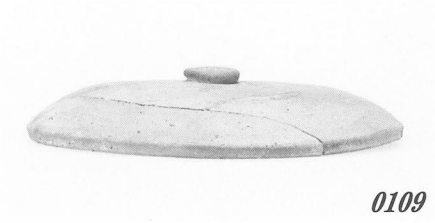
2205

中谷4号窯出土須恵器1

0103

0102


0106


0109

0108

0110

0121

0112

0114

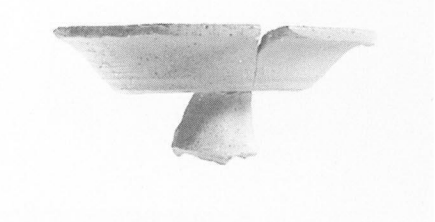
0139

0130

0132

0201

0207


0213

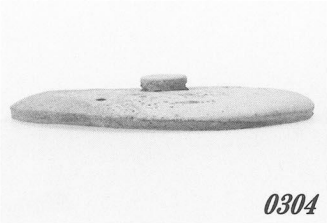
0216

0215

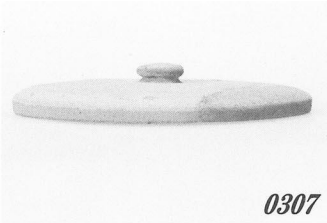
0140

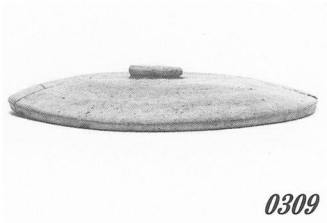
0211

中谷4号窯出土須恵器 2


0304

0303

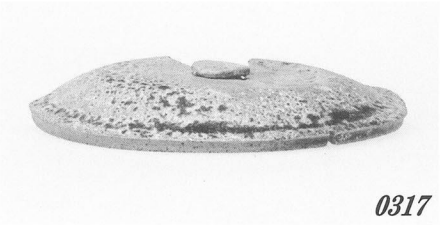

0307

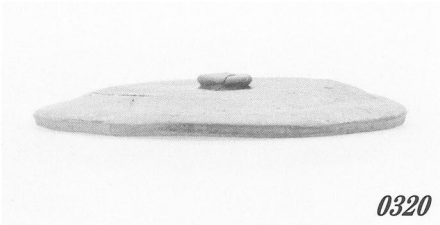

0309

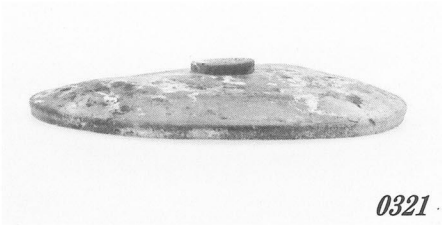
0310

0311

0312


0317

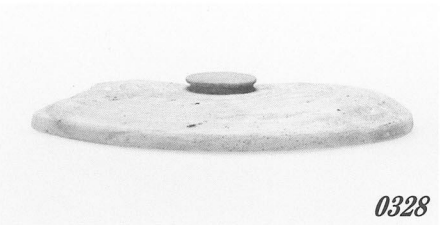

0320

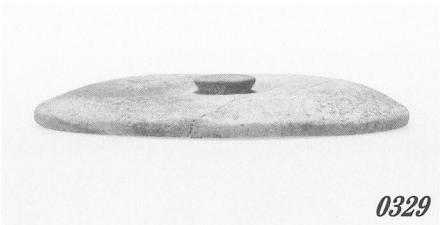

0321

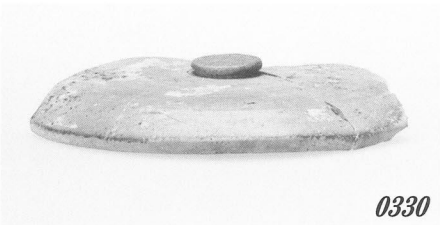
0322

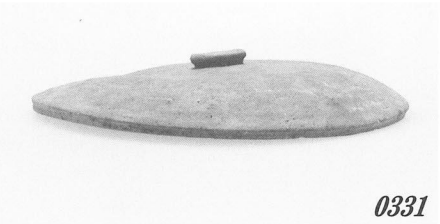
0323

0326

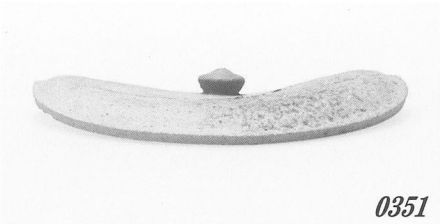

0328

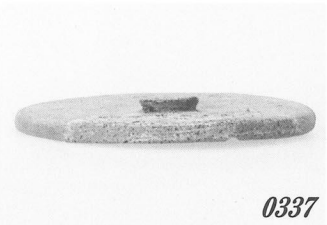

0329


0330


0331

0349


0351

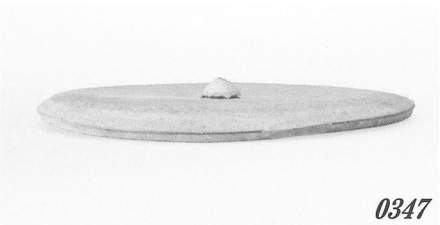

0337

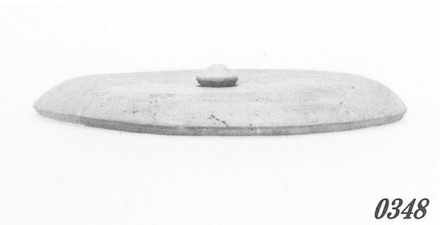
0338

0339

0342

0346


0347


0348

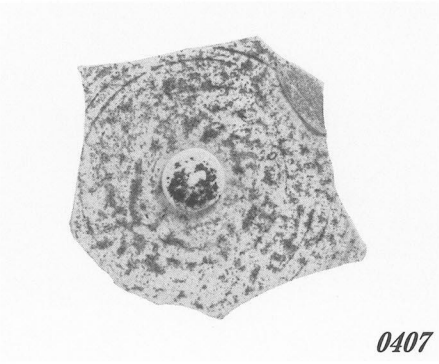
中谷4号窯出土須恵器3

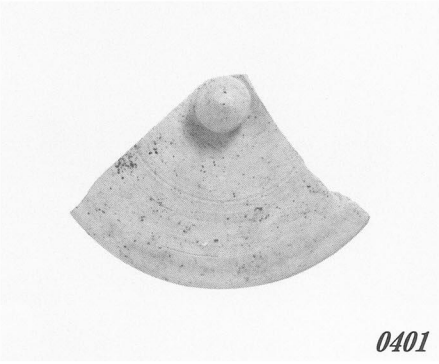
0404

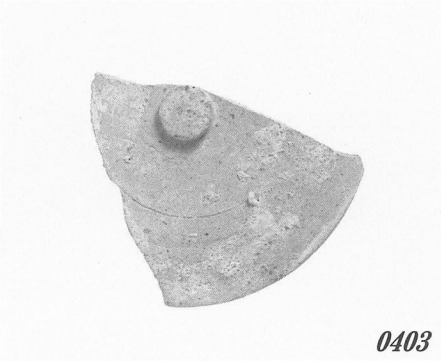
0408

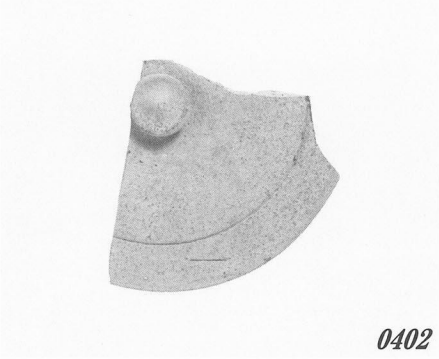
0406

0405


0407


0401


0403


0402

0422

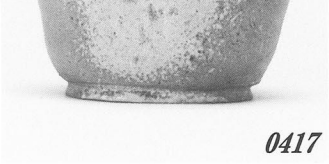
0410

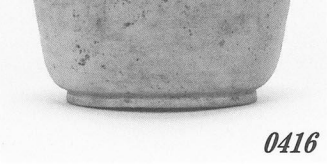
0419

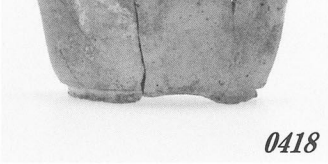
0420

0423

0409


0417


0416


0418

中谷4号窯出土須恵器4

0505

0507

0508

0509

0512

0514

0515

0518

0519

0521

0522

0525

0527

0421

0539

0533

0530

0536

0535

中谷4号窯出土須恵器5

0601

0602

0603

0604

0606

0607

0608

0609

0613

0614

0615

0616

0617

0618

0620

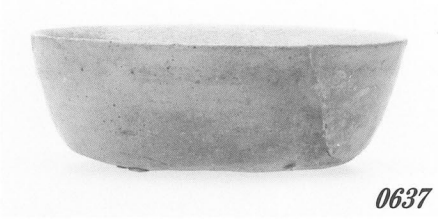
0621

0624

0610

0625

0627


0637

0642

0644

0638

中谷4号窯出土須恵器6

0701

0702

0703

0704

0706

0707

0708

0709

0711

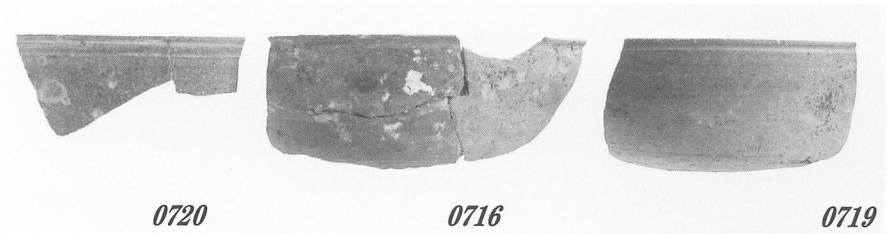
0714

0715

0713

0717

0718

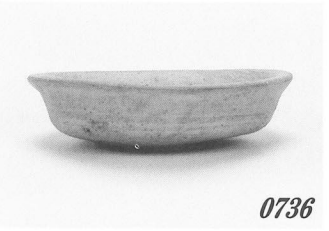

0720 0716 0719

0725

0729

0742

0744

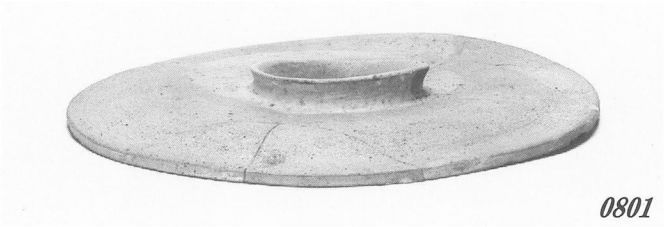

0736

0739

0737

0741

中谷4号窯出土須恵器7


0801

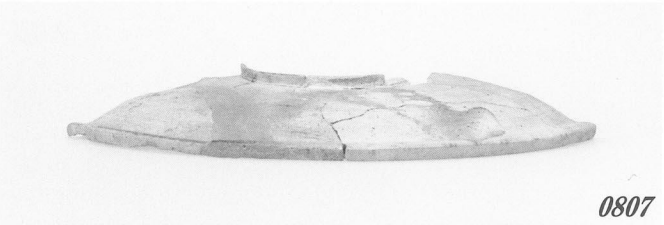
0802

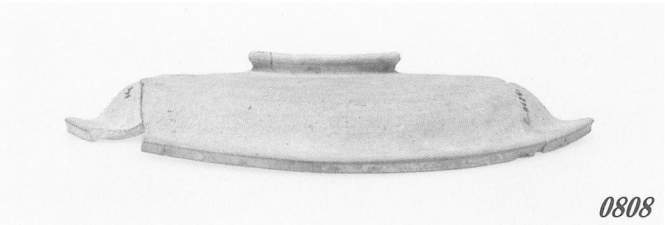
0803

0804

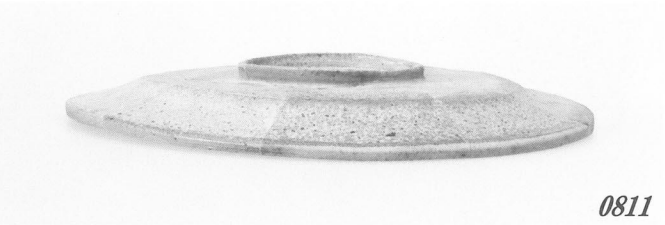
0805

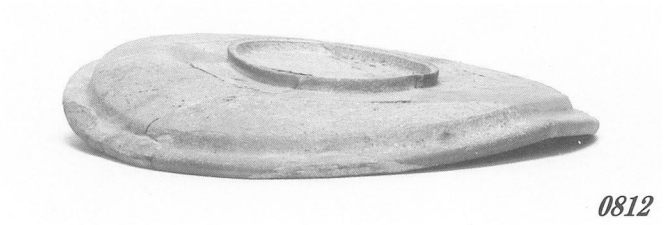
0806

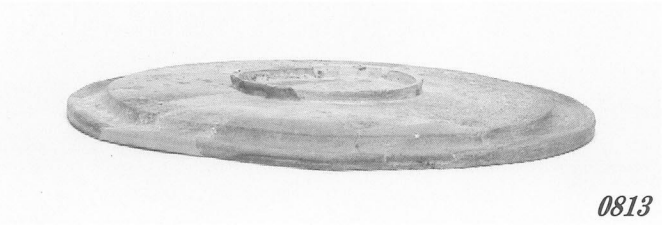

0807


0808

0810


0811

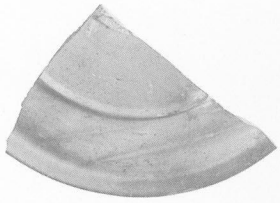

0812


0813

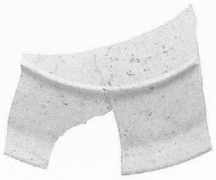
0809

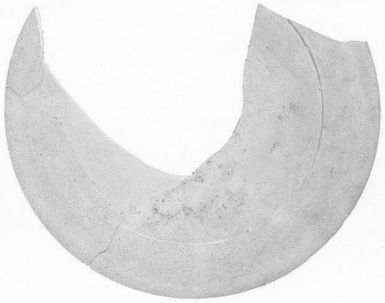
0820

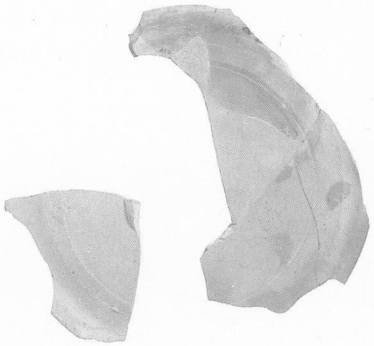
中谷4号窯出土須恵器8

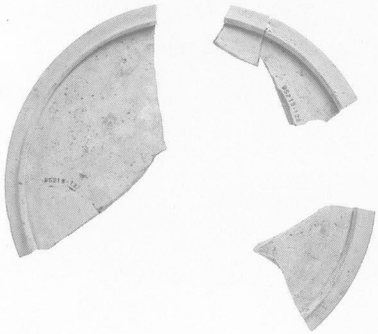

0815

0816


0817

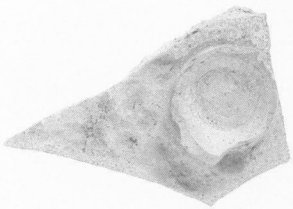


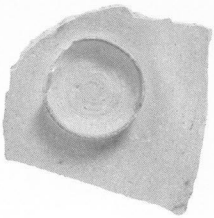

0818

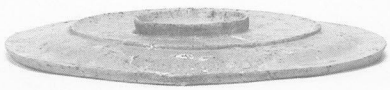

0822

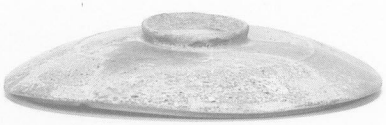
0825

0819


0824


0823


0814


0826

中谷4号窯出土須恵器抜粋9

0903

0905

0906

0907

0918

0920

0921

0922

0923

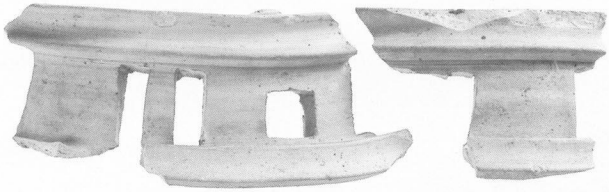
0917

0916 0915

中谷4号窯出土須恵器10

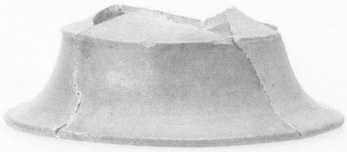
2013

2008



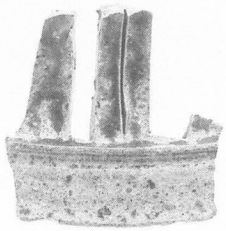
2009

2010



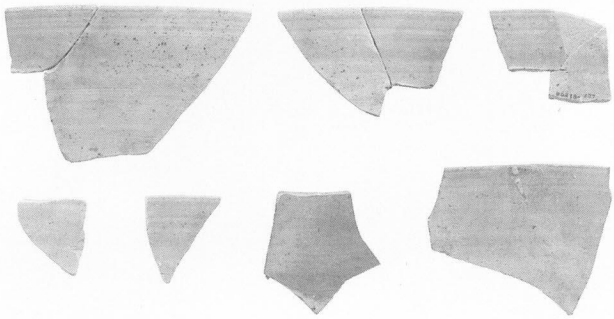
2015

2007



2011

2012



2014

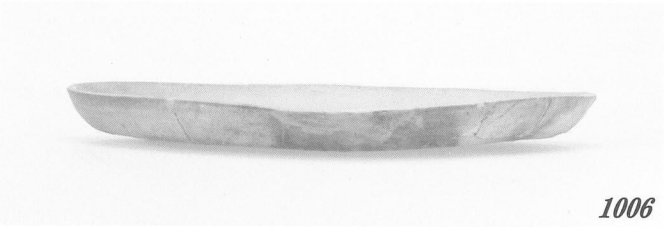
中谷4号窯出土須恵器11

1002

1003

1004

1005


1006

1014

1008

1010

1015

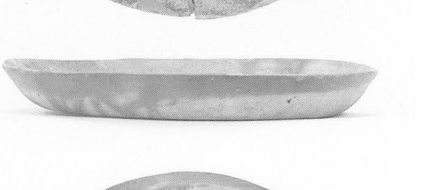
1018

1020

1019

1027

1028



1030

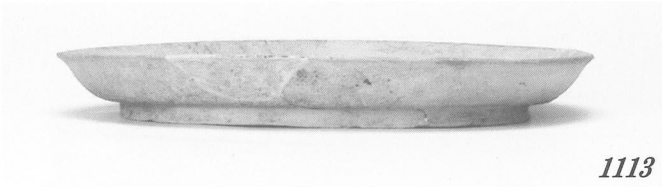
1031

1022

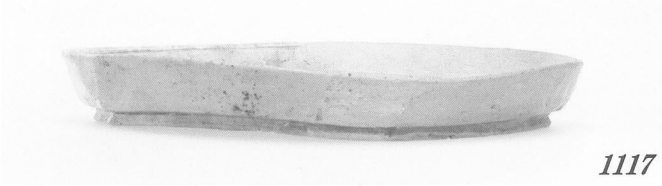
1033

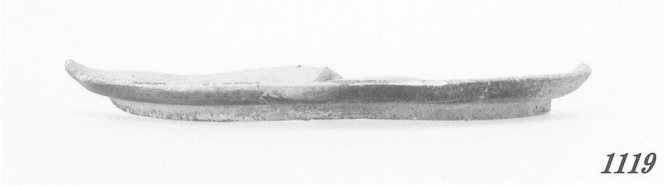
1038

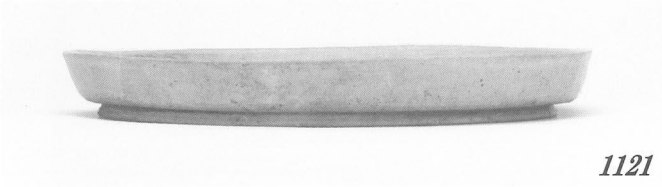
中谷4号窯出土須恵器12


1113

1116


1117


1119

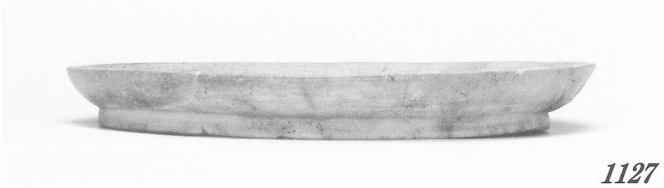

1121

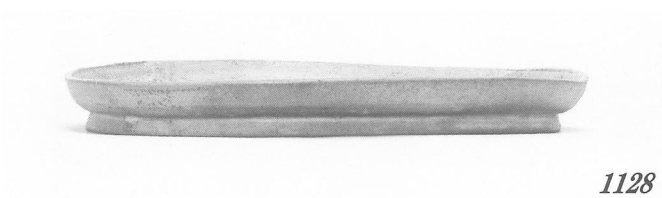
1122

1123

1124

1126


1127


1128

1134

1201

1207

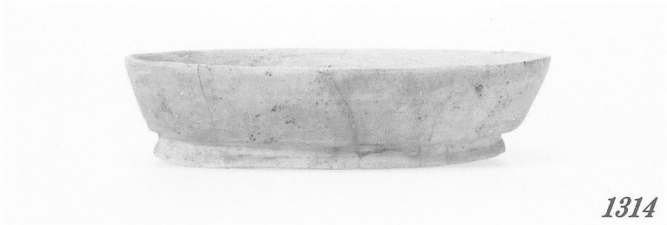
1209

1208

1212

1213

中谷4号窯出土須恵器13



1314

1301

1304

1305

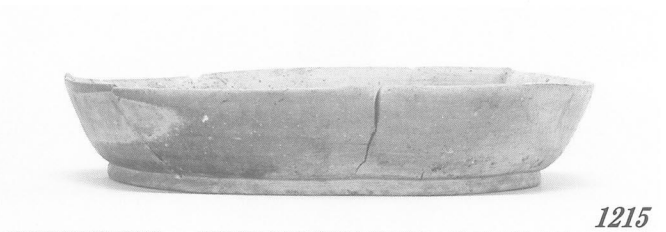
1306

1307

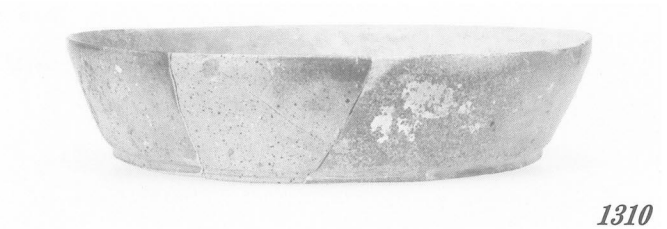
1308

1309

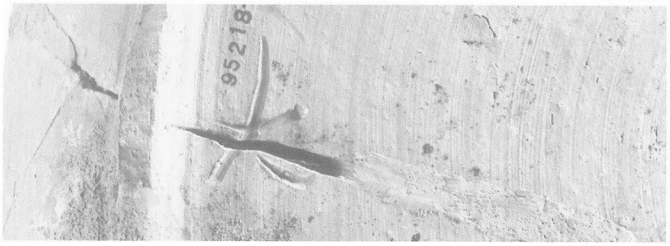
1303



1215

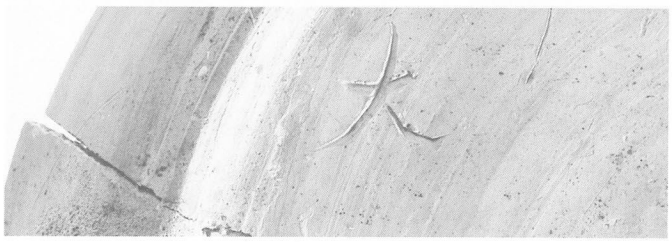


1310



1214

1216



中谷4号窯出土須恵器14

1405

1403

1404

1416

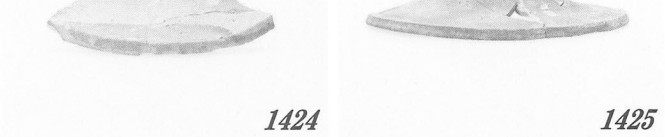
1414

1417

1419

1422

1421


1424 1425

1413

1426 1427

中谷4号窯出土須恵器15

1505

1504

1501

1512

1509

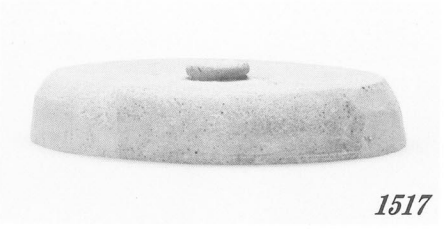
1510

1507

1516

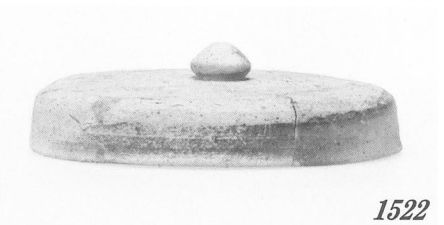
1515 1514

1525


1517

1524

1523


1522

中谷4号窯出土須恵器16

1603

1601

1602

1604

1611

1610

1615

1616

1617

1618

中谷4号窯出土須恵器17

1702

1701

1703

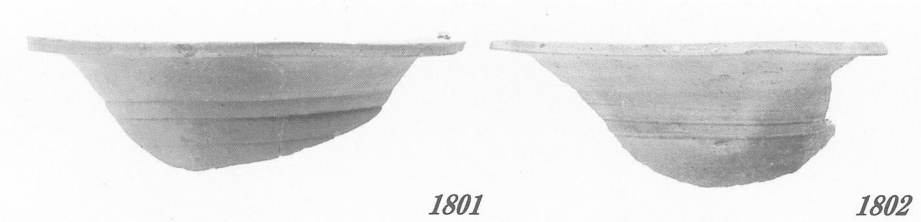
1704

1709

1708

1710

中谷4号窯出土須恵器18



1801　1802

1808

1809

1810

1806

1812

1813

1811

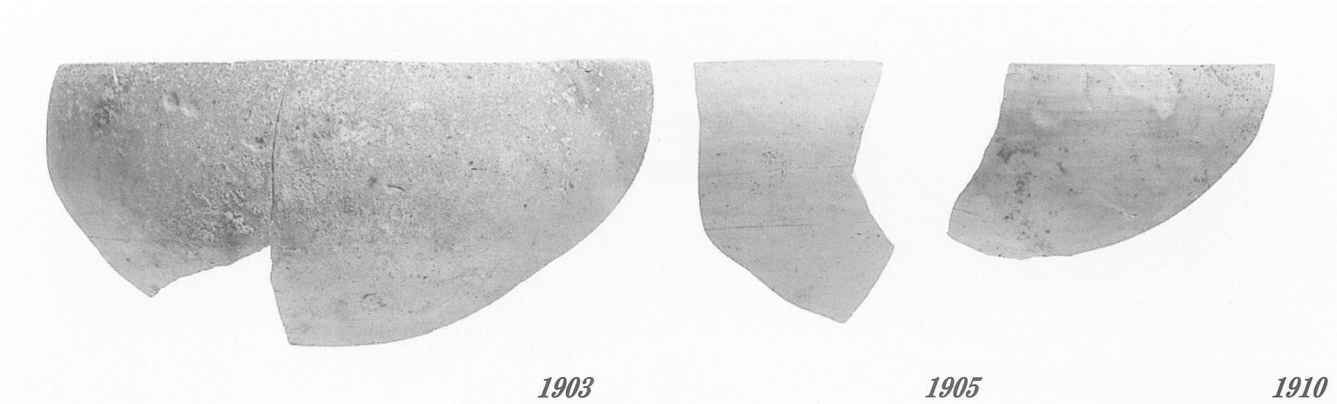
中谷4号窯出土須恵器19

1909

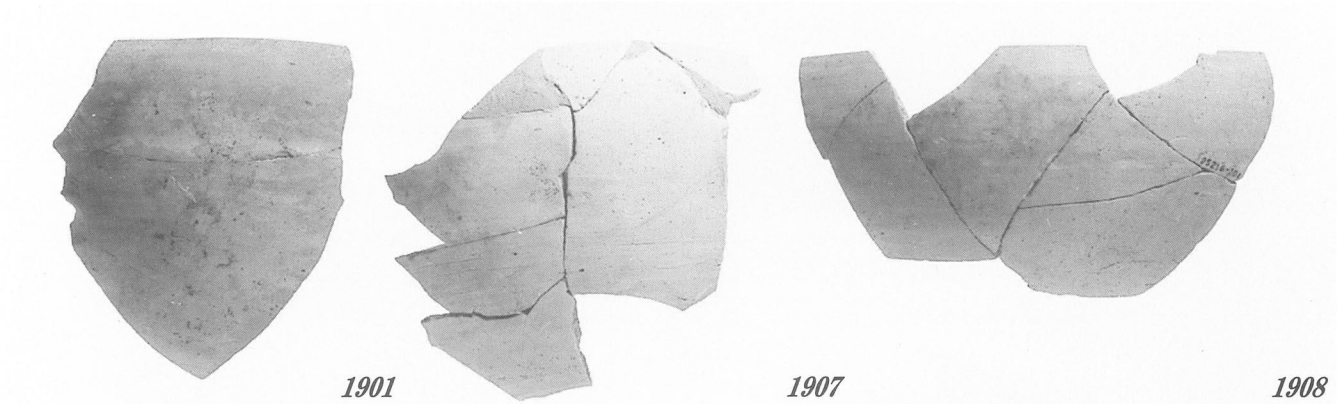
1902

1906

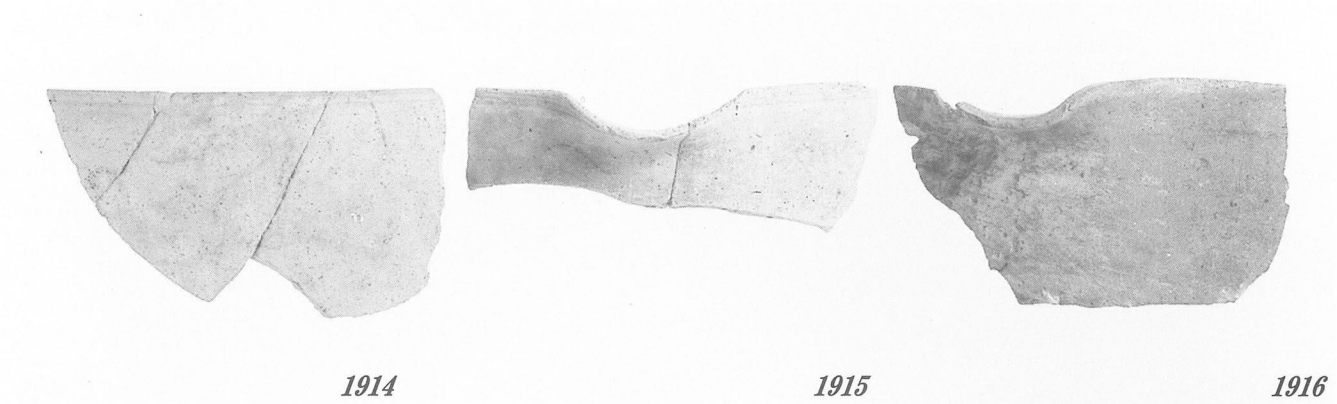
1904



1903　1905　1910



1901　1907　1908

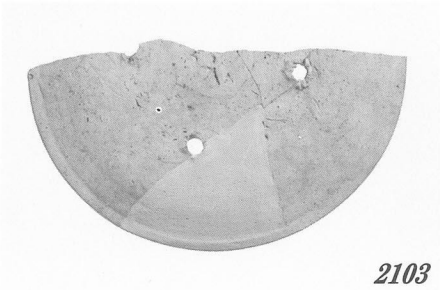


1914　1915　1916

中谷4号窯出土須恵器20

2101

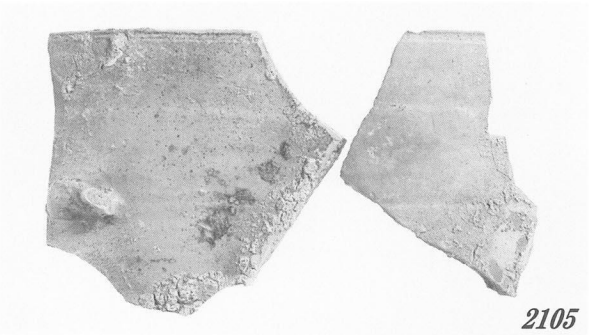
2102


2103

2110

2104

2112


2105

2111

2205

2202

2203

中谷4号窯出土須恵器21

2004

2018

2002

2302

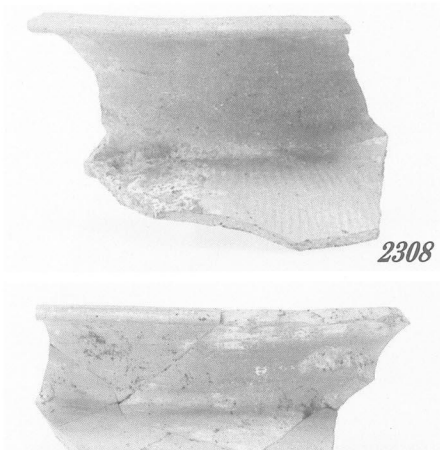
2310

2315

2311

2313

2312

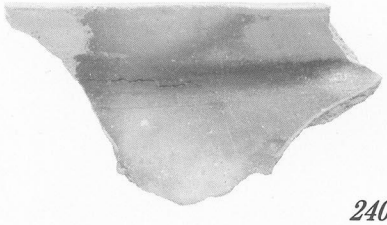

2308

2303

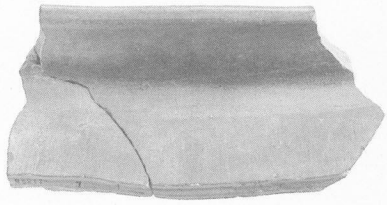
2403

中谷4号窯出土須恵器22

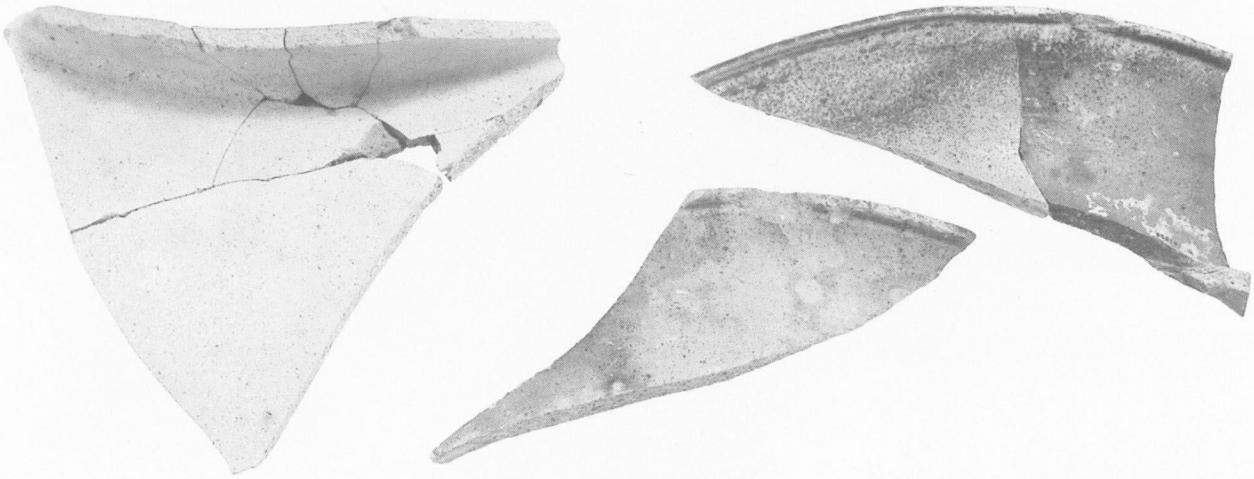
2404



2401



2402



2406

2405

中谷4号窯出土須恵器　細部

0423

0819

0906

0921

1902

0642

中谷４号窯出土須恵器調整技法１

1010

1014

1126

1113

中谷４号窯出土須恵器　調整技法２

1216

1314

0338

0423

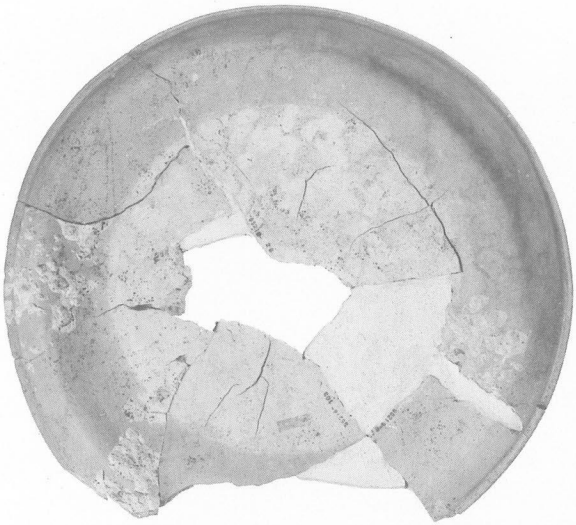
1019

0309

0512

0620

遺物図版32 中谷4号窯出土須恵器 重ね焼痕跡



1420

1423

1207

1201

1809・1810

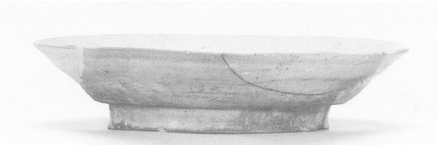
中谷1号窯出土須恵器1

0113

0111

0112

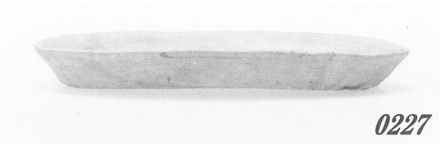
0121


0122

0123

0223

0226


0227

0201

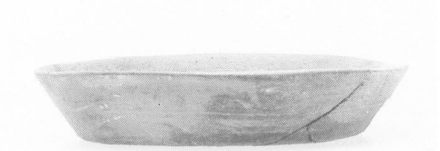
0203

0204

0205

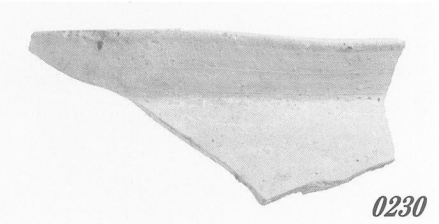
0207

0210


0216

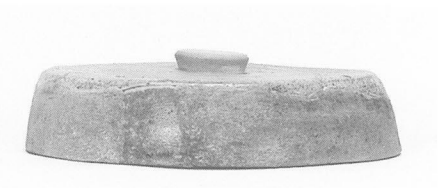
0220

0229


0230

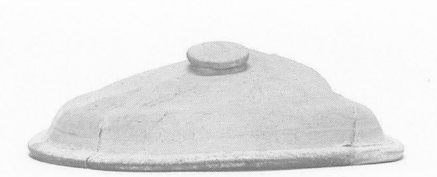
0206

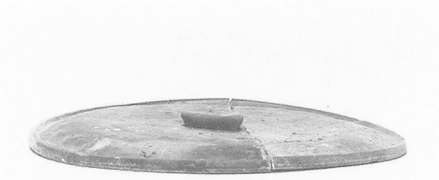
0231

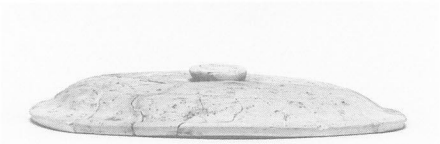

0228

中谷1号窯出土須恵器2

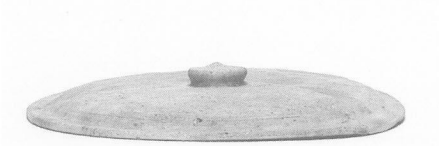
0301

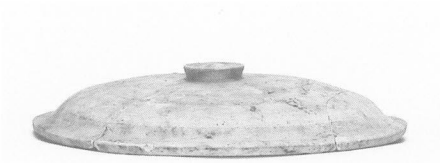

0305

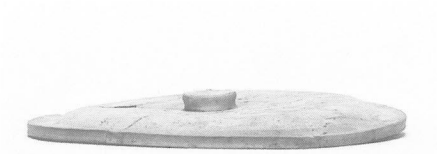

0311

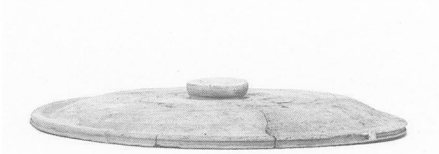

0317

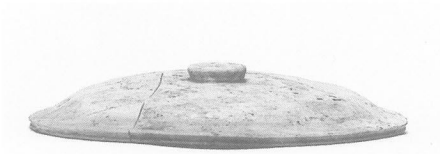
0315


0319

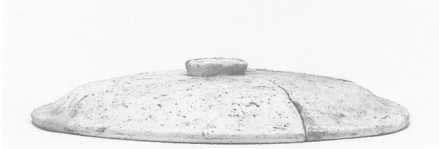

0320

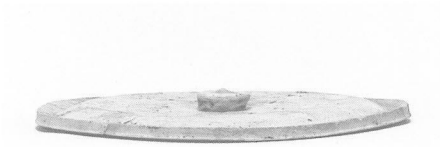

0323

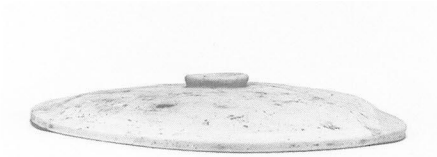

0324

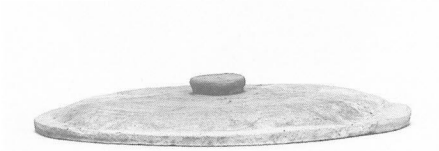

0325

0326


0327


0334


0335


0339

0328

0332

0338

中谷1号窯出土須恵器3

0402

0404

0405

0408

0414

0415

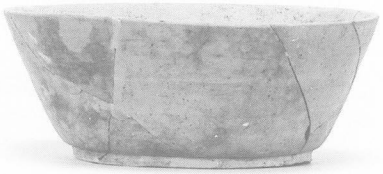
0416

0417

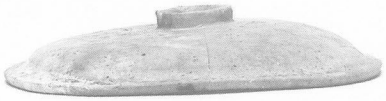
0419

0424

0425



0426

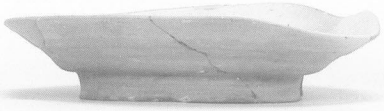


0515

0518

0517

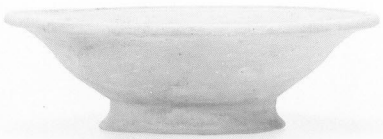
0504



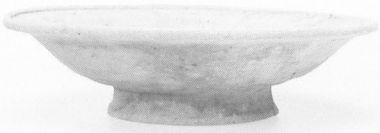
0507

0509

0513



0511



0512

中谷1号窯出土須恵器4

0601

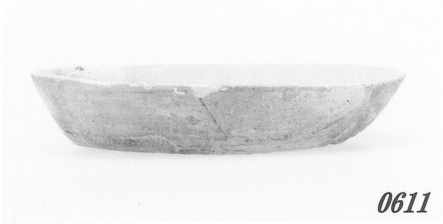
0604

0605

0606

0608

0610


0611

0612

0613

0617

0623

0624

0626

0627

0628

0629

0630

0631

0633

0634

0638

0641

0643

0645

0647

中谷1号窯出土須恵器5

0709

0712

0719

0724

0726

0729

0732

0740

0743

0744

0745

0746

0701

0702

0704

0602

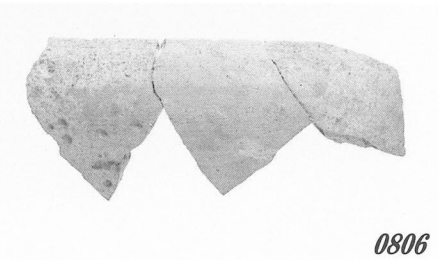
0705

0706

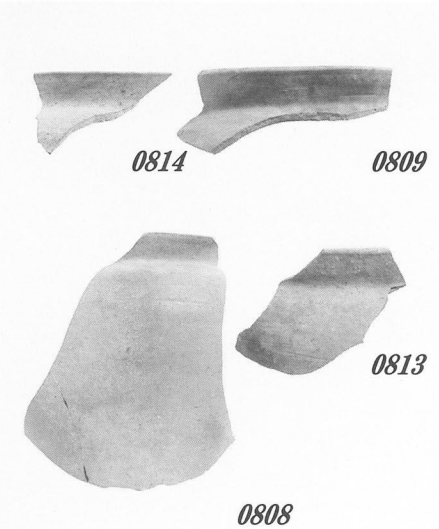
0707

0801

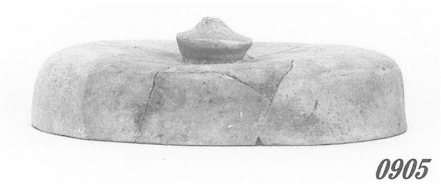
0708


0806

0807

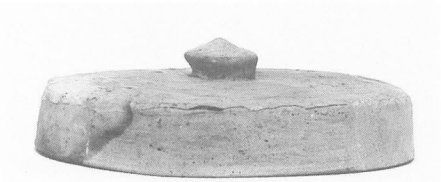

0814 0809 0813 0808

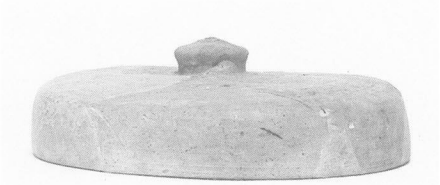
中谷1号窯出土須恵器6


0905

0906

0904


0907


0908

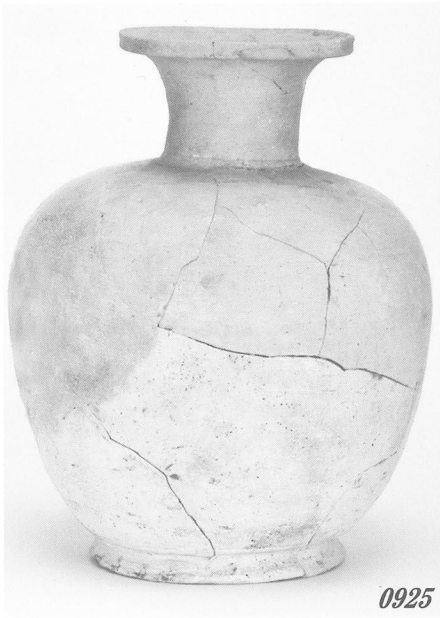
1001

0914

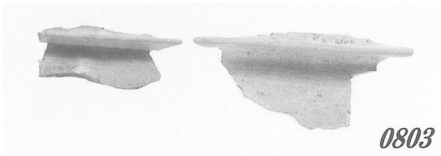
0913

1004

0926


0925

0921


0803

1108

0804

0805

中谷2号窯出土須恵器1

0102

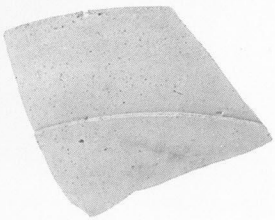
0103

0109

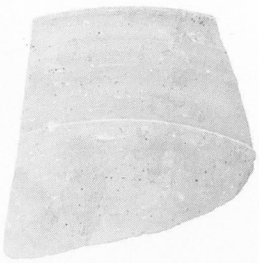
0119

0116

0117



0111

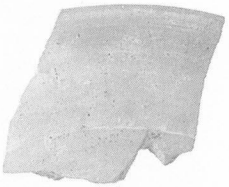


0115

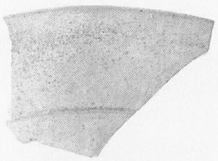
0118

0104

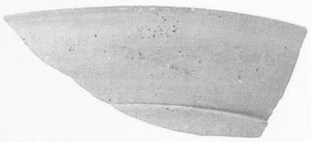
0101



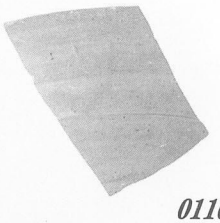
0113



0112



0114



0110

中谷2号窯出土須恵器2

0209

0205

0208

0211

0212

0210

0201

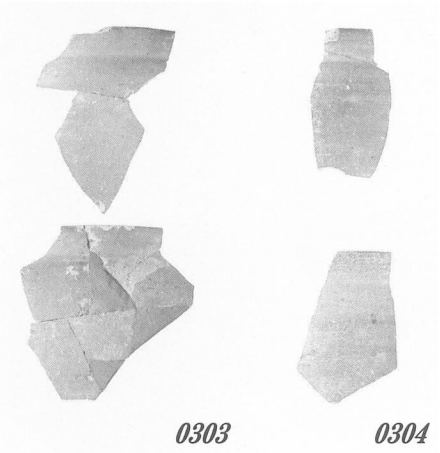
0133

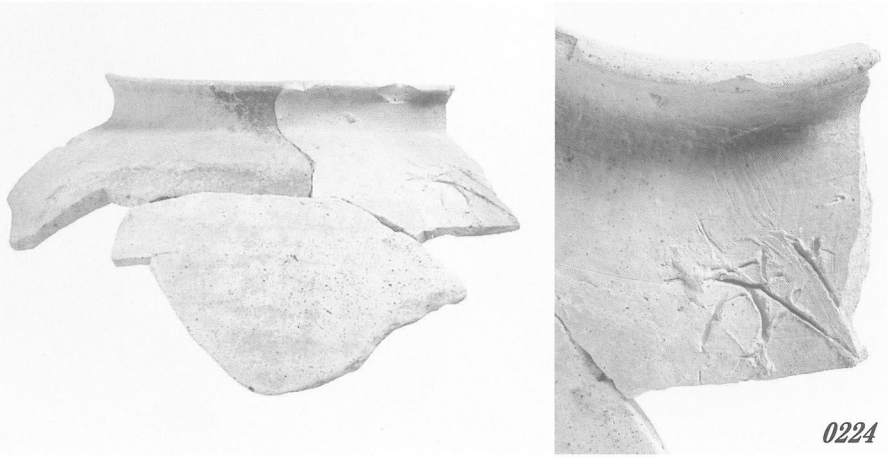
0131

0128

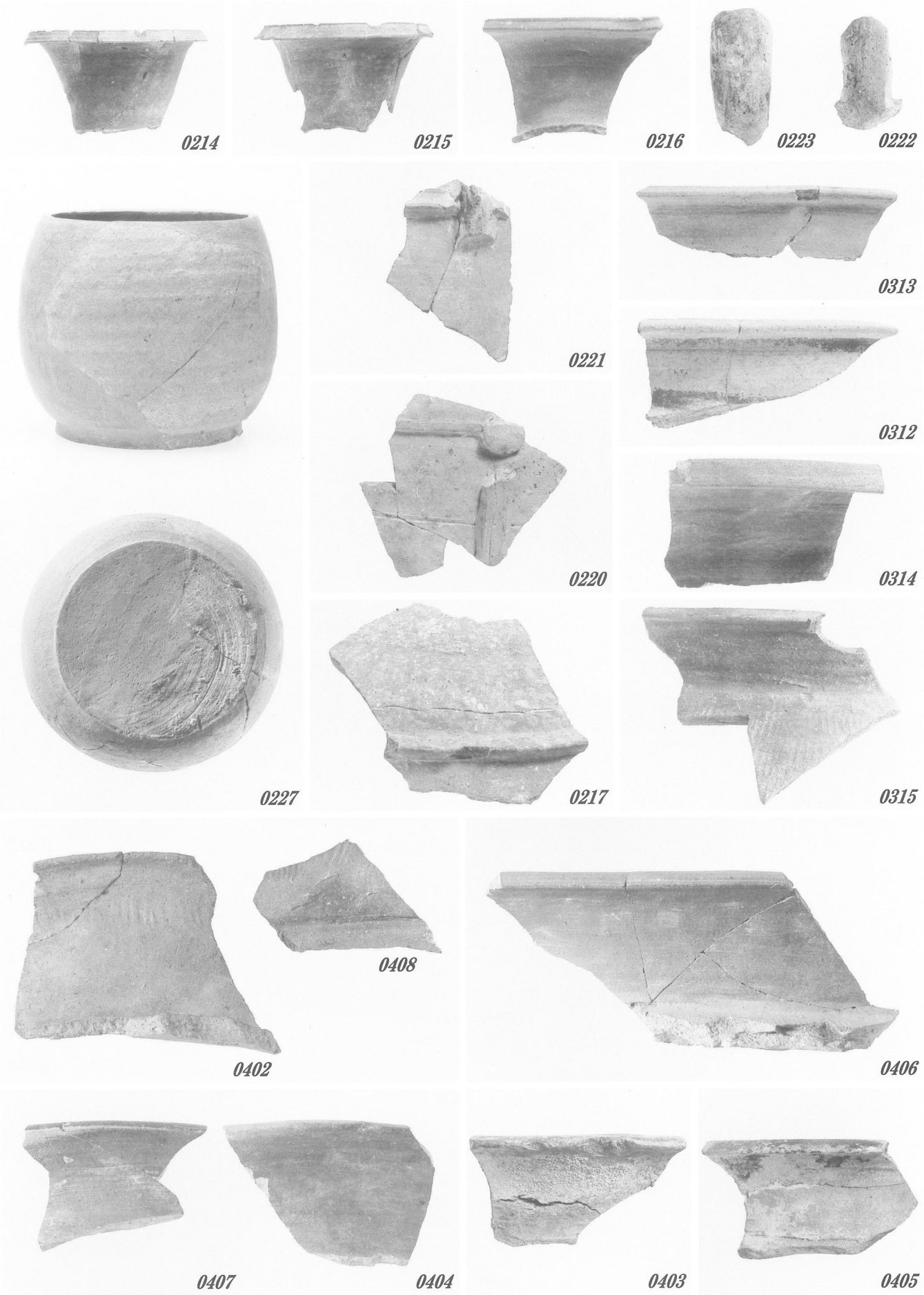
0306

0309 0307 0310 0308 0301


0303 0304


0224

中谷2号窯出土須恵器3

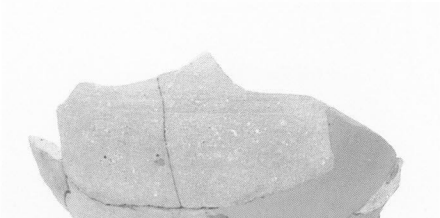


中谷3号窯出土須恵器1

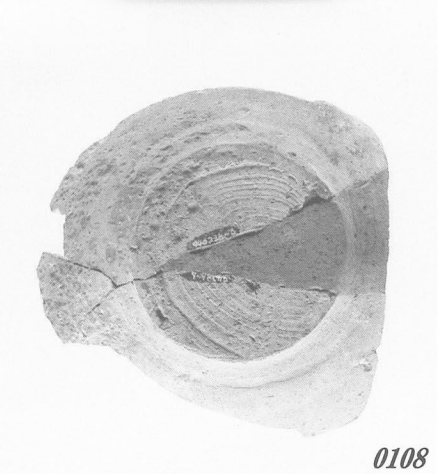
0101

0102

0104



0107

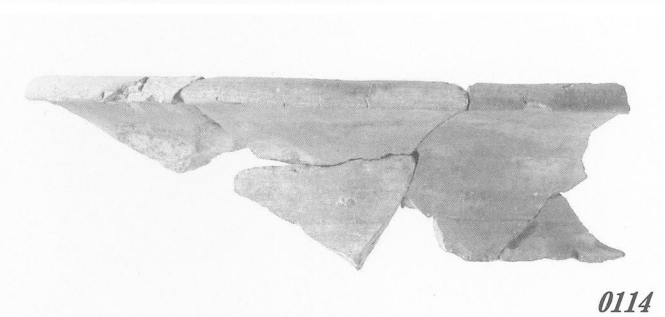

0108

0110

0112

0109

0113


0114

中谷3号窯出土須恵器2

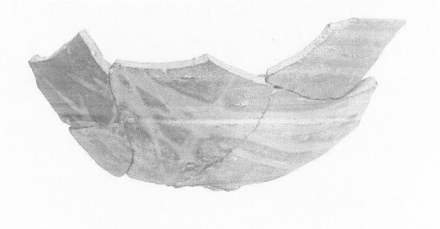
0201

0203

0207

0213

0209



0208

0219

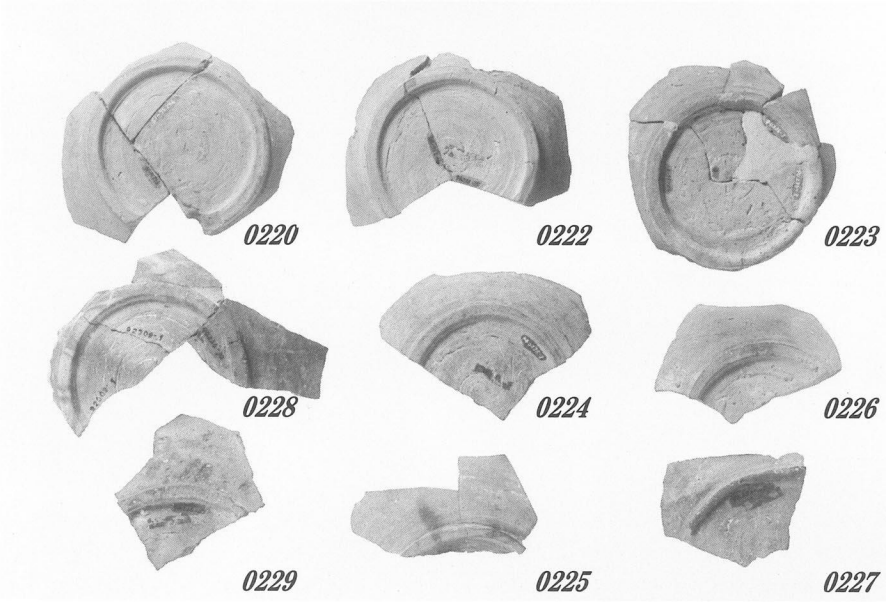
0217

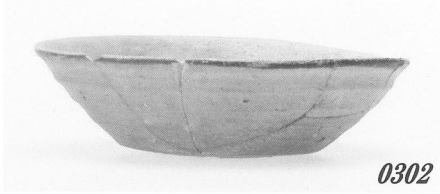
0218

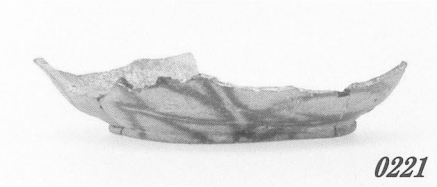
0231

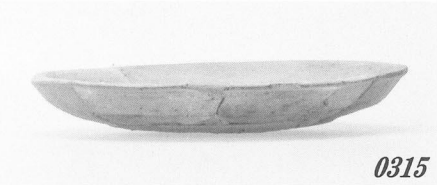
0216

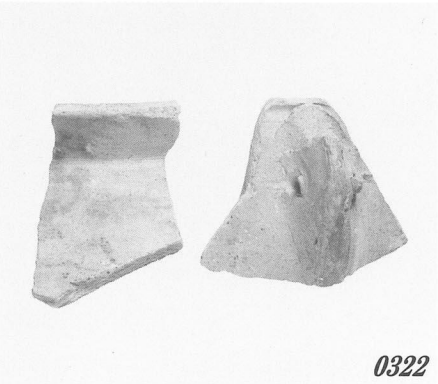
中谷3号窯出土須恵器3



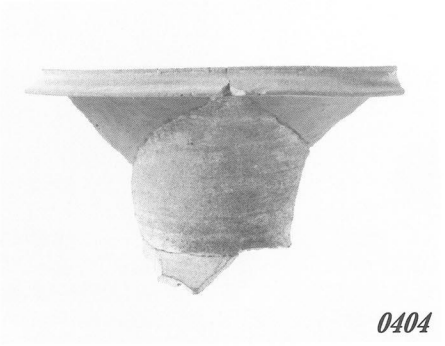




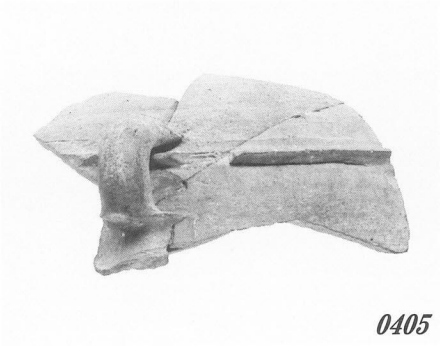




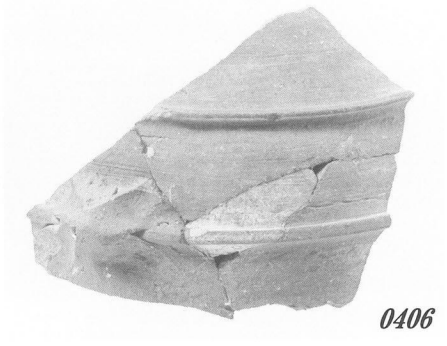
中谷3号窯出土須恵器4



0404



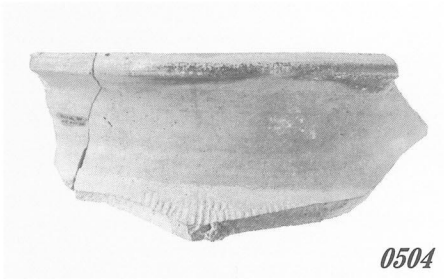
0405



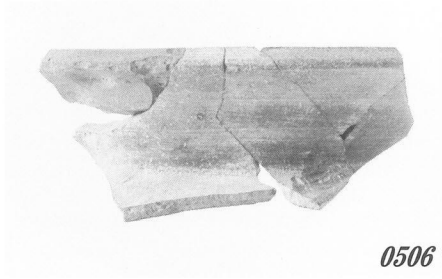
0406

0403

0402

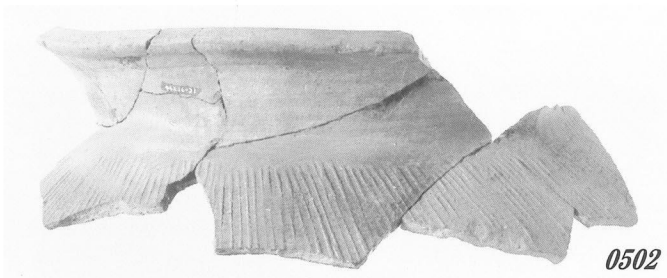


0504

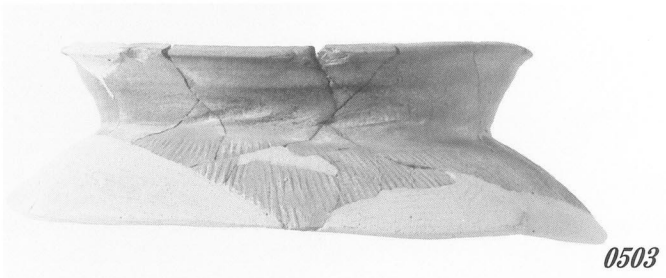


0506

0602



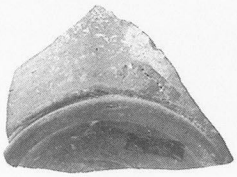
0502



0503

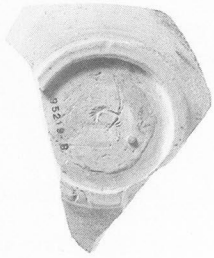
中谷5号窯出土須恵器

0102



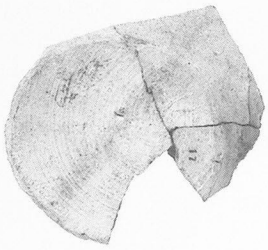
0104

0103



0101

0110

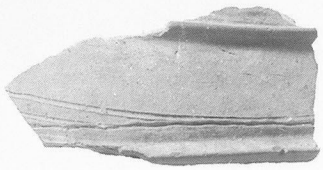


0109

0107

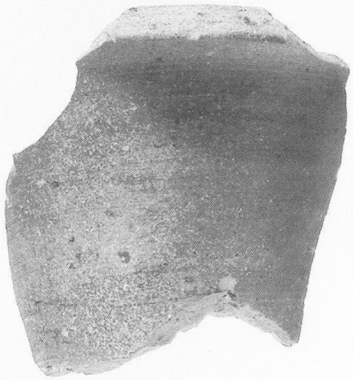
0108

0111



0114

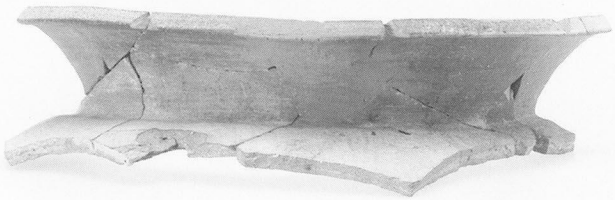
0115



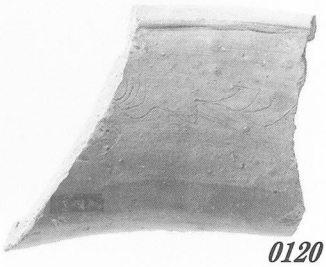
0113

0116

0117



0119



0120

報　告　書　抄　録

ふりがな	しかた　かまあとぐん（なかだにしぐん）
書名	志方窯跡群（中谷支群）
副書名	山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告
巻次	XXXI
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第２０３冊
編著者名	森内秀造・井本有二・仁尾一人・岡本一秀
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　TEL０７８－５３１－７０１１
発行年月日	西暦２０００年（平成12）年３月３１日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山陽自動車道（三木～姫路）No.39地点	兵庫県加古川市志方町大沢字中谷８４７他	28210	910147 920309	34度 50分 46秒	134度 49分 46秒	確認調査 19920302 ～ 19920313 19921120 ～ 19930312	730 ㎡	山陽自動車道建設に伴う発掘調査
中谷１号窯 中谷２号窯 中谷３号窯			940001 940002 940236			全面調査 19940624 ～ 19941005	2085 ㎡	
中谷４号窯 中谷５号窯			950218 950219			19950821 ～ 19951031	1790 ㎡	

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中谷１号窯	須恵器窯跡	奈良時代後期	窯体・灰原・炭土坑	須恵器	
中谷２号窯	須恵器窯跡	平安時代前期	窯体・灰原	須恵器	
中谷３号窯	須恵器窯跡	平安時代前期	窯体・灰原	須恵器	「忍坂」銘の刻書須恵器。
中谷４号窯	須恵器窯跡	奈良時代前期	窯体・灰原・炭土坑	須恵器	平城京ＳＤ5100から４号窯産の製品が出土。鋺写しの製品多数。
中谷５号窯	須恵器窯跡	平安時代前期	散布地・流路	須恵器	調査区内には、遺構存在せず。遺物のみ採集。

兵庫県文化財調査報告　第203冊

志方窯跡群Ⅰ－中谷支群－

－ 山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXXⅠ －

平成12年（2000年）3月31日発行

編　　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL 078－531－7011
発　　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
印　　刷　㈱岸本印刷所
〒676-0805　高砂市米田町米田400-1